JARO XVII, N-RO 6 JUN O, 1936

LA REVUO ORIENTA

Tridek jarojn travivis Esperantista movado en Japanujo.

30 jaroj pasis de post kiam Japana Esperantista Asocio, la unua centra organizo de Esp. movado en nia lando, fondiĝis la 12-an de junio, 1906.

Kompreneble antaŭ ĝia fondiĝo estis esperantlingvanoj en nia lando sed ne ekzistis forta centro de l' propaganda laboro.

Dum kelkaj monatoj la nombro de la membroj de l' Asocio kreskis ĝis kelkcent. Sed multaj anoj lernis Esp. nur pro scivolemo. Al ili mankis bonaj libroj.

Unu jaron poste jam la ĝenerala publiko forgesis Esp-on, kaj eĉ multaj adeptoj komencis perdi sian ardon al ĝi.

Post la mondmilito internaciismo favoris nian mavadon sur la terglobo. Esp. movado en nia lando ankaŭ ekvigliĝis.

Sed oni ne povas meti novan vinon en malnovan vazon. Ĝis tiam la Asocio nur inerte funkciis, sed la propaganda laboro ne estis ĉe la Asocio kaj estis nur en la manoj de kelkaj fervoruloj. Reformo aŭ rekonstruo jam ne estis evitebla.

Definitive Japana Esperanto-Instituto, nia nuna centro de Esp. movado, estis organizita en la fino de la jaro 1919-a. La tuta membraro de J. E. A. transiĝis al J. E. I.

De 1919 ĝis nun J. E. I. agadis kiel la sola centro kaj ne nur propagandis Esp. sed ankaŭ eldonis ĉiumonatan organon kaj aliajn lernilojn. Dank' al nia Instituto nia movado sufiĉe prosperis kaj prosperas.

Okaze de la tridekjara datreveno de la ekfloro de esperantista movado en nia lando, la redakcio petis niajn malnovajn veteranojn skribi rememorojn pri sia esperantista vivo, kiuj nepre donos al ni multe da instruoj rilate al la propaganda laboro. Ni tre bedaŭraske ni ne povas publikigi ilin en Esperanto pro manko de spaco kaj mono, por internacie vaste konigi la valorajn artikolojn.

日本エスペラント運動の回顧

我邦に組織的エスペラント運動が發生してから正に 30 年の歳月が流れた。過去 30 年は決して坦々たる大道ではなかつた。荊棘にとんだけはしい坂道であつた。昨日も今日もそうであつた。明日もまたそうであろう。

この 30 年を回顧する毎に，我々はこの荊棘の坂道をこえて絶えず我エス運動に聖火をもちつづけてきた古い同志の事，今は運動の第一線から退かれたにしても嘗ては第一線に花々しく活躍された同志の事，さては旣に地下にねむるが生前聖戰に雄々しく戰はれた同志の事をおもひだして敬虔の念にうたれる。

我々はここに記念すべき 30 周年をむかへて我聖戰の veteranoj 達に 30 年前の追憶をきき我々の今後の運動に資したいと思ひ本誌の第二百號記念特輯にあたり之等 veteranoj の追憶談を滿載することとした所以はここにあるのである。

我々は之等老戰士の追憶談を單に興味ある昔話とのみ聞いてはならない。之等の生きた，なまなましい體驗談が，無數の敎訓と示唆を含むことをわすれてはならない。これあるが故に，本誌の特輯としたのである。老人の骨董いじりと考へてはならない。

例へば，これらの全篇を通じてみられることは，如何に新聞雜誌の記事が多くの人々にエスペラントといふことを敎へたかといふ事，初めは好奇心や人まねや物好から學習し始めたが遂に切つてもきれぬ深い緣となつてしまつたこと，自身は餘り熱心でなかつたがそれが周圍に大きな影響を與へた人々の事等々，その他，數限りなくいろいろの材料がこれらの追憶談から汲み出せることを忘れてはならない。

世人曰く「歷史は繰返す」と。30 年前の我々先輩が苦心したと同じ苦心を 30 年後の我々もすることが多い。30 年前と 30 年後とに於て我々のエスペラントは質において，長足の進步をとげてゐる。併し質がちがつてゐるにしても，やはり我々は先人の苦しみと似かよつた苦しみをなめさせられることが多い。先輩の追憶談をよむ每に特にこの感が深い。

この意味に於てこの特輯號が將來のエス運動にだつさはる我々に大きな示唆を與へることをのぞむ次第である。

猶本特輯は古い材料の散佚をふせぐ意味をこめて特に古い時代の事に主力をおき主としてエス語發表の時（明治 20 年）から 大正 8 年末我が日本エス學會の誕生までにエスペランチストとなして活躍された方々の追憶談を乞ふた。學會設立以後のものはまだ最近十數年以內のことであるから，之等は次の機會にゆづることとした。

最後に本誌特輯のため御多忙中を御執筆下さつた各位並びに之に關し種々調査や古い同志によびかけて下さつた地方會の各位や編輯上助言を下さつた人々，特に種々奔走下さつた藤田穰三氏，貴重な資料を貸與下さつた方々，Japana Esperantisto の舊號その他御贈與下さつた藤林房藏氏等に深甚の感謝の意を表明致します。猶本誌には

1）明治 39 年に出版された各種のエス書の寫眞や第一回から第六回（大正 8 年迄）までのエス大會の寫眞や各地の協會支部創立當時の寫眞その他種々の寫眞等々數十葉。

2）小坂氏「日本エス運動小史」（大正 3 年から大正 8 年末迄――大正 3 年迄は 1931 年の本誌に小坂氏が「回顧二十有五年」として書かれた）――これは原稿紙五十枚の力篇。

3）多忙のため御承諾を下さつたが玉稿をいただけなかつた大井學，淺井惠倫，金億，大橋宇之吉等々の諸氏の追憶談數編。

4）編者がお目にかかつてお話を伺ふ筈になつてゐる黑板博士安孫子貞治郞氏その他二三の人々（既にお話を伺つた人に中村竹白氏あり）のお話。

5）編者の手許にある材料整理中のもの等々が豫定の頁數超過のためと期日切迫の爲本號にのせられなかつたことをここに深くおわび致します。（金澤エス運動史もその一）。

之等の材料は本特輯號所載の追憶談と共に遠からずまとめて，エスペラント文庫の一篇（300 頁以上に上る豫定）として發表の豫定ですからその節御覽を願ひたく存じます。（岡本）

我國エスペラント移入の三系統

藤間常太郎

ザメンホフが 1887 年（明治 20 年）にエスペラントを發表して以來十餘年あらゆる困難迫害を克服して漸く歐米諸國に普及し繁榮の兆を現して來た。從つて日本においても歐米の新聞雜誌等を通じてエスペラントの名が折に觸れて耳に入るやうになつた。理想に燃え知識慾に驅られた人々の個人的研究時代が來たわけだ。しかし火はストーヴのなかで靜かに燃えてゐるだけである。

1902 年（明治 35 年） Alphonse Mistler といふフランス人宣教師が長崎の一英字新聞――Nagasaki Press? ――にエスペラントに關して寄稿したのが日本におけるエスペラントについての最初のものだといふことになつてゐるが，その內容は判らない。Mistler 師は1873年2月フランス Alsace-Lorraine の Tannenkirch に生れ故國にあるとき僅か 2 時間でエスペラントの文法を習得したといふ。1893 年長崎に來て 1903 年同地の海星中學物理化學の敎師となり 1906 年 9 月東京曉星中學に轉じて 13 年までをつたが同年再び海星中學に戻り 33 年辭して現在橫濱の St. Joseph's College でフランス語を敎へてゐる。（Enciklopedio de Esp. 參照）

曉星中學在任當時日本エスペラント協會が創立されて黑板勝美博士がその例會に Mistler 師を招待したことがあるが用務のため出席しなかつた。

堺利彥氏が 1905 年 3 月 19 日の週刊社會主義雜誌「直言」誌上に黑板博士の談話に基づいてはじめてエスペラントについて書いた時「日本に此エスペラントの事に注意してゐる者は東京大學の黑板勝美氏と長崎に居る佛蘭西の宣敎師某と外に一二人しかないとの事」と述べてゐるが宣敎師某とは Mistler 師を指したのはいふまでもない。Mistler 師と日本のエスペラント界との接觸面は甚だしく微かで積極的な貢獻はないにせよ，孤立帝國のエスペラント運動に最初の一石を投じた榮譽は永久に消えるものではない。

我國のエスペラント界から未だ嘗て感謝の言葉とともにその名を口にせられたことを聞かないがしかも搖籃期の運動に甚大な寄與した有名な敎育學者樋口勘治郎氏を逸してはならない。

樋口氏は 1895 年（明治 28 年）東京高等師範を拔群の成績で卒業し同校敎授となり社會的敎育學を唱導して「統合主義敎授法」を著し弱冠にして一躍天下に名を揚げた。要するに今までの敎育はただ小さい範圍に局限してゐるからいけない。知識慾に燃えてゐる學生に廣く種々な知識を與ふべきであるといふのが氏の主張である。3 年間のフランス留學を終つた 1903 年（明治 36 年）歸朝し早々「國家社會主義新敎育學」（1904 年 2 月出版）次いで「國家社會主義敎育本論」を矢繼早に上梓したがともに洛陽の紙價を高からしめた。殊に前者は歸朝第一報告の意味も含まれて隨分敎育者仲間に讀まれたものだ。內容は新しい敎育學や社會思想に關する廣汎な知識で充たされてゐるが，特に十九，二十の二章を「文字及び言語」のために割いて先づローマ字を論じ次に國語の統一を說き最後に世界語の必要に及んでエスペラントを紹介推奬してゐるがただ單なる紹介にあらずしてヨーロツパにおけるエスペラントの普及並に利用の情況を滯佛中自らの見聞により詳しく述べた堂々たる大論文である。當時これだけ整つた內容の充實した文獻は他に見當らない。

樋口氏がはじめてエスペラントの存在を知つたのは南佛 Toulouse において同地の大學敎授 Ribaut 氏によつてであつた。同氏や他のエスペランチスト敎授 Roul 氏らに刺戟される一面

當時 Beaufront らの努力により世界最盛を誇るフランスのエスペラント熱を目のあたりに見た新進學徒は新しい國際語に輝かしい未來と希望を發見したにちがひない。歸朝早々解いたトランクには數多學者の教育學の書籍に混つて

Gaston Moch; La question de la langue internationale et sa solution par l' Esperanto.

M. L. de Beaufront: Grammaire et exercices de la langue internationale "Esperanto".

の二書があつた。

名聲嘖々たる好著に托して我國知識層特に教育者間に廣くエスペラントの何ものたるかを敎へた其功績は沒すべくもないがなほ「教育時論」とか「教育學術界」等の教育雜誌やローマ字論者として氏が關係してゐた「Romaji」誌上に屢々エスペラントについて寄稿してゐる，また 1906 年 6 月 25 日に東京 YMCA で「エスペラントに就て」といふ演說を行つてゐるのを見ても多少運動に積極的に乘出してゐたことが窺はれる。しかしその後自己の教育學の方面に多忙なせゐかエスペランチストとしての樋口氏の足跡を辿り得ないのは何としても遺憾に思へる。日本エスペラント協會が創設された當時會員中に多數の教育者を獲得したのもその一半は樋口氏に負ふところがあると思ふ。この機會に全日本の同志とともに樋口氏の靈に敬意と感謝を捧げておかう。

二葉亭年譜によれば……明治 39 年 43 歲 7 月「エスペラント」出版，同 9 月「エスペラント讀本」出版，日本に於けるエスペラント語學書の權輿也……とある。

明治の文豪二葉亭が露國エスペラント協會々員長谷川二葉亭の名において小册子「世界語」(エスペラント)をはじめて世に送り出した時には當時のインテリはアッと驚いた。これは正に日本エスペラント運動の黎明を告げる鐘であつて遠慮勝ちな個人的研究者に勇氣と誇りを與へると同時に未知の人々の多數をその陣營に走らせた，この先驅的役割が二葉亭のごとき大文學者によつて果されたがために運動に對する刺戟と影響は蓋し甚大なるものがあつた。

一生思想的な苦惱から蟬脫することの出來なかつた二葉亭は元來世界主義人道主義に對して深い興味を持つてゐたが日露の關係が切迫するにつれて一轉して恐ろしく愛國的傾向を帶びるやうになつて自ら東方經略の plano まで樹ててゐた。日露の急な風雲を坐視するに忍びずと遂に 1902 年(明治 35 年) 5 月東京外國語學校の教職を擲ち Vladivostoko の貿易商德永商會の顧問として同地に滯在盛んに日露兩國の有力者と交つて情勢を探つてゐた。偶々同地のエスペラント會々頭 Postnikov 氏と相識るに及んで同氏からエスペランチストとしての洗禮を受けた。「余曾て事を以て露領浦潮に遊べる時，偶々交を同地のエスペラント協會々頭ポストニコフ氏と結び，始て氏より詳かに世界語の事を聞くを得たり，氏久く日本語にて其教科書を刊行せんの意あり，余に一臂の力を添へんことを乞はる，余欣然として其意を領し，便ち氏に就きて略此新語の一斑を傳習し，又氏の率ゆるエスペラント協會に入會し，數々其集會に出席して，親しく會員諸子の如何に熱心に之を研究しつつあるかを目擊したり，其後滿洲を經て北京に入り，故ありて留りて遂に日本に回らず，滯燕中ポ氏遙かに書を寄せて教科書譯譯の業未だ成らざるや否やを問はる，且つ曰く君が譯譯せらるべき事をワルシャーワのドクトル，ザメンゴフに通報したるに，ドクトルは如何に悅びたりけん，其豫告は忽ち最近の露國エスペラント協會々報に出でたり願くは速かに業を卒へよと，當時余の身邊には俗務叢脞，往々徹宵睡らざることあり，未だ筆を執りて此閑事業に從ふ能はず，かくて三十六年の夏日露の關係漸く切迫せる頃，余の志望も遂に不成功に終り，怏々として歸朝し，是より永く世と相謝して又時事を省

せず，終日書齋中に兀坐して，茫然として我の我たるを忘るゝことあり，是に於てポ氏との契約を果さんことを思ひ，暇あるごとに筆を執りて今年今月飜譯の業漸く就る，此書即是也。

ポ氏が余に托せし教科書といふは，此書の發明者として有名なるドクトル・ザメンゴフが自から筆を援りて起草せし露文の教科書なり。現に各國語に飜譯せらるゝものゝ原本に係ると雖も，元と露人の爲に著したるものなれば，之を原文の儘に飜譯して我國人に進めがたき點あり，ポ氏も此に慮る所ありて著作上の斟酌增減は一に余に委せられたれば，余の淺學を顧みず叨りに大家の著書に向つて剪裁を加へたり，潜越の罪は固より甘じて受くる所也。……」

と「世界語」の序言に自らその由來を述べてゐる。二葉亭が Vladivostoko に滯在してゐたのは 1902 年（明治 35 年）5 月中旬から 10 月初旬までだからエスペラントを學び同地のエスペランチストと交を結んだのもこの期間中の出來事である。當時 Postnikov を會長に戴く Vladivostoka Grupo の活躍は目醒しいもので會員も隨分あつた。二葉亭がエスペラントを習得したのは Postnikov の熱心な勸奬によること勿論であるが，他面同地の急進的な多くのインテリを構成分子とする Esperantista Grupo に絕えず接觸して親交を結ぶことは二葉亭が渴望してゐた各種の情報を最も短時間に最も能率的に得る方法だと考へたからでもあつた。エスペラントは卽ち敵本主義だつたのである。

「……又如何に凡てのことを國事のために盡して居るかといふ例は嘗て氏がエスペラントの書を著したことがある。私にも一册贈與してくれましたから，私も其返禮として，エスペラントで手紙をやりました。すると重ねてエスペラントで手紙をよこしました。定めし例の凝性で大いに研究してゐることと思つて，其後逢つた時に例のエスペラントは大變進步しただらうなと尋ねると，ナーニあんなものは疾に放擲つて了つた，必要を感じたから研究をしたやうなものの，其の目的がなくなつた今日，あんなものをやる必要がないと云つて凡ど知らざるものの如くであつたのには聊か驚かされましたが併しよく聞いて見ると全く之を研究する必要があつたからのことで，それも決して名利のためではなく，對外政策の必要上之を研究することが有力な外人と折衝するに，多大の效果あることを認めたからだつたのです。其の內容は今之を公言することを避けますが，何にせよ僅々一外人との折衝に關する必要のため，兎も角あれだけの著述をさへ出すに至つたのは，氏の語學上の天才も容易ならぬものですが，私等はむしろ氏の愛國的熱情に滿腔の尊敬を拂はざるを得ないのです」（坪內逍遙，內田魯庵編二葉亭四迷）

とカナモジの發明者山下芳太郎氏もこれを裏書してゐる。

とまれ Postnikov が二葉亭をエスペランチストに改宗せしめたのみならず日本最初の教科書を著はさしたのは日本は勿論世界のエスペラント界に對する特筆大書すべき功績といはねばならぬ。ザメンホフも二葉亭のささやかながらも歷史的な二著を手にしたとき興奮に手を慄はせたことは想像に難くない。

Postnikov は日本にエスペラントを輸入することに間接的に偉大なる貢獻をしてゐるが，エスペラントの日本移植に努力した外國人は Postnikov だけではなかつた。

當時極東の新興帝國に對する興味乃至關心が頓に歐米に昂りつつある際ヨーロッパにおける具眼的なエスペランチストがこの處女地を見逃すはずはない。Brita Esperantista Asocio の創始者 Joseph Rhodes は Ĥabarovsk の Poljanskij (ruso) や Seattle の Geoghegan (irlandano) と聯絡をとつて日本の開拓に力を致したが不成功に終つた。殊に矢張り Brita Esprantista Asocio の創始者の一人としてイギリスのエスペラント運動に不朽の功績を殘した Geoghegan のごときは 1893-1900 年の間自ら日本の地を踏みつつ普及に努めたが何らの效果もなかつた。

彼は自分の努力の成果を見ずして名殘りを惜みつつ Alaska に去つた。これらの先覺者の成し得なかつたことを Postnikov は 100% 成し遂げたわけだ Postnikov は 1905 年 Vladivostoko を去つて合衆國に移住したが同氏去つた後の同地はエスペランチストの沙漠と化し 1907 年 Gauntlett をして Vladivostoko の宿舍において「Dum ĉirkaŭ du semajnoj mi ne povis trovi rusojn, kiuj parolas Esperante...」と慨嘆せしめた (Postnikov. Rhodes, Poljanskij, Geoghegan については Enciklopedio de Esperanto を參照されたし)。

△エスペラント研究法　長谷川二葉亭
　成功第 9 卷第 6 號 (明治 39 年 9 月 1 日)
△エスペラント講義　長谷川二葉亭
　學生タイムス第 5 號 (明治 39 年 10 月)
△エスペラントの話
　女學世界 (明治 39 年 10 月——二葉亭全集第 4 卷收錄)

ちよつと妙な云ひかたかも知れないが日本に最も大量的にエスペラントを移入したのは何といつてもイギリスの新聞雜誌及び日本で發行された英字新聞雜誌である。

イギリスでは 1903 年 (明治 36 年) Rhodes らの骨折りによつて Brita Esperantista Asocio が生れこれに對して London Times, Daily Mail, Daily Express 等の一流新聞が後援し，當時イギリス第一の出版部數を誇る Review of Reviews 誌の如きはその持主兼主筆で平和主義者の William Stead がエスペラントに共鳴して自ら陣頭に立つてこれを宣傳し每月同誌の一頁をエスペラントのために割き數々の書籍を出版してゐた。これらの諸新聞及び Review of Reviews はまた日本の上層階級に多くの讀者を持ち彼らの知識の糧ともなり意見を形造る一助にもなつてゐた。從つてエスペラントの名が彼らの間に浸透して彼らの興味を唆つたのは自然の勢である。二葉亭の二著が世に出るまで我エスペラント界の pioniroj を導いたのは殆ど例外なしに Reviews 社出版の諸書であつた。吉野作造，土屋元作，安孫子貞治郎，高橋邦太郎，福田國太郎，Gauntlett の名を擧げるだけでも思ひ半ばに過ぎるものがあらう，日本で發行された Japan Mail その他の英字新聞もイギリスの諸新聞と併行してエスペラントに關するニュースを載せるやうになつたのみならず，「英語靑年」「英文新誌」「英學界」等十指に餘る英語雜誌が競つて新國際語を紹介するに至つて大いに英學者間にエスペラント熱を吹込んだ，日本エスペラント協會の創立者の過半數が英學者であり，その會員名簿中に多くの著名な英學者や英語敎育家が名を聯ねてゐるのを見てもこの方面への傳播の狀態を推しはかることが出來る。

1906 年 (明治 39 年) 6 月日本エスペラント協會が華々しく誕生するまでのエスペラント移入の跡をかく辿り來つて眼を當時の社會狀態に轉ずるとき，そこにエスペラントを培ふべき溫床が用意されてゐたのを見逃すわけにはゆかない。日露戰爭後に來つた對外的な躍進，國內的にはあらゆるものの再吟味再評價世の中の根本的な建直しの時代にあつて，國際語の思想は正に當時のインテリに對する道德的，思想的，知識的要求に應じてゐた，その合理的實踐的な點において，愛國心を傷けない點において，國際間の理解を深める點において，學習の容易な點において，なほまた一般に英語敎育に全力を傾注してゐるにも拘らず一向效果があがらないに業を煮やして英語敎育の是非がやかましく云々せられた時代でもあつた。

初て掲げた日本エスペラント協會の看板

中村有樂

我國エス語黎明期の懷舊談をとのことですが，私はエス語の爲といふよりは，唯當時有樂社を經營し，常に新鋭尖端的雜誌書籍の發行を主として居たのですが，一日安孫子君がエスペラントの話をせられ，有樂社に事務所を設けエスペラントの爲に盡してはどうかといふやうなことであつたが，此語の性質，普及性等も直に諒解が出來たので，贊成を表し，エスペラントの爲に社內一室を提供し，「日本エスペラント協會」の看板を有樂社の看板と相並べて掲げたのですが恐らくは是が我國でのエス語の團體的運動の產聲であつたに相違ないやうに記憶されて居ります。而て同時に相前後して黑板博士，千布利雄氏等も協會に出入せられ それから機關雜誌も發行する，辭書等も初て出版せられたやうに覺へて居ります。併しそれは黑板，安孫子，千布，諸君の努力で暫時すると讀賣の何某氏やら其他相當出入があり，讀賣の何某氏が協會の會計をやつて若干費消をやつたとやら，其あとへ軍隊に居たとかいふ某といふ人がやつて來たとか而て勿論雜誌では計算の立ち樣もなく，辭書の如きも出版はしたが本は無くなつて金はどふなつたか，甚放漫不明瞭の次第でした。それのみならず此協會で近付になつた爲にエス語に關係なく立替が出來たり，私は元々外國語を知らぬのですからエス語普及運動に盡力するといふよりは唯側面の立場だけのことで，當面の運動，雜誌編輯，辭書編纂，講演會，等のことは前申す三君が兎に角中心であつたやうに覺へて居ります。

猶他に言ひ添へるならば，今星岡茶寮をやつて居ます家弟竹白，又今單式印刷會社に勤めて居る山鹿泰治君（當時有樂社給仕）等が或は自分の寫眞を繪葉書として，外國エス語雜誌に葉書交換廣告を出した爲に外國より交換葉書が殺到し，中に歐羅巴人でありながら，エス語の綴字が日本人より拙い等と言つて居るやふなこともあつたやうであります。

以上ホンの朦朧たる記憶で併も唯內情だけのことで，表面エス語發展史の何の史料にもなりますまいが私に書けよとあれば，こんなことだけでエス語黎明期に少しばかり間接にお手傳ひ致したやふな次第です。(昭和 11・4・12)

橫須賀に日本エスペラント協會を創立した當時の思ひ出

加藤節

明治 39 年陽春麗らかな或る一日，郊外散策を橫須賀近郊の金澤方面に試みた頃の自分は，商船學校の機關科實習生として，橫須賀海軍造船所へ派遣されて居た白面の一靑年に過ぎない者であつた。その日偶然にも，當時日比谷公園の，海軍省裏手に當る海軍豫備校の同窓生であつた舊友山口美親君と出逢ひ，路を同ふして歸途についた。路々「エスペラント」語が話題に上り，目下「エスペラント」自修書が，有樂社から賣り出されて居るとの事に自分は早速之を購入して讀んで見た。その時取り寄せた本は，J. C. O'Connor 著 Esperanto (The Student's Complete Text Book) と A. Motteau 著 Esperanto-English Dictionary の二册であつた。讀み初めてから三日で，手紙が書けるとの自信を得たので，同書卷尾に掲載されてあつた

British Esperanto Association に入會申込みの書面を書き送つたものである。

その時には，既に自分の胸中に，ある計畫が組み立てられて居た事は，次に揭げる文中で諒解される事と思ふ。

そうして同會から折り返へし其入會承認と共にエスペラントを獨修し初めてから僅か三日目に書き送つた自分の書面の寫にその中の誤を正して赤インクで書き込んで吳れた一紙片が偶然にも篋底から近頃發見出來たのである。それは英國エス協會の書記か誰かがわざわざ自分の手紙を紙片にうつしとりそれを好意的に訂正してくれたものであらう。此一紙片などは自分一個人として確かに貴重な文獻だと思ふから次にその手紙の寫と思はれるものをかかげてみよう。(誤も原文のままとし保存す)。

Estimata Sinjoro,

Mi havas grandan honoron reporti vin sekvantan sciigon.

Mi estas urbano de la ĉefurbo Tokjo en Jap. Kaj mi estas fondinta "N. E. S." ĉe Yokosuka kun la celo propagandi la IL larĝe en Jap.

La ĉefa celo de la NES estas esplori la IL kaj instrui al ĉiuj la popolo la IL per senpaga.

La M NES consistas de la realaj M la helpantoj de la societo kaj la studantoj de Espo.

La studentoj de E. estas decidintaj gradigi klason per la edukado de 40 horaj ĉe la intertempo da tri monatoj. La gradigintaj studntoj fariĝas la realajn M de NES.

La ĉiu okazoj mia ideo estas fari la IL popular en Jap.

Si vi estas tiel bona ke vi helpas mian aferon en Jap. Si vi bonvolas depagas iajn librojn pri Espo al la bibl. de NES. Kaj laste mi esperas vin ke vi permesos min kiel unu M de BEA.

とにかくこれは自分がエスペラントを初めて，三日目の作文である事が，興味ある記念物であると思ふ。

右のやうな譯で，外國語の素養さへ有る者にとつては「エスペラント」は非常に學び易い事を知つた自分は「エス語が國際用語として理想的で，且つ又將來性を多分に持つて居ると確信し，先づエスペラント協會を設立してエス語の普及に努力する事こそ，ザーメンホフ博士のエス語を創始した主旨にも合致する一階段なりと考へたのであつた。

第一着手として協會の設置場所を物色した。丁度その折に胸に浮むだのは，橫須賀汐留に汐留幼稚園が存在した事であつた。之こそわがエスペラント協會の看板を揭げるに，最も適應しい場所と考へ，同園には一面識もないにも係らず，靑年時代の猪突的勇氣で，鐵面皮にも突然同園を訪れ，園長福本夫人に面會して藪から棒的に，エスペラントが何んであるかから說き起してエスペラント協會設立の希望と協會設置場所として同園の一隅なりと借用し度き旨を申入れて贊同を求めたものである。

福本夫人は夫君（當時汐入小學校長）福本新吉氏と協議されて，拙者の申出でに御理解を持たれた御兩人は，共々協會員になられ，且つ同園に協會を置く事に贊同された。實に之れが橫須賀に於ける日本エスペラント協會の誕生であり，亦た日本に於けるエスペラント運動の一烽火でもあつた事を牢記すべきである。

それで協會の名稱について，當時未だ日本の何所にも協會等の設置されたのを聞かなかつた

ので，大きく日本の代表的の名稱をと考へて，日本エスペラント協會を名乘る事にした。發會の日取りは，今日自分の記憶に殘らぬが，同所で二十數名の會員が集つて，發會式を行つたものである。當日は勿論夜間であつたが，自作のエス語譯「君が代」を，福本夫人のオルガン伴奏で，會員一同が齊唱した事である。

其時の「君が代」譯詞——それが現在あつたなら，確かに貴重な文獻であるが，惜しい事に今自分の手元に殘らぬとは，返へすがへすも遺憾な次第である。當時齊唱された誰かの手元から表はれて來たなら意義深いものであらうと思ふ。當時の協會は專ら通信講習の法を採り極く初步の階梯から初めたものであつた。

其頃に小坂狷二氏と相識るを得たのであつて同氏はまだ席を陸軍幼年學校に置いて居られ，病氣療養の爲湘南地方に來て居られた時と記憶するが，青年同志の感激しかたも強く，エスペラント普及事業には，互に堅き提携を約したものである。

（當時小坂氏が，回覽の目的で書かれた。自筆自畫のパンフレット八頁のものが，自分の手元に殘つて居た。之れなどは小坂氏にとりて最も貴重な文獻ものであろう）。

次いで東京に，日本エスペラント協會が設立され，エスペラント大會を神田の青年會館で催された際，自分は橫須賀の日本エスペラント協會を代表して出席し，同名の協會が東京と橫須賀に在るのも異なもの故，橫須賀のものを東京の支部と云ふ事に爲し，橫須賀では以前通りに，謄寫版の通信講習を依然として續け，東京の協會發行の雜誌を每號讓り受けて，之を會員に頒つ事とした。

之れより曩，エス語普及の一方法として，當時各書籍商の店頭に，カッセル文庫を眞似た各國語の獨修書が最も人目に觸れ易いのを見てその發行元たる神田の岡崎屋書店に交涉してエス語獨修書發刊を目論み，長谷川二葉亭著述の世界語讀本發刊に僅か後れて，明治 39 年 9 月 30 日拙著「エスペラント獨修」を岡崎屋書店より出版した。

流行に敏感な東京ではエスペラントに因むだ商店名商品名等が續出して，日本エスペラント協會會員章たる綠色の星を帽子に附けたり，又は胸につけて，時代の尖端を行く先覺者と云ふ見得が，可なり廣く學生間に用ひられたと聞く。

其頃橫須賀で，戰艦薩摩の進水式が行はれた。當日は京濱方面から多數の人士が橫須賀に入り込むと云ふ機會を攫むで，停車場から造船所迄の通路で，人目に付き易き場所にエス語で橫須賀のエスペラント協會の所在地と，立ち寄り方を勸めたビラを張り廻わつたものである。

其頃エスペラント和譯字典の善きものが，まだ刊行されて無いのを遺憾に思ひ，曩に英國エス協會より送り越した。各國語別の字書を參照して，成語（根語並びに組合語を含む）約一萬一千七百餘語より成る，エス和字典を編纂し，黑板博士を訪問して，日本エスペラント協會より之が出版方を慫慂したるも博士は謝絕せられた。後に思ひ合せるのは，同年 10 月 28 日に黑板博士淺田敎授と安孫子氏の共著に成るエスペラント・ヤパナ・ヴォルタロを日本エスペラント協會より出版なさる積りのが，旣に脫稿して居た爲であつたと，その日取りから想像されるが，右のエスペラント・ヤパナ・ヴォルタロの，第一頁に於ける 29 文字に對し，自分の編纂したものには 57 文字を含有して居るのであつた。その原稿は今でも自分の手元に保存されてあつて世に出でられざりしを卿ち顏に古びて居るのである。

尙ほ明治 39 年の夏頃に書いたもので自分の篋底に秘められ 40 年 3月に公表しやうと思つて書いた原稿下書があつた。それには自畫で，ラ エストンタ テレフォノ と題して，一紳士が電話器の前に起ち，電話器の上部卽ち紳士の顏に直面する高さに，鏡面に似た平板が書かれ，そ

れには先方の對話者たる一婦人がレシーバーを耳に當てた像が寫つて居る畫であつて，今日のテレビジョンが實用化された空想畫が，明治 39 年に自分の胸に想像されて居たものである。そうして其紳士は

「ボナン タゴン ミア カラ……」と云つて居て，その畫には

「オニ ボヴォス パロリ ヴィダンテ イリアン クンパロラントン ュエ マルプロクシマ ロコ」と註が入れてある。

又「ラ エストンタ ヴォヤヂョ」と題して，葉巻形飛空船に，エスペロ第一〇五と大書してあるのが，今や大建築物を離れたところを畫き，その建物の屋上廣場には見送人達が帽又はハンカチーフを振り振り，

「アドィアウ！アドィアウ」を連呼して居る。一方飛空船上の客は

「アドィアウ！ミ エスタス イランタ ヤパンランドン」

と叫んでゐる所が畫かれたもので，現在の旅客輸送にツエツペリン飛行船が活躍して居る。それを當時にあつて豫見して居た事が，此畫で保證された譯である。

尙ほ最後に書き添へて置きたいのは，その頃巴里で萬國エスペラント大會が開かれ，ザーメンホフ博士もそれに出席され，佛蘭西あたりはエス語の普及が普ねき事と想像されて居た。自分は工場の實習生活を終へ，明治 40 年の末頃佛蘭西マルセーユ港に上陸する機會を得た。先づ上陸場から眼を光らせて，エス語による何かを探し求めたが，何物をも得られなかつた。そして目抜通りの書店に入つてエスペラントで話しかけたが，更に通じない。佛語でエスペラントの書籍は無きやと尋ねたが，無いと答へる。エスペラントの會の在場所を尋ねたが，知らぬと答へる。

次にロンドンのアルバート・ドックに船が繫がれた時，附近を見廻わしても，エス語の片鱗さへ認め得られなかつた。

次に白耳義アントワープ港然りで，世界的な港灣たるマルセーユ，ロンドン，アントワープの埠頭にエスペラントの片影さへ見られない樣な宣傳方法では，國際語としての將來は推して知るべしと，エスペラントに對する期待は當時の自分に大打擊を與へて，大悲觀に陷つた事は僞らざる告白である。

然じ大きい期待を持つて，マルセーユやロンドンの埠頭の現狀を見得たのが，自分のエスペラントに對する熱を冷ました一大原因であつて，當時のサムイデアノたりし小坂氏が，爾來幾星霜の今日，エスペラント界の重鎭として，推しも推されもせぬ地盤を築き上げられた事に對して，深甚の敬意を表して此思ひ出での記事を結ばうと思ふのである。

後記＝小坂氏の當時のパンフレツトには La najtingalo, La leona felo. 兩方とも小坂氏の露西亞讀本よりの，エス語譯であつて，陸軍幼年學校の玄關先のペン畫並びに，同校々長野口大佐のペン畫肖像，及び幼年學校生徒の各服裝圖等が，いづれも小坂氏の筆に成つたものである。

〔編輯附記〕 La Japana Esperantisto の第 1 卷第 1 號(明治 39 年 8 月 5 日發行)第 3 頁に「第八，第二例會」の題下に「7 月 12 日午後 6 時から神田の學士會事務所で第 2 回例會を開いた。當日集つたものは安孫子貞次郎，淺田榮次，藤岡勝二，飯田雄太郎，黑板勝美，堺利彥，斯波貞吉，田川大吉郎，薄井秀一及び丘淺次郎，和田萬吉，松井知時，井口丑二，原松治，杉井和一郎，石川安次郎，岡田榮吉，木內禎一，大杉榮，古賀千年氏等の 20 名で，又橫須賀から加藤節氏が來られた。當日の會合で雜誌發行のこと基金募集のことを議決し，又 9 月の大會の準

備，横須賀支部のことに就て意見を交換し，又毎會短い詩や散文を集つた人に頒つことに定め早速 "La Vojo" と "Bone kaj Malbone" を配布し，黒板博士と淺田教授が之を朗讀された。(以下略)」

とでてゐるし第4頁には「横須賀のエスペラント協會」といふ見出しで

「加藤節氏を幹事として横須賀のエスペラントが日本エスペラント協會を組織せるは昨年9月のことにして爾來熱心に加藤氏等は此語の研究と普及に勉めたりしが東京にて日本エスペラント協會の發表ありしより之に合併することとなりたり。」

とでてゐるこの二つの記事と上記の加藤節氏自身の記述とに三つのくひちがひがある。

その一は加藤節氏がエス語を學習されたのは明治 38 年か 39 年かの問題。

その二は加藤節氏が日本エス協會を横須賀に創立されたのが明治 38 年か 39 年かの問題。

その三は横須賀の日本エス協會が東京の日本エス協會に合併したのが何時の事かの問題である。

扨これらの問題について上記原稿をいただいてから編者から加藤氏宛照會した所第一の問題については次の様な解答をよこされた。

「どうもハツキリした記憶もないので甚だ申譯もありませんが,種々の事實を綜合して考へて見ると私がエス語を始めて學んだ O'Connor の著書が 1906 年(明治 39 年)發行の改訂新版であつたり又山口氏と出逢つたのは牡丹の花を見に行きし日のやうにも憶へますので明治39年が正しいと思ひます。何しろ總べてを一氣呵成に爲したやうでした。即ちエス語を獨習する,英國エス協會に手紙を送る，日本エス協會の旗上げをする。通信講習を行ふ，著述をする，辭典を編纂する等々……」

とのことである。この御返事によつて加藤氏のエス語學習は明治39年5月頃といふことが確實らしい。してみると

第二の横須賀の日本エス協會の創立が明治 38 年 9 月といふことはありえないことで La Japana Esperantisto の記述は編輯者の聞き誤であると思ふ。

而して小坂氏所持の材料によつて横須賀の日本エス協會の創立は明治 39 年 5 月 28 日であることが明かである。

第三の横須賀の日本エス協會が東京の日本エス協會に何時合併したかの問題についての加藤氏の御答は

「小生の微かな記憶をたどつての記事故誤りがあるやも知れませんが學士會で初めて黒板博士にお目にかかりそこで横須賀の日本エス協會が既に存在する事をお話し申して今後の處置を御相談致し次に第一回大會に出席した際横須賀支部に改めて欲しいとの御協議の結果を承つたやうに記憶します。」

との解答をよせられた。

之について小坂氏の記憶をただした所小坂氏は「加藤氏が東京側の合併希望について横須賀へ歸つて皆と相談した所とにかく東京側には博士とか教授とか名士が多いのでとてもかなはないから合併を承認しようといふことになつたときいてゐる」と語られた。

上の La Japana Esperantisto 第 3 頁の記事を見ると加藤氏は東京のエス協會の 6 月 12 日の第一回會合には出てをらなくて第二回會合に初めて出席して横須賀にも既にエス協會の出來てゐることを話し黒板博士等から同名の會が日本に二つあるのも變故東京の會に合併してもらひたいとの申出をうけ横須賀へ歸つて幹部連と相談したことは事實と思ふ。そして合併の承諾

をしたのが加藤氏の記憶の如く9月の第一回大會であつたのかそれとも既にその前に承諾の通知を出した(書面か何かで)のかは不明であるが Japana Esperantisto 第1號の第4頁の記事をみるとやはり第1號が發行された8月5日(これは本當に8月5日かどうかわからぬが)までに横須賀の方から承諾の手紙でも出してゐるのではないかと思ふ。少くとも大體合併の意向である位のことを誰かから東京側へ通知したのではないかと思ふ。尤も加藤氏が口頭で正式に承諾を表明されたのは第一回大會の時であつたかもしれぬが。

生きたる證據

千布利雄

〔編者附記〕これは明治 39 年 9 月 28 日日本エス協會第一回大會(即ち第一回日本エス大會)に於てエス語で演說せられたものの和譯 (La Japana Esperantisto 第 1 巻第 4 號所載) である。和譯者は同誌の編輯者で千布氏ではないと思ふ。これは千布氏が何時エス語をやられたかを示してゐて興味があるのでここに再錄した。

私は今日玆に演說をされる諸君の如く，有名な者でも又身分ある者でもありません。私は唯エスペラント語學校の一學生であります。玆に此盛大なる會合に於て，私が，我學友を代表致しまして諸君の前にエスペラントを以てお話を致しますのは大なる光榮と存じます。

私がエスペラントの研究を始めたのは僅かに一ヶ月前でありまして，8 月 31 日に此協會に入會し，本月 17 日，即ち開校と同時に右の學校に入學致しました。學校に參ります以前は獨習をして居りました。

私の研究は斯の如く短時間で，又此の語に關する知識は斯の如く不十分でありますが，それでも私は今日，素より能くは出來ませぬけれど，幾らか之を讀み，書き又話すことが出來ます。

私は長い間英語を學びました，今も猶學んで居ります。然し一向英語を書いたり話したりすることが出來ませぬ。然るに僅か五週間の勉强で以て此の興味ある有用なる言葉を了解し，使用し得ると云ふのは，如何にも愉快なることではありませぬか。

然らば，何が故に斯の如き驚くべき結果を得たのでありまうか決してこれは私がエライわけではない。それには學校に於ける先生の親切なる敎授も與つて力あることは勿論ですが，然し，私は固く信じます。これは全く言葉が學び易いからであります。

エスペラントに就て委しい事は，既に他の諸君が御話になつたことでありますれば私は玆に申上げませぬ。唯だ私は諸君に一つの生きた標本，此の國際語の容易いこと便利なことを證據立つる所の生きた標本をお目にかけます。それは斯く申す私自身でありす。終に臨んで，此の盛大なる會合を祝すると共に，私は，我協會が彌々益々隆盛に赴かんことを希望し，又諸君來會の紳士淑女諸君が此の有用なる言葉，即ちエスペラントを十分御研究あつて熟達せられんことを希望する次第であります。

ガントレット氏についてエス語を學ぶ

村本達三

私の家は印刷屋で岡山在住外人宣教師諸氏からの注文を引受けて居ました。其一人の米人ペテー博士の紹介で，明治 33 年第六高等學校が當地に開かれると共に，英語及びラテン語教師として來岡せられたガントレット先生のレターペーパーや，封筒に，先生のアドレスを印刷させて貰つたのが，私の先生とお近づきになつた最初でした。明治37年に先生著“Phonetics”(明治38年2月東京三省堂發行）の印刷を御引受し校正の事等で，度々先生と御話をする機會が出來續いて他の二種の書籍を印刷し，益々御宅へ出入する事が多くなりました。其頃先生の夫人，あの有名なガントレット恒子女史は，東京に居られて先生は三友寺に，鰥暮しをして居られ，建築家の古橋柳太郎氏や造兵少將の渡邊貫三郎氏(其頃前田)等が，六高に通學しながら，家婢を使つて，先生の家事を分擔して居られました，其等の諸君が先生と，英語でペラペラやつて居られるのを見て,羨ましくて堪らず,度々先生に英語を敎へて下さるやう御願ひしましたが，却々承知して下さいませんでした。其中に夫人が二人の小さい御孃さんと御一緒に御歸りになり，賑やかな御家庭になつた頃(明治 38 年)の或日，突然先生が「村本さん，エスペラントを稽古しませんか」と申されるのです。私が「エスペラントとは何ですか」と御尋ねすると，「ポーランド人ザメンホフの作つた世界語だ，今度妻にこれを敎へやうと思ふから，君も一緒に習ふたらどうだ，テキストは英語だから，英語も一緒に覺えられるぞ」と云はれるので，私には大變な重荷ながら，英語が習へる嬉しさに，有難うございますと引受けてしまひました。隔日に，一週三日と授業日が決つて，御宅へ通ひました。テキストはレヴュー•オブ•レヴュース社發行“Esperanto, The Student's Complete Text Book.” J. C. O'Connor 著でした。英語に御不自由のない夫人の御邪魔にならぬやうにと隨分努力が必要でした。但し私にも少許ハンデイキャツプがありました。それは中學は私が佛蘭西語でやつて居た事でした。デイマンチヨ•サンデイと覺えるより，デイマンチヨ•デイマンシユと覺える方が似て居る丈け覺え易いのです。しかし飛んだ學友が出來た爲に夫人は大變な道草で,御迷惑は少くなかつた事でした。それにも拘らず少しも悪い顔をなさらず誠に氣持よく御つき合ひ下さつた事は今に忘れないで居ます。今日の御盛名もあの方ならばこそと感嘆して居ます。先生が英語で，エス語通信敎授をなさいましたのも，其頃で，發送やガリ版刷の御手傳を時々致しました。其受講者が買ふだらうから小語彙を印刷出版せよと先生の御勸めで，英エス，エス英の小辭書“A Short Vocabulary”を發行しましたが，原稿の訂正や校正迄先生のお力添で完成出來たのです。萬國エスペランチスト年鑑の名簿に登錄して貰へと，先生の御勸めを承諾すると，私が手紙を出してやると仰言つて，御自分で書いて下さいました。同時に British Esperanto Association 入會の手續もして下さいました。其頃は名簿掲載を承知したと云ふことを必ずザメンホフ博士が自筆で全文を書いて答へられました。此端書を失つて甚だガッカリして居ます。登錄番號は 11839 でした The English Esperanto Dictionary の著者 Rhodes が 5260 で Esperanto-English Dictionary の著者 A. Motteau が 6266 でしたから其頃にはまだ歐米でも無茶に澤山は加入者がなかつた事と思はれます。夫人の令弟山田耕作氏宛の外國からの繪葉書を數々先生が下さつて，君の名で返事を書けと仰言るから，先生に訂正して戴いて出した事もあります。其頃山田氏は音樂學校在學時代で，休暇中は先生の御宅に居られ，前記の學生諸君と共に起居されま

した。夫人から色々同氏の噂を聞いて居ましたが，又御目にはかかつて居たのでせうが，名のり合つて御話したことは覺えませんでした。しかし山田氏の方では私を御承知であつたと見え，後に獨逸へ御留學の時に圖らず實業練習生として在獨中の私の從弟の處へ泊られて，岡山の村本なら知つて居ると云はれたと云ふことを其折從弟から知らせて來ました。

エス文を活版で印刷したのは恐らく日本では私が最初ではないかと思ふて居ます。先生が通信敎授をなさつた時のリーフレツトが最初のものです。符號文字の ĉ がなくて ê の上の ^ を切り取り c の上につけて用ひました。私の辭書 A Short Vocabulary の時には「イタリツク體文字は ^ のある文字の代りです」と斷り書をしてイタリツク體文字で代用しました。丸山順太郎氏と先生の合著「世界語」の折には，やはり前記の通り削つたりくつつけたりして非常な手數をかけて造つて間に合せました。

明治 39 年春母校の岡山師範附屬小學校の校友會の席でエスペラントを紹介しました。これは私が公表の第一聲でした。同年黒板博士の御依頼で先生の通信受講者名簿の送附承諾を先生に願つたのでした。其數は數百の多數に達して居ましたが過半數は名ばかりの連中でした。先生の寡慾と普及に對する御熱心から，六高の職員生徒には無料で敎授すると云はれた處，只より安いものはないと云ふ位の氣持と，前に先生が六高校友會誌に，英文でエスペラントを紹介されましたから，アウトライン丈けは知つて居た人もあり，且物數奇も手傳ふて，我も我もと申込んだので，あんな大變な數になつたのですが，初めは少し位讀んだでせうが，問題の解答を出した人はいくらもありませんでした。其内先生が金澤へ御轉任になつた爲，エス語も英語も御敎授が願へなくなり私の失望は一通りではありませんでした。せめてもう一年も御厄介になつて居たら，私の幸福は多大であつたらうと惜しくてなりません。其後は專ら外國人と繪葉書や通信の交換によつて獨習しました。

熱心な同志であつた故赤木久太郎氏が初めて來訪されたのは 40 年か 41 年であつたと思ひます。同君は時と財とに惠まれて居られ，自村に同志を募り自ら講師となつて普及に盡されました。黒板博士の外遊中外國向雜誌發行の資金を得る爲，赤木氏を訪問せられた千布利雄氏と赤木氏の紹介で初めて當地で會ひました。初め赤木氏が日本エスペラント協會を振替貯金口座の持主たらしむべく，基本貯金 20 圓を(其頃は 20 圓で無利息でした)寄附されたのが千布氏來訪の機縁となつたのでした。其時私は出資の餘裕はありませんが雜誌の奉仕的印刷ならば御引受したいと話しておきました。此結果 42 年の 5 月號から 43 年廢刊(外國向雜誌の)となる迄印刷と外國會員への發送事務を引受けて居ました。發送を引受けたのは東京迄の運賃を輕減する爲でした，雜誌を引受けるとなると，どうしてもエス文用の符號文字が入用なので，東京築地活版製造所へ注文しましたが，面倒がつて造つてくれませんでしたから，父の弟子で當地に活版製造所を持つてゐた三省堂主林崎將太郎氏に懇願してやつと造つて貰ひました。其内方々から文法書が發行される樣になり，築地活版所でも，其必要を認めて來たと見え，製造を承諾して來ましたから，後には築地から買ひました。"The British Esperantist" だつたかと思ひますが，エスペラント活字を入れる活字箱の作り方が出て居たのを，東京の印刷雜誌に投書して掲載して貰つたのが此時分でなかつたかと思ひます。

明治 43 年夏赤木氏と協力して，其前歸朝された黒板博士を聘して普及講演會を開きました。驟雨で出足をくだかれたにも拘らず，相應のインテリ層の來聽者を得ました。翌日博士を送つて驛のプラツトフオームに待つて居ますと，やがて着いた汽車の中に音樂學校のユンカー敎授が乘つて居られ，博士も其傍に乘車せられてエス語で私を紹介して下さつたので敎授と數語を

交はせました。之れがエスペラントで外人と會話した最初でした（ガントレツト先生は別として），若い時分の事ではあり無上に愉快でありました。前に書きました萬國年鑑の名簿で名を知られたのと，極東の戰捷國が興味をひいたのか，此頃は盛に世界中から繪ハガキ交換や通信の希望者が殺到しました。パラグワイ，ウルグワイと云ふ樣な處からも來ました。こちらも面白いので時々返事をしましたが終には出しきれなくなつて，もうやめると書いたり他を紹介したりしましたが最後には大分默殺しました。後に此前科を次男に發見せられて攻められ，甚だ赤面しました。昭和5年頃からエスペラントを始めた次男が，休暇中に歸省して，仕舞ひ込んであつた昔の繪葉書や手紙を出して讀んで居ますと，「葉書をやつたのになぜ返事をくれぬか」と云ふ小言を書いたのが三つも四つもあつたと申す事でした。相濟まぬ次第です。失敗はまだあります。印刷機械のカタログを集めたいと思ひ亞米利加の通信仲間へ印刷器械製造者に知己があるならカタログを貰つて送つてくれるやうにと頼むと，間もなく機械屋へカタログを送るやう話しておいたと返事が來ました。續いて其カタログも來ました。此處迄は無難ですが，其機械屋から神戸の商館へ手紙とカタログが來て，岡山の村本と云ふ者が機械を買ひたがつて居るから往つて注文を取れと云つて來たと申して，わざわざ番頭が訪ねて來て，どうか注文してくれと云つて却々歸らない。斷るのに骨を折つた事がありましたが米人の商賣に熱心なのに甚だ感心しました。獨人の中にアサヒグラフの樣な雜誌を小包料2圓も拂つて送つてくれた人もありました。こちらからは有樂社發行のグラフイックを送りました。日野大尉の飛行機や人力車にオートバイを取り附けた變な格好のものに人が乘つて居る處なんかが載つて居たので日本の未開を笑つた事と思ひます。それに繪ハガキがまるで段ちがひでした。其癖値段が高い事でした。之れは餘談ですが獨逸の一大學教授からエスペラントと君の國の言葉以外の言葉で返事をくれと申して來ました。丁度其少し前に今金澤の電氣冶金工業所長の東馬三郎君が六高在學時代――前の渡邊造兵少將と同級でした――私と佛獨語交換教授をして居ましたので短文位自信があつたものですから下書をして當時岡山醫專教授で有名な獨逸文法學者の故高橋金一郎先生に見て戴きました。二ヶ所言葉を置き代へたり直したりして下さいましたので。惡筆の草體獨字で書いて出しました。やがて來た先方の返事を見るとまるで銅版彫刻を印刷した樣な立派な草體獨字で書いてあつて先づ肝をつぶしました。讀んで見ると自分は今迄君の樣な正格な獨文を書く者を見た事がないとありました。あの二ヶ所の訂正がそんなに貴い價値があつたのかと且つ驚き且つ先生の御學殖の程を感佩致しました。或獨人が君程の文法學者は獨逸人中にも少いと先生に告げたと申す事でしたが成程と合點致しました。先生畢生の大事業大獨逸語辭書の完成を前にして先生の急死せられた事は我國學界の爲殘念千萬であります。

當地に戰捷記念圖書館と云ふのが縣の事業で出來ました。今の岡山縣立圖書館です。私が丸山，ガントレツト共著「世界語」と私の小語彙とを寄附に往きますと，當時の司書官で元の私の小學校時代の恩師龜山吉次郎先生から「エスペラントは社會主義ではないか」と詰問的に尋ねられて驚きましたが，それは間違ひでエスペランチストの中から社會主義者が出てもエスペラントと社會主義とは別物ですと大いに辯じました。其頃或中學校の英語の先生が，エスペラントには文學がないと申されましたから，私はフンダメンタ・クレストマテイオを出して色々說明し今に立派なエスペラトン文學が興つて來ますと說いた事がありました。私の父は明治5年出京して當時官吏であり，三條公爵の知遇を得て居た兄の家に入り，頻に任官を勸められたのを斷り，實業に就くと申して今の印刷局の前身印書局で自費傳習生となつて受業したと云ふ變り者で，明治19年に日本ローマ字會の會員となり，同時にローマ字活字を購入したと云ふ

ハイカラ屋でしたから，私のエスペラントに對しては滿腔の賛意を表してくれて居ました。大正になると間もなく父は業界から引退しまして私は次第に繁劇となり健康を害ねる等の事がありエスペラントからも引退してしまつて現在に至つた譯であります。小坂氏は最初から異色ある熱心家と遙かに敬意を拂つて居ましたが，たゆまぬ御盡力で學會が今日あるを得ましたのは誠に故ある哉と感心して居ます。同時に學會創始以來同君を御援助なさつていらつしやる諸氏の變らぬ御熱心を尊敬致します。皆様の御力で益々此運動の偉大なるものとなりますやう，皆様の御健康とを祈つて筆を擱きます。

損得の話を落しました。辭書の出版は無論損でした。雜誌印刷も損になりましたが，これは初めから奉仕的にやる積でしたから損をしたとは申兼ねます。(11. 5. 3.)

おお偉大よ，偉大よ

小坂狷二

『から私の心は絕叫した。それは明治 39 年の初夏の，草や木の葉が發育あり餘つた自らの力に，わななきそよぐ頃であつた。その日手に入れた人類語エスペラントの教科書をまだ半も讀まない內に，感じ易い少年の心は，偉大な何であるか名をまだ知らない，只偉大そのものとも思はれる或るものに觸れて高く高く鳴つた』と松崎君譯『愛の人ザメンホフ』への序文に書いた如く私が學習を始めたのは明治 39 年陸軍中央幼年學校在學中の 19 歲の時であつた。前年2月銃劍術の際強く胸を突かれたのが原因であつたか丁度當時流行してゐたコロップ性肺炎にやられ麴町隼町の陸軍第一衞戍病院に入院して癒つたのが，又8月の鎌倉の游泳演習で生憎不順で冷え込んだせいか9月に本科二年になつてから，又體の具合が惡くその年の暮から一ケ年間『自宅療養』の許可を受け横須賀で靜養してゐた頃であつた。夏にはいつも，田戶海岸に小さい家を借りて晝間母や姉妹と樂しい日を送る習慣で其處へは若い人々が遊びに來たものである。その中にその春加藤節氏の講習を受けた今澤秀雄氏あつてしきりに今世界中に普及しつつある新しい世界語エスペラントの吹聽をする。何にまれ學習慾に燃えてゐる少年の頃ではあり，且つは負け嫌ひの癖から7月の末本屋へ長谷川二葉亭の世界語エスペラントが着荷するのを待ち兼ねて買ひ込み海岸の家へねころがつて三日程で讀み上げた。動機は此の如く單に人のやることなら負けて居れぬと云ふだけであつたが，兎に角數頁讀むか讀まぬ內に14歲の時から學ばされてゐるむづかしいロシヤ語に比べてみて，此の語のまことに巧妙な文法に感じたと云ふばかりでなく，何か不思議な力，それは二葉亭の小冊子には暗示さへしてはないのであるが，單に此の新しい言語そのものを通して來るべき人類の歸結はこれだと云ふ樣な印象を受け，何とはなしに自分の一生と此の新しい人類の言葉とは縛られてもう離れやうにも離れられぬ謂はば因緣にあると云ふ感が湧き起るのを覺えたのであつた。早速今澤氏に學習を始めた事を告白して日本エスペラント協會横須賀支部會に入會した。當時支部は，その創立の歷史的關係で所謂本部たる協會とは獨立して居り，會員から每月 5 錢宛會費をとり本部の機關雜誌 Japana Esperantisto を買入れて配布することになつてゐた(その前に二回程小さい學習用謄寫版刷が配布された。然るに8月協會の雜誌 J. E. 第一號が出て見ると記事ばかりで學習欄がない。是では普及上無價値であると云ふので會費を每月10錢とし協會の機關雜誌の外に支部で謄寫版刷の通信敎授をつけることになり發音の講義や，當時よく使はれてゐた英語(と云ふより米語)讀

本 National 1st Reader のエス譯 Hundo. Ĝi estas hundo... などが掲載された（製本はせず，半紙半分をまた二つ折りにしたバラの刷物である）。

其後處は忘れたが今澤氏に紹介され加藤節氏（高等商船學校學生）にお逢ひしたことはあつたが支部の會合には出席せず一人でコツコツ研究してゐた。尤も翌年卒業の前まで學校は休むつもりであつたので解析幾何だの重學（meĥaniko）だのロシヤ語だの學校の方の種々の獨習の傍に少し宛やつたのである。其の年10月28日の横須賀支部第一回大會には今澤氏にすすめられて出席した。その事に就ては嘗て本誌に書いたことがあるから略す。

翌40年1月26日支部に就き重要な協議をしたいから參集を乞ふと云ふはがきが來た。雨が降る寒い晩であつたが事務所の汐留幼稚園へ出かけた。集つたのは支部長高崎，幹事長福本，幹事中里の三氏と私だけ。創立者加藤氏は顔を出してゐない。幹事長の説明によるとエスペラントの流行は全く下火になり會費も集まらぬしその上加藤氏が海軍工廠に於ける實習を了り練習船に乘込むことになつたから支部を解散する。熱心な會員で繼續して行きたい人は直接本部協會の方へ入會して貰ふことにしたいとの事。大に憤慨したが何とも致し方なく，1月28日附はがきで會員へ支部解散の通達があつた。早速協會へ入會を申込んだ。然し百何名の支部會員で協會の方へ入會替へをしたのは私と高崎會長の二名だけで，支部は全く消滅の形になつた。

其後加藤氏が仕方がないから今澤氏と三人で回覧雜誌をやらうではないかと相談された。

3月（明治40年）暖くなつたので幼年學校へ歸校したが中々回覧雜誌が來ない。とうとうしびれを切らして自ら回覧雜誌を書いてこちらから加藤氏の方へお送りした。然しそれはそれなりで終つて了つた。歸校後二三人の者にエスペラントをすすめた。勿論本はないので自ら西洋罫紙に書いてそれを與へて學習させた。その中に同じ中隊（第二中隊）の重松（後飛行隊に行き帝都から所澤への歸途代々木で火災を起して墜死した）や同中隊の一期下の可兒など云ふのに教へた。五月末明治天皇御臨幸の下に卒業式があつて6月初東京灣要塞砲兵聯隊へ配屬された。今日の野戰重砲に當る第4大隊第12中隊に附けられたが中隊に1年志願兵が二名居たのでそれに宣傳をやつた。當時は協會のJ.E.の外に佛國で出してゐた美しい繪入の Tra la Mondo と云ふ雜誌を購讀してゐた。

一年前から健康上陸軍をやめるかどうかと云ふ事が一家の問題になつてゐた。小供の時から診て貰つてゐた横須賀の湖南病院山田院長（元陸軍一等軍醫正）はやつてやれぬ事はあるまいが陸軍などはつまらぬから止めろと云ふ東京衞戍病院長平井軍醫正（後赤十字病院長）もやめたがいいと云ふ。そこで最後の斷案を亡父の親しかつた赤十字病院長橋本綱常博士に下して貰ふと大丈夫だからお親父の後をついで軍人をやれとの事で兎に角卒業することにしたのであつた。然し學校では大勢仲間が居るので本人たる私は止めたくなかつたのだが聯隊へたつた一人で來て見ると成る程山田院長の云ふ通り毎日馬に乘つて十二サンチ榴彈砲を引つぱつて練兵場をぐるぐる廻りして一生を暮す，これはたしかに面白くないと氣が付いた。丁度7月富士の裾野に實彈演習に來てゐるうちに黄疸にかかり横須賀衞戍病院に入院したのを幸として，9月に陸軍をやめる事にした。

さて暇になつて見ると解散せられたる横須賀支部の再興の問題である。親友の中溝新一君を先づ仲間に引き入れて床の中で寒天版で小雜誌『吾等』（後 Jokoska Esperantisto）を印刷して宣傳普及に着手することにし明治40年10月兎に角まことに微力乍ら歴史的なる横須賀の運動再擧を圖ることになつた。

一方陸軍をやめて方向轉換をやるに就ては山田院長は是非醫學をやれと半强制的に獨逸語を

教へられたがどうも理科か工科が性に向く樣に思ふので英語を始めることになり，初め知人の海軍中尉に National Reader の 1 と 2 を，豐島小學校の中野凌雲先生に 同 3, Union Forth Reader, Franklin の Authobiography を敎はつた。此の先生は毎日熱心に學校の歸りに宅へ來てくれて深夜迄敎へてくれた。何分速成だから豫習に一日に百語も字引を引かねばならぬ。その當時のノートを見ると例へば him と云ふ單語にロシア語で「he の役格」などと刻命に書いてある。此の間も毎月かかさず Jokoska Esp isto は發行しつづけた。翌 41 年 10 月上京して午前中は正則豫備校，午後は正則英語學校へ通つた。校主齋藤秀三郎先生の前置詞の講義を聽く。その講義振りとその systematic study of English の方式にすつかり魅せられて了つた。張り切つた愉快な九ケ月を送つた。私の今日のエスペラント研究は全く齋藤先生の sistemo の模倣である。又今日英語で物を書く力が出來たのもひとへに正則のお蔭である。

明治 42 年春支部の會員も少しく增加したので協會へ正式に復興を届出ると千布氏から支部文庫へ數冊の書を贈られた。エスペラント書が買へぬ當時エス文圖書を手に入れた始めてで大なる喜びであつた。第一高等學校入學準備で，それこそ刻苦の時期であつたが我慢が出來ず，韻文劇の Jolanto を繙いてみると字引なしで樂に讀める。字引なしで外國語の書物が讀めるとは思ひもかけぬことで，我ながらびつくらし乍ら一氣に全篇を讀んで了つた。

その後 30 年の年は夢の樣に流れたが學習の最初に運命づけられた通り，忠實にエスペラント陣營の一兵卒として働かせて貰つて來た。所謂人生の定命をかく過ごして來た私としては此の後何年か知らないが生を了る迄皆樣の後について我にとつて神であるザメンホフに對し歡喜報謝の生活を送りたいと思つてゐる。

思　ひ　出

丘　淺　次　郎

私が初めて「エスペラント」を知つたのは全く偶然でありました。それは明治 24 年 (1891) の 4 月の或る日，ドイツ國フライブルヒ市の或る書店へ スヴェデン語の字引を買ひに行きましたとき，語學書類の列べてある棚の上に Die Weltsprache "Esperanto" と題する小さな薄い書物のあるのを見付けたからであります。私はそれより數年前から「ヴォラピューク」を學んだり「ジレンゴ」(我らの語) と名づける一種の國際語を自分で造つたりして，國際語問題には大に興味を持つて居た際でありましたので，直に之を買ひ求め，持つて歸つて，その日の中に讀み終りました。併し，私はその後「イディオム・ネウトラル」の仲間にも加はり「イド」が出來てからはその會員にもなりました故「エスペラント」を良い國際語の一つであるとは考へながら，純粹なエスペランチストには成り切らずに居りました。

斯くして 15 年を經て，明治 39 年に初めて日本にエスペラント協會が出來ましたとき，直に之に入會しまして，その後は例會には殆ど缺かさず出席して居りました。或る時の例會で私は次の樣なことを云ふた覺えがあります。「私がエスペラントを學んだのは甚だ古いことであるが，同語には私に滿足を與へぬ點が二三あるので，直に純粹たるエスペランチストには成り得なかつた。即ち私は今日までは半エスペランチストであつたが，今日からは不滿の點は暫く忘れることとして，全エスペランチストに成る積りである」。そして，實際その通りにして，それから後は，外國から「イド」その他の國際語で書いた手紙が來ても，返事は必ず「エスペラン

ト」で書いて送りました。そのため，ロシヤの「イド」連中から「日本人は進歩的であると聞いて居たが，君がエスペラントに固まつて居る所を見ると存外保守的な民族と見える」などと皮肉な手紙を受け取つたこともあります。

例會を開いた場所として，記憶に殘つて居るのは銀座の裏通りのカフェー松下であります。集まる人數も少ないので二階の狹い部屋で足りて居ましたが，時々外國人の來會があるためにインテルナツィアの感じが濃くありました。大會としては鶴見の花月園へ行つたことを覺えて居りますが，之も頗る愉快な會合でありました。

古いことは大抵忘れてしまいまして，記憶を搾つても思ひ出せることは僅よりありません。概して云ふと，私は實際の宣傳運動には甚だ不勉强でありまして，御手傳ひに下手な講演をやつたことは幾度か有りましたが，特に覺えて居る樣なものは一つもありません。また自分用としては始終エスペラントを用ひて居りながら學問上，その他に外に向ふて之を活用したことは一回もありません。即ち日記とか硏究のノートとかは悉くエスペラントで書いて居りましたが論文を發表する如きことは無しに終りました。

要するに私は初期のエスペラント運動にはただ蔭で成功を祈るだけで實際には殆ど何の努力もせずに居りました故甚だ殘念ながら，今日の若い方々にその頃の模樣を傳へるに足るやうな事柄の記憶が一向ありません。事によると私が初めて「エスペラント」を知つた時に直にその缺點と感じた二三の點が心の奥に何時までも殘つて居て，私をして熱狂的なエスペランチストに成らせなかつたのではないかとも思はれます。現に自分用の日記やノートを書くに當つては私は malgranda の代りに parva; malsupra の代りに infra; maldekstre の代りに sinistre と云ふやうに勝手な字を使ふて居りました。

明治 25 年エス語について聞く

下瀬謙太郎

世界語ということに私の興味を感じましたのは，偶然手に入りました Volapük 手引の小册子からであります。夫は恐らく明治 22 年頃或はそれよりも以前のことでありましたらう。其時私は高等中學校第三部に居りました。時間が相當多く，殊に緣の遠い Volapük などに沒頭することを許さなかつた事情もありましたか，理思として結構に感じた割合に學び易くないと云ふ一點に少なからず遺憾を覺えたのでありました。その本は今はどこにいつたか見當りませんが，たしか神田明神の近くの林といふ古本屋で買つたもので元軍醫總監をしてをられた松本順さんの長男で松本鵬といふ人が長くドイツに留學の後歸朝されまもなく不慮のことでなくなられたのでその方がドイツからもちかへつた書物の中の一つだつたらうと考へます。

其後エスペラントのことを耳にしましたのは明治 25 年頃のことだつたと思ひます。どういふ機會にどういふ風にして知つたかは今でははつきり致しませんが當時大學に在學して醫學を學んでゐた同級の交遊仲間の橋本節齋，藤浪鑑，岡村龍彥君らの間で話がでたのです。その當時誰が一番先にエスペラントといふことを知つたのかわすれましたが私が Volapük の話をした處誰かが Volapük よりももつとよいエスペラントといふのがあるといふことを云ひだしたのです。その時から私はエスペラントを學びたいといふ氣持をおこしました。併しその時分エスペラントといつた處でまるで雲をつかむ樣なもので本屋ではさつぱりわかりませんから書物

を手に入れようとしても不可能でした。

私は明治 29 年に大學を出て5月から軍醫生活に入りました。即ちその當時は日清戰爭終局の歳で，平和克復の詔勅を拜しましたのが 5 月 5 日でありました。任官と同時に熊本衞戍病院附に補せられまして戰地から還送された重病者の治療を擔任しました。その際歴戰軍醫から聞きました經驗談の中支那の傷病者を取扱つた時支那語の素養ある者がなくて同文とは云ひながら筆談でも十分に意味が通ぜず急仕込の支那語でも間にあはず先方に日本語を敎へるとしても同じ事であり事柄が治療に亘る丈に實にもどかしく感じたといふ經驗談を常にきかされたものです。その時共通語あればどれほど便利だらうかといふことを一層深く考へさせられました。

明治 32 年秋陸軍省醫務局課員として勤めることになり仕事の一として外國文書の保管や取扱がありましたが各國の言葉が夫々異なる爲に，字引丈を頼にして仲々面倒でありました。これらがすべて國際中立語でかかれてをればどんなに便利だらうかと思ひました。

明治 33 年 (1900) 初夏の頃所謂團匪事件がおこり歐米各國の軍隊が北支那に集中した當時日本からは福島派遣隊が之に參加し私はその衞生豫備員の一員として從軍したのであります。太沽，天津，北京の間に於て各國軍共多數の傷病者が出來ましたので前方又は後方の陣地に於てお互の傷病者を處理する必要も起り，又各國部隊の衞生狀況に關し多少の折衝交渉もあり又軍醫同志の來往交驩も屡々行はれました。

當時の派遣軍は日本の外に英，米，佛，獨，墺，伊，露の七ヶ國でありましたが公私の用語は概ね英語か佛語に限られて居りました。併し各部隊と直接交渉の場合は矢張夫々の國語を必要としました。しかも我々の交渉は多く醫學に關係があつたので醫學をしらぬ一般の通譯官はちつとも役にたゝぬ有樣でした。

軍醫の間では一人で各國の言葉を自由に使用し得た者は絕無で二三の國語をよくした者は獨墺露の軍醫に多かつた樣であります。英米佛伊の軍醫では自國語以外の言葉を話す者が殆んど無かつたかと思ひます。

言葉の不便に就ては屡々語り合ふ機會がありましたがエスペラントに就いて多少の知識をもつてゐたのは露國と墺國の軍醫一兩名で其他は全く不案內の樣でありました。

北淸事變が終りまして私は明治 34 年陸軍から大學院に入學しベルツ敎授及三浦博士の許に內科を專攻することになりましたが，研究中諸外國の文獻を渉獵することになり，其都度一方ならぬ苦痛を嘗め盡しました。若しも專門語の發表が皆エスペラントになつたならどの位むだが省けるだらうと醫局の同人櫻田龜一郎，岡田榮吉君等と屡々話し合ひました。其後岡田君が獨逸に留學することになりましたので彼地到著後早速エスペラントの獨修書を送つてもらう樣くれぐれも依頼しました。35 年 (1902) の春岡田君が約束に從ひミュンヘンからエスペラントの獨修書を送つてくれました。これは 1891 年 München にゐた豫備陸軍大尉 Ludwig Meier が自分で出版したもので "Vollständige Methodische Grammatik, Formenlehre und Syntax der Internationalen Sprache Esperanto" といふ菊版 68 頁の小册子です。

好奇心に燃えて此獨修書を貪り讀みましたことは今も忘れ得ないのでありますが，何分相手のない獨りぼつち，また全く實用の見込をもたずにやることですから根氣と共に屡々斷續するのでした。無論病室勤務や研究方面で仕事は力一杯で，殆んど餘力がなかつたかもしれません。

明治 37-8 年の日露戰爭終結の後即ち 39 年 (1906) 8 月に "La Japana Esperantisto" が創刊されました。その年の 10 月私は北京の日本公使館醫務を擔當することとなり東京豫備病院の殘務を半にして渡淸しましたが，前年のエスペラント熱を燒直したり，Esperantisto 創

刊號を樂しみにして携行しました。勿論先にのべた獨修書も行李の中に藏めてをいたものであります。

併し往て見ると支那語を學ぶことが當面の急務となりましてエス書を取出す遑はありませんでした。

北京の駐在は7年許でありますが，其間外交團區域の傳染病豫防問題，特にペスト，天然痘のことに就ての會議，又衞生上に關する協議等が常に開催されますので各國の言葉の異なる所から意外の不便不自由を感じて，會議用語がエスペラントになつて共通する日は如何に愉快だらうかなどの矢張夢幻を逐ふ樣な心持は離れませんでした。

それから歐洲大戰中のことですが此時及び其後ほど國際語の必要を痛感せしめた事は從來曾つてないことと存じます。戰時に於ける赤十字の事業の如き云ふまでもありますまい。

その頃から日本の各地にエスペラントの研究が盛んに行はるゝ樣になつた樣でありますが私としては親しく之に參加する程の境遇に居りませんでした。

其後大正9年臺灣に赴任しましたが當時彼地には既にエスペラントの講習會が有りましたが之にも參加するまでに至りませんで病氣の爲辭任しました。その後大正12年旅順に赴任しましたがその當時大連，奉天，撫順等諸處にエスペラントの講習が盛に行はれてゐました。その翌年に，大連に放送局が新設せられ逸早くエスペラント講座が開催せられ尾花講師の開講の辭をエス語で述べるをききました。これが私がエスペラントの發音を耳から聽いた始めでありまして愉快に堪へませんでした。その後のことは今度の御尋ねの範圍を脫してをりますからここに申上げません。（昭和 4 年 4 月ザ祭における談話要旨として後日下瀨氏が自ら書かれたものの中より抜萃し二三ヶ所昭和 10 年 4 月下瀨氏の編者に語られた談話により同氏の同意の下に修正せしもの）。

エスペラントと私

吉　野　作　造

石井研堂氏の增訂新刊「日本事物起原」に「日本エスペラントの始」と題する一項がある。その中に

「吾が國にてこの新言語の研究と普及とを計れるは明治 39 年ころよりのことなりとす。即ち 38 年の 4, 5 月頃，東京帝國大學教授文學博士黑板勝美エスペラントに關する談話を雜誌「直言」に揭げし時は絕て反應も無かりしが翌 39 年 5 月讀賣新聞に再び同氏の談話筆記を揭ぐるに及び漸く世間の注意を引けり」

とあるが私は之より先き明治 36 年 5 月發行の「新人」誌上に「世界普通語エスペラント」と題し可なり詳細の紹介を公にしたことがある。之はその當時愛讀して居つた倫敦「レヴォー・オヴ・レヴォー」誌に出て居たウォリアム・ステッドの論文を譯したものであつた。

いま正確に記憶して居ないが，ステッドはその頃熱心なエスペランチストであり，36 年の春頃よりその主宰せる「レヴォー・オヴ・レヴォー」毎號の誌上に，その普及宣傳の爲に一二頁を割いて居つた樣に思ふ。二三月頃の號に彼れの詳細なる說明のあつたのに興味を感じ，直に之を譯して「新人」に寄せたのである。「新人」は海老名彈正先生の牧せる本鄉敎會の青年信徒の宣傳機關で，同先生を主宰とし，大學々生たりし私も，その編輯同人の一人であつたのである。

「新人」への寄稿と同時に「レヴォー・オヴ・レヴォー」の廣告に依りオーコンノル著「エスペ

ラント」と云ふ獨案内を倫敦へ注文した。この本は今以て所藏して居るが，11 月 10 日到着の附記があるから，私も明治 36 年の 11 月から之を學び始めたと云ふわけになる。眞面目にもやらなかつたし又間もなく中止したから，物には勿論ならなかつた。物にならない者は今日も仍然として舊の如くである。

そんな次第であるから，當時黑板博士の樣な熱心な研究家のあることも知らなかつたし，又其後協會の創立を耳にしても入らうともしなかつた。大學でも小野塚敎授より雇敎師のブリデル先生がその方のことに明るいと聞いて，一時親しく敎を乞はんかと考へたこともあるが，面倒臭がつたものか遂にその意を果さなかつた。

「新人」に寄せたエスペラントの紹介の拙稿の全文を次に再錄する。原文の儘を存し故らに斧鉞を加へない。

世界普通語エスペラント

普通語の必要　歐羅巴のごとき四隣外國と境を接する國々にありては，言語の同じからざるため不便を感ずること頗る大なるものあり。況んや交通機關の發達と共に國際的往復の頻繁ならんとする今日に於てをや。海牙の仲裁々判所に提起せられたる最初の事件は，羅馬敎會に殘されたる十五萬磅の財産の分配に關する米・墨二國政府の爭議なりき。其時の公用語の種類を聞くに，敎會はラテン語，米國政府は英語，墨國はスペイン語，五人の判官の中，裁判長はディン語，二人は和蘭語，一人は英語，一人は露語，原被兩告の辯護士は白耳義人にして佛語を用ひたりとぞ。其混雜推知すべき也。

……………………………………………………

……………………………………………………

（以下約二千二百字あるも宣傳記事につき興味うすき故省略す——編者）

追　　　記

石井氏の記述に依り明治 38 年度の「直言」を調へて見た。3 月 19 日發行の第 7 號に堺枯川の署名ある「エスペラント語の話」といふがある。一と通りの說明はここに改めて紹介するまでもあるまい。只最後の二句を引用しておく。

△日本で此エスペラントの事に注意して居る者は，東京大學の黑板勝美氏と長崎に居る佛蘭西の宣敎師某と外に一二人しかないとの事。

△佛國の社會黨が此エスペラントを世界語と認め其戰士に學習を奬勵するの決議をしたと云ふ前號所載の事實に因み，吾人は黑板氏の談話に依つて此記事を作つた云々。

堺君をして黑板博士の談話を載するに至らしめた佛國社會黨の報道と云ふのをその前號に探すと斯うある。

○萬國語エスペラント　去年 12 月 18 日モンペリエに開會したる佛國社會革命黨エロー

ル州會は資本家制度に對する階級闘爭に萬國勞働者が能く其の意思を疏通し得ん爲め，エスペラントを以て萬國語と認め，各戰士に其學習を奬勵すべき事を決議したり。

（昭和2年發行「講學餘談」より）

日露役直後滿洲でエス語を學ぶ

高橋邦太郎

私がエス語に接觸せるは日露戰役直後明治 40 年 1 月 27 日大連に於て J. C. O'Connor の Esperanto, The Student's Complete Text Book を手にせる時に始まる。當時私は野戰鐵道技師として昌圖以北の鐵道復舊に從事中の頃であつた，同線路は露軍退却の際完膚なきまでに破壞して行つたものであつた。右復舊工事一通り完成した後大連に出張せるに同地工場班の事務員たりし知人故藤田榮一氏からエスペラントなるものを知つてゐるかと問はれ，それに就ては何時か讀賣新聞かで一寸讀んだ事があると答へたら，然らば該語學者を紹介しやうと言ふ。イヤ御好意は有難いが人造語などは先づ御兎を蒙りたい。私は今公務の餘暇に支那語を習つてゐるが，それさへ稍あきが來てゐる。此上死語同様のエスペラントなどとても學習の餘裕も希望もないと答へたら，藤田氏は自分に見る所あつてお勸めする。兎に角一應其人に逢つて御覽なさいと無理に紹介して吳れたのは同じ工場に勤務中の武藤於菟氏であつた。同氏は一通りエス語に關する說明をされた後，委細は此本にてと貸して吳れたのは前掲の敎科書であつた。私は否應なしに借り受け，カバンに入れて歸任の途に上つた。

こゝで一言御斷はりしますが，「エスペラント」誌本年3月號に掲載の拙稿及び其他の追憶談に，私は明治 37 年冬エス語を習ひ始めたと書いたが，今日に至りそれは全く私の錯覺であつた事を發見し，如上の年月日を確認するに至りましたから，此序を以て訂正し，謹んで輕卒の罪を御詫申します。

其頃戰地の鐵道は主として軍需品輸送に使用され，客車と申しても古型の三等車計り，然かも其數極めて少なく，皇族か高官の外は便乘を許されなかつた。私は其時四五人の便乘者と相携へて小窓さへ無い有蓋貨車內の客となつた。車中の徒然に私は例の本を取り出し蠟燭の灯影でペイヂを繰り始めた。

ああ何と云ふ素晴しい事よ！私は今英書に依り此奇蹟的國際語に就いて讀んでゐるが，自分の過去を顧れば，斯く英語を解するまでに，どれ丈青年時代の大切な時間と腦力とを費した事か。否これは自分一個の問題でない，我國の中等敎育に於て英語の敎授に伴ふ有形無形の損失は實に測り知るべからざるものがある。こんな事を考へながらペイヂを繰る間にエスペラントの文法は大體呑込めた。エスペラントは他の外國語に比し十分の一の努力で優に十倍の能率は上げ得られるであらう。單に異民族と接觸——然かも對等の資格で——しやうと云ふ目的の爲なら是までの樣に外國語學習に浮身をやつす事はもう時代後れである。自國語を以てしては到底外國人と交際し得ぬ情ない地位にある我々日本人は我から進んでエスペラントを唯一の國際的交通機關とすべきであると確信するに到り，其確信は一糸亂れず爾來30年の今日に續いてゐる。

約1週間の後私は獨言を言つた「私はもうエスペランチストである」と。そこで私は初めての試みとして武藤氏に宛て其好意を謝したるエスペラントの書面を送つた。

もう平和は恢復した。2 年間滿洲の野に低迷せる暗雲のすつかり晴れ渡り，昨日までの不倶戴天の敵も今日は友邦國民同志と轉向した。そこで私は露語を知らぬを幸にエス語に依つて其昨日の敵と意思の交換を試みやうと思ひ立ち，同年3月請暇の上ハルビンに赴き，全力を盡して綠星者を求めたが，エス語の讀物を買ふ事すら出來なかつた。

加之日露大戰後尙日が淺いため市内は未だ血腥く，白晝强盜横行し，つい一兩日以前にも日本醫師一族が鏖殺されたなど云ふ噂さへ耳にしたので，滯在2日で匆々に引上げた。

歸途私は或る外人と同車した。其人相から察するに彼はロシヤ人でなさそうだ。果せる哉彼は營口に住むギリシヤ人の卷煙草商であつた。其語る所に依れば彼は數ヶ國語を話し，ロシヤの卷煙草廣告ビラを集めに行つたシベリヤからの歸途だとの事であつた。彼は私に幾枚かの見本を示し，どう云ふ圖案が特に日本の軍人に氣に入るだらうかと私の意見を求めた。私は例の講習書を取り出し，其表紙に印刷してある星を指し「此星は私の帽章に似て居らぬか」と問ふたら「イヤそつくりです!」と答へた。

そこで私は彼に，其星こそは日本軍人に取つては何にもまして氣に入りもし，魅力もあるのが當り前である，從つてそれを商標にしたら吃度よく賣れるであらう，但し其場合はそれを綠色にし，煙草に「エスペラント」と名付ける樣にと勸めた。

彼は此進言に興味をもつた樣で，歸つたら早速實行しませうと約束した。私は喜びの餘り大切な講習書の表紙を氣前よく切取つて彼に與へ，尙私の名刺を添へて言つた。「『エスペラント』煙草を賣り出したら，此住所宛に御一報下さい」。彼は承諾した。

私は勇敢に，イヤ冐險にも此出來事をエス語で綴つて當時の日本エスペラント協會の機關雜誌 Japana Esperantisto に送つた——實に私の生涯に於ける最初のエス文原稿である——が，下手な記述はお恥かしい事ではあるが掲載に値しなかつた。加之待望の『エスペラント』煙草もどうやら煙と消えて了つたらしい。

明治 40 年 4 月歸國後私は前任地福知山に歸り 2 ヶ年住んだが，其間には何等記述すべきものもなかつた。

明治 42 年から大正 7 年までの 10 年間私は大部分廣島で暮した。其間廣島高等師範學校教授中目覺氏其他と同志として知合つた。又其間終始一貫エス語運動に聲援し吳れた藝備日日新聞主筆故前田三遊氏の献身的努力は廣島市エスペラントの歴史上特筆に値する。同紙は先年藏相たりし故早速整爾氏父君の經營せるものであつた。

明治 43 年5月廣島に於て帝國鐵道協會の年次總會が開かれた際，私は鐵道界に宣傳を試みた。其時の司會者は生憎にもエス語に同情なき鐵道界の大先輩で，演壇の側私の耳元で「簡單!」を連發されるので，私の講演はしどろもどろに終るべく餘儀なくされた。

然し引續き催された園遊會でエスペラントに就てもつと知りたいと色々な質問を發する人も五六人あつた。其中には外國人の顏も見えた。私は大會後彼等にオーコナの講習書を送つて，彼等がやがて同志になる樣望んだ。

およそ一ヶ月經つてから，果してあの書に目を通されたかどうかを探るため，其内の一人にエス語で手紙を出して見た。處が何と云ふ喜ばしい事か，折返しエス語の返事が來た。然し其後偶然汽車の中で其人に逢つた時次の樣な申譯的辨解があつた。

「實は折角君から寄贈を受けながら，あの本は一頁も讀まず，どこか本箱に押込んであつたので，君の手紙を受取るとあわてて，其本を探し出し，數時間學習の後辛うじてあの返事を書いた」との事であつた。

其人と云ふのはトルストイではなく，琵琶湖疏水工事——從つて日本最初の水電工事——を擔當せる青年技師として其名は海外にまで知られ，其後東大教授又京大工學部長となられた工學博士田邊朔郎氏であつた。

明治 44 年 12 月私は水電工事の用で遞信省に出頭した序を以て時の大臣林董伯閣下を訪問

し，大臣としてエス語に對する御意見を御尋ねした（當時同伯は日本エスペラント協會の名譽會頭であつたが）所，同伯の言はるるには今大臣としては直接何等後援を與ふると云ふ譯には行かぬが，其内閑散の身となつたら個人として全力を盡さうと云ふのであつた。されば其翌大正元年夏廣島に公務上出張されし際にも，停車場にて綠星旗を翳せる我々同志の歡迎を快く受けられ，尙我々（中に廣島高等師範學校教授中目覺，乾環，神田正悌，高橋梓，四野宮豐治，故河野元三，仲佐貞次郎，外三氏あり）の中心となり記念撮影の光榮を與へられた。然るに其後1年足らず大正2年7月溘焉薨去された事は我エス語界の爲めにも實に追惜の至りであつた。

林伯訪問と前後して（年月はハツキリせぬが）私は德川公爵閣下を華族會館に御尋ねした。それはたしか英國の同志から同公に言及せる通信を受取つた時であつたと思ふ。其時も林伯訪問の時と同樣エス語に關する御感想を叩いたら充分同情の御言葉を伺ひ將來のため大いに人意を强うするに足るものありと滿足して引取つた。昨年東京にて開催せる赤十字社國際會議の樣な場合，日本を代表しての挨拶はドイツ國代表がドイツ語で話した樣に，堂々と日本語でやつてのけられるか，左もなくばエス語であつたらと當時ラヂオで聞きながら思はずに居られなかつた。

大正2年4月私が宣傳講演をやつた時「廣島新聞」記者が「3日間で習得出來る國際語エスペラント」と大活字の見出しで記述した事もあつた。

同市で大正3年ハルビンの Kostin 氏夫妻を迎へた。彼は教育家でハルビン市エスペラント會の書記であつた。鐵道省運輸局長木下淑夫氏――大正12年の震災で橫死せる――の好意で私は此夫妻を神戶東京金澤等へ案內したが，到る處歡迎會が催された。

彼の講演は各地で好印象を與へた。私は夫妻を京都や宮島へも案內したが，美しい景色を彼等は滿喫した。

翌大正4年私は遊意勃々禁じ難く，中目教授と相携へてハルビン，ウラヂヲへとエスペラント旅行を試みた。

我等は早くも長春（今の新京）から東淸鐵道（今の北滿鐵道）の賓客となつた。我等のため特に車室を用意し出迎へ吳れたのはコスチン氏とハルビンエス語會々長で，東淸鐵道の主任技師故 Kazi-Girej 氏であつた。車中同氏の思ひ付に依り，我々エス語實用の最初の試みとして，食堂車で同行の日本人の爲に通譯の勞を執つた。彼等は後の鐵道大臣仙石貢博士に率ゐられた帝國議員の一行であつた。日本語とエス語に，それを更に露語に通譯したり，又それを逆にやつてうまく成功した。

8年前同志を求めて得なかつたハルビンに到着すると，これはまた何たる變り方だらう。早くも乘降場に待受けたる多數の綠星緣として我等の行を祝福するが如く，溫かき握手の間に浴せかけられる彼等の歡迎の辭は一言一句明瞭に聞き取られる。此瞬間の感激は今尙ありありと記憶してゐる。

翌日我代議士一行のため陸軍々樂隊入りの豪華な歡迎會が催された。我々兩人もそれに招待されたのは全く望外の光榮であつた。席上主客の間に交換されし三四の儀禮的演說は滿鐵より同行せるモスコー大學出身と云ふ某氏が通譯した。其時中目氏は突然立つてフランス語で謝意を述べた。それは接待員長ホルワート將軍に直接に解らせる爲であつた。若し將軍がドイツ語を解すると中目氏が知つたならドイツ語で話したであらう。

此不意の發言に些か驚いた Kazi-Girej 氏は私に日本語で話す樣にと囁いた，初めは私にエス語の演說を所望したのであつたが。私は氏の希望通り日本語で話した。

續いて Kazi-Girej 氏の忘れ難い印象的な演說があつた。氏は約 20 分にわたり自國語で非常に雄辯に話した。

氏の演說は通譯されなかつたから私に解らう筈はないが，後で示されたエス譯に依れば其演說中次の樣な一節があつた事を記憶してゐる。

「萬物の靈長と誇る人間は少くも相互諒解に就ては動物に恥ぢなければならない。見られよ，我々今日の宴會席上主客共通辭に依り辛うじて形式的な挨拶を交換する以外は恰も聾啞者の會合見た樣なものである。神ならぬ身の私はエスペラントの將來を豫知する事は出來ないが，外國の同志と斯の如く自由自在に胸襟を開いて親善を實行しつゝある私は自己の利益のためエスペラントを捨る事は出來ぬ。又隣人の利益のため宣傳を思ひ切る事も出來ぬ云々」。

私は該演說の梗概を手交され持歸つたが，“Japana Esperantisto”の編輯者千布利雄氏はそれを同年の 11 月か 12 月號に載せてくれた。

それから我々はウラヂヲストクへ向つたがそこでも同志はハルビンに劣らず親切に我々を歡迎して吳れた。Kokin と云ふ大きなカフエーの一隅で多數の客に耳新らしき言語で愉快に談笑してゐる我々日露兩國人の一團が一時彼等の注視の的となつた事は今尙會心の思出である。

ウラヂヲからの歸途我等兩人は再びハルビンに立寄り，奉天で別れた。それから私は北京(今の北平) へ行つたが，車中車掌及び食堂給仕の如何はしい英語に對し，日本語と怪しげな支那語のみを以て應酬したさへ我ながら變つた旅客と思つた。北京にては UEA の委員 2 名を尋ねたが逢へず大いに失望した。

一人はベルギー公使館員で大戰に出征するために歸國して居り，もう一人は支那人であつたが其人を探すために，日本では何處でも見られぬやうな狹い路地に這入つて行つた。

然し幸にも私が明治 35-6 年頃福知山にて鐵道建設の練習を指導した支那の鐵道官吏で，我鐵道協會員である李壯懷氏を探し出し，彼の紹介で鐵道技師華通齊氏と逢ふ事が出來た。此人とは明治 43 年 2 月 (同氏ベルギー留學中) 以降數回通信し合つた事もあり，實に不思議な邂逅であつた。稍遲くはあつたが，華氏夫妻は可愛らしい眼の混血兒を抱へて私を迎へて吳れた。華氏は沈默勝であつたが，夫人は時々無意識に支那語を，例へば“vi”といふ所を「儞(ニ)」といふ樣に交へながら非常に流暢に話した。彼女は私の記憶違ひでなければポーランド人である。たつた其時丈ではあつたが，北京でエスペラントでしやべることの出來たのは實に嬉しかつた。昨年 10 月我學會を訪れた華夫人と云ふのは卽ち其人であつたと聞き，21 年前の懷舊談を試みたかつた。

大正 5 年廣島高等師範學校の英語敎授某氏と藝備日日新聞紙上エスペラントに關し論議した事もあつた。又或時(年月日不詳)小坂氏とアレクサンダー女史を迎へ，席上流川女學校敎師フルトン孃の日本舞踊に打興じた事もあつた。

大正 5 年 8 月にはウラヂヲ市エスペラント會々長公證人 Vonago 氏を迎へたが，同氏は其會の代表として日本エスペラント協會々長黑板博士に贈るべく特別に作つた豪奢な署名簿をもたらした。博士は其時京都に滯在中であつたので，兩氏が京都にて親しく握手される樣前以て書面及電報にて出來得る限りの手配をしたが，生憎にも博士は其日奈良に出張不在であつたのと，京都驛の驛員やツーリストビユーローとの諒解が不十分であつたため——Vonago 氏はフランス語を話すが英語は出來なかつた——事は甘く運ばなかつた。

其上氣の毒にも宮島から手荷物の運搬に手ちがひがあつて，カバンが敦賀で手に入らなかつたので，氏は日本の單衣と羽織の儘で乘船歸國しなければならなかつた。氏は宮島滯在中我

Tourist Bureau にエスペラントを採用する様進言の書狀を出した。

大正6年4月 Majstro の永眠を聞いて悲歎にくれた直後私は上海から杭州へ，更に錢塘江をジャンクで10日間にわたつて遡航した。上海で二人の同志に逢つたが，一人は以前から種々な西洋のエスペラント雜誌のために中國の古典をエス語に譯してゐた盛國成 (K. Ĉ. Ŝan) で，も一人は某英商會員陸式楷氏であつた。上海滯在中は毎日盛氏の訪問を受けた。

杭州の市技師徐安眞氏も亦私を歡迎し，有名な西湖の靜かな水で，東京から携帶した新調の流量計の調整に，あらゆる便宜を與へ具れた。湖心にある林和靖の墓側，梅樹の下，彼の愛撫せる黃鶴の塚がある，題して鶴塚と云ふ。近年の建設に係り徐氏夫人の手書なりとの事。これはエスペラントとは何等關係は無いが，林處士と梅と鶴の合作は我々日本人に取つては寒山寺の楓橋夜泊の碑と同樣に相當興味あるものと思ひここに附記したのである。

其夕徐氏の設計に成れると云ふ湖畔の某料理店に入り共に晩餐を喫した。會稽產の老酒三行，耳熱するに及び徐氏談論風發，世界平和のためエス語の必要を說く事切なり。數日前上海航路の我平野丸で英語に中毒せる私は初めて起死回生の思ひをなすと同時に，賴もしき支那靑年と思ふた。

私の大正8年までの思出は先づこんなものである。私のエス語を學び始めた頃は東京には主として千布利雄氏，横須賀には小坂狷二氏など盛んに活躍して居られたらしい。Japana Esperantisto 誌上木村自老氏の我俳句に關する寄稿を讀み蔭ながら敬意を表した事もあつたが，同氏は陸軍の佛語教授と仄聞せるのみで今以て未見の儘である。

明治時代長崎でエス語をやつた人

富 松 正 雄

長崎は我國近世文化輸入の門戶として著名であるがエスペラントの我國へ渡來の門戶として閑却せらるべきではないと思ふ。エスペラントの發表は明治20年(1887)であるがその頃より長崎敎區の神父として赴任のフランス人 Frenau 師は浦上天主堂の設計建築に任じ明治40年未完成の儘逝かれたが一方若い信者達に音樂を敎へ鍬をとる手に樂器を奏でる技をも傳へて katolika bando を創設するといつた八面六臂のすぐれた人であつたが私は人から同師がエスペラントを學んだといふ事をきいてゐる。

其の後を繼いだ Raquet 師は鹿兒島敎區から赴任天主堂を完成し又佛和辭書を著したが私は今から 10 年も前であつたか大浦天主堂の敎師館に病臥中の師を訪ねて五分間位ならといふのでエスペラントについて短い話をした事があつた。その時同師はエスペラントはやりましたがその時の本は今どこに置いてあるか記憶しないといふ程度のことで病が癒ゆれば先づ佛和辭典の再訂が終生の念願であると聞かされて歸つた。兎に角これら牧師間にエスペラントがいち早く傳はり趣味として手をつけられたものらしい。しかしその年代はつまびらかでない。

長崎海星中學校がまだ縣廳前外浦町にあつた時分 A. Mistler 氏は同校の物理化學の敎師として赴任したが同師はフランスのアルサスローレンの生れで既に母國にあつてエス語の文法を學んだといはれてゐる。明治 26 年(1893)に來朝して昭和8年(1933)まで長崎に滯在してゐたが（その間明治 39 年から大正 2 年までの間東京に轉任曉星中學の敎師をして居た）その後横濱 St. Joseph's College のフランス語の先生として轉任した。同師は明治35年(1902)長崎の或新聞にエスペラント紹介の記事を書いた。黑板博士がエス語に注意を喚起したのはこの

Mistler 氏の記事だといはれてゐる。

Mistler 氏が一時海星中學に於て約同數の日本人及ロシヤ人の生徒約 60 名に對してエスペラントを敎へたとの事であつて，盛んに通信もやつたといはれてゐるが折から日露の風雲急をつげ當局の取調をうけたりしたので中止したらしい。同氏は非常に遠慮深く筆者が先年「長崎の靑年」に掲載された高原氏の “Historieto de Esp.-Movado en Nagasaki” をもたらしてこの事をききただしたが只一讀しただけでそれにふるる事を差控へるといつた態度で我俱樂部の會合にもついぞ出席をしてくれなかつた。

猶日本エス協會創立時代の名簿の中に見出される横山寅一郎氏は長崎市長をやり衆議院議員であつた人，中村健三氏は判事であり城野威信氏は縣會議員であつたが旣に何れも故人でありどの程度にエスペラントをやつたかわからない。又明治 40 年春頃協會へ入會した人に長崎高等商業學校の學生田中克三氏がある。同氏は後に東京や大阪に於てエスペラント運動のために相當活躍された人であるときいてゐる。

思 ひ 出

月 本 喜 多 治

明治 39 年 (1906) の 10 月に私は京都の大學醫院に入院して居つた。脚に手術を受けただけで他に是と云ふ病氣がなかつたので小說や講談を次から次と讀んで大分飽きた時であつた。遇然大阪朝日新聞に長谷川二葉亭の「世界語」の廣告を見付けた。其文面は最早忘れたが世界各國共通の言葉であると云ふ樣な事が書いてあつたに相違ない。珍らしいものだ，どんなものだらうと思つて早速其本を取寄せて見た。是が抑々私のエスペラントといふものを知つた始めであつた。丁度毎日所在ない日を送つて居た時であつたので何遍か繰り返して讀んで見たものだ。其迄習つた英語や獨逸語に比べて，其文法が簡單で規則正しく覺え易いのに驚いた。こういふ言葉が各國に通じる樣になれば自分がこれ迄英語や獨逸語に拂つた樣な多大の苦心と勞力は大いに救はれるに相違ないと考へた。固より當時言語として以外に，遠大なるエスペラントの理想などといふ事は考へても見なかつた。いはば唯珍らしい言葉だ，も少しやつて見ようといふ位の單なる好奇心から學習を續けて行つたものだ。

其年 12 月の末に山梨縣の甲府に歸つて，それからずつと大正 3 年 (1914) まで住んで居つた。其間ちよいちよい人にエスペラントの事を話して見たが誰一人知つて居るものもなく全く獨學獨習であつた。唯一人明治 40 年に東大の醫科を卒業した某氏がエスペラントを知つて居つたが一向學習の希望もない樣で相手にせられなかつた。尤も其人はパトロ，パトローイ，ドーモ，ドモーイといふ風に讀んで居た。當時そういふ樣に敎えられたのではないかと思はれる。自分の讀み方と大部違つて居るのでどちらが本當かと一時迷つた事がある。

今から考へて見てどんな工合に知つたものか思ひ出せないが，明治 39 年 (1906) の末に日本エスペラント協會の存在を知つて早速入會した。會員章には 720 の番號があつた。其時にクラヴアツト・ピングロで綠星の眞中に日の丸のある徽章を貰つた。

同時にヤパーナ・エスペランチストの配付をうけて「世界語」の字引とくらべて讀んで居たが，間もなく協會から字書が發行せられたので大分わかる樣になつた。

何しろ病氣が再發の恐のあるものであり，身體は不自由になつたし，色々の點で可成悲慘な

思をして暮して居た時なので，新しい言葉，將來性のある言葉，エスペラントの學習は，殊に多少外國語に特別の興味を持つて居た自分には新たなる興味と大なる希望とを齎らして當時の苦腦を忘れる具となり又慰安を與へてくれた最も大なるものの一つであつた。何か讀み物がないかと思つて東京の友人に丸善でさがして貰つたら是が一番よい本だといふて送つて吳れたのが Esperantaj prozaĵoj であつた。文法や字書が不滿足で今少し精しいものが欲しいと思つて丸善に取り寄せて貰つた，Borel の Vollständiges Lehrbuch, Jürgensen のエス獨字典，Zamenhof-Jürgensen-Pagnier の獨エス辭典が明治 40 年 (1907) の 6 月に到着した。其 7 月には Hamleto やドンキヒヨートが手に入り，9 月には Fundamento と Krestomatio と Fruictier の Sintakso が手に入つた。其頃 O'Connor の Textbook を求めた。然し其ボレルにしろ，オーコンナーにしろ，世界語にしろ人にエスペラントをすすめるのに，此本を讀んで見給へと貸して仕舞つた。其人はエスペランチストにならなかつた樣であるが，本はとうとう歸つて來なかつた。

明治 40 年 (1907) の 7 月にヤパーナ，エスペランチストに出した和文エス譯の答案が賞に入つて有樂社の一圓の書籍券を賞品として貰つた。譯文は極めて簡短のものであつた。徽章といひ入賞といひ，今日から見ると何でもないものだが，當時の自分にとつては大變うれしいものであつた。

其年に Lingvo Internacia 誌を注文した。直接外國に郵便爲替を送り手紙を出したのは生れて始めての事であつた。それで其四月號以下を購讀した。始めての事であり，多少不安を以て試みたのだが，希望通り事が運んで雜誌を受取つた時は何とも言へぬ愉快であつた。

明治 41 年 (1908) に Aŭstrujo (今 Pollando) の Lwow に S. Mikolajski 編輯の Voĉo de Kuracistoj を注文した。其 7 月號に松田恒治郎氏の手紙とならべて私の注文書き，9 月號に受取りが Korespondaĵo として載せられた。9 月號には，此手紙をシベリヤ經由の指定で發送後 18 日で受取つた。日本との文通がシベリア經由ではアメリカとの文通より多くの時日を要しない事を證明するものだと附け加へてあつた。日露戰爭後で我國が大分知られて來た時でもあり，日本からの通信が可成り珍らしかつたものと見える。其翌年に開業醫師の日曜日休業に關する各國の習慣の調査をやつて居つたので，我國には特に大病院の外は一般に日曜休業の定めはないと言ふ樣な事を報告してやつた。是は 42 年の 7 月號に載せられた。別に是といふ寄稿もしなかつたが其雜誌の kunlaborantoj の一人としてあげられた，尤も 1911 年のものにはドクトーロ山崎氏があげられて居る。

其頃であつたが，Bayol の負傷兵士に對する赤十字勤務用を目的とした小さな Frazaro の獨逸語エス語のものを手に入れた。簡單なもので，是なら日本語のものも作つたらよからうと思つて，アシエツトに交涉した事があつた。出版は六ケ敷いが自費で出版するなら賣擴め等は充分骨を折るといふ樣な事を言ふて來た。原稿は大分作つて見たが自費で出版するだけの決心がなくて其儘になつてしまつた。

明治 41 年 (1908) のドレスデーンの第 4 回萬國大會で萬國醫師協會 (TEKA) が組織せられて Voĉo de Kuracistoj が其機關誌となつた。TEKA の Sekretario (現今 Prezidanto) W. Robin から日本のコンスーロになれと言ふて來た。返事に自信がなかつたので原稿を千布氏に賴んで添削して貰つて，適當なる人があるまで引き受けようと返事した。それで日本のコンスーロ，甲府のレプレゼンタントとしてあげられた。1600 以下の番號を打つた會員票を送つて來て，會員の勸誘を依賴して來たのでヤパーナ・エスペランチストの名簿によつて會員であ

る醫師に 14, 5 通勸誘狀を出した。然し入會を得たのは，堤友久，村井德壽の二氏だけであつた。明治 42 年 (1909) 及 43 年 (1910) に TEKA の年鑑が發行せられたが其中に右二氏の外に學生として山崎祜久氏があげられて居る。堤友久氏は其後退會を申し出られたがエスペラントには始終熱心であつた樣だ。3, 4 年前の「日本の醫界」にエス語の事を書いて居られた。然し今は旣に故人となられた。村井氏の消息は知らないが，山崎氏は東京に居られると聞て居る。

明治 44 年 (1911) 頃から段々エス語に不熱心になり，TEKA の事もよく覺えてゐない。然し 大正 2 年 (1913) の所謂 TEKA-libro: Estetiko en Medicino を送つて來て居る。1914 年の Kuracisto 誌が二册あるが多分 Robin 氏の好意によるものと思ふ。それに矢張 kunlaborantoj の一人としてあげられて居る。(但し kunlaboranto として何等の義務を果す事の出來なかつた事は大に遺憾に思つて居る。)

TEKA の年鑑が出來たので當時時々各國から端書などを貰つた。ブラジルから脚氣の說明を頼まれたり，ベルギーからコンヂユランゴ・エキスの處方を尋ねられた事を覺えて居る。

何分田舍に住んで居たので，固より時折は人にエスペラントを說明もしたり宣傳もしたのだつたが，更に耳を傾けて吳れなかつた。甲府在住八ケ年餘の間一人の同志も見出さなかつた。獨りで會話を試みてチユーネの伯父さんと綽名せられた事もあるが，家族のものだにあまり勉强しなかつた。

そんな風で大正 13 年 (1924) までは外人と話した樣な機會はなかつた。又講習會といふ樣なものを設けた事もなかつた。唯一度獨逸人を宿屋に案內する事を頼まれた事があつた時ナインがどうも出ないでネーネーと繰り返した。さぞ變に思はれた事だらうと赤面した事があつた。

明治 44 年頃から段々エス語に遠かり，又世間一般もエス語に對する熱心がさめた樣であり，引き續き世界大戰に入り自分も大正 3 年には島根縣の田舍に轉住したので外國文通などどうなつたかわからず，自分にも文通をする程の熱心もなく其頃から外國の雜誌も保存せられて居ない。

相當古くからエス語の學習を始め，引きつづき協會や學會の會員としてやつて來たものだが言語技術に一向上達もせず，エス語運動に何等貢獻するところもなく，私のエスペランチスト生活は唯々遺憾と慚愧より他何物でもない事を告白せねばならぬのは誠に殘念の至りである。

明治時代の思ひ出

野原休一

始めてエス語と云ふものの名稱を耳にしたのは例の北淸事變の一二年前卽ち明治 31-2 年頃であつた。尤も其れは單に謂はゆる文字通り耳にしたと云ふ迄で何も取止めた話では無いが，其頃歐洲の某國から或筋へ一通の書簡が來たところ其れが何國の語であるかサツパリ分からぬので外務省の何局とかに勤めて居る某と云ふ有名な博言家の所へ持つて行つたら一種の世界語である事が分かり而して某は見事に其れを飜譯したので今更ながら一同が某の博識に舌を卷いたそうだと云ふやうな事を神田の下宿屋の二階で同鄉出身の法學生 M が燒芋の皮をむき乍ら話した。すると同席の一人 S は曰つた:「馬鹿云へ世界語なんど云ふものが此の世界に有つて溜るかい……」と頭から否定してしまつた。其時又誰れかが例のバベルの塔の話など持出したが

今思ひ出すと一人で面白い氣がする。バベルの塔の話は其以前に流行つた英語の教科書のパーレーの萬國史に出て居たから其頃の學生は浦島物語以上に詳しく知つて居た。其うした風でMの話した世界語の存在を其席の大勢は否認しようとした。Mは勿論不服であつた。彼れは自分が出鱈目のウソを云つたのでない事を辨明する爲に其世界語の名稱を思出さうとして頻りに考へた末到頭思ひ出して云つた:「そうだそうだ其世界語と云ふのはエスペランドと云ふ名前だつた,確かにエスペランドと云ふ世界語が近頃出來たそうだ,俺は確かに聞いて來た」と云つた,併し誰も其話には最早厭きて相手にならなかつた。其後約十年間自分は同問題に關して考へた事も無く聞いた事も無いが其時耳にしたエスペランド(……トではないド)は頭の何處かの隅ッこに潜んで消えずに居た事が自分ながら不思議だ。エスペラントをやるやうになつて後に自分は其の時の博言家某が誰れであつたか知りたかつた。併し M は地方官になつて各所に歷任し自分は又學校の先生になつて田舍には入つた爲に終に再會の機なく其内に彼れは故人になつた。

次に自分が何時エスペランチストになつたかと問はれた時にハッキリ答へる事が出來ぬ。實際今でも未だなつて居ないかも知らぬ。併し始めて志を起したのは明治39年東京に日本エスペラント協會が設立された時で其時逸早く入會を申込んで協會から頂戴した會員證には 54 號となつて居たやうに記憶する。當時自分は長野縣師範學校に奉職して居たが同僚中に D と云ふ國語の先生が居て言語學に深い興味を持つて居た。又 S と云ふ哲學の先生が居て歐洲留學の野心を持つて居た。此二人の先生が讀賣新聞紙上で黑板博士の論文を讀んで斯語研究の志を起し自分の所へも勸めに來て吳れた。此時始めて以前曾て耳にした例のエスペランドの記憶が蘇生した。而して同時に示された協會發行のビラに „Japana Esperanta Societo“ とあるのに眼が止つた。(協會のエス名は Japana Esperantista Asocio であつた筈だが其時示されたビラには確かに …… Societo となつて居たやうに記憶する。) そこで自分は思つた。ハハア Japana Esperanta Societo か,これなら成る程世界語の名に反かず始めて見た三つの單語が獨りでに讀める。兎に角これは面白いものだと思つたので早速 D, S の勸めるままに入會した。二人は更に數名の贊成者を得た。長野中學の數學の先生 K も加はつた。(英語の先生は何處からも來なかつた)。斯くて六七名の同志が研究會を組織した。D, S 二人が幹事役で二三回會合したが其内に自分は遠く山口縣に轉任を命ぜられたので其後の事は知らぬ。併し材料とては協會發行の雜誌以外には何もなく且又會員の全部が komencontoj の事とて深い研究は出來なかつた。長野と云ふ所は面白い所で“研究”と云ふ語が妙に魅力を有するやうだ。何か或一つの題目に就いて或一人が“研究”に志して同志を勸誘すれば必ず數名の贊成が得られる。謂はゆる德孤ならずが實現される。併し其研究の熱が果して何時まで永續するか其點は自分が同地に長く留まらなかつたから知らぬ。長野エス會は自分が去つて後も引續いて可なり熱心にやつて居たそうだ。Kなどは盛んに海外發展(外國同志と通信交換)を試るやうになつたそうである。其内に D は何所かの校長に榮轉したが間もなく病歿し, S は留學の宿志を遂げ歸朝して大學の先生になりK亦上京して私立大學の先生になつた。斯くてエラくなつた彼等は何れもエスペラントを棄てたやうだ。是れは今日でも同志の間に流行る惡い癖だ。此點に就いて自分がエラくなり得ざりし事をエスペラントの名に於て運命の神に感謝する。

「一體其頃何處で誰からエス語を教はつたのか? 又はドンな本で研究したのか?」と云ふ質問は度々受けるが邊陬の地に於て先生の有らう筈は無し又獨習書とても田舍者の手には入らなかつた。二葉亭の「世界語」なども後に知つたので當時は名も聞かなかつた。長府に來て後は同

好の友もなく只月一回協會發行の雜誌に眼を通ふす以外に斯語との交渉は全く無くなつた。(但し當時宣傳上一般に强調された謂はゆる interna ideo には深く共鳴して居た。) 然るに 40 年の夏の頃であつた，外國の切手を貼つた葉書が同時に 3 枚始めてやつて來た。見ればオーストリー，フランス，ドイツのエスペランチストからで何れも或雜誌で君のアドレーツを見た。(自分は廣告を出した覺えは無い。多分協會の會員名簿でも見たのだらう)。エスペラントで通信交換をやらないかと云ふ意味であつた。自分は未だ一人の Komenconto に過ぎぬ。辭書も持つては居ない。併し雜誌で多少の單語は學んで居り又例の Japana Esperanta Societo 同樣多數の單語は想像で大抵片附けられるので書中の意味は凡そ分つた。其中で唯一づだけ urbo と云ふ單語だけ想像が附かなかつた。(自分は羅典が苦手であつた)。偖返書を書かうとしたが必要の單語を求める和エス辭書の有らう筈は無し英エスさへも 1910 年に O'Connor 小ツぽけな辭書が出るまで何も無かつた。そこで此の點大いに困つた。止むを得ず先方の手紙に有るだけの語を用いて出來る限り文法に注意して簡單な返書が出來上つた。只例の urbo の問題が片附かぬので困つた。其れは向ふの手紙に via urbo に就いて書けとあつたからだ。そこで返書には mia urbo に就いては次の度に書くから先づ君の方の urbo に就いて書いて吳れとやつた。シベリア經由にして出したので約一ケ月後には再び返書が來たが何れも此方からの返事の意味は能く分つたと書いて居た。而して例の urbo の返書には「我が urbo は Main と云ふ河の邊に在つて人口が何萬人で云々」と云ふやうな事が有つたので始めて urbo の意味が分つたものだ。今時こんな馬鹿々々しい事を話しても殆んど笑つて吳れる人も無からうが事實だから仕方がない。又他の一つの手紙には極東の日本と斯く自由に通信の出來ると云ふ事は歐洲に於てエスペラント宣傳上非常に助けになるから今後盛んにやつて吳れと云ふやうな事が書いてあつた。そこで自分は斯く始めて通信に成效(?)したので大得意であつた。Komenconto は一躍して一人前のエスペランチストに成り濟した。「エス語は學び易い」とは其頃何れの國でも强調された事であるが自分は之を文字以上に信じたものだ。其れから數ケ月經つと右の三人が次から次へと傳へたと覺ぼしく歐洲や南北米各國のエスペランチストから求通信の手紙や葉書が殺到し始めた。面倒臭いとも云はず一々返事を出して居ると益々新手が加はつて來るは來るは！一時は每週十通以上も來た事がある。(其頃の事であつた，獨逸から一通の手紙が來たが其發信者は餘程のアワテ者と見えて宛名に S-ro K. Nohara, Japanujo として所書きを書き忘れたまま投函した。其れを敦賀局で附箋して滯りなく自分の所へ配達された。全國にも同志の數が未だ少數であつた事が窺はれる。) 御蔭で單語も追々豐富になり發表も次第に樂になつて來た。斯ういふ次第で自分のエス語は耳からでもなく眼からでもなく云はばペンからはいつた。

自分は元來コレクトマニアでは無いがエス語通信に依つて瞬く間に多數の外國繪はがきや郵便切手が溜つた。之れが中學生共に對する誘惑の種になつたと見えて勸めもせざるにエス語を敎へて吳れと自發的にやつて來る者が段々出來た。其頃の中學生は未だ今日の如く上級學校の受驗準備に惱まされず幾分の餘裕を有つて居た。自分は此等の生徒を自宅に集めて數名宛講習してやつた。五年級の優等生共から込入つた質問を發せられてタヂタヂの事も有つたが其時には外國の通信から送つて吳れた各種の參考書も有つたから大抵の問題は片附けた。彼れ此れで自分は到頭エスペラントの先生になつた。42年の初頃から同僚先生達の有志を集めて一ケ年間引續き講習をやつた事もある。

42 年の秋には葡萄牙人で香上銀行マニラ支店の店員 Freire と云ふ同志が自分を尋ねて來た。箱根へ湯治に來ての歸途であつた。彼とは一二年前から手紙の上の交際をしては居たが實

際の會話は勿論始めてだつた。併し自分は前以て之に就きチツとも危惧の念を抱かなつた。自分は「書けるだけの事は言へる，讀み得るだけの事は聽き得るもの」と信じて居た。自分の豫想は違はなかつた。會話には相方共不便を感じなかつた事が嬉しかつた。彼の乘船が門司港碇泊期間中下關長府附近の各所を徒歩で引張廻はして案內してやつた。下關の某旅館で晝飯を振舞つた時，名物の饅頭が出た。是は何と云ふものかと尋ねたからマンヂユウだと答へた。すると彼れは之を manĝu と聞いた。而して『有難う！だが此物の名前は何と云ふか？』と重ねて尋ねた。間違ひが分かつて主客共腹を抱へた。Freire は橫濱で齋藤，東京では山賀，千布，安孫子等の同志に出會したが此等の諸氏のエスペラントの上手なのには感服したと云つて心から讃めて居た。

此頃まで自分は國內の同志とは全く沒交渉であつた。只外國の同志とは相變らず盛んに通信して居た。外國の二三の雜誌にも通信員又は寄稿者として名前を列して居た。東京では千布氏が『日本エスペラント』の經營に力瘤を入れて居る時であつたが或時巴里から來る Le Monde Esperantiste と云ふ桃色雜誌（但し用紙の色）で自分の書いたものを見て自分に手紙をくれた。日本エスペラント誌には Komitato de Redakcio として高楠，黑板，田川，安孫子而して小生（千布）の五人が控へては居るが何分寄稿者が無いから寂寞の感がある。そこで Kunhelpantaro de Redakcio なる一團を組織する計畫だ。これから淺田ドクトル，丘博士，高橋邦太郎，月本喜多治，松田恒治郎，木村自老，村井德壽，赤木久太郎，陸式卿（淸國人）の諸君に御依賴する積りだが君も其一人に加はつて吳れとの事であつた。此等斯界の諸名士との交渉が如何になつたか自分は與かり知らぬが自分としては二年來作文の稽古に書いて來たものを筐底から持出して時々送つてやつた。千布氏は大抵沒書にもせず載せてくれた。併しどんなものを出したか今では殆んど覺えても居らぬ。

淺草安倍川町に彥坂本輔と云ふ熱心なエスペランチストが居て Samideano Ĉiumonata と云ふ雜誌を經營したのも丁度同じ頃の事であつた。彼れと識り合ひになつたのも矢はり外國の同志の仲介であつた。昨年故人になつた獨逸の Arnold Behrendt が其れである。B はかねて自分と交際があつたが彥坂の熱心ブリに動かされて自分に吳れた手紙の中に是非彼の仕事を助けてやつてくれと書いて居た。彥坂と千布とは大の仲惡るで千布からは隨分猛烈な惡口を云はれた事もある。併し自分は其等の關係に頓着なく B の勸めるままに彼れの雜誌にも數回寄稿してやつた。併し何を書いたか是れ亦最早記憶に殘つてゐない。兎に角日本に居る日本人同士が外國に在る外人の紹介で識り合ひになるなんどはエスペラントの世界以外では滅多に見られぬ圖だと思つた。彥坂は自費で態々印刷機械を買入れて自分の手で印刷する程の熱心であつたが其後全然斯界から消息を絕した。多分何れかの方面でエラくなつたのだらう。

其後明治 43 年 8 月黑板博士が長府へ來られた時一場の講演をやつてもらつた事もある。時恰かも縣敎育會の主催で長府に夏期大學が開かれた際とて講演會は非常の盛況であつた。縣の內外から集まつた敎育家宗敎家其他知識階級が三百餘名聽講した。博士は國際語の意義やエスペラントの起源其の現狀等に就いて語り先年歐羅巴でザ博士と會談された事などにも及んで大なる感銘を與へられた。博士の講演が濟んだ後に自分は更に博士の指圖により斯語の輪廓に就いて約一時間に亘り大體の說明を試みた。會場は町の某寺院を借受けたが，最初委員の者が會場借受の交渉に出掛けた時，寺の老僧曰はくに，エスペラントと云へば恐らくヤソの一派に相違ないが，ヤソに寺を貸したとあつては門徒衆に申譯が無いからと言つて仲々應じない。委員は辯明に可なり骨を折つてやツとの事で承諾は得たが一方老僧は終始ビクビク者であつた。講

演が終つて後に老僧漸く胸撫で下ろしたとの事であつたが，よくよく聞けば何か曾て聞き覺えのあるプロテスタントと云ふ言葉とエスペラントとを混ガラかして居たとの事であつた。此度の講演會は宣傳上には確かに大なる効果があつた。少くともエスペラントとプロテスタントとをゴツチヤにする者は無くなつた。

其頃の天下の大勢は田舍者の自分等には分からぬが黑板さんを旅館に御尋ねすると同席に在つた某帝大教授が黑板さんに向つて「君等の御仲間は何處にも居るネ」と云つた。すると黑板さんは簡單に「ウン居るよ」と答へた。時維れ明治 43 年夏 8 月（卽ち西暦 1910 年）。

高知でエス語を勉强した頃

吉 川 桂 太 郎

エスペラントと言ふ言葉を初めて知つたのは明治 38 年頃丁度日露戰爭の感情興奮期の頃であつた。當時十七，八歳の私は燃ゆる向學心に學術硏究の爲めには諸先進國の國語を習はなければならぬ不便さに何か統一せられた世界語があつたらどんなに便利であり記錄にも都合がよいと思つて居た折りから，世界統一思想の總ての空氣が地球上に漲つて居た，そして種々の世界語なるものが續出した。

その內ポーランドのザーメンホーフ博士がエスペラント語を創成した事をニュースで知り，是非その語を習ひたいと思つて居た。すると明治39年に岡山の高等學校に敎鞭をとられて居たガントレツト氏が新聞紙上にエス語に就て紹介され，續いて東大の黑板博士等が日本エスペラント協會を創立されたので直に入會して初めてエスペラントの綴字を見る事が出來た。當時私は醫學を志して居たので創成者のザーメンホーフの醫師たる事等に一脈の共鳴を覺えエス誌を通して同博士の風貌に接して悦んだ。私は父の鄕里である高知市に父の膝下に勉學して居つた。同市に於けるエス語協會員は私だけで話をする人もなく，私は黑板博士などの入門書や協會の辭書文法書によつて一時間位に大體の概念を覺えた。

エス語は三十分から一時間位で學習が出來ると言ふ宣傳であつた。南風が草を吹く丘のほとり，或は寒燈に對してエス書を繙いた。それ等のエス書の名前は忘れてしまつた。その內エス語を使用したくなつて私は協會の名簿を見ると父の知人で横濱に居られた速水眞曹氏（目下久留米市在住の速水信宗氏）を見出したので明治 40 年の年賀狀に Kara Sinjoro !! と言つた調子に書いて送つたら未知の同氏から横濱に於けるエス語の狀況その當時横濱局にはエス語の出來る係員が居てエス語宛名でもズンズン文通が出來る樣な事を書いてあつた事を記憶する。そして同氏は同地で同志の會合をせられて居た樣だ。その後東都では千布利雄氏が協會の講習を修了して會の仕事やエス語の敎授をせられた樣子であつた。その後私はエス協會誌を通じてウインのエスペランチスト達と繪はがきの交換や文通を受けた事があつた。私は一時エス語に凝つてエス語の認印を慥えて屆書に捺印したらその役所で綴字が間違つてゐると言はれて叱られた。多分ローマ字や英語と思つたからであらう。

その當時の會員は皆熱心であつた協會員中で記憶に殘つて居るのは大杉榮氏などで，エス語は社會主義者やアナーキストによつて利用される樣になり，遂に同協會も影がうすくなつてしまつて私もいつの間にかエス語から遠ざかつてしまつた。その後エス語の運動が再興した事は知つたが昨年夏の頃名古屋醫大構內でふと同學生の展覽會を觀た折りエス語の種々の文書を散見して昔なつかしく思つたのであつた。

回　顧　三　十　年

赤　松　定　雄

私は明治39年5月「讀賣新聞」紙上黒板博士のエス語に關する談話記事を讀んで――その時分讀賣は唯一の文藝新聞であり殊に教育者に對して割引してゐたので比較的教育者の間で愛讀されてゐたのです――始めてエス語の存在を知り研究の志望を起しつつある折柄偶々當時私の勤務してゐた豐津中學の教頭だつた文學士伊東尾四郎氏が同年8月東京に於てガントレット氏のエス語購習會に出席し新知識を收得して歸郷直に夫を福岡日日新聞紙上に連載する等にて益々研究心を煽揚せられたので直に長谷川二葉亭著「世界語」を購入し獨學にて研究を始めた。

夫より間もなく日本エスペラント協會に入會し會員番號476を得た。其後はエス和辭書によりて協會雜誌等を研究し自習に努めた。時には千布氏及び小坂氏に書を寄せて敎を乞ふた。

大正7年の暮に上京した際小坂氏を訪問した事を記憶してゐる。其際小坂氏は八疊許りの餘り綺麗でない部屋で机邊には雜誌や原稿や内外通信の應答書類の中で鐵道院の制服のままで中等講習員に講義せられたのを拜聽し其の熱心と努力とに感服させられたことを覺えてゐる。

元來私が此研究を始めた動機は一種の好奇心も幾分手傳つたかもしれぬが現代及び將來に就て中立的國際語の必要なことは何人も否むことの出來ないことでありエス語は此國際語として最も適當なものであることを信ずると同時に之が宣傳實現を謀るのは我等日本人の使命であると信じたからである。爾來研究と宣傳の傍翌明治 40 年には繪ハガキ及び手紙の交換を始め世界各國に多數の同志を得一時は應答になやまされたこともあつた。

同僚に宣傳の際反對するのは多く英語敎員であつて或時は口角泡を飛ばして論じ合つたこともあつた。

大正 12-3 年頃小倉市に於ける宣傳講演會にて一場の講演をなしたこともあつたが今猶ほ生活戰線に立ち寸暇にも乏しく只月々「エスペラント」や「レヴオ・オリエンタ」を愛讀する位で何等進境もなく新進の諸君に對して誠に慚愧の至りである。唯エス語に對する一片耿々の信念は三十年前から今日に至る迄依然として舊の如くである。他日機を得ば餘生をエス語の研究と宣傳に捧げる積りである。(4 月 22 日稿)

エス語と私との因縁

堺　　利　彦

明治 38 年 3 月 19 日の週刊社會主義雜誌「直言」に「エスペラント語の話」が載つてゐる。當時「日本で此エスペラントの事に注意して居る者は，東京大學の黒板勝美氏と，長崎に居る佛蘭西の宣教師某と，外に一二人しかないとの事」であつた。現にその話も黒板氏の談話に依つて書いたもので，それを書いた記者の私もその時，はじめてエスペラントの名を聞き，その國際語の組織の大體を知つたのであつた。それから程なく，岡山にゐたガントレット氏が謄寫版刷のエスペラント講習錄を發行した。私等もその購讀者になつた。社會主義者中には頓にエスペラントが流行しだした。「チュー ヴィー ハーヴァス モーノン?」「ネー」 などといふ會話がよく私等の間に行はれてゐた。

その頃，ポーランド人のピルスドスキー氏がシベリヤの流刑から逃走して東京に來てゐた。

私の家には折々遊びに來た。英語で少しづつ話をしてゐたが，或時私がエスペラントの話を持ちだすと先生は至極冷淡であつた。私は少々不平で，これほど便利な言葉をなぜやらないのかと云ふと，ビル氏曰く，私はロシヤ語も，ドイツ語も，フランス語も，イギリス語もやるから，エスペラントなどの必要がないと，これには一本ギヤフンと參つた。

それでも我々の間にはいよいよエスペランチストが增加して，大杉榮君，山川均君などその錚々たるものであつた。千葉の監獄にゐた時など兩君その他が英，獨，佛，露，伊，エスの六國語で書籍係を困らせた。

その後流行に盛衰があり，個人としての冷熱の變化もあつたがそれでも絕えず誰かしら熱心家があり，又幾度か流行の盛り返しがあつた。ツイ先きごろ亡くなつた吾黨の長者齋藤翁が常に外國語のわからないのにゴウを煮やしてゐたが，六十歳ばかりの時ででもあつたらうか，エスペラントなら二個月で出來ると聞いて，それなら俺もやらうと云ひだし，大笑ひをした事もあつた。

私としては，ビルスドスキー君から冷水をあびせられた結果と云ふのではないが，そうそうは迚もやりきれないのと，幾らも實用にならないのとで，いつの頃からかスツカリやめてしまひ今では全く忘れてしまつた。そして若い人達が一時の熱に浮かされるのを見て，ビル君式の冷語で憎まれ口を叩いた事もあつた。實際，今の日本の青年で，英語や獨逸語を物にするだけの勇氣がなくて，そしてエスペラントいぢりをやつたりするのは，「難を避けて易に就く」ものだと云はれても仕方があるまい。

曾ては，黑板君に引張りだされてエスペラント協會の評議員に名を列したりした事のある私として，今日こんな事を云つては甚だ相濟まないわけであるが，事實は事實として申上げて置きます」。然し私はエスペラントの流行を喜ぶに於いて昔と變りはない。若い人達がそれを一時のオモチヤとしてでなく，本氣にやりとげようとするのなら憎まれ口なんぞ決して叩きはしません。只だ自分としては兎かく自分の聊か輕佻な初物好きを嘲けつて見るに過ぎません。

（大正 15 年 4 月發行「エスペラント文藝」第 1 卷第 1 號より轉載）

三十年前の思ひ出話

藤林房藏

私は協會創立前友人より世界語エスペラントと云ふ人造語が出來たと云ふ事而て夫は實に文法が容易で一週間も勉學すれば誰でも書く事や話す位の事は出來得ると云ふ事を初めて聞きましたが私は言語學に堪能の者でなければ決して其樣なことが出來得る筈がないと思ひ餘り深入は致しませんでした。如何に文法が容易いと一口に云つて仕舞へば何でもないが兎に角全世界の人々を相手にする事故假令自分丈が解つた積りでも先方が了解せざれば何んにもならぬと考へ又私は中々左程簡單に片付けられるものでないと思ひました。

明治 39 年（1906）8 月となり日本エスペラント協會より機關誌が發行され尙新聞紙上其他で盛にエスペラントが宣傳されし結果青年の興味を唆り一時研究者勃興せしも案外同志少なく又好奇心に驅られ研究する人もありましたが各國語の素養少なき者には却々六ケ敷く又其話し相手少なき爲め其後餘り振はず殆ど停頓の狀態を持續したかの樣にも思はれました。いざ外國の人と通信する事となれば案外思つた程容易でなく特に佛語の出來ざる者は辭書さへ引くこと

出來ず，夫故英語丈の者は J. C. O'Connor 氏の英語エス語辭書を頼りに致しましたが語數少なく通信する場合造語に苦しみました。

私のエス語勉學の動機は其當時石榴の盆栽に夢中でした而て此藥用植物が全世界に如何なる狀態に於て分布され其用途及種類其他に就て知らんが爲にエス語の學習を思ひ立ちました。

其後私はエスペラント語學校へ參り三ヶ月間大杉榮氏の講習を受け眞劍に研究を始め漸く幼稚園の生徒位に話し得る樣になりました。それはたしか明治 40 年でエスペラント語學校第三期卽ち最終のものに出席したのでした。先生は大杉氏以外には誰も出られなかつた。仲間は十人位でしたが最後まで殘つて卒業式に出て大杉氏を眞中に紀念寫眞をうつしたのは五六名だつたと思ひます。その寫眞はどこかにあるのですが，今見當らぬのが殘念です。あれば全部の氏名を書きいれてあるのですが。1907 年に佛國に於て萬國會員名簿が出版せられ其中に私の住所氏名が揭載されてある爲め歐洲各國の同志より繪葉書の交換を申込まれました故覺束なくも伊太利，西班牙，白耳義，ポルトガル，和蘭，瑞典，ハンガリー，マダガスカル島等の同志と繪葉書で通信致しました。夫故今迄知られざりし異國の情緒が味はゝれ，國民性が解り大いに得る處がありました。外國の人は二三回通信すれば必ず各國共申合せた樣に寫眞の交換を希望されました。繪葉書交換中佛國より世界廻送の珍らしき葉書が伊太利，阿弗利加の同志を經て私の手許に到着しました(直に他國へ廻送)其文句が頗る振つて居りました。「私は常に全世界を漫遊したいと思つて居りましたが金もなければ又時もなく夫故此葉書を私の身代りに全世界を一週させたい」との事が書いてありました。外國の人は誠に奇拔な事を致します。

西班牙の建築家某氏と文通してゐましたがその友人の J. Grive といふ畫家からも文通の申込があり當方から日本畫をおくつてやつた所大變よろこんで自分で畫いた油繪をいくつも送つてきました。私の肖像もかいてくれました。それらの油畫は今も部屋にかざつて珍藏してゐます。

其當時はエス語を以て外國と通信する者は頭の新しき者として色眼鏡を以て見らるゝ事が實に遺憾でしたが私は其時代の風潮で致方ないと諦めました。而て是等の誤解を受くる事が自然幾分かエス語の發展を阻害したかとも思はれました。併し此通信道樂は誠に愉快でありますが寫眞以上に金が掛り經濟上大に閉口致しました。

其當時は日本人と通信の機會なき爲か先方は却々熱心でした。而て又エス語で通信する日本人は極めて少數の樣でした。

其爲か江戶橋の外國郵便局のお役人さんもエス語は餘り顧みざる樣に思はれました。各國より私宛郵便物の名宛の敬語卽ち sinjoro を名と思ひ何々信次郞と譯せる如きは其當時エス語が如何に普及されざりしかを雄辯に物語ります。

私がエス語學習當時人々にエス語のことを話せば皆一笑に附せられ唯君は餘程物好なりとて顧みられませんでした。何となれば其當時は何人もエス語は唯各國の學者丈の共通語として是が全く實用に供せられ永續するものとは誰も思はない樣でした。而て又其當時は今日の如くエス語が發達し斯く隆盛になるとは夢想だも致しませんでした。而て無線電話，ラヂオの如く一番最初に研究を始めた者は參考書なく非常に無益の努力を致しました。

私は明治 43 年に栃木縣の方へゆき大正 12 年迄そちらに居りましたからエスペラントの會合には出られませんでしたが明治 40 年から移轉前迄東京在住中は協會主催の會合や大會には缺かさず出席してをりました。併し大會等には堂に一杯になる程の多數の出席者があつたが例會等は非常に出席者が少かつたとおぼえてゐます。

私は明治 40 年に協會の會員となりその後學會に變つてからもその會員として今日に到つて

ゐます。30 年前の當時を回想すれば實に隔世の感があります。

協會横濱支部の思ひ出その他

速　水　信　宗

先般學會の岡本さんから何か書く様にと御手紙を頂きましたが，元來の筆不精と震災の爲めに多くの資料を失ひ正確の月日なども知る由なく，つゐ書き澁つて居りました處再度の御手紙でほんの責を塞ぐ積りで書く事に致しました。私の事を書きますと勢ひ横濱の運動史の様のものになりますが元來横濱は日本でも早くエスペラントに目覺めた土地で，明治 39 年に既に志村保一，久内清孝などいふ方々が盛に宣傳して居られましたのです。私は明治 39 年の秋頃でしたか新聞紙上でエスペラントといふもののある事を始めて知り，早速二葉亭著の「世界語」を購入獨學をやつて見ましたが一向見當が付きませんので，どこか教ゑる處はないものかと探がして居る内に辨天通二丁目の志村八巻合名會社といふ貿易商の二階で教ゑるといふ事を聞き込み早速同社を訪問して見ますと東京から黑板博士，千布利雄氏がわざわざ來て教えて居らるるといふので嬉しくてたまらず，講習日には必ず伺つて一生懸命勉强しました，3 月計りやつて少し覺えて來ると外國と通信がして見度く，先輩の方々の通信先へ葉書の交換を申込み片言交りで色々書き送りました，一時は英佛獨米露墺蘭濠ブルガリヤなど殆んど全世界に亘つて葉書の交換をやりました，今も此内の 200 枚計は大事に保存して居ります。

小坂氏の「回顧二十有五年」にも載つて居ります通り，明治 39 年 11 月に日本エスペラント協會横濱支部が出來志村氏が支部長を勤められて居ましたが，其内に志村氏が事業の都合上支部の看板を小生方へ揭げて呉れとの事で南太田町の小生宅の門へ支部の看板を揭げては置きましたが，此頃になつては一向に振はなくなり全員も殆んど志村氏と私丈といふ哀れな有様でした，是れではいけぬと思ひ千布氏に御願ひして小生宅で講習會を開きましたが矢張り振ひません，全くの暗黑時代でした，此間東京の會へは可成出席する様にして連絡を取つて居りました。從是先明治 40 年の暮頃私が未だ野毛町に居た頃門柱に「エスペラント研究會」といふ看板を出して置きました處或る知人(尤も新知識の人ではありませんでした)から速水さんあなたの御宅でお賣りになる何んとかペラントといふ藥はどんな藥ですかと聞かれたには少々面食らひました，今はこんな人は一人も居りませんが其時分はそんな情ない有様でした。話しが元へ戻りまして「回顧二十有五年」の中にある本邦最初の普及講演會へも出席致しました我孫子貞治郎氏が氣取つた口調で Estas granda plezuro といふ言ひ出しで演說された時は全身の血が湧き返へる様に嬉しかつたもので未だに其時の光景が目に見ゑる様です。大正 3 年に志村氏が東京へ移轉されるので私に支部長を引繼いで行かれました。此暗黑時代に横濱が得た熱心の同志は今以て横濱で活躍して居らるる間泰藏氏と目下神戸にある尾關利雄氏の二人でありました，此兩氏の御助力は後年横濱エス界の發展に非常の効力があつた事は忘るる事が出來ません。其後横濱支部も細々ながら間，尾關兩氏の助力を得て新會員を作りましたので大正 5 年の冬東京の幹部諸氏に御來濱を願ひ太田町日盛樓で晚餐會を（「回顧二十有五年」の中にある日盛樓の晚餐會といふのは此時より以前の事で其時は何んとかいふ音樂家が東京の一行に加はつて居て始めて Espero を音樂的に謠つて聞せて呉れたのを覺ゑて居ます）催し續て横濱小學校で(校長山本盛太郎氏の御盡力)普及講演會を開きました處案外の盛況で聽衆無慮 200 名は御座い

ました。此會の結果少しは會員も增加しますし，そこへ又米國より新歸朝の佐々城佑氏 R. H. Dick 氏などが入會され大分横濱のエス界も活氣がつき太田町五丁目へ小さいながらエスペラント俱樂部と常設講習會場も作りました，私などが眞劍に會話をやつたのは此時代で全く Dick 氏の刺戟によつたので御座ゐます，能く Dick 氏から，君の手紙は能く判るがなぜあの通り話せないのかといはれましたが，それは手品の種を御存じないからで，手紙を書く時には "Vortaro" といふ內助のものがありますが會話となると記憶といふ意地悪い奴と二人連れですから中々自分の思ふ通りにはなりませんでした。其內機運熟して大正8年5月3日第6回日本エスペラント大會を横濱記念會館に開く事が出來まして私の喜びは此上もありませんでした，此大會の準備の爲めには間，尾關，佐々城，古澤，椎橋其他の方々の獻身的御助力は勿論でしたが，私自身も每晚大概午前1時或は2時になつた事も御座いました，大小の綠星旗などは皆家內が夜なべに作つて吳れました。此機會に私はエス語を實業方面に運用する事に力を盡さんと思ひまして，横濱支部の仕事は尾關氏の主として養成された古澤末治郎氏其他の若い方々に讓りました，丁度其時分英國の K. K. L. K.（國際商業語協會）から盛に Libreto を廻して來ましたので其れを飜刻して日本全國の商業會議所，京濱間の貿易商全部へ配布しましたが返事をよこしたのは唯一人京城商業會議所の書記長大村友之丞氏のみで御座いました，それから黒板博士と高橋邦太郎氏と私の三名連署で日本貿易協會々長池田謙三氏へ宛てエス語を貿易上に使用せられん事を建白もいたしましたが一向きき目も見ゑませんので，是れは到底人を當てにして居てはだめだと思ひまして，高橋邦太郎，間泰藏氏等と謀りエス語で商買する會社を創らふと考へ色々畫策の結果成案を得ましたので上記二氏の外に淺井惠倫氏，兒玉四郎氏，坂井田梅吉氏外一氏を加へて大正 9 年 2 月 28 日日本エスペラント貿易商會（Japana Esperanta Komerca Korporacio）を創立し横濱市山下町 70 c に店を開きまして高橋邦太郎氏を社長として世界各國に呼びかけました，時恰も世界戰爭終て將に Paniko の來らんとする時期でしたので思ふ樣に商賣も出來ず業態も二三度變更してやつて見ましたが思はしくなく遂に大正12年9月1日の大震災で跡形もなく消ゑ失せて仕舞ひました事は殘念千萬でしたが兎に角こんな商會を創つたのは世界で第一番でした事は愉快に思ひます，商會が出來てから後に獨逸でも Germana E. K. K. といふものを作つた樣でした，唯時機を見て今少し自重してやつたらも少し永續性があつたらうと返す返すも遺憾に堪ゑません，どうか第二の J. E. K. K. が一日も早く出現せん事を切望して止みません。私は J. E. K. K. に關係します以前は横濱正金銀行に勤めて居つたのですが，銀行の內規として行員たるものは他の營利事業に從事する事を得ない事になつて居りますので斷然銀行の職を擲つて一意商會の事に從ふ積りで辭職願を書て先づ平素眷顧を蒙つて居ました，穗積取締役に御相談しました處君のそういう固い決心ならやつて見給へと贊成して下さいましたのに力を得て今度は正式に支配人森賓藏氏（現安田銀行副頭取）に辭職願を出しました處熱心に其不可を說て諫止されましたが遂に振り切つて辭職してしまいました，其外親族中でも義兄の久保田貫一が唯一人贊成して吳れました丈けで誰れも贊成して吳れるものは無かつたので御座います。私は此仕事が失敗に終つた事は殘念でたまりませんが其爲めに銀行の職を棒に振り，僅か計りの財產を失つた事などは何んとも思つて居りませんが，唯商會の同人に對して御迷惑をかけた事は誠に相濟まぬ氣が致しまして今に寢覺が惡いので御座います。

貿易商會の定款も保存してはありますが是れを發表しますと御差支のある方もありますので差控へる事に致します，唯定款中の一部利益金處分といふ處に「積立金若干，役員賞與若干，配當金若干」の外に「エスペラント普及費若干」といふ一項のあつた事丈けを附記して置き度

いと存じます。

それから是れは少々餘談に亘りますが私の Subskribo はエスペラント式で Ŝ. Hajami と書て居りますから J. E. K. K. の場合は遠慮なく使用しましたが，震災後神戸の河野貿易株式會社に勤務してからも銀行へ出す Kambio や Kargatesto の裏書きなどにも堂々と使用してやつた事は愉快に存じました故一言書添へて置き度いと存じます。

それからも一つ，大正 13 年に佐世保の沖で沈沒殉死しました第四十三潜水艦の艦長海軍少佐桑島新は私の又従兄弟になります，同人がまだ少尉時代から色々の libreto を送つては勸誘したのでしたが一向趣味を喚起しませんでした，處がどうした動機か佐世保へ轉勤してからだと思ひますが急テンポでやり始め死ぬ前などは佐世保エスペラント會を牛耳つて隨分盛にやつて居たものですから遺骨が東京へ着いた時など學會からも盛なお迎へを受け本人も地下で滿足して居る事と存じます。

エスペラントの思ひ出

美野田琢磨

最初のエスペラント入門　エスペラントは鐵道人に餘程緣が深かつた樣に思はれる。私は，明治 36 年 (1903) 夏 (29 歳) 鐵道技師で山形市に滯在中 Review of Reviews, London にエス語の紹介が出ておつたのを見て，頗る興味を感じ何とかして其以上の詳細を知り度いと思ふて，年月が經つ內 1906 年(明治 39 年)初めて "Esperanto" by O'Connor が手に入つたので，喜んで耽讀して一と通り會得し，自身作文などを試み樂んで居つたが，同志が見當らないので，比較研究して見たいと云ふ願望が果せなかつた。全くの獨習故，何處か歪んでは居ないかと考えて居つたのである。

獨習中の疑問　此の語は全く我々の意を得たものであるが，c, e, ĝ, ĵ, ĥ, ŭ, v の發音が正確でなければ適用せぬと思ひ，先づ英，獨，佛語に對照して自信を作つた。然し獨學で發音抑揚を設定するのは淋しくも，たよりなくも思はれた。次に如何かと思はれたのは n, j が餘りに多いこと，kiel を how と as (英) に兼ねること。malvarma, malgranda と言ふ語は自然の感情から出る語として如何な場合にも適切であらうか。又地理，歷史上の固有名詞の命名法は如何，又大阪の目的格が Oosaka-on であるかなどの疑問が殘されて居つた。

最初の同志　1912年(明治45年)(38歲)有樂町の日本エスペラント協會發行の古雜誌で初めて原田勇美氏を訪ねた。此の時，氏(60歲以上)は既に謄寫版で彩色繪入の月刊 "Orienta Azio" を發行して外國の同志と交通し，先方から數多の本を取寄せ，此方からも種々の小雜貨を送つて居つた。扇，小刀，人形，絹物，錦繪等である。此處で私は Motteau の英エス辭典と La Ondo (Moskvo), Krestomatio, それから Lingvo Internacia (Parizo), Pola Esperantisto 等を手に入れ，時を經て自身海外から Vortaro (Esp.-esp.) de Kabe を入手した。其以前から讀書中に "Ekzercaro" と "Krestomatio" と云ふ本が度々出て來るので此等を手に入れようと永く苦心したのである。

海外通信　原田氏に見做ふて歐米との通信を始め同時に "Katalogo de Japanaj Komercaĵoj" を作り，外國の同志雜誌に廣告した。其結果照會は頻りにあるが金が更に附いて來ない。此の時表榜したものは扇，靴下，ハンケチ，小刀，ヘチマ，鳥モチ，お伽噺 (英文)，錦繪，人形，

象牙細工，漆器及陶器，特許代願等である。然し極めて僅かの商賣で費用倒れに終つた。數多の商品を並べて通信販賣をする事は全く成功せぬものと悟つた。のみならず海外から冷やかしの通信が殺到するので到底應答し切れない。之は當時の初心者の誰もが嘗めた苦杯であらう。

當時の記憶に次の事がある。Monosistemo spesmilo が行はれて Ĉekbanko Esperantista, London（萬國振替貯金）を創設した人があつたが利用にならなかつた事。ポーランド人で萬國通用献立表 "Bonan Apetiton"（六ケ國語對照）を發行した人があつた。此は便利である。外來の postaĵoj に Sinjoro とあるのを郵便局では "新次郎" と譯して配達し居つた事を記憶する。

Paris-Orléans 鐵道會社のエス語旅行案內記を會社から入手したり歐洲の各エス雜誌會社から見本を取寄せたのも此時代である。

涉書所感 好んで Humoraĵoj, Anekdotoj 等を讀んだが歐洲では猶太人と妻君を題材とした物が非常に多く，又北歐物は南歐物に比して深刻であり，意味深長であると思つた。又用語で一事物に各樣に造語し得るが後日自然に一定にならんことを希望した。

日本の同志との通信 1912年9月，舊知の鐵道技師で Esperantisto 高橋邦太郎君（當時46歲位，廣嶋住）と始めてエス語で通信をした。同氏は語學の才に富み，又天資の名文家で，其後同氏から種々の文献と Kolektaĵoj を得，又種々の疑點に就て示教を仰いだ。1915年（大正4年）（41歲）世界大戰の際，海外の通信を止めて "Krestomatio", "Prozaĵoj" 及び Internacia Lingvo 其他各種の雜誌を耽讀して居つたが，各國人の表現法，vortfarado, sintakso が多樣で，ちよつと我々の rapida kompreno を得ぬこと。又 Motteau の字典に間斷なく新語增補をせねばならず，エス語も當初の約束通り，僅少の語で，充分に行かぬ事に失望したこともある。

日本エス學會との接觸 は本鄕燕楽軒の會合と，牛込新小川町小坂狷二君宅訪問の際である。其の時の Esp. Junuloj の意氣と熱心は，大したものであることに驚いた。小坂君を首班とする鐵道部內の同志の活動の御蔭で Niaj aferoj が漸次光彩を放つた事は敬服に値する。

講習會及宣傳 1926 年頃盛んに側近の青年と，帝國鐵道協會員に講習，宣傳を爲した。然し語學は人により全く興味を感じない人があり，中學校の英語の如く Book IV で止めては駄目で Book V を讀了せねば物にならぬ。此の峠を越して始めて景色のよい處を觀賞することが出來る。然し此の忍耐ある人が少ないと云ふことも感じた。

宣專中諸君と同樣に聞かされることは，

(1) エス語は何處で流行して人々が通信して居るか，(2) 之を用ゆる人は極めて僅少ではないか。(3) 人造語は乾燥無味，幾千年前から自然に出來た美音，美辭なくては文學に駄目と思ふ。(4) 幾多人造語は，入り代はり，立ち代はり，生れては影薄になるのは，何處か不自然があるのではないか等々である。入らずに究めずに，邪しまに，推察する人が多い事は，何事の新智識も舊慣を破るに大困難があるものと思ふた。

1926 年には東京開催萬國工業大會で，來會の歐洲人に，エスペラントを用語に取入れるよう高橋邦太郎，井上仁吉博士等と聯絡をとり，當事者間を運動し Protokolo に採擇することに成功した。

雜誌を亂刊するな，單行本にせよ そうでなければ共倒になる。之は Z 博士が屢々言ふた事があるが，然し青年の野望はなかなか之を聽かない。"己がやれば屹度うまくやる" と。然しやつて見てすぐ廢刊したり，他の同志の既成物を害す丈けで終るのである。

今日私の所感は——

(1) 科學（工學共）の用語は萬國共通性があるから，論文はなるべく此の語で發表すること。即ち科學者工學者のエス語採用を進めること。

(2) 外國の著書を盛んに紹介すること。

(3) 同志のエス文著作を海外に紹介し又送る事。

而して，日本へは第二外國語として，エス語なら役立つと思はせる事である。

思　ひ　出

中　目　　覺

小坂氏の「回顧二十有五年 4」にある通り明治 38 年白國滯在中，書店でエス語の圖書を五六册手に入れ，獨習。

私は明治 37 年 2 月以來墺共國に滯在，この國は民族が非常に複雜で官話が十數國語もあり，何れも平等に取扱はれて居るといふ厄介な國，こんな國ではエス語の如きものを使用したら良からうといふ考へ，同樣に，骨の折れる外國語を二つも三つも學ぶよりは，各民族が其國語の外にはエス語一つ學べば，國際事務が辨ずると云ふ事であればさぞ便利だらうといふ考から學んだ譯。

明治 39 年冬佛國パリ滯在中，エス語圖書印刷所を訪ねた時話したのがエス語で話した始めかと思ふ。其前にも書面の往復はして居つたかと思ふ。

廣島にエスペラント會が出來たのは明治 41-2 年頃である。多分故大野直枝教授が歸朝されて間もなくの事でないかと思ふ。いつぞや食堂で誰かの口からエスラペントの話が出て大野教授や私などもその效能を述べると我國の英語萬能に感服しない教授連が數人エスペラント研究會を始めやうぢやないかと言ひだして早速成り立つた。大野教授や私などが持ち合はせたエスペラントの本で研究をした。御承知の通りたやすいものだから初學の人も一ヶ月位の中には文章の意味が解るやうになり，それから毎週一回 30 分間程集まつて交る交る專門上の事を簡單にエスペラントで談話することにした。仲々卽席には出來ぬので草案を作りそれを暗誦して話すと言ふやり方であつた。時々遠足などもしその時は話はエスペラントに限るとして會話の練習をした。

そのうちに黑板博士が東京で起したエスペラント協會宛に出したりすると向ふからも返事がくると云ふ風で會の實際の存在よりも外界には大きく聞えて居つたらしい。

そのうちに高橋邦太郎さんなども熱心な研究家である事が判り高等師範內だけの研究會が廣島全體（と云つても人數は 20 名には上らなかつたであらう）のエスペラント俱樂部に昇格した譯である。

日本人同志でエスペラントで話をするのもおかしなものだから外國のエスペランチストの來るのを歡迎し時々ロシヤだのアメリカだのの客を迎へたものである。

それから大正 4 年頃ハルビンのエスペラント會から大會に代表者を出してくれと云ふ案內があつた。高橋さんは是非行きたいが君も同行せぬかと私にすゝめるが 10 月であり授業があるので出張でも命じてもらはないと行く譯にはゆかない。それで學校の取計ひで東支鐵道附屬地の教育視察を文部省から命ぜられて同行が出來る事になつた。この教育視察報告は後に印刷はしないが相當長いものを書いて提出しておいた。そのそへものとも云ふべき「東亞視察談」は

新聞に連載したものを後に單行本として印刷した。

ハルビンのエスペラント會々長は鐵道會社の技師長のカジギレイといふ人でわざわざ長春迄迎へに來てくれ，それから先は社賓といふ資格で非常な優遇を受けた。吾々二人の爲にホテル客車一臺を提供され，それにボーイが一人ついて居り暖房裝置もありて浴室もあり客間もあると言ふ結構な寢臺車であつた。

三日程の間に色々の會合があり高橋さんはエスペラントで縱橫に切り拔けられ座談會の時などは私もどうやら意味が通ずる程度に應對した。

この大會の結果はハルビンのエスペラント會にとつて非常な好影響があつたときいた。といふのはカジギレイ會長の勸誘でエスペラントを始めた會員が三十餘名もあるが，さて書いたものは解る。又手紙などを書いてやれば向ふでもわかつてくれるがさてお互には話も通ずるがこんな發音で外國の人と話をして解るだらうか。恐らく解るまいといふ懷疑派も相當多かつたが，日本から來るエスペランチストと話をしてみると何等の不自由がない。これでは自分らのエスラントも立派なものだといふ確信を得て疑が解消して益々盛んになつたと云ふ事である。

こんな具合で吾々二人の參會は日本のためには何等の利益もなかつたがハルビンの爲には多少の貢献をしたと思つて滿足してゐる。

猶その時の話であるが同地の同志と懇談會があつた。座長が時々代り，高橋さんの座長振りは却々見事なもので裁決流るゝが如しであつたが，未熟な私の番となると解し兼ねる事などがあり，高橋さんの助け船で漸く切り拔けた事などは困つた方。も一つ同地滯在中カジギレイ氏から電話がエス語でかゝつてくると，私の方から先鞭をつけ，どうかゆつくり話してもらひたいと前置きをして，話を始めた事などは餘り體裁のよい方ではないが，どうやら用事は辨じた。

其他に申し上げる程の事はありませんが，先般大阪鐵道倶樂部の聯合會に出席した時，來會者がいづれも能辯なのを見ては，日本もエス語で世界を指導して行くことが近い中に出來ると感じ，非常に愉快でした。(昭 11, 3, 30 稿)

〔編者附記〕

中目覺氏が明治 38 年白國滯在中エス語を學ばれた事及 42 年に廣島エス倶樂部創立の事については同氏が明治 42 年に日本エス協會へ宛て出したエス文の手紙に明かである。これは和譯文（同誌編輯者譯）を附して Japana Esperantisto 誌第 4 卷第 10 號（明治 42 年 10 月號）に出てゐる。これは興味ふかいもの故こゝにその和譯文を全部次に轉載する。

「予が羅馬に於ける硏學を終りてアバジオ，ライバホ，維那の順路に依りブルセロに旅行せしは 1905 年（明治 38 年）の事なりき。二ケ月と少しの間，即ち 7 月 8 日羅馬出發より 9 月 17 日ブルセロ到着まで，各所に或は永き或は短き時日を過しつゝ，數ケ國を通過し，其間以太利語，クロアシヤ語，匈牙利語，スロヴエン語，獨逸語，フラマン語及び佛蘭西語の話さるゝを聞けり。予は所々の都市を見物し，種々の風俗を視察し，又美しい風景を觀んと欲せしが故に此旅行に長時日を費せしも羅馬よりブルセロまでの距離は極めて短く，二日以內に到達し得べし，而も此二日の間に七種の異りたる言語を聞かざるべからず。予の如き旅行を爲せる者にして誰か國際語の必要を感ぜざるものありや。予は旣に屢々新聞雜誌等に於てエスペラントに關する記事を讀みしも多大の注意を拂はざりしが，今や熱心に斯語を學ばんと欲するに至れり。白耳義の主府ブルセロに到着してより，秋晴甚だ佳なりしを以て予は博物館寺院圖書館等を訪ひ又，市の近傍を散歩せり，即ちアンヴエルソ，ラケーノ，テルヴレーノ等に遊び又ヴアテルロの古戰場を弔へり。然れども 29 日に至りて天候一變し，其後殆んど每日雨天にして，夜間

劇場に至るの外戸外に於て何事をも爲す能はざりき。一日散步の折ふと一書店に於て兼て買はんと欲せしエスペラントの書籍を發見せり。仍て 7, 8 册を購ひ，直に其夜より研究せ始め，二週間の後には次の書篇を讀み終れり："Diversaĵoj", "Esperantaj Prozaĵoj", "Vojaĝo interne de mia ĉambro", 及び "Rakontoj pri Feinoj".

予は 1907 年（明治 40 年）4 月日本に歸り，屢々エスペラントの必要を語りしも，之を學ばんと欲する者なかりき。然れど好機は間もなく到來せり。我校植物學の敎授大野氏昨夏歐洲より歸朝せしが，氏は旣にエスペラントを知り且若干のエスペラント書籍を購へり。予は屢々氏と語り，其頃旣に忘れかけたる斯語硏究の爲め集會を起さんと欲せしが恰も英文學の敎授杉森氏も亦我が同志なることを知り得たり，氏も亦エスペラントの書籍を所有せり。茲に於て同志を全校に求めて他に六人を得，かくて吾人は本年 1 月 26 日始めて倶樂部を創立するに至れり。爾後每週二回會合を催し，談話及び讀書に依りて斯語を學びつゝあり。吾人は熱心なる會員二名を失ひしを悲しめども，池田氏は航海中以太利のエスペランチスト Bracci 氏と語り，重松氏は鹿兒島に於て新に倶樂部を創て旣に會員 7 名を有せる由愉快なる報知を得たり。又 9 月に至りて新會員四名を得たるは吾人の大に悅ぶ所なり。」

想 出 す 人 々

佐 々 城 佑

私の話は斷片的なもので許して貰ひたい。第一 1920 年火災に遇つて記錄やうの物も全部燒いたし，又頗る健忘性なので，歷史的には價値のないものと思ふ，漠然とした印象記位に見て貰ひたい。

古本屋の亭主　私のエス語は全く橫須賀の賜物である。委しく云ふと，加藤節さんの「エスペラント獨修」の廣告を見た時から始まる。その本の發行が 1906 年 9 月 30 日だ相だから，それから凡そ一ケ月も後だつたらう。その頃私は米國加州の首都サクラメントの北百哩許り入つた片田舍の果樹園に行つてゐた。夏の仕事が終つて農閑期の 11 月頃，雨季に入つた侘びしい農場の粗末なバラックで，10 人足らずの勞働者學生達が日本からの新聞を貪ぼるやうに讀む，そういつた或日，新聞の廣告が私の眼を射たのだ。生來の語學癖とその頃熱中してゐたトルストイズムの傾向からか，世界語性に强く惹かれ，直ぐ東京の友人に賴んで送つて貰つた。待つてゐた本が着いた時は嬉しかつたが，偖て始めて見ると，發音の爲の假名が心元ない。英語の「獨案內」からの經驗から，最初に惡い癖がついたら困るといふ不安で讀む氣になれなかつた。1907 年（明治 40 年）の三月頃だつたらう，サクラメントへ出ると早速圖書館に行つた。語學，國際語などの書目を調べると，ヴォラピユクの講習書はあつたが，エス語の本は一部も見當らなかつた。圖書館員の注意で雜誌を片端から調べると "Review of Reviews" の卷尾に斷片的な講義が載つてゐた。"North American Review" の講義も多分此の時見たのかと思ふ。この位なら街の本屋に何か有り相なものと思つて搜し始めたが遂に徒勞に了つた。直ぐバークレに歸つた。同地は加州大學の所在地なので此處には有り相なものと思つて本屋と云ふ本屋を軒別に搜し廻はつたが何處にも無かつた。それ許りか，エスペラントと云ふ vorto が彼等には全く初耳であつた。エスパニョルだらうと訊き返へす店もかなりあつた。その都度エス語の宣傳をすると云ふ妙な役割を演じた。尙ほ懲りずに隣市のオークランドを搜してゐる

と，或日どうせ駄目だらうと思ひ乍ら，餘り大きくない古本屋できいた。そこの亭主は不思議さうに私を眺めて，私自身がやるのかと問返すので頷づくと，急に嬉しさうな顔をして「大變良い本がある」と云つて渡して呉れたのが，發行後間もない Bullen 著の Ekzercaro であつた。それが 5 月であつた事は表紙の裏に May, 1907 と書いてあつた記憶に基づく。それから半年この小册子と頸引きで獨會話に耽つた。その本屋は其後一度も尋ねなかつたが今から考へると其亭主は或は Esp-isto ではなかつたかと思ふ。トルキスタンらしい東洋風な，そして明るい理智的な貌が今でも眼底に殘つてゐる。その年の暮に日本へ歸る事にしてゐたので非常に忙しくはあつたが，一遍はその男を訪ねるべきであつた。"Enciklopedio de Esp." によると其頃米國各地にエス運動が起つたやうにあるから，本屋さん自身が Esp-isto でないとしても何かのエス消息が聞けたのではないかと云ふ氣がする。殘念な事をした。

飯田雄太郎先生　飯田さんを Esp-isto として知つたのは同氏が亡くなられた後の事であつた。飯田さんは，私がまだ小學校へ行かない時分からよくうちに來られたので覺えてゐた。當時は「畫かきのオヂさん」としてであつた。全く俗離れのした飾氣の微塵もない，一本氣の人であつたと思ふ。私が中學の途中で札幌へ轉校して行くと，飯田さんはその學校の圖畫の先生をして居られた。その後一二年で東京へ出られたと思ふが，私はとうとう無沙汰をしぬいてしまつた。尤もそれには多少理由ならざる理由がある。それは飯田さんの前に云つたやうな性格から變人扱を受けてゐた事は容易く想像出來やうが，「世界の言葉を統一するといつて譯の分らぬ事を口走つてゐる」等といつた噂があつたやうな氣がする。飯田さんにとつて世界語意識がはつきりして來れば來るだけ世間からは益々狂人視されると云つた苦しみを經驗されたのではなかつたかと想像する。今その「狂人」の群に入つてゐる自分としては誠に濟まなかつたと思ふ許りでなく，何故この大先輩にもつと厚く師事しなかつたかと云ふ悔を抱いてゐる。

祝さん　1908 年（明治 41 年）から 1916 年（大正 5 年）私が九州にゐた時分には殆どエス語を使ふ機會が無かつた。唯一回 1911 年頃（明治 44 年）たしか和蘭人で世界を徒歩で廻はるのだと云ふ Sayer とかいつた人に當時私が住んでゐた佐賀で逢つた。エス語を知つてゐるかと訊いたらベラベラ喋り出されて面喰つた事がある。

1913 年（大正 2 年）上京した折その頃物理學校で開かれてゐた集會で中村，高楠，黒板の諸博士にお逢ひした。又支那から來たばかりの祝振綱さんに逢つた。大變感じのいい青年で，筆不精の私は別れたきり消息を絶つてしまつたので，交際の期間は短かつたが，此の人の温い氣持は今でも感じる。物理學校の集會で小坂さんが後藤敬三さんを臺にして私達に短文の講義をして下さつたのへ誘ひ合はせて聽きに行つた事もあつた。祝さんは忘れ難い人である。

西川義治さん　1917 年（大正 6 年）の暮横濱の小林商店に英文通信係として勤めるやうになつた翌春早々，その頃速水さん方へ週一回講義に來られてゐた小坂さんに引出され（尾關さんが呼びに來られた），速水さん方で度々講義を伺つた。私が同地の講習などに働き出したのは 1918 年（大正 7 年）の夏だつたと思ふ。速水さんには殊の外厄介や心配をお懸けした。又間さんにも手厚い援助を頂いたが同地のエス運動の本筋は速水さんやその他の方々が書かれる事と思ふので，私はほんの傍系的な事に止めたい。

前記の講習は YMCA の室を借りて開いた。かなり華やかなスタートであつたと覺えてゐる。その時に古澤さん，椎橋さん兄弟，西川禎造さん（後義治と改）など後で横濱運動の中心となられた人々が入つて來た。古澤さん椎橋さん（兄さんは早く亡くなられた）は今も盛に活動されてゐるので，私の不精確な記憶から云ふ事は差控え，西川さんの事をざつと記して見やう。西

川さんが初て講習に見えた時，二三週前から千布さんの全程を半分許り讀んだ丈だと云ふのに初からペラペラやり出して講師側を面喰はせた。當時西川さんは横濱商業の三四年であつた，一寸爺むさい所があつて歳の見當が付き兼ねたが二十歳前であつたに違ひない。文學，語學には驚く可き天分に惠まれてゐた。その頃から伊藤左千夫の歌や荻原井泉水の句などを喜んで讀んでゐた。又自分でも短歌を作つたりしてゐた，國字の問題などではいろんな人の研究書を渉つて飽く事を知らぬといふ風であつた。さう云ふ風なので商業學校の課程は面白く無かつたのであらう。學校も卒業前に退學した。

1921 年（大正 10 年）の夏西川さんが太田町五丁目の運送屋の二階で夏期講習會を開いた。講習生五人。尚ほ續けたいといふ講習生の希望で，私と同店に勤めてゐた宇式といふ人の家を借りて繼續する事になつた。宇式氏はローマ字，假名文字に關心を有つて小さな會を作つてゐた。これに西川さんの會が合體する事になつた。此の會は 1922 年の暮が全盛であつたが，震災で全く消滅した。（此の講習の記事は當時講習生であつた大久保（現荻原）ちか子さんの通信による）。

燒野原の横濱を神戸に避難中の一二年も同市のエス運動に活躍された。横濱が少し復活し始めた頃戻つて來た。そしてバラック建の YMCA で直ぐ講習を始めた。神中校長の瀧澤さん，フェリスの池田先生と云つた人々が習ひに來られた。その後この會がどう解消したか知らない。

早稻田邊りの下宿にゐるといつて來られたのが 1927 年（昭和 2 年）頃だつたと思ふ。そこでも講習會を開くのだと云つて，きれいな謄寫刷の廣告を見せて吳れた。

同君が學校を止めてから度々職業を換へた。獨自性が强かつた爲か或は趣味に合はなかつたのかいづれも永續きはしなかつたやうだ。然し 1927 年か 1928 年かに横濱磯子の或る紙袋製造會社に就職。その後二三回逢つたがまるで別人になつたやう，職務に沒頭してゐたやうだつた。然し，それも束の間で 1929 年（昭和4年）の 2 月腸チブスで僅か一週間許りで亡くなつた。だから死ぬる前一年程を除いては，同君がエス語を始めて以來，何處に居ても何をしてゐても宣傳と講習に終始して居つたと云へる。

西川さんのエスペラントは淀みなく流れるといつたやうな，わざとらしい所の全くない大變氣持のよいものであつた。あんな人は珍しいと思ふ。私の知つてゐる人の中で强て近似な人を求めると，岩下さんのを malklara にしたやうなものではないかと思ふ。　此人にもつと年を假したなら，きつと面白かつたらうと私は空想してゐる。

〔編者附記〕

Japana Esperantisto 第 4 巻第 6 號（明治 42 年 6 月 5 日發行）に飯田雄太郎氏の訃を報じ次の如き追憶の文をのせてゐる。

「飯田君は東京の人，慶應 3 年東京に生る。畫伯淺井忠氏の門に入り洋畫を修め札幌中學校教諭札幌農學校講師等の職を奉ぜり。君は極めて多方面の人にして殊に語學の才に長じ英，獨，佛，希臘，羅甸，伊太利，西班牙等の諸國語及びエスペラントに通じ，ヴォラピユツクの如きも嘗て之を研究せりと云ふ。君性謙讓にして沈默且つ多く失意の境遇に居りしを以て，其學殖の豐富なりしに比して盛名なく，公職を辭して以來畫筆を弄するの傍某書（羅甸語聖經の飜譯及び字典の編纂なりしと云）の編述に從事せしが，其業を卒るに至らず 4 月 9 日溘然長逝せるは眞に惜むべし。本會評議員として亦頗る力を悉し，嘗て獨力「日エス辭書」を編纂して本會に寄せられたり，君の生存中本會終に之を上梓するを得ざりしは遺憾の至なり。」

エスペラントを始めた時

重松達一郎

たしか明治 41 年であつたと思ふ。廣島高等師範學校に奉職中松山に出張の節，偶然書店に於て長谷川二葉亭氏の「世界語」と云ふパンフレツトを見出し購讀した。然し別段興味も起らずそのまま經過した。

然るに同年末か翌 42 年の始めであつたか同僚中目文學士（後の大阪外語學校長）が歐洲留學中研究されたエスペラントの講習を始められたので同僚數名と之に參加して研究を始めたが此の度は大に趣味を感じはじめた。

明治 42 年 8 月鹿兒島高等農林學校に轉任以來も常にエス語の勉强に從事した。廣島時代及鹿兒島時代の初期に當つてはエス和辭典などはなく丸善より英エス及エス英辭書のごく簡單なものをとりよせてこれによりて勉强したものであつた。

鹿兒島に於ては同僚數名と語らひエス語研究會を起したことがあつたが永續しなかつた。又高農學生に晝食後の卅分を利用して講習會を數年催したが二三のエスペランチストを出したのみで努力も大した實を結ばなかつた。その外熱心な人々と研究會を作つて居たが會員の轉出その他でこれ又永續しなかつたことを殘念に思つて居る。

時勢の進歩とともに近年は我國エス語界にも青年有爲の俊才續出して大に意を强ふして居る。斯界のために歡喜にたへぬところである。も早老骨余の如き心身衰弱したものの安じて引退する時期であると思つて居る。

往時を顧みる時茫として夢の如しである。小生如きは文獻のきはめて貧弱な時代所謂獨學的に斯語の研究に從事したものでその學習上の不便を感じたのは勿論であつた。當時廣島在住の高橋邦太郎氏とは常に書翰により互に意見を交換して居た。これによりて余の啓發されたことの多大なことは今も尙高橋氏に對して感謝して居る。

近年は兎角病床に親しみ勝で何等の運動も出來ないことを殘念に思つて居る。

露都駐在中エス語を學ぶ

萩野末吉

私は幼時より佛語，英語，支那語を學ぶこと數年，而して一つも役に立つ迄に成功せず。露語に至つては 25 歲の時より學び始め前後 8 年師に就き學びたるが完全には役に立たず。其發音に至つては特に然り。露國内の旅行の時はさまで不自由を感ぜざりしが，一度國境を越え歐米の旅行，就中北歐や，バルカン旅行の時は言葉の通ぜざる爲め困難少なからず。此不便の爲め苦辛せし事は一生忘れ難き事なりとす。

私がウラヂオストツクで一生懸命に露語を學んで居る時代，即明治 18 年に支那語の通譯を伴ふてポセツトに向ふ航海中，乘客中の一人の露國海軍士官が頻りに世界語の有利な事を話してゐたので多少議論もあつたが私は大いに耳を傾けて聞いた。併し書いた物もなく其儘になつたが多分 Volapük 語の事なりしならん。ウラヂオ地方でも露語も入用支那語及朝鮮語も入用で實に不便だと思ひながら日を送つた事であつた。

明治41年の末と思ふ。私が露都ペテルブルグ在勤中露國大尉でポストニコフと云ふ人が露國

エスペラント會の會長の資格で訪れて來た。其用向を聞いて見ると「明年ペートル大帝がポルタワで瑞典軍に打捷つた200年紀念祭を同地で行ふので政府は各國に向つて代表武官の參列を案內することになつて居る。就ては各國へ御依頼して其參列者が途中中立語を學んで來られ中立語を以て其會場の用語とせられたら大に便利であつて至極好感を起させる事と思ふ。云々」との事であつた。

私は中立語とはどんなものか一つ讀んで聞かせて貰ひたいと云ふた處一つのエス語雜誌を取出して讀出した。頗る耳あたりの好い言葉であつた。大尉の申込は自分としては面白い考へだと思つたが，實行は不可能の事柄と腹の中では決定して居た。夫で日本政府に取次ぐ事は然るべく答へて置て自分自身大にエス語に興味をもち，大尉より月々雜誌及敎科書字引等を買ひ少し宛獨習を始めた。其翌年ストックホルム府に滯在して居つた事があつたが丁度そこへ黑板博士がエスペラント大會に出席しての歸途に來られ始めてエスペラントの事を詳しく聞き日本にも會があり雜誌もでてゐるとの事で益々興味を持ち，遂に日本エス學會の前身たる協會の會員となり今日に至つた次第である。ストックホルムで同地のエス會の次長とか云ふ人が黑板博士を訪れて來てエス語で談話をして居るのを傍で聞いて，解らぬなりに何だか面白かつた事を記憶して居る。博士よりエス語の本を若干貰ひ今尙記念に保存してゐる事である。

爾來エス語の宣傳には微力を盡して居るが公私の上に種々の故障があつて十分に活動し能はざりしは遺憾の至り，其內に老年になり健康を損し益々意の如くならざるは致方なき次第なり(La Revuo Orienta, 1926 年 4 月號附錄より拔萃)。

エス語を學び始めた頃

大石和三郎

エス語の聞き初め　エス語といふ名前を私が初めて耳にしたのは明治 39 年頃のことである。當時エス語が初めて盛んに日本に輸入せられた頃であつて新聞でエス語の講習會があるとか仄かに見たやうであるが當時私にとりてはエス語は何等氣に留むべき對象物ではなかつた。明治 40 年の末，故中村精男博士が歐洲より歸朝の途次，佛船內で佛國水路部員某の爲めにエス語の宣傳を受けられたのが基で同博士は急に熱心なエスペランチストになられたので隨て私も亦同博士から頻りに說法を受けました。明治 42 年の夏かと覺ゆるが水產講習所の囑託を受けて房州館山に同講習所學生に氣象觀測の實習を指導したことがある。同地に赴く爲めに東京靈岸島から汽船に乘つたが船中の無聊を醫する爲めに玆に初めて O'Connor の „Esperanto"を讀んだ。通讀三時間エス語の要領は解つた。館山に上陸するや直ちに當時水產講習所の講師であつた子爵田中阿歌麿氏にエス語の講釋をなして同子爵を驚嘆せしめたことがある。併し當時私はエス語の實用的價値を疑つて居たので更にエス語を深く學ぼうといふ氣はなかつた。

エスペランチストとなりし動機　然るに明治 44 年の春，私は獨逸に行くことになり同年秋には同國ポッダムの氣象臺で硏學することにした。處で同氣象臺には地磁氣學の大家で當時既に 13 年もエス語をやつたといふ Ad. Schmidt といふ先生があつた。ここに私は再びエス語の宣傳を受けた。其の年の 11 月初めポッダムに於けるエス會主催の會合があつたので勸められて之に列席してみた。そして初めてエス語の會話を聽いた。演說も聽いた。唱歌も聽いた。かくて私は初めてエス語の實用的なことを自覺した。そして愈々エス語を學ぼうと決心したのであつた。

ポッダムに於けるエス語講習會　當時ポッダムに於てはエス語の講習會が開かれて居た。私は直に之に申込んで講習員となつた。講習は毎週木曜日一回で午後8時半から10時までであつた。10月の末頃から始まつて居たものと見え私の始めたときには既に2回ばかり講義が濟んで居た。かくて翌年三月末に講習は終つた。講習の初は講習員が十八人許りあつたが修了の際には十人許りになつた。講習料は全期で參圓で其の外毎回出席の都度，點燈料及び暖室料として一人五錢づつを拂つた。講習員は男女各半數づつ位であつた。勿論日本人は私一人だけで他は皆獨逸人であつた。中には老夫婦及び令孃の一家三人で來會して居るものもあつた。講師は E. Markau 氏であつた。

ポッダムのエス會に入會　私は講習會を修了してからポッダムのエス會に入會した。このエス會は獨逸エス語協會の支部であるから私は自然獨逸エス語協會の會員となつた譯です。會では毎週一回水曜日に會合をなし由自會話や演説や唱歌や或はエス語の研究をするのであつた。やはり晩の8時半から始まつて10時か11時に終るのであつて會合は極めて氣樂なやり方で麥酒とか珈琲とかを飲みながらするのが普通であつた。ポッダムは伯林から汽車で30分間程の處であるので伯林支部のエス會合には屢々參加した。獨逸のエス會では屢々遠足會が催された。歸途は適當なる料理店に入りて一同晩餐をするのが普通であつて最後には舞踏會になるのが多かつた。遠足會では終日エス語を話すのであるからエス語の練習には最も有効な方法であると思つた。私は一度遠足會に參加してから初めてエス語の會話に自信が出來たやうな感じがした。大抵のエス會合には男女同數位であつて時には女の方が男よりも多いこともあつた。會話の練習の爲めには私はポッダムの F-ino H. Nickel 其他獨逸の多くの女性の方々に負ふ所尠からざるを今もなほ感謝して居る。ポッダムに滯在すること一年餘。去るに臨みエス會の人々は私の爲めに送別會を開いた。私は告別のエス語演説をした。參會者にはエス語を解せぬ人も澤山あつたのでニッケル孃は爲めに私の演説を獨譯したのであつた。Ad. Schmidt 教授は喜色滿面に溢れ余に固き握手をなされた。由來先生は握手が嫌いと見えて平生は容易に握手を交す人でないが此の日に限りて實に懇懃なる握手を下さつたのであつた。かくの如くして私にとりてはポッダムはエスペラントの故郷であり又終生忘るべからざる土地である。

1912年の夏クラカウで第8回萬國エス大會が開かれたとき私はポッダムのエス會の Delegito として之に參加する積りで既に大會費まで納めたのであつたが偶々自分の專門としての學術的旅行と時期が重なり合ふこととなつた爲めに遂に大會出席の初志を果たすことが出來なくなつた。而して親しく我が敬愛する D-ro Zamenhof 先生に面接するの機會を得んとして遂に之を失つたことは終生の遺憾とする所である。

歐洲旅行中の經驗　當時獨逸のドレスデンでは巡査がエス語を知つて居た。電車の車掌も鐵道の役人も知つて居た。私は停車場の改札人に向つて獨逸語で尋ねたのに私の胸につけた綠星章を認めて直ちにエス語で應へたものがあつたのには一驚を喫した。同じく獨逸國のミュンヘン市の電車に乗つたら直ちに Bonan tagon, sinjoro! と話しかけられ驚いて見たら車掌であつた。是れがエス講習を終つてから三ケ月後の旅行中のこととて殊に嬉しく感じた。

歐洲にはエス語の通ずる旅館が處々にあつたのであるが私が自身で利用したのは巴里に於ける旅館であつた。旅館の主婦はエス講習會の修了證書を有するエスペランチスチーノであつたのである。余は佛語に慣れなかつたので佛語を練習したかつたので事の簡單なるものは總て佛語で主婦と話した。けれども込み入つた話はエス語で辨じた。余はまた主婦から佛語をも學んだ。解釋は勿論エス語によつたのである。エス語の助けで他の外國語を習つたのは是れが初め

てでもあり又終りでもある。當時巴里の市内には旅館のみならず百貨店とか書店とか種々の商店にエス語の通ずる所が澤山あつた。

巴里エス會の印象 當時巴里は全世界に於けるエスペラントの中心であつて最も活躍して居たやうに思ふ。巴里全市中のエス連は毎週金曜日の夜に大學の講義室内に集會して居た。巴里滯在中私は屢々この例會に出席してエス語の演說を聽いた。Sebert 將軍の莊重なる面影，Bourlet 敎授の流暢なる辯舌は今猶ほ眼前に浮ぶやうな氣がする。月の 12 日にはいつもエスペランチストの晩餐會がある。私も一度招かれて此の會に臨んだことがある。參會者は百人餘であつて佛國人の外に英，獨，以，露，日，支，墨其他幾多の外國人があつた。何れも一様に只一つのエス語のみで談論するのであるから誠に愉快であつた。佛語に不得手な私のことであるから佛語など一言も話さず勿論エス語一點張りであつたので後に此の晩餐會の記事を見たら「何等の歐洲語の智識なくしてエス語のみで世界を旅行して居る」と私の事を評してあつた。面白い觀察でもあり又時宜に適したる宣傳でもあつた。

次に巴里滯在中エス黨であつた爲めに得をした一例を揭げる。それは巴里市内で katakombo を見物したことである。katakombo とは地下の墓所である。巴里にあるものは地下 20 米位に地下道があり長さ一粁餘もあるであらう。其の兩側に腕の骨や股の骨が材木のやうに重ねられ其の上に累々たる頭骨が整然と列べられてあつて其の數の莫大なるに驚くばかりである。之を見物するには警察署長の許可證を必要とするのであつて私などはそんなものを見やうとの野心が毛頭あつた譯もなく又 katakombo の名前さへ知らなかつたのである。然るに或るエス會の席上，當時巴里に來て居た英國人が立つて參會者一同に向つて言つた。「自分は katakombo 見物の許可證二通を持つて居る。希望者あらば一通はどなた様に差上げてもよい」。と私は直ちに希望する旨を述べて全く見ず知らずの此の英人と共に世界の珍たる白骨の地下道を見るの機會を得た。是れ全くエス語の賜であつた。

以上は余が歐洲旅行中に經驗した二三の例に過ぎない。何れの國，何れの市を問はず我々エスペランチストは到る處に歡迎せられた。實質的に利益を受けたばかりでなく，異郷の空にありながらも家郷にあるやうな親しみを受けた精神的の利益は實利の幾十倍に當るや測り知るべからざるものがある。是れも 24 年前の昔の經驗である。今日に於けるエス語の普及は昔と比べ物にはならぬ。それだのに今尚ほエス語がまだ實用にならぬなどいふもののあるのは氣が知れぬ。尤もエス語の解らぬ人にはエス語を實用することが出來る譯はないのであるから非エスペランチストではエス語の非實用を唱ふべき資格はないのである。

エス語を人に教へたこと 歐洲より歸朝の後，中央氣象臺始め處々でエス語を敎へて見た。當時日本での敎へ方は多くは文法を重んじ又は書物を讀むのを主眼としたので私は主として會話から導き入るる方法をやつて見た。今日レクタ・メトードとか何とか云ふやうな方法に似寄つたものであつた。講習を受けたものも尠くはないが熱心な同志として殘つて居るものの少きは甚だ遺憾なことである。併し百の種子は失はれ千の種子は滅するとも倦まず弛まず種子を蒔いて行くのが我等の務と思へば致方もないのである。

エス語の宣傳は機會ある每に相當にやつた積りである。東京にあつても地方にあつても或は汽車中でも汽船中でもやつて見た。或る人からはエスペラントは宗敎のやうなものですねと言はれた事もある。之に對して正面から反對を受けたことは殆んど無かつた。エス語を知らずに蔭で反對するものがあるのは仕末が惡い。寧ろ正々堂々と反對して與るる人があつたらば其の誤解を解くのに却て都合が宜いと思つた。エス語に對して贊意を表する人は多いが，夫れなら

ばとて愈々研究しやうとする人は少なかつた。また研究は始めても永續きのする人は少ないのであつた。要するに大正8年頃までにはエスペラントの種子は蒔いても私共の蒔いたものは殆んど何等の實りがなかつたやうなものである。ただ後年の發芽に際して必要な培養土としてでも幾分かの役に立つたかも知れない。

長府でエスペラント學習の思ひ出

梶間百樹

余の郷里は山口縣の長府である。關東大災震に遭つて持つて居た書籍を全部燒きその上この震災以前の記憶が明瞭を缺くが，多分明治43年の 8 月であつたと思ふ。日本歴史地理學會の夏季講演會が長府に開催せられて，その道の名士や篤學者が多數此處に集つた。

この會期中一夕町内の某寺院でエスペラントに關する講演會が催されて，土地の中學の教諭であられた野原休一氏がエスペラントの發音や造語其の他に就て一通りお話になり，黒板博士からは該語の由來現勢並に國際大會の模樣等に就てお話があつた。聽衆の中には既にこの語について多少は知つて居た者もあつた模樣であつたが，余はこの會で始めてエスペラントと云ふものを知つたのであつた。當時私は中學卒業後健康を害して家にあり保養して居た時で無聊に苦しんで居たので早速協會に入會した。すると協會から三，四十頁許りの袖珍の辭書兼用の獨習書が送られたので，これに依つて獨習した譯であるが，この書は英國で出版されたものであり余の英語は中學で習つた許りのものであつたから，どうもこれだけでは意味の徹底しない樣な處があつた。後に千布氏のエスペラント全程が出版せられたので是によつて始めてほんとうの學習ができたのであつた。

以上の樣な事情から余はエスペラントには共鳴を持ちその學習は始めたものの，元來語學は甚だ不得手であることを自覺して居た爲めかどうも熱心になれなかつたが，其の後健康を恢復して中央氣象臺に入り又測候所に勤める樣になつて，その先輩に熱心家のあつたお蔭であらう，協學が學會に變つて今日に及ぶ迄三十年近くこれに籍を置いて居るのであるが，前にも述べた如く甚だ不熱心で此の點何とも汗顏の至りである。

雜魚のとゝまじり

伊藤德之助

エスペラント運動が本邦に起つてから大正8年迄の間の回想を書けといふ岡本君からの御薦めではあるけれども，丁度それ迄の間は他の眞摯な開拓者とちがひ貝殼に閉ぢ籠つた蠣のやうな殆ど他と沒交渉な時期であつて，何等語るべきものがない。しかしたつての御薦めであるから追憶を辿つてみるのも自分だけには興味の深いことである。

明治39年の夏のことだ。といへばもう30年の昔になる。當時10歳8月の少年だつた。今でも嫌な英語，殊に米語の發音ときたら蟲ずが走る程たまらなく嫌だ。その英語に小學校ではいじめられ家に歸れば下手な家庭教師に惱まされ，ほとほと英語嫌忌症に罹つてゐた。夏休みの一日，神保町を通ると，繪端書屋の上形屋の反對側にあつた彩雲閣といふ本屋の立看板が眼についた。「誰にもわかる世界語」長谷川二葉亭著といふ大看板だ。誰にもわかる……すば

らしい魅力だ。世界語！何といふ福音だらう。大枚？――と思つて本箱の隅からとり出してみると惜しいことに奥附の一枚が紛失してゐる――だが確か 20 錢だ――を投じて早速頁をめくり乍ら，眞夏の神保町の通を走るやうにして歸宅した。

その時の喜び，だが殘念にもザメンゴフ（さう書いてある）の肖像は製版術の未熟なためセンチな少年には少しグロに感じられて，一寸親しめないやうな氣がしたものだ。

後年ビヤリストクに偉大な先覺の生家を訪れ，その業蹟を偲んで泪を流した時にも，なほあの下手な寫眞版から享けた印象はどこか胸の片隅にこびりついた滓のやうに殘つてゐた。

だが一度「世界語」の洗禮をうけるや，英米語なんてそつちのけで，一人で勉强したものだ。相手はなし遲々として進まない。東京堂を漁つて，やつと加藤節氏の「エスペラント獨修」，黒板博士の「エス和辭典」を手にしたのは，その年の秋だつた。

協會の設立したことを知つても，小學生では一寸入會する勇氣もなかつた。僅に東京堂の店頭から雜誌を買ひ，中西（後に丸善神田支店となる）にたのんで，二葉亭著に載せてあつた既刊書三十一册の中から二三とりよせて貰つたりした。しかし英語で說明してあるものは肝腎の英語が讀めない。ライプニツのモナドロギーオなどは，少年でなくても荷がかちすぎる。

然しエス運動の衰退や壓迫とともに，中學生になつてゐた私は，たまにとり出して讀む位で明治時代は終つてしまつた。

大正元年，一高に入學した頃から，またぼつぼつ勉强し初めた。死んだ東宮豐達君は，同期の三部の學生だつたが，當時氏はエス語の勉强をしてをられたかどうか全然話したことはなかつた。只同級生の二三にエス語と佛語の智識の交換をした位だ。

偶々先輩の小坂狷二君が，非常な達人であり，工科大學の學生が本職か，エス語の先生が本職かといふうはさを耳にした。しかも小坂君は，私の小學時代からの友人吉川君の父君の經營されてゐる岩國藩の寄宿舍にをられることを知つたので，早速訪ねていつた。大正 2 年のことで，氏の活動振りは凄じいものだつた。横須賀での講習，雜誌や講義錄の謄寫版刷。あの熱意，あの努力，想ふだに尊敬の念に耐えない。その講義錄は，後に臺北からエスペラント講習書として美裝して上梓されたものの前身であり，氏は同時に大成エス和辭典の編纂をやつてをられた。中村（精男），黒板兩博士や千布氏の名で編纂されてゐるが，實に小坂君の大學時代の精進の賜である。

小坂君を訪ねるのと前後して，不便な目黒の奥に原田素軒翁を訪ねて，エス語の書物を買ひオリエンタ・アジーオを貰つてきた。あの美しい木版刷の表紙，纖細な謄寫版の本文。大それたことに私は，萬葉集を譯してみやうと思ひ，身の程しらずに一つ二つ書いたことがあるのは今更汗顏の至である。

その頃となつて，小坂君に誘はれ銀座のパウリスタで開かれる例會に出席したりした。初めての時の印象は深い。列席者で想ひ出されるのは，大石理學士（當時中央氣象臺統計課長），黒板博士，祝振綱君だ。私ははじめて大石氏や祝君にエス語の單語を並べて喋つたと思ふ。

然し性來のひつこみ思案は，又机の上の勉强だけに戻り初めた。外人と繪端書の交換位で。

大正 4 年の秋理科大學に入ると，金澤で活躍してゐた淺井惠倫君が文科に籍を置かれたことを知つた。小坂淺井兩君の骨折で，初めて大學のエスペラント會ができ，學生集會所で會合を開いた。淺井君がしきりと喋り續けてゐたことを想ひ出す。

しかしエス語は，理科大學（中央氣象臺では中村臺長大石課長の熱心で，藤原咲平博士や中村左衞門太郎博士等の，今ではエス語など見向きもしない連中迄短い乍らエス語の論文を書い

たりしてゐたが）では到つて不評判だつた。大正6年，結晶光學の宿題をエス語で書いて出したために，中村清二博士からひどく白眼視された。これは大正8年より後のことになるが，アインシュタインが來朝した機，晩餐會の席上で，長岡半太郎先生は，アインシュタインがエスペラント會の名譽會長になつたことを御存知なく，何かの序にエスペラントなどやる位なら漢文でもやつた方がいゝと，例の豪快な笑をされた（平常はエス語の代りにローマ字などといはれてゐたものだ）。ところが中村先生は，數年前の宿題のことを覺えてをられて，僕の顔を見乍ら，「こゝにエスペランチストがゐますよ」なんて長岡先生に言はれた上「君，あの宿題にはまゐつたよ」と例の微笑をされた時は，つくづく情なくなつた。だがそれは私のエス運動に油をかける一因となつた。

私が及ばず乍らエス運動の戦線にのり出したのは，大正8年福岡に赴任してからのことで，従つて今度のテーマから外れる。

顧みれば明治 39 年から大正8年に到る黎明期に於いては，私はエス運動に何等貢献するところがない。只々自分ひとりの修業にかゝつてゐたにすぎない。他の熱心な運動者を少しでも助けることをせず，それに任せて晏如たるものがあつた。ことごとしく書けば書く程，却つて恥をさらすだけのことになる。今更ら顧みて恥しいけれど施す術はない。只私の眼に親しく映つた，小坂君，原田翁の眞摯な努力の姿は，今日に於いて誰に覓めることができやう。せめてもその姿を印象づけることができれば，私の目的は達したのである。

思　ひ　出

河　村　北　星

二十年ぶりに高知から遥々畏友藤田䆐三氏の御來訪を受け，Revuo Orienta の特輯記念號に三十年昔の思ひ出を書けとの事であつたが何分にも古い事なので記憶も極めておぼろげで書く材料が無いと御斷りしたが，許されず，强ひても思ひ出せとの嚴命のまま，枯木も山の賑ひと柄にも無い筆を執る事となりました。

現在の自分はエスペラントとは凡そ縁の遠い能樂や謡曲に沒入して居り，京都に於て初めてのエス講習生として佐藤政資氏の御指導は受けたが而も esp-isto としての僕は花火線香の様に第一戰に討死して仕舞つたのだから，全く御恥しい次第である。

明治 40 年春の意義深い日本エスペラント協會京都支部の發會式に就ては藤田氏の御記憶に譲る事として，會後都ホテルの晩餐會の tablo で最年少の故を以て黒板博士の隣席を汚した事が優越感と申さうか，他愛もなく嬉しかつた事と散會後玄關先で來賓諸先生方を御見送りして adiaŭ の交換に柔い快い響の中に新人らしい淡い矜恃を感じた事でもあつた。

講習會は松籟颯々の知恩院山內良正院で開かれた。住職角田俊徹師の御好意であつたらしい。若き英語の先生であつた俊徹師は勿論熱心な esp-isto であつた。會場はガランとした天井の高い黝ずんだ廣い一室に暗い電燈の下でボロ机を並べて新人の意氣に燃えて頗る熱心に聽講したものである。講習生はサア十四五人もあつたか，二十人もであつたも知れぬ。當醫專在學の三村信常君と帝大法科の山本庸彥君が世話役であつたと記憶する。三村君は丸刈りの秀才型，山本君は長髪の哲人肌の人であつた。

佐藤講師は大學生であつたが相當の年配でドッシリ重みのある人であつた。講習生の色分は

勿論學生が大多數で中には會社員や銀行の方も相當にあつた樣だ。孰れも外語の繁雜な文法や例外や慣用法に惱まされてゐる人々なのだから，どんなにエス語の造語法に興味と感激を有つた事か。外國の某商業會議所では今後 esp-isto で無ければ採用しないとか，世界巡禮に esp-isto は他の外語を知らなくても何等の不自由を感じないのみならず，相當歡迎を受けるとか，當時エス青年の血を湧かせたものであつた。

僕が小平房吉氏を訪ねた折（當時は無暗に未知の人の間に繪葉書交換の流行時であつた）早速繪はがきの albumo を見せられた。それには各國の esp-isto から送られた色々の繪葉書でつまつて居た中には美しい文字や立派な文章もあつたが，多くは文字もタドタドしいエス人であつた。憧れの日本へ行つたら是非君を訪ねる。その節は神戶まで迎へに來て吳れとか，京都の名勝を案內せよとか，迚も嬉しすぎるやうなのも澤山にあつた。小平氏は一二度どこかのエス雜誌に繪葉書交換の廣告を出したのだがメール每にドシドシと投り込まれるので今後どうしたものかと悲鳴を擧げて居られた事もエス人らしい惱であつた。

當時の esp-isto の多くが我等同樣花火線香式に終つた事は當時研究機關として雜誌はあるにはあつたが會合が無かつた爲ではあるまいか，兎に角今にして遺憾の極みである。

想ふにエスペラントは電話の樣なもので加入者が多くなればなる程功德が廣大となる。現在のエス人は相當に深い研究を積んで居られる事であらう。恰も十數年前の寫眞熱のやうに猫も杓子もやり出した所謂初物喰時代の amatoro は早く討死して眞面目な方々のみが殘られた事と信ずる。今後が本當のエスペラント時代を作るのでは無からうか。迚もの事に中學や女學校で七面倒臭い他の外國語の代りに世界語をやらせる運動は起らぬものか？洋々たるエスペラントの將來に遠大なる希望を繫ぐものである。（昭和 11 年 4 月 27 日稿）

協會京都支部發會當時の回顧

藤田稱三

私が初めて Esperanto を學んだのは京都府敎育會雜誌に載せられた佐藤政資氏の「エスペラントに就きて」と題した文によつてであつた。私は日本エスペラント協會京都支部發會式の記念寫眞の裏に明治 40 年春と記してあるので私がエス語を學んだのも其の頃の事と思つて居たら，今回用事があつて京都に來た序に京都府敎育會を訪れて當時の雜誌を借覽するに及んで，之は私の思ひ違ひであることを發見した。同雜誌は明治 39 年 10 月の第 173 號に初めて佐藤氏がエス語の紹介をされた。此の文には日本に於けるエス語發達の概略，ザメンホフの斯語を工夫するに至つた由來，エス語の實用性について，最後に獨習參考書について述べてある。翌月の第 174 號，175 號，177 號，178 號の四號に亘つて相當に詳しくエス語文法が記述されてある。

私は當時京都府第二女學校に勤めて居た關係から敎育會の會員であつたので，この雜誌をとつて居て，珍らしいので次ぎ次ぎ號を追うて讀んだわけである。だから私がエス語を學んだのは 39 年の秋からであつた。尤もエスペラントといふ國際語があるといふ事は之より前から知つて居た樣に思ふ。併しどうして知つたかは全く記憶がない。

同雜誌第 174 號からはエス語の紹介で語彙や，練習題も載せられて一通りエス語がわかる樣になつて居る。

第 174 號は第 14–19 頁の 6 頁, 第 175 號は第 9-15 頁の 6 頁, 第 177 號は第 17–18 頁の 2 頁, 第 178 號は第 10–14 頁の 5 頁で合計 19 頁に亘るものであつた。

これが四六倍版二段組の雜誌だから相當詳しく説かれて居るわけである。

京都に於けるエス運動に就ては當時の講師現京都藥專敎授佐藤政資氏が書いて下さる事であり又珍奇な資料も拜見出來ることと思ふが茲に日本エス運動の一事實と思はれる一節を同雜誌から引用さして貰ふ。

……昨年(38 年)黑板博士が直言誌上に紹介された時は格別世の注意を惹かなかつたが，本年讀賣新聞上に掲げられた同博士の談話が大に世に反響し，軈て日本エスペラント協會の創立となり……(第 173 號)

とある如く，又既にガントレット敎授の夏期講習又通信敎授で 30 餘年前に斯語が相當弘く世に識られて居た事が想はれるのである。

扨て私としては唯獨りで同雜誌を繰返し繰返し讀んで見ると英語などとは違つて發音法の簡易なこと，語法文法が規則正しく例外のないこと，即ち如何なる語學よりも學び易いことが著しく私の心を惹いた。併し雜誌の練習題をやつたりして居たに止り，エス協會に結び付くことをしなかつたのでした。所がその後，どういふ所からか 40 年の春，協會の京都支部から發會式の案内狀を貰つた。小坂氏の書かれたものによると之が 4 月14日だとの事だが，何でも日曜日の午後であつた事を記憶して居る。行つて見ると現京大敎授，當時大學院學生であつた野上俊夫氏や，師範學校の主席敎諭增澤長吉氏が來て居られた。過日，會場であつた富小路六角下る生祥尋常小學校に當時を偲ぶべく訪れた。同校の校門は西面して居る。その右に體操場があつて，此處が式場であつた。二階の疊敷の室が控室であつた。校門を入つたところに井戸があつて植込みになつて居るが，校門を閉めて之を背にして東面して撮影した。同校は場所を借りただけで，この事については同校に何の記錄もない。唯エスペラントの發會式があつたといふ口碑が殘つて居るに止る。尤も聞く所によると其後同學區內で綠星會と言ふが結成されて，三條通麩屋町東入杉本氏の指導と盡力でエス講習會が催されたとの事である。

この發會式場で友人の河村晴重君がエス語をやつて居ることを始めて知つた。同君とは既に知りあひであつたが，二階の控室で色々周旋して居られるので偶然エス語に於ても亦一しよになつたわけである。式の順序は忘れたが，黑板博士がエス語で挨拶を述べられた。白紙に數枚もある長いものであつたが私には意味は解らなかつた。それから京都圖書館長の湯淺吉郎氏が舊約聖書のバベルの塔の故事を引いて言語の混亂，分化から，國際共通語の必要を說かれた。最後に角田俊徹師が Espero の獨唱とあつたが實際は朗讀があつて式は閉ぢた。終つてあとに殘つたものが記念の撮影をやつた。

其後も私は河村君から Japana Esperantisto を借覽して獨習して居た。記憶に殘つて居ることは同誌のエス文和譯の課題に應じて圖書劵を貰つたことであつた。其間に長谷川二葉亭の「世界語」及びつづいて「世界語讀本」を購つて讀んだこと，それからドンキホーテの一章とまだ何か二章ほど集めた一册子があつたが，今は書名も內容も全く記憶にない。書庫を探したがどこに紛れ込んだのか，はた失つたのか見當らない。當時辭典のよいのがないので寔に不自由であつた。そこで A. Motteąu の Esperanto-English Dictionary を奮發した。この本は當時では最も語數の多い辭書であつたかと思ふ。130 頁で語數が 3500 ある。Universala Vortaro にある語が 2400 餘。二葉亭の「世界語」にある語彙が 1600 なのに比べると大分多い。それに合成語も相當にあるので，當時では最も語彙の豐富な辭典であつたかと思ふ。頁數が 130 頁

あつて1頁1錢に當るなと思つたから多分1圓30錢もしたかと思ふ。2志8片となつて居る。取り次ぎの書肆が「丸善が口錢を出して呉れないので口錢なしで御座います」と言つたのを覺えて居る。

此の辭書を手にしたものの，造語法がよく解らないのと，色々な疑問を解いて呉れる指導者がなかつたのと，讀書の資料が得にくかつたのやらでいつの間にか熱がさめて，折角覺えたエス語は中途半端で忘れるともなしに昭和5年に初等講習でやり直すまで全く私の生活から消え去つてしまつたのであつた。一時は熱心にやつた勉强も結局は世間並の物好きに終つたのは甚だ恥しい次第である。（昭和11年4月29日稿）

日本で最初のエスペラント語學校

小　山　英　吾

30年も前のことで自分の記憶も十分でないが明治39年8月の或日の事であつた。大杉氏が當時長兄（小山庸太郎）が經營してゐた習性小學校（當時東京市にはこういつた個人經營の小學校があつた）に尋ねて來られ實は今度エスペラント語の學校を開きたいのだが校舍の一部をかしてもらへないだらうかと申込れた，それでどうせ夜は空いてゐるものだし，ではお貸ししませうと云ふことになつた。

私はエスペラントについてはその時全く初めであつたので私も一緒に敎へてもらひませうと話したのであつた。同氏は快諾され，どうせやるのだから御宅の方でやつて見ようといふ人かあるなら御入り下さいとまで言つて呉れた。

私の習性小學校は當時本鄕の壹岐殿坂にあつた。丁度今の壹岐坂の東洋女子歯科醫專の所がそうで門は北側にむいてゐ，今の醫專の南側の廣い道路は震災後出來たものでその當時は運動場になつて居た。

このエスペラント語學校は9月17日午後6時花々しくその開校式をあげ酒井勝軍氏が得意の美聲を以てエスペーロを獨唱し安孫子，磯部，飯田等の諸氏の演說があり最後に大杉榮氏の敎授方針についての話があつて午後7時散會したといふことが當時の雜誌の記事にもしるされてゐる。

エスペラント語學校の看板はその數日前（?）にかかげられ開校式には私も出席した。

生徒としての入學申込者は40餘名であつた。當時はまだ一般にエス語とはどんなものか十分に知つてゐる人も少い時代で又從つて入學するものも確固たる信念を以て居るものも少なかつたらしい。而して生徒も各種類の人々で年齢も統一なく中老の人，壯年の者，靑年の輩，或は學生，或は官吏，或は商人，會社員等千差萬別であつた。

兎に角この學校は毎日午後6時から一時間半の授業で講師としては大杉榮氏唯一人之に從事された。

同氏は當時二十二歲の靑年で一見所謂ハイカラ紳士で中肉中背普通の談話の際は少し吃る節があるやうであつたが語學となれば左程でもなく親切丁寧に敎へられた。

當時の敎科書が今でも私の手許に二葉亭氏著の世界語讀本やガントレット丸山兩氏著の世界語が殘つてゐるし又二葉亭氏著の世界語も參考書として使はれたと思つて居る。

今も所持してゐる當時のノートがあるが之にはいろいろ作文やその他文法の六ケ敷しいもの

が細々と記されてゐる。そのノートに當時の時間割が出てゐるので紹介したい。

月曜日　文法　讀書　　火曜日　讀書　作文　　水曜日　會話　會話

木曜日　讀書　作文　　金曜日　詩　暗誦

となつてゐる。土曜と日曜は休日であつた。授業は一時間半を二分して間に中休みが十分位あつた。

生徒は皆幾分外國語の知識のあるものであつたから，比較的進歩も著しかつたらしい。その時分の規則でみると12月15日に授業が終ることになつてゐるが15日が土曜日だから14日に終講したものと思ふ。

終講間近になつて卒業式に唱へる準備として酒井氏が來られ La Espero の歌の練習を行つたことを記憶してゐる。

併し始めの四十餘人はだんだん減つて目出度卒業したものは十一二名であつた。

卒業式は12月16日神田の國民英學會で開かれ當時斯界の權威であつた黒板博士，淺田教授等の諸氏が臨席され來賓として元外務大臣加藤高明氏も臨席された。エス語の祝辭や訓話や卒業生代表の演説もあつた。

又卒業に際し協會から記念として卒業生にエス譯のクリスマス・カロルをくれた。併しこれは丸善に部數不足のため一部の者には他の本が渡されたと記憶する。自分はクリスマス・カロルをもらつた。その本の見返しの所に大杉榮氏がペンで Al S-ro E. Kojama por la Memoraĵo de la unua Kuraofiniĝo.　J. E. A.　と書き入れてある。

その時は私も私の弟の香も義弟の猪飼毅(現在森毅)も一緒に學習した。卒業式の記念寫眞にも私と共に一家三人入つてゐる。

明治40年1月からは第二期の入學生が募集されたがその頃から學校は私の小學校から東京の中心神田錦町の國民英學會の一教室へ移つた。かく申す私は名譽あるエスペラント語學校の第一回卒業生ではあつたが其後本職に忙殺されエス語の研究を怠つたので第二期の學校の模様は參觀もしなかつたので十分その樣子をしらないがその後も出入してゐた弟達の話では場所のよかつたわりにあまりよい成績をあげることができなかつたようにきいてゐる。その原因はいろいろあるが講師であつた大杉氏の思想がわざはひをしたのだと思はれる。私も大杉といふ人物はどういふ人か知らなかつたが既に學習中にも大杉氏のエス語は牢獄にある間に研究したものだとか又同氏の主義について世人がとやかく噂する樣になり我々の卒業後は同主義の者達があちこちで檢束されたとか同氏が引致されたとかと新聞に屢々出るやうになつた。その頃はこういふ主義者も世人には餘り知れて居ない時分ではあつたが大杉氏を知ると共にこういふ話は我々(否自分)の耳には强く響いた。それで自分ばかりでなく一般生徒もおそれをなして近づかなくなつたのぢやないかと思ふ。何もエス語が大杉氏の獨專物でないのだから，エス語と大杉氏の思想との間には何等關係はないのだが兎に角先生として相當の敬意をはらつて交るといふことになるとやつぱり敬遠したくなる樣な氣になるのは私だけではないと思ふ。

自分がエス語から遠ざかつたことも一つにはこの事が原因してゐる。併し當時の小學校は私の家庭と殆んど同樣なものだつたので La Espero の練習などは相當長くやつたので私の家族達も始終之を口ずさむほどであつて當時5歳だつた私の長男一郎もエスペーロを歌つてよろんでゐたことをおぼえてゐる。

私や弟達がエス語をやめてしまつた後も一郎はエスペーロの片はしを無意識に口ずさんでゐることもあつたがずつと後になつてエスペラントをやる樣になつたことも何かの因縁であら

う。

その當時のエスペーロの音譜を印刷したものも手許に殘つてゐるがそれには大杉氏が鉛筆で年賀狀の書き方を示し Osugi とサインしてある。

何はともあれ當時エス語は芽を出し初め大いに氣を吐いたもので，まづホテルにはエス語のガイドを置くとか又上野の博覽會や展覽會にはエス語の揭示板やエス語の案內人を置くといつた風であつたがその後中絕をみたのはエス語と社會主義とを混同したことによるのではないかと思ふ。

猶當時の思ひ出としては大杉氏は牛込市ケ谷に住んで居られいつも外濠線の電車にのつてやつて來たのだつたが——その時分市電は非常に線路も少かつた時であるが——或る時生徒から集めた授業料を入れた財布を電車の中ですられて悲觀してゐたことをおぼえてゐる。

又第一回卒業生の一靑年が冬休に歸省の途次汽車の中で話合つた某中學校の先生にエス語のことやその使命等を種々說きかした時かかる世界的の語學のあるのを初めて知り大いに感歎したとのことであつたが之でもわかる樣にその當時は知識階級のものでもエス語についてはあまり知つてゐない一證左である。

私がエス語學校の卒業式の時エス語で述べた挨拶の草稿に大杉氏が朱筆を入れてくれたのが手許にのこつてゐる。題は Esperanto kaj mia espero といふのである。

エスペラントと私

松隈健彥

私は自分でエスペランチストであると言ふのは恥しい位で話す方も餘り上手ではなく又宣傳の方もあまりやつて居りません。然し何か書けとの事でありますので誠におこがましい事ながら自分に關係した事のみを拾つて書いて見ようと思ふ。

私が初めてエスペラントと言ふ物がある事を知つたのは 1910 年（明治 43 年）の事である。當時私は大學にはいつて私の先生である藤澤利喜太郞先生を御宅に訪問した。先生は社會萬般の問題に亘つて御意見をのべられたがその御話の中に世界語と言ふ事にふれて其時初めてヴォラピウークやイードと一緒にエスペラントの事を知つた次第である。然しその時は唯そう言ふ物があると言ふ事を知つただけであつた。其後大學を卒業して地方に奉職する樣になつたが其頃廣島市に居られた高橋邦太郞氏が新聞か何かで現代日本の敎育制度が英語萬能である事を痛擊しエスペラントについて書かれて居たのを見て大いに共鳴し直ちに手紙を差上げ又私自身氏の御宅に伺ふて御意見を伺ふた。そして同氏の紹介で初めてエスペランチストとして會員になつたのである。それはたしか 1914 年（大正 3 年）ではないかと思ふ。その頃であつたか或はそれ以前學生時代であつたかはつきりしないが神田の古本屋あたりで二葉亭四迷の「世界語」と言ふ本を買つて最初はその本によつてエスペラントを勉强したのである。

其後かなりながい間地方で學究生活をつづけたのと又生の性質として自分の理想や主義は固く持して一步も他人に犯されたくない代りに他人の意志もそれだけ尊重したいと思ふので自分から積極的に働きかけて他人にエスペラントを宣傳するとかエスペラントで話すとか言ふ樣な事は餘り得意でないので自然消極的になり從つて何時までたつてもエスペラントは上手になれず御恥かしい次第である。唯一つ次の樣な經驗を持つて居るからそれを茲にのべたいと思ふ。

1926 年(大正 15 年)の夏 Norway を旅行した事がある。日本人で Norway を旅行した人と言へば大抵は Oslo と Bergen との間を汽車で走る位であり，それより一歩進んでもフィヨルドを汽船で見物する位である。私は勿論フィヨルド地方は心行くまで見物したが Sogne フィヨルドの一番奥の Lärdalsören と言ふ處で上陸しそれよりJotunheim とはいつた。Jotunheim と言へば日本で言へば「日本アルプス」とも言ふべき所であるがその山の中にはいつて5日ばかり旅行した。勿論乗物處のさわぎでなく全部歩いたのである。其時の話であるが一日中山を歩き疲れてやつと10軒か15軒位しか人家のない寒村にたどり身振り手眞似で非常に疲れて居る事を示しやつと一夜を眠る事ができた。翌朝になるとそう言ふ田舍に珍しい外國人が來たと言ふので僅かの村人達も奇妙な眼付で私を見て居たが一人の人が訪問して來て自分はエスペランチストであると言ふたので私も同樣である事を告げとにかく御互の意志を通ずる事ができた。歸朝後も其人とは時々文通してゐたが數年後にそれも止み唯今その人の名前もおぼえて居ないのは誠に残念である。

私の專門は天文學であるがその專門の論文をエスペラントで書いて見たいとは思つて居るがこの理想をまだ實行する事はできない。然しながら數年前東北帝國大學に天文學講座ができたのでそれを機會に次の樣な事を實行して居る。即ち東北帝大の天文に關係した人が何かの專門雜誌に出した論文の別刷を少し餘分にもらい，是を新たに Sendai Astronomiaj Raportoj と名づけて是を日本は勿論世界中の天文臺，大學の天文學敎室，其他天文學に關係のある研究所などに送つて居る。この Sendai A. R. は唯今 N-ro 10 まで刊行され配付先は日本國內に約 30 個所，國外に約 220 個所位である。尙又この S. A. R. は主として歐文でかかれるが日本文でかかれた論文でも構はぬ事にしその場合には必ずエスペラントの抄錄をかかげる事にして居る。

唯今までのべた樣にエスペランチストとして私が述べ得る事は誠に貧弱である。然しながらエスペラントの精神は充分把握して居る積りで機會ある毎に人にも說き時には演壇に立つ事もない譯ではないのである。

廿年前のこと

神近市子

エスペラントといふものを直接知るやうになつたのは大正4年頃であつたかと思ふ。その時分私は新聞社に勤めてゐて仕事の事で九段坂上の櫻井といふ家に下宿してゐたアレキサンダアといふ布哇生れのアメリカ婦人のところに時折り出入してゐた。ミス・アレキサンダアは世界主義のバハイ教の宣敎者で從つて熱心なエスペランチステイノであつた。ここには同じエスペランチストである關係からエロシエンコが出入してゐて，バハイの敎理に例のあの皮肉な批評をして人の好いアレキサンダアを當惑させてゐたものであつた。

ある日何か他の用事があつてアレキサンダアのところに行くと今夜エスペラント協會で講演をするから私にもぜひ來て聞いてくれといふことでエロシエンコと三人で牛込見附の近くにあつた(多分今もあると思ふが)物理學校に出かけて行つた。何だか暗い狹い會場で，例會ででもあつたと見へて人數も十何人位の淋しい集合であつた。

で，當然のこととして新米の私は皆から歡迎された。そして會員になるやうに勸誘された。

集會の世話人の中に大學の制服を着た人が二人ゐて，英語がお分りならすぐ覺へますよと云つて，一寸部厚な英語で書いたくわしいエスペラントの獨習書を下すつた。アレキサンダアが「ミスタア・コサカ」と云つて紹介してくれたやうに覺へてゐるが，近頃エスペラントの本を出して居られる小坂氏ではなかつただらうかとこの頃考へてゐる。

たしかこの集會で矢張りアレキサンダアが「ビッグ福田」と云つてゐた福田さんに逢つた。福田さんとはその後も始終お逢ひしてゐた。熱心なエスペランチストでどこか銀行だか會社だかに勤めて居られたが，その後大阪の方に住んで居られるさうで，一二のエスペランチストから氏の消息を聞いたことがあつた。

エロシエンコの事はロシヤにゐる時分からのエスペランチストで，日本に來る時もエスペラント協會を賴つて來たものであつた。中村理學博士が協會の會長をやつて居られたが何かそんな關係から赤くなる前の彼は中村博士にはずい分お世話になつたものであつた。ロシヤからの送金は全部中村博士のところに來て，エロシエンコは月々いくらかづつか費つてゐたが，その後歐洲戰爭が始まつて，ロシヤが戰費の爲めに苦しむやうになり，もう到底これ以上は送金できないから何とかして生活してくれといふ手紙と一緒に親許から最後に三百圓かしらの金が送つて來た。その時は流石のエロシエンコも一寸當惑してゐたやうであつたが，金が切れると中村博士は月に五十圓位なら自分の手から一時立替へて置くから心配なく勉强をつづけたが好いと云はれたといふことであつた。エロシエンコも博士の好意は隨分感謝してゐたやうであつたが何度位御無心に行つたものか、私はよく知らない。淸廉な學者氣質の方らしいから，決して生活に餘裕がある筈はないといふ話を私がしたから，あの氣性としては或は一度も行かなかつたかとも思ふ。とにかく一と頃は大變困つてゐたやうであつた。

日本を追放されてから，彼が北京大學のエスペラント講師に聘されてゐたことはもう世間に知られてゐるが，最近ではモスコオに歸つて日本人にロシヤ語を敎へてゐるらしい。……(略)……最近ロシヤから歸つた人の話によると，彼は白派のエスペランチストの會合にばかり出席するので片山潜氏に叱られ通しだといふことである。(以下略)。(大正 15 年 4 月發行「エスペラント文藝」第一卷第一號より)

山中から京都へ

竹内藤吉

山中小學校の宿直室で有合せた雜誌「太陽」の黒板先生の論文を讀み始めてから續をまちかねて讀みつづけた。最後のエスペラントの記事を見てそんなよいものがあつたのかと大變嬉しく，覺えられるものなら是非覺えたいと思つた。それにしてもそんなよいものを今日まで誰からも聞かなかつたことを大變不思議な事に思つた。それは大正 4 年 (1915) 春のことである。それから每日の新聞を丹念にさがした。エスペラント書の廣告が出るかと。しかしいくらさがしても手がかりもないので東京から圖書目錄を取りよせたがあつたのは岡崎屋のエスペラント獨修と投賣のエスペラント日本語字書だけだつた。それらを求めたがローマ字を知つて居ただけの私にはやさしいどころか少しもわからなんだと思ふ。當時小學校に居られた英獨語をやられた俵さんも始められたので，それからは俵さんに色々と習つた。そして次第にエスペラントになじんで御大典(同年秋)の頃にはエスペラントを私の御大典紀念にしようと決心した。其年の暮

に叔父が日本エスペラント協會の會員だつたことがわかり，協會の初期の頃の雜誌をもらつたのでエス文は讀めなんだが邦文の記事をよんで益々エスペラント信者になつて行つた。大正5年(1916)には金澤の H.C.E. や原田勇美氏の世界語書院のある事も知れて Orienta Azio の通信廣告を見てはじめてロシヤとアメリカへはがきを出した，金澤の乃木會であつた淺井惠倫氏の夏期講習に二日出てロシヤ版の Kursa lernolibro をもらつてエスペラント文にもわかるのもあるのだと思つたのも其年の事かと思ふ。大正6年の春には京都にうつつたので，當時大學に居られ廣島で高橋邦太郎氏からエスペラントを學ばれた人を下宿にたづねて，山鹿泰治さんがザメンホフの死を語られたのが大阪朝日の京都版に出たことやロシヤからチエホフだか，ツルゲネフかの日本での刊本をしらべてほしいと云つてきた事などを聞いた。三條の點林堂に山鹿さんをたづねたのはそれからしばらくしてからのことだつたらう。山鹿さんは夜をそく電話で數人へ同時に通信講習をする計畫を話されたが電話局でゆるさなかつたとかで話だけですんだ。それはもう秋になつてからの事だつたらう。それでも山鹿さんのほねをりで會合が出來るようになつてローマ字の高島直一さんも仲間だつたので Evangelio de la horo を maŝinskribi してテクストに數回會合した。讀みにくいと云ふほどのものでない Evangelio も當時の私等には樂でないので仲間のたれも信者にはならなんだと思ふ。そんなことで先生の方でもあまりエスペラント仲間にのぞみをかけられなんだからだつたか會合はあまりつづかなかつた。そして山鹿さんもまのろつこいエス文でよませるよりはと考へられて手つとり早い日本譯をこしらへてをられたのだが少しもそんな事は我々は知らなかつた。

しかし私と同じ工場にをつた人の友達で大阪の中山太陽堂に居た人がエスペラントをやり度いと云つてをられるとの事で，大阪の會合所などを知らせたこともあつた。

大正8年1月に中の島のどこだつたかであつた大阪エス會の會合に出た，相坂佶，高尾亮雄，それに太陽堂の人と伏見の若い女の人なども見えた，盲目の人の聖書の講義があつて相坂さんの詩の朗讀があつた，大變大勢と云ふのではなかつたがよい研究會だつたと思ふ。其大阪から歸つた次の日か其次の日に私は熱が出て寢ついてしまつた。まもなく同室に居た友もたをれた。第1回の流感にやられたのだ。國から母が來て二人を介抱してくれ二人共よくなつたが私は母と國へかへり，一ケ月養生した後再び京都へ來た。其間に La Horo の使徒達が刊本を取り上げられた事を聞いた。私が工場に行つて見ると工場に居た人々の中に丸太町からさがしてきた臺灣で出た綠星社版のエスペラント講習書をびつくりして賣拂つた人もあつた。もちろん私等のたれもなんのかかわりもなかつたが。私の主人なども前から英語を學べとすすめてくれたのであるが記憶力の弱い私にはエスペラントをやめて英語をやる勇氣がなかつたので，エスペラントは變りなくつづけて行つた。

三四年前支配人の濱田さんをたづねた時そんなに長くエスペラントをつゞけて居たのなら正規によい先生について學べと云はれた。今ではもうエスペラントはだれからもゆるされたのだ。

其後たのまれて本をさがしに寺町を上つて大ぶん夜おそくなつた時分まだ開店早々でローマ字の本と聖書ばかりならべて居たカニヤに入つて求める本を注文した時ついでにエスペラントの本をならべてくれるようにたのんだのもまだ春のことだつた。

中原さんは熱心なローマジストだつたから，エスペラントが普及すればローマ字は(もし漢字やカナよりもほんとに便利なものなら) ひとりでにさかんになると考へて居る私のことゆへ遠慮なく議論をしたのでしたが時がよかつたか，願ひは叶た。

又私と同じ五條柳の馬場洛永玩具株式會社に働いて居た小谷惠一郎さんがひどい神經衰弱ですべてのことに興味をなくしてねてゐる時友達が私のとこから綠星社の講習書をもつていつたら元氣を取返して講義全部を書取たのも其年の暮でなかつたか（氏はよくなつて翌年ウラジオに行かれたがかへつて外語に獨語を學ばれ其時私に史學をやつたら又エスペラントをやりますと云てゐたが橫濱高商の獨語敎師としてなくなつた）。

だいぶんたつて京都の大學にもエスペラントの會があるとか聞いたが別に運動には關係して居なかつた。そして翌大正９年には京都を去つた。

エスペラントを始める時10年もやつたら使へるようになれようと思つてかかつたが萬年一年生で其10年目もすぎた。仕事をしながらなにかを學習することはむづかしい。エスペラントの學習は小學校時代にさせてほしいと考へて普及に身を入れるようになつたのはエスペラント信心が篤くなつてからの大正 12 年頃からかと思ふ。（昭和 11 年 4 月 23 日）

過ぎし日の十字架の下に

成　田　重　郎

國際語運動（Esperantismo）と言へば，今日でこそ新語のモダン辭書には挿入されてあるやうだが，當時はまるで主義者の運動のやうに見られたこともあつた。笑ひ草ではなくて事實談である。Vasilij Eroŝenko などいふロシア人が日本の國際語人の間に持て囃された頃は警視廳あたりから盛にやつて來て小坂狷二氏母堂始め往々應接に惱まされたといふやうな話もある。その頃國際觀光局の井上萬壽藏氏，京城大敎授長谷川理衞氏は共に東大生。堀眞道檢事は一高生。元府會議員木崎宏氏等も同樣一高生。秋田雨雀氏は劇作家の國際語人として，支那語敎授何盛三氏等と共に芬蘭公使 Ramstedt 氏をめぐり國際語のニュースを頻に供給したものである。牛込新小川町の小坂狷二氏二階が學會の事務所にあてられてゐた頃で例會は每月一回神田錦町の學士會で催された。必ず誰かエスペラントで講演することになつてゐた。丘淺次郎博士，城井尙義博士，松葉重雄學士，押田德郎ドクトル等が malnovaj batalantoj として姿を見せてゐた。恰度新學會の創立者の一人藤澤親雄學士はジュネーヴに出られて不在であつたが學會の御歷々の集る會として學士會での例會は盛大を極めたものである。大正９年だ。この時には，新學會の母胎日本エスペラント協會（Japana Esperantista Asocio）の首腦者等はもうかかる例會から姿を消してゐた。黑板勝美博士を始め千布利雄氏等は云はずものこと，その他非改革派の人々はいづれも去つてゐた。新陳代謝である。

これこそ大戰以後のことであり初期の國際語人等は旣に種播きの時期を終つてゐたのであつた。民族自決主義からヴェルサイユ條約の特產物として高く叫ばれ，多くの西歐の新興國はいづれも國際語エスペラントを採用しそれを公用語として認定し始めたからたまらない。エスペラントは波のように世界の上に擴まつて行つた。

しかしこれより先この運動はわが國には，日露戰爭直後に輸入されてゐた。この當時の國際語人の間には，後日 Socialisto として名を馳せた人々の顏も見えてゐたのだが學者方面の國際語宣傳は旣に東北の一寒村にまでも及んでゐた。わたくしが初めて世界語エスペラントの存在を聞き知つたのは，中學初年の頃で明治 40 年前後であつたらう。從兄川村直治の話では，向軍治(?)といふ人が東北に宣傳に來たので，世界語なるものを知つた。と。その初めて聞く發音

は東北の青年學生を動かすには充分で，色々な口附をして見せたのが，全く驚異の種であつたと云ふ。それがたまらなく可笑くて腹をよらしたといふ。從兄は代用教員たるべく準備所に入てゐた時，たまたまそれを聞いたものらしい。それから間もなく彼は二十數歳の若さで病死したので今日ではもう聞きただして見ようもない。

しかし，この世界語の存在といふ事實は，初年の中學生の興味を大して牽かずに過ぎてしまつた。この少年はやがて文學に興味を持ち出し，投書家と成つた。當時「秀才文壇」あたりで眞山青果の弟子として，賣出の新進作家清見陸郎氏などの冷たい手で，むざんにも沒書の憂き目にばかり會はされてゐた。……だが或る時，彼は校友會雜誌の校正に早稲田の日清印刷にゆくと恰度「早稲田學報」の校正に來てゐた眉目清秀な青年文士と會つた。この文人こそ詩人として劇作家として文壇に打つて出たばかりの秋田雨雀氏その人であつた。早大教授島村抱月の率ゐた「早稲田文學」はこの青年文士の舞臺であつた。この會見の結果若くて貴公子然たる風格の早稲田派文士から雜司ケ谷の家に招かれた中學生はローマ字の話やら文學談やらを聞かされ劇と詩などと云ふ雜誌も貰つた。……かくして當時自然主義文學の提唱に依つて文壇に雄飛してゐた稲門派の相馬御風，片上天絃，本間久雄，中村星湖，吉江喬松，水野葉舟，德田秋江諸氏の名は斷然この文學少年の思想を左右し，「早稲田文學」は彼の愛讀する所と成つた。明治44年中學を出てから4-5年ぶらぶらし文學青年時代を送つた。大5五年初春痔疾に惱み，外科手術の經過不良一時絶望狀態に陷つたが幸ひにして手厚い兩親の看護により一命を取り止め得た。漸く步行して醫者の許にゆけるやうに成つた時初夏のある夕，路上で偶然秋田雨雀氏と會つた。氏は重患に罹つた文學少年に好意ある言葉を寄せ，失望することなく療養せよと敎へた。ゲーテは若くして落馬し，ひどく喀血して絶望狀態に陷つたが，よく克已節制して健康を回復し後日に至つてあのやうな文學上の偉大なる業績を殘した……と話してくれた。さうして，エスペラントを學んで，人生に希望を持たれよと說かれて，いろいろエスペラントの話もしてくれた。そこで秋田雨雀氏の指導した醫者の書生中村君の許へゆき，エスペラントの本を見せて貰つた。千布利雄氏「エスペラント全程」とか原田素軒編輯色刷り謄寫版の『東あじあ』（月刊雜誌）とか原田版の物語集などは，新知識の源泉たるべきものではあつた。がまだエスペランチストには成るに至らなかつた。文學青年は英國版の獨習敎科書を中村君から借りて獨習で佛蘭西語を始めてゐた。

この同じ大正5年の冬のある晩，またまた路上で會つた秋田雨雀氏から早稲田エスペラント會の研究會に招かれたので早速出席して見た。場所は小石川關口臺町の河合讓氏の二階で，四五人集つてゐた。河合氏は早稲田の哲學科の學生であつたが，お父様は立敎大學の敎授であつた。會は始つて間もなかつたので，讀んでゐた二册の教科書も僅かしか進んでゐなかつた。(1) F-ino Alexander kaj V. Eroŝenko: Kaŝitaj Vortoj (traduko), (2) L. Tolstoj: Per kio homoj vivas. このほかに，エスペラント修得の鍵として，會員に與へられたものは僅かに小册子「エスペラントの鍵」（英國版）で，英語がわからなければどうにもならない仕組に成つてゐた。ここで秋田雨雀氏の說明をきいた。終つて會員持ち寄りの煎餠などが出た。……それから一回出た。それきりで後は全部自分でやつた。大正6年の春には，大分健康に成つた。手には英國版の「エスペラントの鍵」あり，豫後の病青年には一脚の椅子あり，太陽は明るく美しく輝き，初夏の爽やかな風物は，若い心を夢で包んだ。桐の花が綠葉の茂みのなかに，けだかく香つてゐる雜司ケ谷墓地は，彼を招いて生きる悦びを敎へた。人生の曙がそこから惠まれた。文學によつて結ばれた新しい友垣，閨秀詩人，女大學生，文學少女などのことを思ひやつ

た。

雑司ヶ谷墓地への散歩には，秋田雨雀氏と一緒のこともあつた。エスペラントの話も出た。エスペラントでの會話も始められた。しかし，病青年は人生問題に多く時間を費し，讀書と思索に耽つた。ドストエフスキイ，トルストイ，マアテルリンク，ダヌンチオ，彼は「カラマゾフの兄弟」に讀み耽り，「生ける屍」や「闇の力」に感激し，「死の勝利」を思つても見た。さうして「智惠と運命」の神祕を痛感して「アグラヴエヌとセリセツト」や「群盲」の宿命を思ひ見たのであつた。彼は最早「人形の家」を出てゐた。さうして，銀の鈴を橇に結んで，戀人と共に南の國に走る若きボルクマンの身の上を思ひやつてゐたのであつた……感激しながらジアン•ジヤツク•ルウソオの「懺悔」を二高敎授石川戯庵氏譯で讀み始めてゐた。厨川白村氏の「近代文學十講」に親しんでゐた。しかし，手からはエスペラント書を離さなかつた。フランス語ではまだ Bandelaire も Verlaine もよめず，Maeterlinck も讀めなかつた。

この頃ロシアの盲詩人として，Vasilij Eroŝenko が日本の一部の知識人の心を牽いてゐた。彼はエスペラントを話した。ロシアから時々エスペラントをやる同志がやつて來た。南米あたりへ放浪の旅を續けて行つたものもあつた。日本に踏み留つたものもゐる。エロシエンコがエスペラントの通譯を秋田雨雀氏に依頼して，豫言者宮崎虎之助氏と會見したのもこの頃のことである。その會見記は「早稻田文學」に出て，興味を湧き起した。エロシエンコは，印度を英國官憲のために追放されて，日本に歸つて來たものだが。忽ち日本語もやるやうに成つた。しかし秋田雨雀氏に最も光明を與へたのは，エロシエンコとのエスペラントでの接觸であつた。「エスペラントは單なる言葉ではない。たましいがある」といふ意味の事を文學者らしい言葉で力說した秋田雨雀氏は，この盲露人との間に交はされたエスペラントでの會話に依つて，ある信念を得た。それが確信となつた雨雀氏のエスペランチスモ解說は，當年の多くの若い青年たちの心を捉へるには充分であつた。

この當時，エロシエンコの秘書のやうに附いて廻つた青年がゐた。彼はエロシエンコの原稿を書いたが，エスペラントもやりさうしてフランスの旅に登つた。巴里にしばらくゐた。彼はやはり國際語の同志でバハイズムの望月百合子さんと巴里では親しくしてゐた。この青年が現在は東京神田の日佛會館に本部をおく日佛佛敎協會主事武藤仁叟氏の前身だ。最近は「巴里會」の膽煎りで芝の青松寺にゐる筈である。フランス語を能くすることは，望月百合子さん同樣でエスペラントの過去は全部忘れてしまつてゐるやうである。望月百合子さんの方は現在東京で石川三四郎氏と一緒に，フランス語學校をやつてゐるやうである。彼女は大正8年春早大生濱田新一郎氏の始めた會に來てフランス語の講習をきいてゐたが．當時はバハイズムの信者でエスペラントもやつてゐた。この會に來てゐたもののなかに井伏鱒二氏がゐた。當時は早大文科生であつたが，今日では作家として時めいてゐる。エスペラントはやらないが。

河合讓氏等の初期の「早稻田エスペラント會」はその後どう成つたか。たつた二回出席しただけの自分にはわからない。大正9年牛込新小川町の小坂狷二氏の二階に集つた青年學生たちの間にあつて川崎直一氏や藤間常太郎氏等は，第二次の「早稻田エスペラント會」を後繼されたやうに記憶する。英語學の勝俣詮吉郎敎授もたしか役員と成つてゐられたやうに思ふ。勝俣敎授は，英語が第一で，エスペラントが第二たるべきであると，當時英語學敎授らしい信念を吐露されたが，わたくしも今日でもこの言葉は深く心に刻まれてゐる。

「早稻田エスペラント會」に就ては他に書く可き人があるであらう。わたくしは若干の思ひ出の斷片をここに書き綴つて見ただけである。何かの參考に成れば幸ひである。

終りに，この稿をわたくしに依頼せられた學會の岡本好次氏に對しては深くその好意を謝したく思ふ。さうして，この機會を與へて，現在では退役國際語人のわたくしに發言を許してくれたことを心からお禮申し上げたいと思ふ。

Sub la kruco estinta preĝu homaro,
Sub la krono estonta kantu frataro,
Kaj enbraku tutkore unu l' alian,
Kaj postkuru kuraĝe vojon la nian.

El mia «Al la Nova Vojo» — Sigewo Narita

大阪における種まき時代

高尾亮雄

(一) 發祥地としての Kafejo Kurenai

今から 15-6 年も前のことを書けといはれたつて記憶が薄ぼんやり，正確な記錄はむしろ學會にあるらしいので，唯ほんの思出でのまゝを埒もなく列べてみませう。

尤も私たちの運動よりも以前，今の大阪醫大の教授堀見克禮，北里闌の二先輩があつたが，もうその頃（大正5年）熱がさめて，何を若輩が今ごろになつてといつた風，てんで相手にしてくれませんでした。

私がエスペラントの緣に惹かれたのはローマ字會の仲間の辻利助，狩野金之助，神崎泉，相坂佶等，そんな連中から一寸エスペラントの本を借りて讀んでみると一週間ほどで大體會得がゆく，傍にはまるで生き字引きのやうな辻君が附いてくれてるから頗る便利，忽ち私は一週間にして宣傳家にも講習會の Gvidanto にもなつて半ば洒落混じりで冗舌りする。その一例——現在働詞の語尾の as は現ナマ主義の大阪辯の“そうだす”の as だ。未來世を信ずる佛敎寺院のある京都辯の“そうどす”は卽ち os だ。過去百萬石城下だつた金澤言葉は“そうでありみす”の is だ。この市の娘さんたちは“私はミスでありミス”といひます——とまアこんな調子。

實際，大阪のエスペラント界をグヴイドしてくれたのは斯界の大先達高橋邦太郎老で，いつも廣島から手車手辨當でやつてくる，中目覺教授（當時廣島高師の）や黒板博士の歡迎會をカフエヨ・クレナイで開いたこともある。山鹿泰治君（陣太皷山鹿流の末孫）は時々京都から來て流暢な會話でわれわれを驚かしたものでした。

このクレナイと云ふのは大阪最初のバー“旗の酒場”から岐れ主人鈴木與市がおもしろい男で，當時多くの若い文士や畫家ども毎夜集る場所，エス語の發達史にとつては忘るゝことのできぬ思出の家，ザ博士の誕生記念會もこゝ，展覽會や講演，講習，座談會も，Ateneo Esperanta の看板を揭げたのもこゝ，全くの Propagandejo，運動の策源地だつたのです。

こゝから生れた一笑話——われらの同志ではないが隣の芦邊劇場(内部からは共通できた)の一電氣技師，瓢輕な男で所用あつて支那の青島のホテルに滯留中，一知人に何心なく Bonan Vesperon と口走つたところ，同じホテルのパーラに居合せた一白人が俄に聞き耳を聳てツカツカと近づいて，その男の手をしつかと握りペラペラとエス語で喋りかけてきた，こちらは唯一語，この他は存じません御免々々と逃げ出したと。こんな風に門前の小僧でさへ習はぬエス

語を口ずさむに到つたほど，この家の雰圍氣はエス化してゐたのでした。

（二） 水草を追ふた時代

さてバーやカフエばかりでも能がない，もつと街頭へ進出だ，市内各所に研究講習會場を持たふといふことになり，これからが轉々として水草を追ふ，いつも一定不變の會場がない，一ヶ月か半月すると，きつと拒絶されるルンペン生活，一寸その個所を思出してみても左の如し。

日本橋詰のあさがた屋（三絃の譜を賣出した店の二階），北濱の櫻根博士邸（ローマ字會館），堂島の松村敏夫方（辯護士事務所），天滿キリスト敎會，槍屋町の東敎會，市岡のメソヂスト講義所，Y.M.C.A.，法案寺南坊，大阪市民館（これは日本最初のもの），泰西學館，古屋女子英學塾，靱小學校，曾根崎小學校，濟美第三小學校，市立盲啞學校，府立商品陳列所，相愛女學校，樟蔭女學校，外國語學校，白木屋百貨店，洗心洞文庫（大鹽平八郎の記念館），少國民新聞社，朝日新聞社，カフエヨ•ステーロ，六甲苦樂園キャンプ場等々

何故一ヶ所に長つゞきしないか，それは夜遲くまで若い男女たちが何やら解らぬ言葉でペチャペチャいつてゐること，赤い連中の集りかと疑はれたこと，貧乏な者ばかりだからのこと。しかし會場の異なるに從つてまた異なる變り種の收獲も可なりありました。敎會ではエス語の聖書を講じ，お寺では印度の說話やバハイの世界統一宗敎を論ずる，學校では敎育問題をと，こんな風で盲人の學校では宮島校長を首め熊谷，岩橋，橋本，進藤なぞインテリ盲人を同志に引入れました。當時，大阪におけるエス運動の特異性は盲人と女性との多いことでして，眼あきよりも，男性よりもほんとうに熱があり眞摯で且つ進步も速かで徹底した實を結びました。

後に斯道の權威者千布利雄氏が近くの神戸郵便局へ來任されたので，われわれにとつては鬼に金棒，非常に心强くなり，この機會に立派な讀本を編纂して貰ふと着手，その原稿を先づ悉くタイプライターにしたのは全くこれら inoj の働きで（多くは貿易商會のタイピストでしたから），なほその本が出版されるまで印刷の Legolibro が少かつた機とて研究本は今の千布氏の原稿から多數のコッピーが彼女らの手によつて出來，頗る便利重寶な役目，隱れた功勞者として記錄してをきたい。今は皆 Patrino となつて二人三人第二世を產んでゐます。（中には若くして逝いた新聞人北村兼子孃の如きもありますが）

（三） Kafejo Stelo の歌

宣傳をより效果的にするには理窟よりも實際，單なる言語の注入暗記よりも成るべく藝術的氣分でと考へて，高橋老から讓り受けた萬國コドモ畫の數百點は可なり有效に利用しました。對外的には日本のコドモ畫を集めて各國の同志に返禮として送り屆け，またこれによつて新たに蒐集した作品を諸方で展觀し大に國際語の功德を眼の前に示す，特に大阪朝日の手で內地各地方へ兒童畫の參考資料として巡回展をしたのは好い普及になりました。

例のエロシエンコの來阪を好機に盛んに音樂會をあちこちで催したり，加納和夫氏に新しいエス詩の作曲をして貰つて松山芳野里氏に獨唱發表さしたり，六歲の少女にサンタ•ルチオを，古屋英學塾の女生にエスペーロを歌はしたり，石井漠や小浪に舞踊化せしめたり，いろいろの詩歌を私が飜譯してみたり，ある酒場喫茶店の名を Stelo とつけて，和エス兩方の歌を作つて興がつたこともあります。歌は一時流行しました。

"金がホシけれや戀すてろ，戀がほしけれや金ステロー，兩方忘れてさツさ飲め飲め"

Espero といふカクテルを痛飮したのもこんな時代でした。とも角，遊戲半分，洒落氣まぢり

に若やいだ氣分で宣傳し歩いたものです。記念會の時，女琵琶師をつれてきてエスペーロの日本譯を演じてもらつたなぞも今思ふとおかしい。中之島を渡つた淀屋橋詰（今は地下鐵で撤去された）に甘いしるこ屋があつて美しい娘さんがゐた，この Sirkejo の Belulino は一時仲間うちの評判だつたが今はどうしたか……。

（四） 印象を貽した海外同志

中目覺先生は大阪外語の校長になつた時分は前ほどの熱を失はれたようでした。古屋登代子女史は一時頗るエス語熱をあげられたが，浮氣な氣性でか，いつの間にか反いてエスのことといへば見返りもしない，英學塾のあとは今，同志の盲人學者岩橋武夫氏が新に校長になり，エスのためにも有望らしい。

外國人の來訪は年に一人二人は必ずあり，いつか以前，放浪の一外國同志がやつてきて，諸方を案內し一夜を私の茅屋で泊めたところ大男の丈が長すぎて日本の掛け蒲團が短かくて一尺ばかりぬつと足が出る。翌朝，便所の手洗鉢で，あつと聲かける間もなく口をそゝがれてしまつた，風俗習慣の違ゐながら變なわけだ，しかし難有いことには言葉もどうやら通じて親密な交際ができました，いや言語なんかむしろ末技で心と心との融合，Samideano だからでせう。

エロシェンコは到るところが我が家で，一寸の旅行でさへ盲人用の大字典やカサ高い本や樂器のギターにバラライカなんかを携帶に及ぶ，も一度こゝへ歸つてくるのだから重い物は預けてをけと，いくら勸めても頑として承知しない。「永久の旅人」といふ氣持ちがいつも去らないからだらう。で止むなく同行者が手助けに重い荷物を持つてやる面倒がつきまとふ。人混みの電車の中で樂器をコツンとでも突き當てようものなら眞赤になつて怒る，メアキは注意が足りないと痛罵する。後に私が十年振りに東京へ行つた時，メクラのエ君に道案內をしてもらつた。彼は可なり大きな足跡を大阪にも貽して行つた男でした。

ウラヂオの一同志が每年，夏の雲仙へ避暑にくる途中，大阪へ立ち寄つたので，一流ホテルへ泊めたところ，宿料が馬鹿に高いのと，都會の熱暑に辟易して早く立ち去つたが彼のための仲間の集りには非常に喜んでくれた。革命のあと，今はどうしたやら。

最後に，他の人はエスペランチストになつた因縁話をするでせうが，私は幾分エス界から遠ざかり無緣のやうになつた理由を告白しませう——一つは例のブローニュ宣言問題で Ĉ 氏と O 氏と兩方に敬意を表するため嚴正中立のエスペラント主義を守り少時桃園に身を隱したといつたわけ，第二には多年希望してゐた大成和エス字典が日本式ローマ字を採用したこと，これは標準式を主張する私らには慊たらない，當初編纂者の千布氏に逢つて熱心に注告したが遂に容れられず，私は兩方に拘泥せずむしろ中立のエス式の綴り方が好いと進言したのであつた。千布氏の立場も大分困つてをられたらしい。それから〇〇教や〇〇社に利用されたのは難有迷惑で，どうも變なことが起りはしないかと第六感が働いたが，不幸にも果してこれは適中しました，有爲轉變，長い人生にはいろいろな事が起るものです，いづれにしても私は一生涯エスペランチストたることには全く相違ございません。（11 年 4 月 10 日）

回　　顧

八木日出雄

「エスペラント」が國際共通の言語であつてしかも平易優秀な人工語であるとは大正 3 年(1914) ローマ字雜誌で知つた。中學二年級(大阪府立北野中學在學)の時である。ローマ字雜誌は子供の時から購讀してゐて偶然その記事が目についたのであつたが「エスペラント」なるものに尠なからず好奇心を持つに至つた。然し機會がなくてそのままに三年を過ぎた。

大正 6 年中學 5 年級の夏休みに大阪の丸善の外國語學書の書棚に O'Connor の Esperanto, The Student's Complete Text Book がただ一册だけ淋しくあつたのを發見し往年の記憶が急に蘇つて早速に買つた。休暇を幸ひ熱心に勉强した。初めより獨習である。大聲をあげて自分の耳に音をきかせる方法で讀んだことを今でも覺えてゐる。ĝ, ĵ の發音には苦心した。ĥ は親戚の工學士から獨逸語の ch を敎はつて要領を得た。智識はこの本一册だけで外に本もなく，エス語の話をきく人も知らなかつた。しかしこの一册の本は自分の熱心を刺戟するに充分であつた。その後入學試驗で忙しくて中止。

大正 7 年 3 月中學を卒業して 7 月に京都の三高に入學す。この時京都の丸太町通りの古本屋を一々尋ねまわつてエスペラントの本はないかと調べた處ヤツト一册見つかつた。それは赤表紙の獨習書で小坂氏の編まれたもの，臺灣エス協會の發行である。これで日本のエス團體のあることを知つた。この本では初から終まで一頁一頁熱心に硏究勉强したものである。これの附錄に採錄された數篇のエス宣傳文には一々心を打たれた。

9 月新學期開始し獨逸語學習に忙しい。日本エスペラント協會が中心團體たることを知り年末に送金して八年度より入會の申込をなす。Verda Stelo, J. E. A. の記號のはいつた insigno と會員章 1305 を貰ふ。

この頃中學以來の親友植田高三君にエスペラントを勸めた。三高の同級生に松田武夫君があり，小生のノートの標題に Germana lingvo とか Zoologio とかかいてあるのをみてエスペラントをやつてゐるのか，わしの親父もやつてゐるといふ事から同君の，嚴父奈良の松田恒治郞氏と文通を開始す。これが自分にとつては初めてのエスペラントの實用であつた。

大正 8 年日本エス協會の雜誌 Japana Esperantisto 來るも毎月發行されず。本をよみたいからとて廣告にある本の金を送つても返事がなく數回督促しヤツト品切の返事が來たことがあり此時入手した豆本はあとで聞いたが原田翁苦心の手刷の物とわかり珍藏してゐる。本がなくて困るといふ事を松田氏に洩した所，靜岡の高橋邦太郞氏を紹介し本を借れといふ事だつた。高橋氏へエス文で出したら早速長い返事が來て現在若い熱心な同志が少いから一つ大いに運動してくれとの激勵と UEA の Esperanto 其他外國雜誌を若干送つて貰つた。自分が Aktiva Esperantisto となつたのは高橋氏の instigo におふ所が多い。

ここで少しく當時の京都に於けるエス運動をのべる。京都では明治 40 年日本エス協會支部發會式をやつて以來暫くその活動をつづけてゐたが次第に中絕の狀態となり大正 6, 7 年頃一時再擧の氣運も見えたが故あつて中止してゐた。

大正 8 年 9 月に J. E. A. の會員名簿(協會發行の最後の名簿)が出た。これによつて內野仙治，中原修司(カニヤ書店主人)が相計られ，京都市內の會員へ葉書を出して集會するやう案內された。この葉書をみて喜んで聖護院の某喫茶店へ行つたのは 11 月頃の寒い夜であつ

た。その時內野，中原と小生の外にアト二人位集つたと思はれる。內野氏は其夏東京で小坂狷二氏（同鄉關係）に講習を受けて來られた許り，中原氏は大阪の高尾亮雄氏から（ローマ字關係の知合）宣傳された許りで何れも新進氣鋭の鬪士であつた。ソコデ相談が出來自分は三高內で一つエス會をつくつてみやうといふ事になつた。

これより先，三高生の修學旅行で四國の松山へ行つた時出發から植田高三君をとらへてエスペラントの功德を說いて遂に歸る迄にスツカリ同君を味方に引き入れた。そこで植田君と相計り，文科の宇津木睦夫君がエスペラント賛成者だといふので三人の名で同志糾合の揭示を出すことにした。隱れた同志を先に呼び出すにはエス文で揭示をかいたがいいといふので大正8年12月6日次の如き意味のエス語の揭示を發表した。

『國際語エスペラントの硏究と實用とを計る爲吾人は三高エスペラント會をつくりエス語及エス主義の爲に種々なる宣傳運動を行はんとす，熱心なる同志或は初學者と雖もよろしく來り加はられたし，下名等へ御申出あるべし，一部三年丁組宇津木，二部二年植田，三部二年八木』

一週間張出しておいたが何の反響もなかつたので愈々エス語を知つてゐる同志は外にないとし吾々だけの手で始めやうと決心し12月15日に發會式をあげた。會員は植田，宇津木，吉町及八木の四名だつたと思ふ。次で自分は第一回の講習會を催した。使用の材料は Ekzercaro を炭酸紙でタイプしたものだつた。しかし第一日に二三人しか集らなかつたので獨習して下さいといつてその敎材を渡してわかれてしまつた。其時分植田君と同級の岡本好次，自分と同級の永松之幹の兩氏が我々の陣營に加はられた。後年昭和5年（1927）福岡で開かれた第15回日本エス大會の際岡本，永松，植田，八木の四人が相會し當時を追憶したのは今に忘れ得ぬ所である。

猶この年には，年末おしつまつてから色々な事があつた。卽ち12月21日にロシアの詩人 Eroŝenko が大阪で音樂會を開きあと高尾氏につれられて京都の一燈園見學の爲やつて來た。この時，始めて外國人とエス語で會話をやつたのであるが意外に自由容易なのに吾ながら驚いた。獨學で勉强したエス語がしかも僅か二夕夏の智識が長い間英米人について苦心した英語の會話より遙かに樂に氣持がよいことに强く感動したのである。揭示により來會した十數名の三高生を前にして自分は Eroŝenko 君の演說を通譯した。これがエス語を外人と實際に試みた最初であつた。

そこで三高エス會の組織も出來たし，一つ機關雜誌を出して外國雜誌と交換したいものだと思ひついた。といふのは當時臺灣のエス會から Verda Ombro といふコンニヤク版刷の小册子が發行されてゐて吾々にも寄贈を受けたのに刺戟されたのである。その冬休になつた時，會誌名を三高の校風『自由』をとつて Libero とすることと決め，且第一號の卷頭文の草案を練つた。これが翌大正9年の2月に漸く發行されたコンニヤク版の第一號である。今日これを讀み返してみると轉々微笑を禁じ得ない。

翌大正9年に三高エス會が急激に勃興し，京都エス會も又日本のエス運動も急に盛んとなり初めた年で Revuo Orienta が發刊された。三高へは5月にオーストラリヤ人 Hudson 及 Pocklington 來訪，高橋邦太郞氏の講演會，6月 Seriŝev 來訪等々があるがこれは8年以後の事になるから述べない。

以上は日記を繰返しての拔萃であるが，自分はエス語をやつて自分の考が世界的になつたこと。從つて國家及び國際關係の事に關心を强くもつやうになつたことを認めたい。エス語の爲に前途に光明を持つて生活することが出來ると信じてゐる。猶外國語學習に役立つたことなど

あるが是れはエスペラントより得た利益の一小部分である。精神的感化こそ最も大きな收獲であつたと思ふ。

小坂氏とエス譯君が代を歌ふ

林　　髞

余は青年時代にエスペラント語を習ひ始めた事がある。然しエスペラント語の彼方に，偉大な文學があるわけでなく，深い哲學があるわけでもないことを知るに及んで忽ちにして學習を擲つて了つた。これは然しエスペラント語の目的を誤解したからのことで，今の考へは亦別であるが，余は今，晩學に近くなつてロシヤ語を習得せんことを熱望してゐるのでその事を思ひ出すのである。その言語の彼方に何か寶がひそむに非ずんばこれを習得する勇氣を挫くものである。……(中略)

余はこの文の始めに曾て余がエスペラント語の學習を放擲した理由にその言語の背後に寶が潜んで居らぬと言ふた。エスペラント語の愛好者はそれは此の語の目的を理解せぬと言うて憤るに違ひない。余は然し餘りにエスペラントを好愛せるが故に捨てねばならなかつたのであることを附言したい。余は當時二三の外國語を習つて見てその勞力を他に讓つたならば，如何なる偉業も出來るほどの勞力ではないかと考へ，世界の民が多少ともに，その勞役を負ふてゐることを遺憾と考へてゐた。依つてエスペラント語の存在を知つた時に，心からの熱心を以て世界の言語の統一が出來ると夢想した。余は思ひ起すのである。朧氣ではあるが大學の制服のまま，神田の或家の二階，それは工學士小坂狷二氏の下宿であつたか，或ひは小坂氏がエスペラント語講習のために特に借り受けてゐた部屋であつたか，余は其處に突然訪れた。小坂氏は鐵道省であつたか何處かの制服の如きものを着て居られたが，頻りにタイプライターを打つて居られた。余の外に男女數名の講習希望者が座つてゐた。やがてタイプライターで印刷した敎材が配られ一日目に品詞全體の規則を習得し，二日目には既に簡單なる會話が出來，三日目には辭書さへあれば全く言語の共通しない人と意志を通じ合ふことが出來るに至つた。エスペラントの眞の意義が此處にある事を今の余は知つてゐる。が其當時は，この言語を甚しく愛してこれを以て日常會話にも執筆にも用ひることが出來るやうに夢想したために間もなくその反動として，エスペラント語を習得するよりも，羅典語に精通するの，より有意義であること，世界は言語にまれ，生活にまれ，統一し難きもので，其處に亦人生の意義あることなどを以て，余は右の講習會より退いて了つたのである。ポーランドの片田舍に生れ，その民の統一しがたきは，言語の統一なきによることを感じ，そして多くの天才の常としてこの意義を止揚して一國のみならず全世界に思ひ及ぼして遂にエスペラント語を創造したザメンホフの根本思想は，誤れるエスペランチストの如く，これを日常の會話に用ひ世界の言語を統一せんとするのでなくて全く言語の共通せざる，互ひに學習の及ばざる，國語の民をして，辭書一册を所有せば思想を容易に通じ得るだけの，而もそれだけで既に重い任務をその言語に負はせんとの思想であつたのである。エスペラントを宣傳するに於てこの意味を徹底せずして，從來の諸國語の言語學上の不備を責め，或ひはこの言語の合理的にして習得し易きことをのみ主眼として說くのは人生の不備にして，尙その不備なるがために吾等が科學文明の目的は，人生の不備なるを出來るだけ彼方に押しやつて，かくして贏ち得た餘暇を以て，文化を味ふ事に捧ぐべきである。希臘

羅馬の文化は味はしめよ。伯希來猶太の歴史を學ばしめよ。教養のために人生の半ばを捧げしめよ，而して勞苦の生涯を以て悠久なる人類文明史にささやかなる一顆を綴らんとこそ願へ。

余は其後小坂氏を見ない。しかのみならず余の方では白皙痩軀の小坂氏を記憶してゐるが，君の方で記憶せられてゐることは恐らくあるまい。然し余はエスペラント語について何かを思ふ時，必ず君を思ひ出すのである。神田の何處かに，その當時行はれたエスペラント宣傳大會で二三人の講習員と共にエスペラント語の「君が代」を歌つた。お世辭にも上手とは言ひ兼ねるが，熱心と愛とのこもつた君の甲高い聲を思ひだす。余等も亦君の下宿の二階で「君が代」を習はせられたものである。「さゞれいしの」と言ふところは「クレスキージョウース」といふのであつて此處が亦最も甲高いところであることを余は記憶してゐる。一緒に歌つてゐる講習會員等の聲の立たぬやうになり，且つ文句も忘れてゐたのであらう，オルガンに合せて君は唯一人其處を歌つた。そして會堂一杯の聲でカラカラと笑はれた君は日本エスペラントの恩人概して，青年にとつてのエスペラント語の師友である。余は君の記憶を辿る時，溢るゝ好感の湧くを覚える。新聞を手にすると，君の名がエスペラント語の會と共に余の眼に入る機會が少なからずある。君はまだ君の余暇を捧げてエスペラント語のために盡してゐるのであるが，そのひたむきなる愛し方が君の益々洗練せられたであらう人格を思はしめて，その度毎に油然たる暖かい感慨を覚えしめる。あゝ今一度君と共に歌ひたいものだ。クレスキージョースと聲を張りあげて見度いものだ。(「趣味の生理學」より抜萃)

臺灣エスペラント運動の回顧

連　　溫　卿

1913 年 (大正 2 年) 9 月 1 日——久振りに夕立の降つた晩であつた。

すでに初等敎育を了へた私は再び立ち直すことの出來ない家庭的事情のために，中等學校へ入ることが出來ないのみならず，職業に就かねばならなかつた。そして彼これ考へてゐる中に，あるクリスチャンの斡旋により二三の友人と臺北に在住する加奈陀長老敎會臺灣北部傳道局長 Gould 夫人につき英語を學ぶやうになつたが，無報酬の代償的條件であつたような工合で英文のバイブルをも兼ねて使はねばならなかつた。勿論私は未だ宗教を批判する力が缺けてゐたが何となく，嫌悪な感があつた。この嫌悪感は英語の難しさよりも反撥的である。が，間もなく双方の都合で繼續してゆくことが出來なかつた。

それから淡い將來の希望と結び附けていろいろ思案してゐる矢先に，臺灣日々新報紙上に "Esperanta Libreto" 無料送呈の記事を見てから，今まで記憶の隅つこにあつたエスペラント，世界語，學習容易などの印象が急に呼び起された。"Esperanta Libreto" とは兒玉四郎氏が蒟蒻版で印刷された小册子で，第一輯は 1913 年 8 月 20 日附になつてゐるし，最終號の第五輯は翌る年の 1 月 5 日附になつてゐる。これは臺灣に於けるエスペラント雜誌の濫觴である。これより一週間程前にエスペラント普及に關する同氏の寄稿が同じく臺日紙上に現はれてゐたからいま思出したのである。と同時に，私の好奇心がある程度まで掻き立てられた。

エスペラントの種は遂に撒かれた。この夕立後の涼しい 9 月 1 日の晩に，第一回講習會が艋舺龍山寺の一室に於て開かれたのである。18 日までは日本エスペラント協會刊 Zamenhof 博士の "Ekzercaro" の代りに蒟蒻版刷のテキストを使つてゐた。毎週の月，木二回 2 時間宛

だ。講師は兒玉四郎氏，講習會員は10數名，私が最年少者であつた。10數名の會員の中5名の臺灣人を除いたら，他は皆日本人であつた。

臺灣のエスペラント運動の創始者兒玉四郎氏が云ふやうに「臺灣のエスペラント運動を思ひ出す度毎にいつも頭に浮んで來るものは蘇璧輝氏である」如く實際に於て初期運動の發展はもとより兒玉氏の熱心によるものではあるが，さりながら蘇氏の積極的參加が與つて力がないとは云へないであらう。もし單にエスペラントを識ると云ふだけでも，恐らく臺灣に於ては蘇氏を以て嚆矢だと云へる。と云ふのは，兒玉氏の未渡臺五年前に，蘇氏はすでに長谷川二葉亭の「世界語讀本」によつて識つてゐたからである。講習會の開始は殆ど蘇氏の懇請から會場の世話參加者の勸誘などの成功によること大であつた。例へば，私と日本人以外のものは皆蘇氏に勸誘されたものであつて，集會日になると，一々蘇氏の勸めに勵まされて出席したことが決して一再でなかつたやうである。誠に兒玉氏にとつては良き協力者であつた。

この講習會は同年12月15日のザ博士誕生日に終りたるを以て，直ちに日本エスペラント協會臺灣支部創立總會を開き，支部を形成せしめた。本部黑板博士よりの祝電，橫須賀支部，廣島エスペランティスト よりの祝詞以外に，餘興として張福興氏（國語學校の音樂敎師）のバイオリン獨奏があつた。講習修了者は栗田確，加藤春城，橫山盈，蘇璧輝，蘇璧琮，王祖派，陳旺生，連溫卿諸氏であつた。支部會員として上述の氏名以外に今田祝藏，張福奐，王式泉，洪詩蘭，吳老，黃鐵，松原，林煥文諸氏もあつた。當夜の出席者は十五名，幹事に推薦されたものは陳旺生，橫山盈，加藤春城，栗田確，兒玉四郎，王祖派，蘇璧輝，分島薰諸氏の八名である。

兒玉氏は，この講習會以外に通信講義を出して，地方に分散してゐる研究者の熱心にも答へてゐた。が全島を通じてこの時すでに七十名以上に上り，彰化に黃呈聰氏，阿猴に劉鳳崗氏が中心であつた。就中前者は「國語學校出身の同窓者數名と會合し，斯語研究中なり」との盛況を報じてゐるほど，全く線を以て臺灣を包むやうな狀態であつた。このとき，兒玉氏よりも早くから渡臺して通信局の官吏になつた分島薰氏は兒玉氏が臺灣大衆に向つて大いに宣傳してゐるのと反對に通信局內に於て「同氏の主唱に依り數名の同志者と研究を開始された」ことも一つの記錄たるを失はないであらう。

かう云ふ風にして 1913 年の歷史は閉ぢられた。この發展的上向に適應する計畫として，定期初等講習會は次のやうに 1914 年（大正 3 年）の初頭から始められた。

龍山寺に於て 1 月 8 日より每週月，木二回午後 7 時から 9 時迄。

大稻埕澁谷稔氏宅（現在太平町增全齒科醫院階下）に於て 1 月6日より每週火金週回同。

兒玉氏自宅（今の苗圃前）に於て 1 月 7 日より每週水曜日一回同。

だがこの三つの講習會の結果は誰でも意外に思ふほど，慘めなものであつた。龍山寺の方に於ては黃鐵氏，大稻埕に於ては李金塗氏を除いたほか，何らの收穫がなかつた。續いて第三回目の講習會を龍山寺と大稻埕の三層樓(現市役所大稻埕詰所前の路上がその跡である)に於て開かれたが遂に何ら得るところなく中途で罷めねばならなかつた。その原因は後で觸れるであらうが第一個人的依存關係が擧げられると思ふ。大衆的募集から來る情熱な人が無かつたからである。けれども，それだから初期運動に於ける兒玉氏の演じられた役割が少いと云ふ評價にならないことは勿論である。ところが，兒玉氏と足並を揃へて實用的方面から臺灣人知識階級の間に宣傳を努めてゐた蘇氏はこの際遂にある重大問題に逢着した。それは官僚と臺灣人知識階級の社交機關たる大正協會例會の席上に於て後に九大の講師になつた臺灣總督府官房調查課囑託松岡正男氏が眞向からエスペラントはロシヤの虛無黨が使つたものであるから危險だと云つ

て蘇氏を攻撃したことである。これは最もよく當時の官僚が抱懷してゐるエスペラント觀の一端を表はしてゐると云つていゝ。同時に，實用主義からイデオロギー的にエスペラントを引入れる論爭の端緒である。いづれにせよエスペラントに對する認識を深めたことは事實だ。

やがて 1915 年（大正 4 年）が來る。1 月 14 日協會副會頭中村精男博士のために艋舺吳昌才氏の別墅で歡迎會を催したが，中村博士は臺灣支部主催以外の會合に出席せぬとのことを聲明なされたがため，この歡迎會は形式的に所謂官民合同の歡迎會になつてゐた。これは初期運動の華やかなりし時代を飾る花であつた。間もなく昨年から計畫されたところの「エスペラント獨習書として世界に類なく眞に善悉し，美悉せる」「組織的研究エスペラント講習書」が 3 月 15 日に出版されたが，すでに退潮になりかけた時期であつたがため，この出版は兒玉氏の犧牲的勞働の上にまた經濟的負擔を負はせること餘りにも大であつた。兒玉氏の歸京なされた 6 月以後はもはや，どん底の砂地を表した感があつた。この狀態は 1919 年の末頃まで續く。

さて私は講習會を終へてから，月日の立つに從つてだんだんエスペラントから遠ざかつて往く一方であつた。ところが，1916 年（大正 5 年）2 月 25 日に，不意に戰爭中のロシヤから通信したいとの奇麗な繪葉書を受取つたことがある。“Orienta Azio” の編輯者が，私に無斷で通信希望を同誌に掲載したがためであることが，後で判つたのである。これは外國から受取つた最初の手紙で非常に私の興味を唆つた。このことがあつてから私は，再び私から遠ざかつて往くエスペラントに追ひ附くべく自分も勉强し出したが殆ど初學に適する書物の少くないのに苦心した覺へが今でもハツキリと覺へてゐる。この時代に小坂氏の主宰したところの通信講義や “Orienta Stelo” は，私にとつて力になることが多かつた。いまも私が思ふ。もしこの繪葉書が來なかつたならば，恐く私は他の人々と同じやうにエスペラントを見放したのでなくエスペラントから見放されたものになつたかも知れないと。

それから考慮せねばならないことは，エスペラントが臺灣へ入つてきた時は極めて不利な社會的條件のあつたことである。恰度臺灣を日本から分離するこの種の所謂騷擾事件の最後たる西來庵事件が勃發した最中であつた。一方には日露戰後に於ける日本資本主義の發達に促されて漸く發達しかけたところの土著資本が急速に產業資本化しつゝある傾向を表はしたときであつた。この對抗資本に對する抑制として「會社の文字使用に對する禁止條例」を制定せねばならなかつた。これを政治的に最もよく象徵した政策は板垣退助伯の同化會に對する禁止である。臺灣人を日本人と同等に待遇せよとの要求が同化會の目的であつた。この主張すら入れられないときである。これを以てディスポチスモが如何に猖獗を極めてゐるかを想像することが出來ると思ふ。だから講習會の隣部屋に私服の居たことや兒玉氏が月一回位は警務課に出頭して臺灣人會員の動靜を申告せねばならないところの理由も，一にここから由來する。臺灣人は先づ第一に國語國文に通ずべきは勿論である。國語を解しないうちにエスペラント——に限らず一般外國語も——を學習するには事の輕重緩急を謬つてゐるものである」と蘇氏が述べられてゐるがこれは單なる意見ではなく，エスペラントを學習する一つの條件であつた。ザメンホフ博士のエスペラントを創作した動機を考へ合せてみると，實に擽つたい感じがする。けれども，この條件の有無に拘らず，當時エスペラントを學習し，或は學習しやうとするものは殆ど新敎育を受けた臺灣人の知識階級のみであつた。日本人は極少數しかなく大部分は官吏であつた。

初期運動に於けるエスペラントの實用主義宣傳は資本の抑制があるにも拘らず，對抗資本の形成による交通機具の要求の下に於て，一般に受入られ漠然ながら關心を持つやうになる。

臺灣人の知識階級に於てはディスポチスモに對する鬪爭からでなく，嫌惡から，逃避的から

エスペラントの內在思想に淡い憧憬を繫いでゐるのみであつた。しかも組織を缺いてゐた。從つて，初期の運動に對して發展の力を與へることが出來なかつたのは當然である。

一方の日本人に於ては例へ少數であつても，彼らは臺灣人よりもより有利なる社會的，經濟的條件を有しながら，初期の運動に對して何らの貢獻をなし得なかつたのは，彼らが官吏だからである。分島薰氏の取つてきた態度は憐はれや，官吏の悲哀を示すものとみてよからう。それ故に彼らは講習會を修了すればもはや，ザメンホフ博士の云ふ samideano でもなかつたやうである。しかしながら，彼らは決してエスペラントの內在思想を理解し得ない人種ではなく，寧ろ臺灣人よりも情熱的なところがあつた。故臺灣總督府編修官であつた栗田確氏の次の歌が充分これを證明するに足る。

一つなる 世界の上の 人の族
　族の語をいひ 人の語いはど
「とこしへの 平和殿立てり」「伯牙にか」
「否とよここに エス語を見ずや」

また宮島愼三郎氏（後に一條と改姓）や張福興氏が二三の音樂會に「エスペーロ」や「タギーヂョ」を演奏したが，大衆の關心にアピールする意圖の下に於いでなく，單に新奇と言葉の美しいところを紹介する程度に止どまつたのも，やむを得ないお時勢であらう。

そこでエスペラント語の味を體驗した私は同じくさう云ふ體驗を持つ蘇氏の相談に應じて黃鐵氏と共に日本エスペラント學會の成立後に臺灣支部を臺灣エスペラント學會 (Formosa Esperantista Societo) と改稱し，再組織に努めることになつた。そのとき私は一つの民族に一つの團體と云ふ意味から Societo の代りに Asocio を使つてゐたが，小坂狷二氏から asocio は一國的の意味を有するので一地方たる臺灣には適しないとの意味合の注意を受けたことがあつたと憶へてゐる。後になつて F. E. S.（臺灣エスペラント學會）は最初から全島的に組織を持つものでなく，その前提としての硏究團體である以上やはり societo を使ふ方が名實とも伴ふとの結論に到達したことがまた思出される。その第一着手として蒟蒻版刷の "Verda Ombro" を出したのは 1919 年（大正 8 年）11 月であつた。兒玉氏の撒いたエスペラント運動の種は，ここに始めて芽を出さんとする。從つて，その發展と開花は 1919 年以後のことである。

これで私の臺灣エスペラント運動の初期に對する回顧は大體終るが，唯只，ここに觸れておきたいことは，エスペラント運動は，1921 年に始めて發生した文化運動に先驅したこと 8 年，蘇氏の勸めと私の考慮によつて，エスペラント運動で經驗されてきた組織を持込んだことである。のみならず，文化運動の主體たる臺灣文化協會の發會式でなした蔣渭水氏の有名な開會辭の「私は臺灣人に生れたことを神樣に感謝します」との一句は，あの當時東京旅行中でエロシエンコ，小坂狷二，高尾，熊谷諸氏に逢つた私と一面識もない「人類の家」主稻垣藤兵衞氏から寄せられた私信によつてヒントを得たものであつた。（1936 年 4 月）

琉球のエスペラント運動回顧

比　嘉　春　潮

私とエスペラント　大正 4 年（1915）の夏であつた。當時廣島高師の學生だつた友人仲原善忠君が休暇で沖繩に歸つてゐて，或日私を訪ねて來た。いろいろの話の末，仲原君は携へて

來たエスペラントの本を見せて，同君が旣に研究を始めてゐること，廣島では研究が可なりに盛んなことなどを話し，讀みたいならと自分が讀むために持つて來たその本を滯在中貸して吳れた。

私がエスペラントの名を聞いたのは，これが初めてではなかつた。明治40年（1907）の頃，英語を習ひに行つてゐるアモアといふ英人の先生の宅で或日一雜誌にエスペラントの記事を發見した。アモア先生に尋ねると，それが人造の國際語である，併し實際の役には立たないものだとの答だつた。萬國共通とは誠に調法なものだとは思つたが，それ以上質問を進めもせず，只だ英語と違つて母音で終る語が多いといふ位の印象が殘つただけだつた。

仲原君が貸して吳れた本は綠星社發行のエスペラント講習書だつた。本文は後廻しにして，先づ序文や附錄の科外講演を讀んだ。第一に深く感激したのは創始者ザメンホフ博士の人類愛に基く高い理想であつた。次いで興味を惹いたのは，この美しい言語が如何にも學び易く，而かも歐米諸國では否な日本でも旣に實用されてゐるといふ事實であつた。旣に基督敎徒であり世界平和を理想とし且つ語學に興味を持つてゐた私は直ぐにエスペランティストにならうと決意した。

私は早速，本を發行所に注文し，その到着を待つて9月から愈々學習を始めた。其頃私は那覇から三里餘の玉城といふ田舍の小學校に勤めてゐて暇は十分にあつた。每日時間を決めて研究した。併し分かり易い樣でもなかなか覺えられないので，カードをつくつて暗記したりした。又疑問の點は仲原君の紹介で廣島の高橋邦太郎氏に敎へて頂いた。高橋氏は私の最初の先生である。私の初步的な質問に面倒を煩はず懇切に手紙で答へて下さつたばかりでなく私の差上げる手紙を丁寧に訂正して返して下さつた。

臺灣に同志を訪ふ　斯くて研究は續けたが，中々進境を見なかつた。が翌5年（1916）の4月に機會が私に幸を與へた。丁度臺北に博覽會が開かれるのを機會に，沖繩から敎員の視察團が組織され約一ケ月に亘つて臺灣各地を視察することになつた講習書によつて臺北に蘇璧輝氏の居るのを知つてゐた私は，同氏に逢ふ爲めに丈けでも臺灣に行きたいと考へた。私は喜んで視察團に加つた。

臺北に着いた翌日私は地圖を便りに獨り艋舺街の龍山寺に日本エスペラント協會臺灣支部を訪ねた。講習書にさう場所を書いてあつたからである。艋舺街に入ると日本語は通じない，やつと龍山寺は搜し當てたが生憎蘇氏はゐなかつた。來合はせた一老人に「世界語者蘇璧輝先生」と書いて示すと老人は點頭いて一少年を呼んで何か言付けた。すると其少年は私を振返り振返りずんずんと進んで行く，早足に蹤いて行くと間もなく着いたのは蘇璧輝氏の住宅だつた。

蘇璧輝氏は喜んで私を迎へ，色々とエスペラントの事を話し，又所藏の書籍や世界各地からの手紙や雜誌等を示し，辭し去る時に謄寫刷のイソツプ物語を吳れた。私は初めてエスペランティストに逢ひ又エスペラントの實用を視又如何に學習すべきかを知つた。

同志をつくる　蘇璧輝氏と逢つてから沖繩に歸るまでに，私の計畫したことは何よりも先きに一緒に研究する同志をつくることであつた。

私は歸つて間もなく同校の敎員照屋輝一君を同志にすることが出來た。それからは每日二人で時間を決めて研究した。共同研究だから進みも早かつた。續いて縣立圖書館長の伊波普猷氏にもお勸めしたら，直ぐに快諾を得た。伊波氏は言語學の專攻者であり，豫ねてからエスペラントに興味を持つてゐられたが，一二ケ月もすると私達の疑問に明快な解答を與へ得る人となつた。

私は又蘇璧輝氏の勸めに從ひ，臺灣旅行から歸ると直ぐに日本エスペラント協會の會員となり，伊波照屋兩氏も間もなく引き續き入會した。

沖繩の知識階級とエスペラント 沖繩は帝國の一縣でありながら，特殊の狀態にあつた。先づ言語が日本語の一方言と云ふよりも寧ろ琉球語なる一國語と見られる位の違ひがあり，地理的關係上日本本土とは最近幾世紀に亘つて交通が殆んど無かつた爲め風俗慣習も言語同樣特異の點があり，且つ政治上に於ては明治以前は日本支那兩屬の一小國たる形態を持つてゐたので明治の中頃に至るまで，恰も植民地といふ感じがあつた。從つて吾々沖繩縣民特に知識階級の青年は一種の民族的苦腦を懷いて居た。これ等青年が其の思想上の指導者として仰いでゐたのは卽ち伊波氏であつた。伊波氏は言語學上から又歷史の研究から沖繩民族の文化的使命を闡明し，これ等青年に自信と光明を與へたのであつた。此の頃目覺めかけた之等青年は，至る所に讀書會をつくり，文學宗敎哲學を研究する風が盛んであつた。そしてそれが何れも圖書館と一脈の連絡を持つてゐた。今伊波氏がエスペランティストになつたといふことは，それだけでエスペラントが沖繩青年の關心事となるに十分であつた。

最初の運動 其年卽ち大正 5 年 (1916) の 12 月に，沖繩朝日新聞に 1 週間に亘り「國際語エスペラントの話」が連載された。內容は講習書中の「エスペラントの輪廓」の燒直ほしに大石，蘇氏の體驗談に私達の僅かばかりの經驗を書き加へたものだつたが，大いに一般の注意をひくことが出來た。

丁度此頃私は玉城から圖書館のある那覇市の小學校に轉じ，照屋君も亦師範學校の附屬小學校に轉じ，二人は那覇に住む樣になつたので，伊波氏と三人は每日でも相會する機會を得た。これが運動に好條件となつた。私は大正 6 年 (1917) の 1 月から首里と那覇に小さい講習會を開いた。會員は主として小學敎員で何れも十名內外であつた。2 月に入つて伊波氏が圖書館員に二三外部からの希望者を加へて長期の講習會を開いた。

讀書家で絕えず圖書館に出入してゐた那覇測候所長筒井百平氏，沖臺製糖會社工場長鈴木百平氏も間もなくエスペランティストとなり，續いて沖繩每日新報主筆で伊波氏の令弟たる伊波月城氏も加はり急に運動は活氣づいて來た。

研究者も相當に出來たので，私の家を會場にして綠星倶樂部なるものを組織し每週一回研究會を開いた。(綠星倶樂部は一年ばかりの後會場を圖書館に移し，其後大正 10 年頃まで續いた。) 又 Nia Rondeto なる謄寫版刷の機關誌も發行した。これは高橋氏や協會から得た質疑應答や Krestomatio 中の Anekdotoj などから材料を採つて初步者の爲めの註解を加へたものを記事としたが二三號で廢刊した。研究會も皆が初步者ばかりだから譯解練習をするに過ぎなかつたが其都度日刊の三新聞に報導されるので宣傳的効果は著しく，僅か數ケ月の間に講習書を求めたもの 50 名を突破した程だつた。

縣外同志との接觸 夏の初めに大石和三郎氏が公用で來縣され，筒井測候所長の案內で私達の集會へも來られ，會員からの色々な質問に答へられた。沖繩のエスペランチスト達は此時初めて正しいエスペラントを聞いた譯であつた。

6 月に私は學事視察の爲め九州中國から關東地方に約二ケ月間の旅行をすることになつた。此旅行中各地のエスペランティストを訪問する機會を得た。廣島では高橋，中目の兩氏，大阪では大阪支部の各位に堺の阪上氏，鹿兒島では重松氏にお目にかかつた。東京では10日位の滯在中每晚小坂氏をお訪ねして特別に發音や文法を敎へて頂いた。

丁度東京支部の例會がカフェー松下で開かれたが，私の歡迎會といふ事になつて中村博士を

はじめ日本エスペラント界の明星が一堂に會すともいふべき會となつた。私ははじめてエスペラントの演說を聽いたのだが,私自身に關することだつたせいか未熟の私にも大體判かつた。

其後の運動　この冬には圖書館で講習會を開いた。伊波氏と私が講師になつた。宣傳が利いて 90 餘名の會員を得た。中學生と小學校敎員が大多數を占めてゐた。

翌 7 年 (1918) の 3 月には協會の機關誌日本エスペラントで琉球號を出した。材料だけは私達の方で纒めたが記事の殆んど全部が協會（多分小坂氏）の手になるものであつた。

夏にも又圖書館で講習會を開いた。五十名以上の會員を得たが，前回のが餘り良い成果を齎らさなかつたので，今回は會員に「全程」と「エス和辭典」を買つて貰ひ，全程を初めから讀むことにした。一週間の會期が終つて後，約半數 20 餘名の會員の希望によつて，更に一週間繼續した。

運動不振　翌 8 年 (1919) に入りて吾等の運動は別に進展を見なかつた。講習を受けたもの，本や辭書を買つたものは百を超したが，學習を續けたものは十指を屈するにも足りなかつた。大正 6 年以來每週一回の研究會は相變らず繼續してゐるが，集まるものは 5，6 名に過ぎない有樣だつた。

不振の原因は單なる好奇心ではじめた者が多かつたせいもあるが，第一に私達指導者たるべき者の學力が停頓してしまつて，新しい人や後進の者を刺激し指導する力が足りなかつた爲めであつたが又一方露西亞革命を契機として，起つた世界思想界の變動は沖繩にも影響して青年の間に社會思想的興味が興りつつあつた。私達エスペラントをやつてゐる連中も亦此方面に興味を向けはじめたので，幾分エスペラントに對する熱が下向しつつあつた。

雜　エスペラントを學んで樂だと思つたのは母音が五つしかない事であつた。英語などで吾々に取つて新しい音に逢著する時子音は何とかこなせるが,母音は迚も出來さうもなかつた。エス語の母音が日本語のそれと同じにしても通じるといふのが一番の有り難いことであつた。それに日本語になくて琉球語にある子音がエスペラントにあるのも私達には嬉しいことだつた。

エスペラントを習つた爲めに別に不快な事は起こらなかつた。只だ 8 年頃から警察の方で少々猜疑の眼で見られたことはあつた。

外國人との通信は最初少々やつて見たが，繪葉書交換や一通りの挨拶以上には出なかつた。

其頃學習をはじめた人で，現在までエスペランティストとして殘つてゐるのは至つて少ない。圖書館の許田君は其の一人である。照屋君は大正 12 年に死んだ。伊波氏は止めた譯ではないが此頃あまりエス語を使はれない。

沖繩のエスペラント運動は上述の如く大正 6-7 年に急に燃え上がつて忽ちに消えてしまつた。るまで藁火のやうに。

思　ひ　出

藤　澤　親　雄

私がまだ帝大の學生であつた時分に初めてエスペラントがどんなものであるかと云ふことを知つた。大正7年4月の或日神田橋の邊を散步してゐたら和强樂堂でエスペラントの宣傳演說會が開かれてゐたので何氣なく這入つて聽いてみた。恰度小坂さんがエスペランチスモのことを例の熱烈な口調で話されてゐた。初めの內は興味本位で聽いてゐたが論旨が如何にも眞摯なの

で段々と強く惹きつけられて終にはすつかり感激して仕舞ひ，人道主義的立場から是非ともエス語を修得せねばならぬと決心した。そこで其晩早速獨修書を買求め幾度も繰返して熱心に勉強した。其の結果大體の要領が呑みこめたので少し大膽であつたが誰彼の區別をせずエス語で會話を試みてみた。處が案外よく分るので益々勢を得次には拙劣な作文なんかをつくつて小坂さんに直してもらつた。其の當時スキス人でディックと云ふ非常に練達なエスペランチストが來てゐたので彼にもぶつかつて大いに會話の稽古をやつた。これが契機となつてどんどんと上達した。そんなわけで，暑休暇を利用して浦鹽にエス語武者修行に出かけロシアの同志と親交を深めて來た。其後壽府の國際聯盟に赴任することとなつたのでエス語が益々實地に役立つた。殊に中歐からバルカン半島に旅行した際なぞは UEA の代表者の並ならぬ配慮と友情とによつて非常に大きな便宜を享けた。然し何れにせよ私がエスペラントを學んだ主たる動機は實用的なものではなくザーメンホーフ博士の崇高なる人類愛の理想に深く共鳴したからであつた。今でも同じ心の態度を失つてゐない。分裂し抗爭する各國民の間に道義的秩序を持來すことを民族的使命としてゐる日本の立場から。各國民を國際語によつて融和せしめんとするエスペランチスモは我々の心の琴線に深く觸れるのである。

札幌でエス語を學び始めた

三田智大

私が札幌の東北帝大農科大學（後に北海道帝大）豫科で勉學してゐた時，大正 2 年頃，長谷川二葉亭著「世界語」（明治 39 年發行）を古本屋で買つた。薄い簡單な此の本では，私はエス語を十分に了解することは出來なかつたが，大綱を知り得てもつと詳しく學習したいと思つた。然しどうして學ぶべきかの 手段方法が皆目わからないから 其のままになつてゐた。

大正 8 年 1 月靜岡の中學時代の舊友から來た年賀ハガキ。これは靜岡の老工學士高橋邦太郎先生が造つたエス語宣傳のエハガキであつた。私は早速其の友に研究方法を照會し，千布著「エスペラント全程」の存在を知つた。私は全程を讀んだ。編述が巧妙であるからよく判つた。一週間熟讀し耽讀した。

エス語を知り得た喜びを私だけが獨占すべきでない。私は嘗て北大農學部內の外國語研究會の創立者の一員であつたから，其の仲間の幹部たる友にエス語の共同研究をはかつた。友は研究集會の永續しがたい苦い經驗を理由として拒絕した。私は此年6月北大を卒業する，私が今種子を蒔かねばエス語の北大學苑內の芽生方は大いに遲れるのだ。私は別の友人の援助により 2 月上旬寄宿舍を會場として「北大エスペラント研究會」を創設した。集る者約 10 人。3 月末には試驗と休暇とがあり，中止の後の四月には集る者 4—5 名の少數であつた。その內集會をやめた。然し熱心な同志與村禎吉君を得たことは喜びの限りである。

4 月末高橋邦太郎先生は札幌の田舍の 水力發電所の工事の ために來られ約 1 ヶ月滯在された。圖らざる邂逅。御薰陶を受けて隨喜した。

高橋先生の「外國語を以て外國人に話すは，借着物を着て貸主の前に出るが如し」といふ日本語尊重の意見には私も與村君も全く共鳴してゐた。我々は愛國主義者なるが故にエス語を特に尊重したのだ。

卒業論文を英語やドイツ語で書くことに優越感を持つ朋友達の觀念に私は嫌悪を懷いた。私

の卒業論文「各種乳酸菌による乳酸石灰生成の實驗」は日本語で書いた。さうして摘要をエス語書き，支那時文書きの二様で附錄とした。エス語は高橋先生の校閲を受け，支那時文は支那留學生の校閲を受けたものではあるが，とにかく自分で造つたのである。此れが卒業論文中北大最初のエス語書きであるのは勿論であるが，日本全國中でも最初の部類に屬するだらうと思つて開拓の誇を感じた。

大正8年夏私が札幌を去つた後，興村君は永く北大に於てエス語普及に奮闘した。興村君は秀才であつたから立派なエス人となつた。大正 15 年北大畜産科を卒業し，初めからの目的通りブラジルに移住した。

私はエス語愛好の熱情は常に變らないが，興村君ほどの才能がないから，大正8年の時以上にエス人として大して發達しないのが遺憾である。ただエス語の普及には其の後札幌に函館に帶廣に大いに努力した。

世界醫學文獻はエス語で統一せよ

村　田　正　太

私がエスペラントについて知つたのは外國語學校獨逸語科に在學當時であつた。佛語科の友人が二葉亭の「世界語」を示して面白いからぜひやれとすすめてくれたが私は人工語なんていふものは人間の複雜な思想を表現することが不可能だと頭できめてしまつてゐたので見むきもしなかつた。それは明治 39 年のことである。その後私は第一高等學校へ入り東大の醫科に籍をおいた。私は外國語學校で3年もドイツ語を學んだ上更に高等學校で獨逸語をやつたのだから獨逸語については大學の同窓の誰にもまけぬといふ自信をもつてゐた。

併し當時大學の醫科ではすべての術語に獨逸語をつかつて講義をする。私はこのやりかたが非常に屈辱的なことだと考へた。私の古い日記にこんなことが書いてある。「國民としての自覺は必然的にその國語の尊重を要求する。從來の醫學は獨逸の醫學で日本の醫界は獨逸の屬國であつた。しかし吾人はいつまでもこの服從的地位に甘んずべきでない。日本には獨立したる日本の醫學がなくてはならない。日本の醫界を獨逸のそれと對等若くはそれ以上の地位に置くべく努力しなければならない。そしてこの獨立を嚴然として樹立するには少くとも從來の從屬的色彩の總てを除去するを要する。醫師醫學生が不必要に獨逸語を使用するが如きは先づ除かれねばならない從屬的色彩の主なる一つである」と。

私はこう考へてゐたので教授が獨逸語まじりで講義をするのをにがにがしく思つた。そして之をどうしても日本語にあらためしめなければならぬと考へた。

それで私は大正6年大學の卒業試驗に書く病牀日誌を日本語で書いて出した。處が內科の入澤教授が憤慨されて之を却下された。もつとも外科の近藤教授は私の日本語でかいた病牀日誌を異議なく受附けてくれた。

大正7年醫學用語問題を論じ，英獨佛の如き外國語を以つて業績を發表するは國語の權威を蹂躙し國家の體面を傷けるものだと解剖の大澤教授と雜誌上で論爭した當時私の意見としては總べて日本人の業績は日本語で發表すべきもので日本語以外の國語で發表するのは獨立國たる日本帝國の體面を傷け日本國語の權威を蹂躙するもので極力反對しなければならないと云ふのにあつた。この私の意見に對して多數の先輩は反對せられ親しい友人間にも不賛成の聲をき

いた。「理想論でその意氣は壯だ。併し悲しいことは勃興しつつある日本の醫學はまだ充分に世界の認むる所となつて居ない。今日の急務は多少國語の權威に抵觸し獨立國の體面に關することはあつても先づ日本醫學を世界に紹介し我國醫學の優秀なることを世界の識者に認めしめることにある」。之が總ての反對論者の期せずして一致した私に對する非難であつた。之に對して「國語の權威獨立國の體面は醫學を世界的に紹介する爲めの犧牲にするのには餘りに尊い。世界的承認が假令數ヶ年遲くれることがあつてもこれは過渡期の已むを得ざるものとして忍ばねばならない。これ位の犧牲は尊外思想を排斥する意氣のもたらす收穫を以つて優に補ふことが出來る」。私はこう論駁した。併し反對論者の說にもあながち無理ならぬ點もありこの問題の適切なる解決に少からず頭を惱ました。

大正 5-6 年頃神田の夜店で私は日本エス協會臺灣支部で編纂した「エスペラント講習書」を買つて來て一寸のぞいみたが大した興味も起らなかつたのでそのまま本棚の隅に差込んで置いた。或日のことこの赤い表紙が私の注意を惹いた。エスペラントは國際補助語と自ら名乘つて居る如く一國民と何等の關係なく國際的には全然中立的である。「これだ!」私はほほゑんだ。この語には國籍がない或一國の國語でない。英獨佛の語とは根本に於て性質がちがふ。エスペラントで業績を發表すれば從來の英佛獨に對する屈辱的の態度から免かれることが出來る。併しこの悦びには「この語は果して醫語として完全のものであらうか。この語で醫學に關する記載が充分に出來るであらうか」この疑問と不安が續いた。私は 10 年來熱心にエス語を研究すると聞いた未知の高橋邦太郎工學士に書を寄せてこの問題に對する意見を乞ふた。折返し「エス語は人間の頭腦中に浮ぶ思想はその何たるを問はず何國語よりも精確に綿密に奇麗にそして容易に言ひ表はす事を得るものに候」との返書を得たが兎角信者はその宗教を無二の如く稱へるのが世の常で私はエス語に對して未だ充分の信用を置くことが出來なかつた。大正 8 年 1 月高橋氏が東京へ來られ鐵道協會で初めてお目にかかることが出來た。その時色々エス語のお話を承りまたワルソーから出て居た Kuracisto といふ雜誌を二三册貸して戴いた。

それから 2-3 日して日比谷停留場傍の長樂軒でエス語の集會があるから是非出ては如何との手紙を受取この會では總てエス語で談話をし外國人も來ると云ふのにツイ興味を唆られて出席した。幹事の淺井文學士が盛に喋舌られる。氏は 7 年とか繼續せられたと云ふので之には不思議はない。流暢に滔々と外人と論談して居られた。藤澤法學士に何時からとたづねると一年半前からですと言はれた。然しこれは大して私を驚かさない。一番私を力強く動かしたのは農科の松葉學士(現農學部教授)が四ヶ月目で卓上演說をやり皆とエス語で自由に談笑して居られた事である。成程エスペラントはやさしいとその時私は思つた。私は 1 月の 16 日，皆から推奬せられた「エスペラント全程」を手に入れるためわざわざ澁谷の黑板博士邸へお伺ひした。それは月のさへた晚であつた。私はその夜の 9 時から讀み始めた。私は晝間は本職の研究で讀む暇はない。研究所から歸り夕食をすませば 6 時過ぎになる。私はこの夜の少ない時間で一氣に全程を終へ續いて前にのべた臺灣で出た講習書もよんでしまつた。26 日の晚 —— はじめてから 11 日目，この間に 3 晚よまない時があるから正味 7 日目——Kuracisto に載つて居る Pri la skorbuto kaj ĝia esenco (壞血病及びその本質に就て) 6 頁に亘る論文を約 3 時間位ですつかり讀んで完全に了解する事が出來た。私はこの論文を讀みえた時，限りない愉快を感ずると共にエスペラント學習の容易なることの確實なる實證を得た。その後の讀書によつて醫語としてエスペラントは充分なる資格を有することを確信するに至つた。これと同時に醫學用語問題は造作なく解決が出來た。日本語が未だ世界の學術語として認められない過渡時代に於ける今日，

日本の醫學を世界に紹介するには全然中立的で然かも精確，平易にして優美なこのエスペラントによればいい。これなれば國語の權威は蹂躙せられずに濟む國家の體面は傷けられずに濟む。しかも期待する目的卽ち日本醫學の世界的紹介はこれによつて遺憾なく達することが出來る。我が同胞醫學者が外國人にまでも示す必要があると思ふ論文は爾今必ずエスペラント語で發表せられんことを望む。

學者が語學の爲めに貴重なる時間を空費するほど愚なることはない。現在でも佛の學者が英獨の語を修得するは容易でない。獨の學者は英佛の語を必要上修めなければならない。政治的勃興は國民的自覺を喚起し國民的自覺はその國語の尊重を敎へる。戰後の日本伊太利は今までのやうにいつまでも屈辱的地位に甘んじては居ない。過渡時代の現象として國語の醫學上の地位を世界的に認めしめる手段として自國語をおいてエスペラントの如き中立語を以て業績を發表することもあらう。併し一度，自己の地位の認められるやうになれば最早や英米佛獨と對等の見識を以てこれ等の國の學者が世界に發表する業績でも自國語を以てする如く日本，伊太利の學者も自分に最も都合のいい自國語を以てのみ業績を發表するに至る。これは自明の理でかかる狀態の近い將來に現はれて來ることは疑を容れる餘地がない。こうなれば英米佛獨の學者で充分に世界の知識を吸收するには少くも四ヶ國，支那その他の國の學者は自國語以外に少くとも五ヶ國の國語に通じなければならなくなる。この時には英佛獨あたりの學者も最早晏如としては居られない。世界文献の統一，この運動は必然として起つて來る。世界共通醫語の設定は避くべからざる世界各國醫學者の希望になる。多數の外國語修習の負擔から免れて自國語以外に唯だ一つの共通語を學べばそれで世界各國の業績を自由に漁り得る便利なる組織を要求する。そしてこの場合，共通醫學語となるものは英語か，佛語か，獨逸語か，日本語か。伊太利語か。いづれも皆な非。今日の如く國民的自負心の盛な時代に於ては，國民と結びつけられた語，卽ち或る一國の國語は決して國際醫學語として採用せられ得べきものでない。國際醫學語は國家と關係を有しない全然中立的のものでなければならない。羅典語はこの意味に於て國際語としてその資格を或る程度まで持つて居るのかも知れない。併し國際語は正確，明瞭である他に成るべく平易なることを要求する。この最後の條件の爲めに羅典語は國際共通語としては不適當である。これが爲めにはこれ等の條件の總てを備へるエスペラントをおいて他に適當の語がない。またこの語以外に他の候補語を物色する必要がない。私は日本の醫學者に對しエスペラントを用ひよと勸告すると共に日本の醫學が世界的の地位を獲得した曉には世界の學者に向つて世界共通醫語選定の必要を說き，エスペラントを最も適當なるものとして推奬せんことを望む。私は遠からずこの文献統一の必ず實現せらるることを確信しこの永遠の計の爲めにも盛にエスペラントでの業績發表によつてこの氣運を促進せんことを希望する。

以上は大正 8 年頃種々の醫學雜誌に執筆した記事を大部分その儘うつしとつたものであるが今もその當時も自分の考へに於て少しも變りはない。而してその時代から私は自分の研究を發表する原著はすべてエスペラントで發表し過渡時代の必要と日本人としての立場から邦語譯をそへることに決心し之を實行してゐる。

一つの追憶

西　成　甫

自分の歐洲留學は今から凡そ二タ昔前になる。當時まだ三十に滿たない希望に燃える好學の青年は明治 44 年 12 月上旬橫濱埠頭を解纜の宮崎丸に乘船して，海路恙なくあこがれの都ドイツ，ハイデルベルクに行李を解いたのが翌年 1 月下旬，そこで豫て聞き及ぶ斯界の泰斗，Fürbringer 先生のもとで比較解剖學を專攻することになつた。今でも或る程度までソウであるが，其の當時の日本の醫學は謂はば獨逸醫學の出店と云つてよからう。語學と云へばドイツ語一天張りで，理屈は兎に角自分が平和な南ドイツの大學町に何の不自由もなく愉快に研究を續ける事が出來たのは全くドイツ語の御蔭である。無論ドイツ國內ではドイツ語さへ出來れば萬事 OK で，國際語などに就ては考へて見たこともなかつたことは是非もない次第である。

下宿の婆さんか何かの折に，此の町にはエスペラントと云ふ人造語を使ふ不思議な人間が二人居て，外國から仲間が來るとわざわざ停車場まで出迎へて，宿屋の世話から土地の案內までもすると云ふお伽噺の樣なことを聞かされた時にも，實は何等の關心を持たなかつたのである。其の頃から歐洲の天地はそろそろ險惡となつて來たが，自由主義的な學生達の間には反つて平和運動が擡頭して，國際學生聯盟 Corda fratres なども屢々會を催し，自分も幾度か出席してなごやかな國際氣分を味ふことが出來たのである。併し席上の用語は凡てドイツ語で事足り，別にそれを不思議とも思はなかつたのは，今から思へば寧ろ不思議な位であつた。

1914 年（大正 3 年）の夏遂にかの運命的な世界大戰が勃發して，呑氣に構へて逃げ後れた自分は保護監禁の美名のもとに約 40 日を憂欝な牢獄に過した。其の間の退屈凌ぎに豫て希望して居た——今は殆んど忘れてしまつた——イタリヤ語の獨習をやつて見たりしたが，その時にも未だ國際語のことには思ひ及ばなかつたのである。解放されてスイスに來たのちも，多くはドイツ語の行はれるチューリツヒに滯在して居たためにさして不便もなくそこで約一ケ年を過した。やがて留學期も盡きて愈々1915 年7月歸朝の途に就くことになつたが，今更驚いたことは汽車が首府ベルンを出る時分から車掌も乘客もフランス語を使ふやうになり，ジュネーブで汽車を乘り換へて一歩フランス領に這入ると，ドイツ語の通用しないのは無論であるが，ウツカリ ja, nein でも口走つたが最後拳固の一つ位は覺悟しなければならない——そう云ふ實例は少くなかつた——有樣で，下手糞なフランス語の片言でドウやらコウやらマルセーユまではたどり着いたものの，再び宮崎丸——此の船は次の歐洲航路でドイツ潛航艇の犧牲になつた——の客となつて言語的に解放された時には實のところ胸をなで下した次第である。所で船の上では兎も角その寄航地では英語のほかドイツ語もフランス語も玆では通用しないのである。此の時上に述べたハイデルベルクの下宿の婆さんのいつた「不思議な人間」の話が一寸念頭に浮んだが，併し歸朝後直ぐに新設の東北帝大に赴任して，其の日其の日を忙しく送つて居たため國際語の事などはトント忘れてしまつて居た。其の內ドイツの旗色は段々惡くなつて，ドイツ語が世界の學界からボイコツトされる樣になつた時，驚いたのはドイツの學者ではなくして實は日本の醫學者であつた。中には密かにエビシーやアベセーを習ひ始めた教授や，ドイツ語のサブタイトルを英語に改めた雜誌などもあつた位である。自分が國際語の問題を初めて眞面目に考慮したのは此の時である。日本エスペラント學會の創立されたのも恐らく其の當時のことと思はれるが，田舍に居る者の呑氣サは一ツパシ先覺者の積りか何かで，早速丸善から，た

しか英語のエスペラント手ほどきを二三册取りよせて其の一頁を開いた時是れある哉と思はず案を叩いたかドウか，それは兎に角，あらゆる國際關係を超越して人類共同の所有物となるべき科學上の研究の如きは唯だ「此の」國際語を以て記錄さるべきであると堅く信じたのである。

そこで大正 11 年の春東大に轉任の後試にエスペラントで綴つた小論文——今讀むと誠に拙い文體であるが——を書いて見た。人は嗤つた。併し慶大の解剖學敎授岡島君の理解ある好意によつて其の主幹する Folia anatomica japonica の第一卷に，解剖學では恐らくは最初のエスペラント書きの論文が掲載されたのである。人は今も嗤はふ。併し自分は特別の事情に迫られない限り，研究の發表にはエスペラントを使ふ事を今も續けて居る。今日幾多の科學雜誌にエスペラントが採用される樣になつたのには，科學者エスペランチスト達の斷えざる努力もさる事ながら，岡島君のエスペラントに對する理解も亦與つて力ありと云はねばならぬ。

君は去る 4 月 9 日働き盛りの 55 歳を一期に急逝された。此の機會に君の冥福を祈つて筆を措く。

私にエスペラントをすすめた大杉榮

板　橋　　鴻

大正 12 年の大震災のドサクサまぎれに大杉榮氏は殺されてしまつた。そして今日では世人の記憶から漸く薄らぎつつある。懷へば遠い昔である。當時私が勤めて居た築地の聖ルカ病院へ大杉氏が入院したのはたしか大正九年の暮のことだつた。朝に夕に大島通ひの汽船のボーを聞きながら暮したあの時分は私もまだ若かつた。あの築地河岸に佇んで遙か雲の行方をウツトリとながめたこともあつた。時のたつのは速いものだ。あれから 16 年になる。頭も相當禿げてしまつたし，髭の白毛を氣にして拔き取る年頃となつてしまつて私の記憶も薄らいでしまつた。みたと云つても私のは診たのであつて，氏の爲人を精しく觀察したといふのではない。ミザントローパな私に氏のやうな友人がある筈はない。思想的の交渉などは絕對にない。只偶然に僅か數ケ月の間醫者と患者といふ關係にあつたまでのことである。

まづ最初に記憶に甦る大杉氏は快復期にベツトの上に胡坐をかいて，おそろしく吃りながら物を言ふ丸顏の眼のギヨロリとした，瘦せ衰へた髯ボーボーの男である。入院當初は回診に行くと少し白眼をみせて輕く眼をつむり，アパツイアな，蒼白な顏貌で，まるで死相を呈して居つた。當時の日記を繰つてみると，ウイダール氏反應は六百倍まで陽性，血液及び其他の培養に於てはチフス菌を發見し得ない。喀痰中に結核菌陽性とある。新聞記者には肺結核兼腸チフスと發表したのであるが，幸德秋水や大杉氏が，肺病であつたと云ふことは周知の事であつた爲に，チフスと云ふ事のみに注意が向けられ，世間では「大杉がチフスで死にそうだ」と宣傳されたのである。暮に入院して翌年の春退院したのであつたが，其後の經過を觀察してみると，肺結核のシユーブ（新しい病竈を作つて廣がつてゆくこと）とみるのが至當らしい。患者としての大杉氏はよく醫師や看護婦の言ふ事を聞く人であつた。看護婦達は異口同音に「恐ろしい思想を持つた人のやうにはチツトも見えないわね」と言ひ合つて居つた。

夫人の伊藤野枝氏は大きなお腹を抱へて看護して居つた。大杉氏が快復する，野枝氏がお產をするといふ順序であつた。病院の同じ食堂で同じ食事をしたこともあるが，野枝氏は色の淺黑い小柄なやさしい口のきき方をする女であつた。御夫婦の間は實に圓滿なものであつたらし

い。入院中は同志の者や其他の知人の見舞にくるものが仲々多數であつた。堺利彦氏などもよく來られたとか。しよつちう來て看護に當つてゐたのは村木源次郎氏であつた。

何時も刑事が二人病院の近所にブラブラして居つた。時には小使室に入り込んで居ることもあつた。そして折々醫者や看護婦をつかまへては大杉氏の樣子を尋ねる。村木源次郎氏はあれから數年後獄死したといふ記事をチラと新聞でみたことがあるが，實にまめまめしく看護婦のやうな仕事をしたり走りづかひをしたりしてゐた。これといふ收入の道もなかつたらしくどうも大杉氏の消化したものを吐き出してもらつて舐めて居つたらしい。そう言へば僕も舐めた。といふのは村木氏がどこからか「エスペラント全程」といふ本を買つて來てくれたからである。

私が大杉氏から直接聞いた話といへば唯エスペラントに關する事のみである。科學的研究といふ研究はみなエスペラントで發表されるやうな時代が今にも來るやうなことを言つて居た。それは大變だといふので私は試驗前の學生のやうな氣持で「エスペラント全程」を讀みふけつたものだつた。エスペラントといふものを全然知らなかつた私には當時彼等がどの程度迄エス語を實用に供して居つたかは知る由もないが見舞に來る同志の中でエス語のできる者達とはエス語で話しあつてゐたのではないかと想像してゐる。

大杉氏がどうして何時エス語をやつたかといふようなことはその當時聞いたやうな記憶があるが今はスツカリ忘れてしまつたのはのこりおしい氣がする。唯同氏が自分が日本で一番古いエスペランチストだとよく云ひ云ひした樣におぼえてゐる。

退院後の大杉氏とは私は全く沒交渉であつたが同氏から聞いたエスペラントは其後今日に至る迄私の身邊を去らないものとなつた。實に不思議な緣である。

綠星下に於ける二葉亭四迷

井　上　　一

長谷川二葉亭の名が明治文學史に輝く記念碑的存在であると同時に，亦この邦エスペラント運動の讃へらるべき先達のそれであるといふ事は，現在では旣に常識に屬してゐる。わたしは玆では後者における二葉亭の橫顏を skizi することによつて，些か《常識》のあとづけをしたいと思ふ。

*　　　　　*

日本エスペラント協會（JEA）の機關誌 "La Japana Esperantisto" 創刊號（1906, 8, 5 發兌）は次の如き記事を掲げて《エスペランティスト二葉亭》の debuto を報じてゐる。

エスペラント研究用書

協會にてエスペラント語研究用として取敢へず簡單なる手引樣のものを編輯中の處今回露國浦鹽エスペラント協會會員長谷川二葉亭氏は同樣のもの世界語（定價貳拾錢郵稅二錢）を東京神田表神保町彩雲閣より出版せられたるにつき，硏究者は之を用ふるを得べきを以て，本會は別に完備せる大字書其他を出版することに決し手引の出版は見合せたり，云々。

此處では二葉亭はその常に嫌惡せる《小說家》としてではなく，一個の esp-isto として，われわれの前に登場する。

この邦最初の獨習書（敎科書）「世界語」——このささやかな，しかし銳い武器が，二葉亭によつてエスペラント戰線の若き兵士たちの手に渡されたのは，實に明治 39 年 7 月 21 日（1906），

Zamenhof によつて此の世界に，時にあるひは奇蹟とも呼ばれやう《偉大》が齎されてから二十年目のことであつた。

彼が如何にして「イタリイ語のやうに音樂的で，フランス語のやうに明快で，ギリシヤ語のやうに完全な」(シャルル・リシエ) エスペラント と手を繋ぐに至つたか；われわれは明治 35 年まで遡らねばならぬ。

*　　　　　*

年譜によれば，明治 35 年は二葉亭をして東京外國語學校教授の椅子を抛擲し，外遊の途に上らしめてゐる。すなはち，暫くは教卓にかくれて《人物》の薫陶に專念しつつあつた彼ではあつたが，再び沸騰する東亜經營熱（實業熱）に堪えきれず，僚友，學生の勸告，嘆願をも振りすてて，德永商店顧問の名のもとに，勇躍任地 Ĥarbino に向つたのであつた。

彼の全生涯に纏綿する此の ŝtatisma fantomo は，惟へばそれは時代の生んだ elegio ではなかつたか。とはいへ彼の身には多年の宿志を現實に移し得た新生への旅立ちであつたに違ひない。彼がまづ目指す新天地の關門 Vladivostoko は曠漠たる大陸を背にして，彼の情熱に拍車をかけるべく待つてゐた；われわれは其處に彼の活躍振りを想ひ描くことができやう。

然るに，偶々同地の有力な實業家 Postnikov が，同地のエスペラント協會々頭であつたといふ平凡な條件が，おもひもよらぬ幸運をエスペラントに與へることとなつた，と謂ふのは：ここでエスペラントが日本のもつ最も優れた頭腦のひとつと關聯をもつに至つた，その運命的な出來事を指すのである。

ところで，英・獨語にも堪能な《ロシヤ語の二葉亭》が，かかる新語を何故學習し始めたか，否始めねばならなかつたか？

だが人はその理由を窺知すべく尠くとも困難ではないだらう。當時の彼にとつては固よりそれは國際補助語必要の痛感から發するものでは無く，彼の選んだ外交的手段——偏へに其の手段にしか過ぎなかつたことは慥かである。後年彼自らこの間の事情を匂はしても居り，友人もまた之を裏書きする言葉を遺してゐる。

なほ，わたしはさきに「學習し始めた」と云つたが，學習とはいふものの，彼が滯浦の十餘日間に Postnikov から教はつたのは，纔かに唯 alfabeto の讀み方にすぎなかつた事を附け加へて置かふ。

彼が勞作「世界語」によつて，Postnikov との舊約を果して，Majstro Zamenhof の期待にも副ひ得る爲めには爾來四春秋を待たなければならなかつた。

明治 35 年（1902）といへばエスペラントの種が地におろされて僅かに 15 年，稚芽が漸く成長のテムポを昂めはじめた時期に相當する。けれども未だその力は東海の島帝國にまで根を張り延ばすには足りなかつた。かの Bulonjo に開はれた第一回萬國エスペラント大會がシベリヤ鐵道開通の翌年——1905 年であつたことを思へば，假令それが偶然事であつたとはいへ，ここでも先驅者としての二葉亭を見出し得ないであらうか。

*　　　　　*

明治 39 年（1906 年）10 月の「女學世界」誌は二葉亭の談話筆記「エスペラントの話」を載せてゐる。此の esp-isto として唯一の《聲明書》——は，「世界語」例言（序文）と共に，この語に對する彼の卓れた理解を物語るものとして貴重である。

この談話筆記に於いて，彼はその體驗を織り込みながら，エスペラントが國際語として如何に適當な言語であるかを Volapük との比較において，巧みに，しかも可なり正鵠に解說しつ

くしてゐる；Zamenhof の所謂《内的精神》には些かも觸れてゐないけれども……。

彼はエスペラントがその構成の上からは《自然語》であるといふ事に「自然的で無理が少い」といふ表現を與へ,「……かれこれ思ひ合せればエスペラントは或一部の人の想像するやうなユートピヤではない，旣に世界の人から國際語として存在の價値あることを認められて現に應用されつつあるものだ」と斷定し,「發明後僅か二十年經つか經たぬ中に此通り弘まつたのは,一方から言へば人間の交通が益々頻繁になつて世界通用語の必要が切に感ぜられることを證據立てると同時に，一方に於てはエスペラントなるものが此の需要を滿足する恰好の言語であることを證據立てる」ものだと云ひ,「こんな容易しい言語が世の中に又と有らうと思へぬ。さう容易しくては複雜な思想は言顯せまいと思ふ人もあらうが，ところがそうでない。かの「世界語」の終りに載せた世界語旣刊書目を見ても分るが，旣にシエークスピヤのハムレツトもエスペラントの飜譯になつてゐる。デツケンスのクリスマス・キャロルも飜譯になつてゐる。ハイネ，ゲーテの詩も飜譯されてある。バイロンも，プーシキンも，トルストイもシエンキーウィチも飜譯されてある,私が曾て苅心と署名して「四日間」といふガルシンのスケッチを反譯して新小說に出したことがあるが，あんなものまでもう反譯されてある。是は皆美文だが，哲學書にしてもライブニツのモナドロギイが反譯になつてゐる位だから，凡そ今の人間の言語で言顯す事は，どんな事でもエスペラントで言はれぬといふことはない，……私はエスペラントの將來に就いては大のオプチミストだ」と自信を披瀝し，且つ躊躇するところなく云ひ放つ「必要は發明の母」であると。

*　　　　　　*

如上の言說は一見なんの變哲もない至極《あたりまへ》のことに見えるし，又事實それに相違ないのだが，今日なほ lingva fetiĉismo が尾骶骨のやうに根強く殘存してゐる社會の實情を顧みれば,當時にあつての彼の言語に對する斯る觀念がどのやうに高い意義を有つてゐたか,ハッキリと知ることができやう。

周知の如くエスペラントの歷史は，明治 39 年が日本エスペラント協會（NES 並に JEA）の結成，エス語學校の開設，第一回日本エスペラント大會……等々の花束に飾られた組織的普及時代とも稱すべき現段階の最初の日であることを語つて居り，この年に於けるエス語流行の燃烈さ，その暴風的躍進の姿は，此の一年間に斯語に關する 8 種の書籍が市場に現はれたといふ記錄がヨリ雄辯にヨリ端的に，這般の消息を傳へてゐると思ふ。

恰もかかる機運に際會して「世界語」が，いかに世の歡迎するところとなつたかは，旬日ならずして 3 版を賣り盡し，忽ち 7-8 版を重ねた事實,また翌 8 月 5 日には學究者の熱心な要望に應へて，姉妹篇「世界語讀本」を送り出してゐる事實を指摘すれば足りるであらう。但しこの書の享けた非常の歡迎を，啻に《時潮》の然らしむる處とのみ思惟するならば，それはまさに認識不足であり誤りである。

二葉亭が過去に步んだ言語における痛々しい苦楚の道程（身をもつて理解した言語の本質),その天才的語學力と語學敎授の豐富な經驗；それらの總和の上に組立てられた「世界語」が,草創期てふ時代的な運命を背負ひつつも,なほ往時の「標準的硏究書」（ホ　ニ）となつたらう事は寧ろ當然といはねばなるまい。

*　　　　　　*

近代日本文學の選ばれたる pioniro 二葉亭四迷によつて，この本邦エス史の黎明が聲高く謳ひあげられたといふことは，意味深くも敎訓的な示唆を投げかけ，新たな感慨を以てわれわ

れの胸を搖り動かさずには措かない。

——「世界語」上梓滿 30 年に當る昭和 11 年の春——

〔編者附記〕 古いエスペラント書はザメンホフの所で番號がついてゐた。Adresaro de la Esperantistoj, Serio XXIII, 1903 年刊の 47 頁に Novaj verkoj, kiuj eliris de Aprilo 1902 ĝis Aprilo 1903 としるして N-ro 152 から N-ro 190 までのエス書の表が出てゐるがその中に

155. Hesegavo (kaj Postnikov), Lernolibro de Esperanto por Japonoj (en preparado)

.....

とでゝゐる。これが二葉亭の「世界語」である。此の表の中の他の本は大抵 1903 年 4 月迄に出版されたものであるがこの本は未刊 (1906 年 6 月にやつと出た) ではあるが既に番號は 155 番として登錄されてゐたわけでこれは Postnikov がザメンホフに通知したのでザメンホフも日本人 (Japonoj となつてゐる) 用の書籍は宣傳上にもおもしろいと思つて大變よろこびそれで特に未刊ではあるが番號をつけたものと思ふ。日本ででたエス書で番號のついたのは恐らくこの本だけだろう。

私の經驗

能勢淡二

古い時代にエスペラントを學習したと云ふ事は如何にもそれに相違ないのですが，其後全く遠ざかつて忘れてしまひ，此頃又改めて初等講習でも受けようかと思つて居る私が，お歷々のエスペランチストの間に交つて乏しい經驗を話すと云ふのは，全く烏滸がましい話ですが，神戶の會の方からも態々電話でお勸めを受けましたので，御返事を差上げる事にしました。

私が明治 39 年 9 月岡山の高等學校に入つた頃，前年入學しながら原級に止まつた爲私等と同クラスになつた連中の中にTと云ふ男が居ました。まだ入學試驗を受けて居る時，試驗場の入口に固まつて，不安な思ひに開始のベルを待つて居た私等受驗生の前を，紋付の羽織を着て肩を怒らせ顎髯を貯へた壯漢が，握り太のステツキを持ち憧れの白線帽の汚れたのを阿彌陀に冠り，恰も我家の如き心易さで校庭の方へ濶步して行くのを，羨望と畏敬の眼で私等は見送つたのでしたが，是が其Tでした。Tはこんな男でしたが案外に優しい處があつて大層語學が好きで外國文學も讀んで居り，會話にも氣の利いた語を知つて居るといふ工合でしたが，私にエスペラントの話をしてくれたのは此男です。岡山の高等學校には私等より前にガントレツト氏が英語を敎へて居た事があつて，學生にエスペラントを鼓吹し，プリントを作つて有志に敎へられたのださうです。Tも其のプリントを持つて居ましたので私に呉れました。で私は其プリントや小さな獨習書——本の名は忘れましたが袖珍本で簡單なもの——で研究しましたが丁度同クラスのMも獨習を始めたので夏休に各歸省した時などはエスペラントで通信をしたものです。其內これでは物足りなくなつてプリントにある宛名をたよりに外國の同好者と繪葉書の通信をはじめましたが佛蘭西人が一人と英人が一人との葉書は今でも殘つて居ます。處が其時の獨逸語の敎師のシュミットと云ふのがエスペラント嫌ひで，エスペラントをやる時間がある位ならもつと獨逸語を勉强しろなど，攻擊もするし，又次第に獨逸語がむづかしくなつて來たので，いつとなしにエスペラントも中止して仕舞つたわけです。Mの外に有志もなく，Mも餘り熱心でなく，岡山の町にもエスペランチストの會合などなかつた樣でした。有つたとして

も極めて少數の同志だけだつたと見えて一向氣が付きませんでした。こういふ環境の下にあつて物好きに始めたエスペラントが永續するのは中々困難と思ひます。

右の樣な次第で私のエスペラント學習はエスペラントと云ふ川の流れに一寸浮いて直ぐ消えて仕舞つた小さな泡の樣なものです。ただ，今となつてはあれから續けて居たならばと誠に殘念に思ひます。もし私の貧弱な經驗が若いエスペランチストに何等かの參考になる事がありとすれば「始めた以上は中絕して悔を後日にのこさぬ樣に」といふ一事で有りませう。

ザメンゴフの人間性禮讃

鳴 海 要 吉

前置きに，私の今のエス語への立場とでも言つた樣なことを少し述べて見たいと思ひます。

エス語の存在の理由や，言語としての價値などがよく問題になるやうですが，私の今のエスペラント語への心持，或は立場とでも申すものは，あの創建者たるザメンゴフ氏への親しみとでもいふもの，其れだけであります。ザメンゴフ氏の（明治40年頃に讀んだ小傳記に依るのですが）あの發明に至つた徑路は，恰度吾々の心の一面をまざまざと見るやうな心持ちがするのです。どんな大事業でも結果から見れば，さう大して意味のあるものでは無いやうです。況して，言葉とか文字とかいふものは，利用や結果から見れば何とも名狀することの出來ないもののやうです。エスペラントが，後日どういふ事になるかなど考へて見ては，どんな人も迷はない譯に行かないでせう。今日，例へば日本の漢字節減とか，メートル法とかいふやうに，實際問題的に考へて見る時には，それがどういふ結果になるかと問題にして見る時には，どんな人間も日和見にならない譯に行かないと同樣に，エスペラント語もやはり，實際からは判斷が六づかしいと思ひますが，それの創建者のその人間と，其の意志だけは嚴として永久に葬られるものでは無い譯です。ザメンゴフ氏の場合で見ると，あの一刻な考へぶりといふやうなものは，尊いとか値打ちがあると言ふものではなく，つまり，吾々其のものだといふ氣がされるのです。一體，私は，藝術といふものに就いても，斯ういふ見解でばかりゐた爲めに，遂に，今日の如く，有名な作家といふやうなものにならずにゐる譯ですが，要するに私は，藝術といふものをも，此の通り一刻さといふ工合に見てゐる譯です。

以上を一括して申しますと，世間の人は，エス語を實用の點からばかり見るやうですが，私は，實用よりも，それの意志の方を問題にして居る……と斯ういふ譯であります。

扨て，「世界語」といふ言葉は，明治 31 年頃，つまり私が 16 歲頃に，要助といふ私の少兄に聞きました。此の少兄は私より 11 歲上でした。けれども，之はホンの一時の坐興的の話であつたので，別に問題にした譯ではありません。

私ば其頃から，假名文字に憧れて，その頃平假名の橫書きに 1，2 年，縱書きに又 1，2 年，總計 4，5 年も假名書きをやりました。その書いたものが，文庫に 2，3 杯も今に殘つてあります。

私があんまり物事を深く思念した關係と，生活の激動から，22-3 歲の頃殆ど絕望して了ひ，何とか之の更生を圖らうと，又復，言語方面に活路を求めてゐた頃に，二六新報かで，「堺枯川氏が入獄中に外國から來た手紙が，看守にも枯川氏にも解らないで手古摺つた。それは何とかいふ便利な世界語であつた……」といふやうな記事を見ました。その時私は，さういふもので，

私の精神的復活が得られはしないか？ と漠然と考へました。

23 歳（明治 38 年）の春，郷里の青森縣から上京して，島崎藤村先生の世話で田山花袋氏の内書生に住み込みましたが，その時分の絶望の心境から極度の神經衰弱に陷り，歸省して靜養の上，24 歳（明治 39 年）の春，青森縣師範の講習科に入講しました。其の時，やはり二六新報の下段にエスペラント語の講義の載つてるのを見，それから，青森市の書店を漁り求めて，長谷川辰之助（二葉亭）氏の著はした獨習書 2 册に依つて學びました。

25 歳（明治 40 年）の春講習を終へ，同縣の尻尾燈臺のある半島の佐井といふ漁邑に小學教員として赴任しました。確か其處で，日本エスペラント協會に普通會員として入會したと覺えてゐます。

私は其以前から我流の短歌を作つて居り，其の赴任した頃

伴れもなく天つ旅路にはふるれば佐井の磯曲に鴎の群飛ぶ

憂ふ哉旨は時代と相容れず杜翁を慕ふ友が秘めごと

などいふとてつもない自己流の歌を青森の新聞に載せてゐました。此の事が，所謂エスペラント受難に關係ありますから一寸玆に揭げた譯であります。——此の歌に依つて，大塚甲山といふ當時の熱烈な詩人から手紙を貰ひ，それが緣故で通信で同氏と交際しましたが，エス語をやつてることを私から通信したものだから，同氏は當人の理想の社會主義者と私を解したことが後で解りました。

同年の秋，佐井から，尻屋燈臺のある村の別字田代といふたつた 20 戸ばかりの山村に赴任，そこで歌を口語法に改め，又一方エスペラントを熱心に學び，夏休みには，田名部といふ町に出て，小さな商店を借りて或晩宣傳演說をやりました。26 歳の時です。

其の歲の冬に，學力補充講習を受けて青森市に行つた場合に，協會の機關誌で見た，懸賞エス文和譯の當選者山田鋤助といふ人を訪問しました。その人は，肺病で殆ど危篤の狀態に陷つて居り，其處に御老母と令弟とが枕頭に居りました。其の令弟は今の青森市の東奧日報社長山田金次郎氏です。斯ういふ奇遇もエス語に依つてあつたといふことも一つの思ひ出であります。

此の年でしたかに，在京中の秋田雨雀君（同君とは竹馬の友であり，島崎先生に僕が同君を紹介したり，又，島崎先生の所へ僕を同道して吳れたり，私とはいろいろ深い緣故がある）の所へ，久しぶりに通信し，エス語獨習のことを知らせてやると，同君から，贊成の意を洩らし自分（同君）もやらうかと思つてるとの返事がありました。之で思ふと，同君はまだ其頃はエス語はやつてゐなかつたやうです。

私が，協會機關紙に，千布利雄氏のお世話で，世界のエス語同志と通信交換したいといふ小廣告を出して貰つたのも其の年でしたらう。

27 歳（明治 42 年）の春，北海道增毛に轉任し，此處で，各國からのエス語短信を盛んに受取りました。獨逸の何とかいふドクトルから日本着物一揃ひの値段照會などもありました。又，同機關紙に見える工學士高橋邦太郎氏に通信をして見たところ，やつぱり，私や秋田君と同鄉黑石町出身の先輩であり，其の上，私の長兄慶太郎と年少時代の親友であつたことが解りました。

28 歳（明治 43 年）の春，增毛より數十里北の苫前郡の原野，古丹別に轉任になり，そこでも，短歌とエス語をやつてゐましたが，翌年，長男が生れ，それが百日咳に罹り重態となつた爲めに留萠町の病院に妻とも一緒に滯在してゐた時に，同町の署の刑事に尾行されたことが同

宿の役場員から聞知しました。其の愛兒が間もなく死に，其の骨を携へて，古丹別に歸つで來ると，警官に屢々見舞はれ，エス語の書類を幾度も點檢されました。

29 歲（明治 44 年）の 4 月に突如期間付休職の辭令を受け，永久に小學敎員から緣を絕つことになりました。然し，其の事情は，大塚甲山君が，東京で警視廳に召喚された時に，私を稱揚のつもりで,「エライ社會思想家だ」といふ意味を仄めかしたことに依るのだといふことが略ぼ明らかになりました。

私は，その翌年（大正元年）の 12 月に上京しましたが，それ迄に，エスペラントへの態度は大體劈頭に述べたやうな風に變つて行き，短歌に關連せしめての實際運動としては，ローマ字運動の方が適切だといふやうになり，其の方に力を注ぐことになりました。上京してから，ローマ字雜誌編輯や，ローマ字で，藝文を興すことに盡力しました。エスペラントは，元より反對ではないが，上述のやうな立場に於いての共鳴者といふやうになつた次第であります。先づ此の邊で。（昭和 11 年 5 月 21 日）

ヴォラピュークよりエスペラントまで

八十六翁　田　鎖　綱　紀

エスペラントに就いて何か書けとの嚴令もだし難く，辻褄のあはぬ老の繰事をのべることとした。

偖老生南校を中途にてぬけだしたのは明治 5 年の春英國から新進の化學博士デヴキース氏が我政府の招聘に應じて來朝の日，予が恩師礦山學大博士ホツチタクタア・ガドフレー師の命により客船オレゴーニヤンにて橫濱に到着せるを出迎の爲め橫濱に至り，デヴキース師を歡迎して其頃橫濱隨一の旅館グランド・ホテルに案內して同館唯一の客室に滯留することにした。

晝飯を共にせん爲休憩して居るとデ博士が印度在留の友人より贈られた黑の小猫がデ博士の膝の上に安心顏に休息して居る處へホテルの黑白の斑點ある小猫が來りニヤーン，ニヤンと親しげにニヤンゴトかを語り合ふ如く見えた。するとデ博士の曰く,「流石は日本は東洋の英國と云はるる如く猫まで英語を解する」と當座の諧謔一番,予も亦之に應酬して「イヤ然るに非らず貴國の猫まで主人について日本へ來られたので日本語を學んで來たものならん」とお互に諧謔の交換を試みたが,予はこの時猫より人間の方が餘程不便に出來て居る,英人には英語佛人には佛語獨露亦然りで，そこでどこへ往つてもお互に通ずる言語が出來ねば交際上極めて不便である。博言學といふものさへある世の中に萬國共通の言語が出來ねばならぬ筈であると考へた。予がヴオラピユークやエスペラントに志したのは蓋し此の動機からである。

明治 18-9 年であつた。獨逸に 48 ケ國語に精通したシユライエルといふ博言學者が各國語中から一聲語を選拔して根語となし，其語尾に 2 個の文字を附記して名詞動詞その他の語を代表することとなし，例へば pen といふ英語に od の 2 字を加へて penod とすれば書物となり ol の 2 字を加へて penol とすれば書くといふ動詞になるが如き組織にして其の頃世界唯一の簡便な言葉との事で舊知の和蘭の博士ヘーデン氏に質問して其一班を學んで居た。急にヘーデン博士が歸國してしまつたし又ヴオラピークは仲間の間で意見の衝突がおこつて隆盛を見ずして半途中絕の悲境に陷つてしまつた。それで遺憾ながら予も亦研究を中止した。

處が其後明治 21-2 年頃南校時代の學友であつた長谷川芳之助（雅名二葉亭四迷）氏が浦鹽

に在留して新世界語たるエスペラントを研究中なることを新聞紙によつて傳聞したので早速照會してその書籍かパンフレットを送つて貰ふこととした。

其後一小パンフレットを友としてエスペラントの獨習を繼續して居たけれども，どうも發音の正確と讀方の調子には如何とも仕方がない。讀んで聞かせる人も聽いて貰ふ人もないけれども又も辛抱して獨習を怠らずにゐた。ところが明治 41 年の夏期に重症に侵され，伊豆の修善寺溫泉に靜養し乍ら獨習をつづけ，先づ漸く曲りなりにエス語を書くことと，讀むことが些しく出來る樣になつた或日のこと溫泉に籠城中の兵站部に缺乏を來し沼津迄出掛けて副食物を求める爲，駿豆電車に便乘して三島まで來る途中，どの驛からか乘り込んだ洋裝の立派な外人夫婦があつた，よくよくみるとロシヤ人の風采が見えたので不遠慮に英語で話しかけロシヤ人なら近くのポーランドでできたエス語を試みる機會があらうと思ひ「私は貴國の領土内のポーランドのワルソーのザメンホフと云ふ人が發明したエスペラントを習つてゐるが私の不完全なエス語をきいて下さいませんか」といふた處，先方は「エスペラントのことは新聞や雜誌で傳聞しては居たが私はまだ之に手をつけませんからエス語のお話は解し得ません」との答に大いに戸迷ひした。そこで「それでは露國公使館か橫濱かにエス語を解する御親友がありますならば何卒御紹介を願ひたい」とのべたら，「一人もしらぬ」との事に私は大いに失望した。發明の本家本元の露國人で解する人が皆無だとの一端をきいて三度失望した。イヤ我々は輕率にも輕信したのは大いに不覺であつた。シテ見ると我々が信ずる程有益なものではあるまい。是迄輕信して研究したのは實に徒勞であつたと考へた。そのため予は其後一と先エス語の研究を怠るに至つたがまだ斷念はしなかつた。ここで遭つた外人はペトロコーフといふ人で後に公使になつたとかきいた。

それから數年の後大正 4 年に京都に御大典が行はるるに際し鄕里の知事大津鱗平氏の懇篤なる斡旋によりこの無位無官の寒生が御大典を拜觀するの榮を得た。殊に大隈侯の秘書官たる山崎直藏君は態々予が辨天町の舊居を訪問せられ，大典の特別列車に便乘し得る特等の切符と，若干の旅費まで惠まれた。

幸ひにも其期日に至り大禮使の列車に乘ると座席もゆたかに，多くの紳士が一杯だ。予が老軀をねぎらはるると共に予に座席を與へられた。早速名刺を諸君にさし出すと，予の右は坪井九馬三博士で左は中村精男博士，向ひは同鄕の田中館博士，その右は山脇博士御夫妻，其他は皆帝大の博士達ばかり，イヤハヤ寒生の此方は大いに面くらつた。

汽車が進行をはじめてから，予輩も安座するを得たのでフト左方の中村博士の膝の上を見ると「ノバセンタ……」と云ふエス語の書籍に目がついた。そこで予は博士にお尋ねした，「貴下はエスペラントを御研究ですか……又東京にエス語研究のお集りでもありますか……」とお尋ねした處「東京の牛込の物理學校の中に我々有志の者が多く集つて 1 週 1, 2 回宛互に研究して居ります，若し東京へお歸りになつたら是非御來會下さい」との事，予は實に大旱の雲霓的に大いにうれしかつた，予は大いに感謝し必ず出席することを約して京都に向つた。御大典を拜觀後若干の日時滯留して歸京した。それから間もなく年末に近づいたので雜事に追はれ竟に此年は中村精男博士のエス語會へ心ならずも出席することが出來なかつた。

が翌大正 5 年の 2 月の紀元節に始めて物理學校のエス語會に出席することを得た。出席した處，定めし少くも四五十人の來會者はあるものと豫想して居たところイヤハヤ漸く 6 名！……實にだだつぴろい敎場も寂々寥々たるものであつた。そこで予は先づ此協會會頭の奮勵を促したかつたので直ちに中村博士に相談した。處が此會の會頭たりし林董伯は先年物故せられ

たまま，今は副會頭たる中村博士が萬事萬端一人できりもりして居らるるので運動の餘裕もないとの事であつたから，然らば新舊會員 2000 名に近き人々に更に出席を督勵することは中村博士の責任とし新會員募集は予が及ばず乍ら奔走せんことを約した。その後は大いに予の友人間を奔走して次回の出席漸くは 20 餘名となり，會場は物理學校の外青山の中川ドクトル醫院の2階を借用し講師には京都の山鹿氏に一任し，一方本郷弓町に在住する舊門生清水方に會場を設置し淺井氏に講師を托することとした。

然るに時期未だ到來せぬのか，青山も本郷の會場も亦漸く 6，7 人の來會者あるのみにして無會費なるにも拘らず，會員は一向增加せぬ。是は何でも財力豐富なる貴族院連中か有閑財閥の諸君子を勸誘するに如ずと氣付いたので早速予は單獨其勸誘に着手することにした。

そこでその方面を驅け巡つたが，どこでも其事たるやよし，併し寸暇がないので出席は……應分の寄附ならば……と云はるる方々が多かつた。けれども予は武士は食はねど高楊枝と義捐金のことは一言も口に出さかつた。

*　　　*　　　*

まだまだ書くことが多々ますます多い。例へば神田における大會，横濱における速水氏のエス語の大會，花月園に於ける園遊大會など又マニラ總督のヴゥシュ將軍の來朝など書きつづけるとまだ 10 枚や 20 枚の原稿紙では書きつくせぬ。大會における高楠，黑板，藤岡，三宅諸博士の高話やエロシエンコやユンケル敎授等の高話などいふ面白い話題もあれど迚もとても一寸書きつくせぬ。又花月園における後藤敬三君や秋田雨雀君や予の卽興の笑話など一々書ききれぬ。今以て文通をお互に斷たぬのは後藤，速水の兩君ばかりだ。いづれ又折があつたら過去の思ひ出ばなしを申述べる時もあらう。今回は餘りに長くなるからこの位で。

數々の思ひ出

山鹿泰治

ザ博士のお蔭で僕等の樣な學問にめぐまれない者でも或る程度まで智識階級に追從して行く事が出來るのは全くエス語を學んだ賜であつた。明治末期の靑年の間に今日程眞面目さがバカにされなかつた時代があつて，その頃僕は窮屈な官立中學校と嚴酷な家庭から脫出して始めて自由に好きなものの讀める出版屋（有樂社）へ雇はれて，世界共通のエスペラントの存在を知つて朧氣ながらやがて此の言葉が自他に幸福を齎すであらうと直感した。これは明治40(1907)年 2 月頃のことである。間もなく黑板博士指導の下に有樂社でひらかれたエス語講習に參加した。

爾來荷車を輓きつつ，又使ひ走りの電車の中でいつもエクゼルツァーロと辭書を離さず，質疑は貯めて置いて，黑板博士，千布利雄，安孫子貞次郎の三氏に出逢ひがしらにイキナリ尋ねる事にしてゐた。

今日の樣に食傷する程初學書の揃つてゐる時代とちがつて一つ疑問にぶつかると却々解決出來なかつた。エハガキ交換を始めると日本人は珍しいので來るは，來るは1ヶ月に 100 枚以上も來て月に1圓のお小遣を貰つてゐた僕はエハガキは誰かに貰ふにしても切手代が足りなくて困つた。1 年程の間に約 1000 枚程も美しいエハガキが手に入つた。その中から1人のポルトガルの同志がマニラから遊びに來た。これを新橋驛頭に出迎へる段になつてハッタと當惑した。

エクゼルツァーロにはどこを見ても初對面の挨拶なんか出てゐない。先輩に相談してみたら，何でも向ふの言ふ通り言つてゐればいいだらうとの事だつた。

緑星目當てにすぐ互に見付かつたが先方は嘗て聞いた事のない早口でまくし立てるので却々太刀打は出來ない，でも銀座の柳の間を尾張町まで來た頃大分耳馴れて來て段々ハッキリわかる樣になつて嬉しかつた。これが明治 42 年 (1909) の夏の事。

其後4半世紀を經過した今日昔の僕の樣なエスペランチストは山の中へでも行かなくては見られまい。やつとどうにか手紙は書ける樣になつたが，本が讀めないので苦しんだ。これは歐洲語の素養が丸で無い爲めいくら讀んでも意屈するばかりで少しもわからない。所謂尺讀といふ樣な教壇的な教授を受けられなかつたし，今日の樣な親切な對譯の講義の記事もなかつた爲めであつた。フラーゾは解るがパラグラーフォになつてゐるともうピンと來ない。それで僕の能力は 10 年もの間エクゼルツァーロ程度で足踏みをしてゐた。

明治 43 年 (1910) に始めて日記を書いた。その前にもその後も日記はかいてゐない。この唯一の日記帳が手許に殘つてゐる。

その日記をみると 2 月 16 日に明治 41 年 2 月以來洋行中だつた黒板博士が歸朝早々有樂社へ來られたことが次の如く書いてある。

「黒岩涙香の「破天荒」を耽讀してゐる處へ「御免」と呼ぶ聲に玄關に出て見ると……黒板博士だ。3 年越し待つた先生のめでたい歸朝を心から迎へた。竹四郎さんと話して歸られた。」

又 3 月 10 日に黒板博士の歸朝歡迎會が學士會であつたこと。その日相談の結果黒板さんと高楠さんが矢面にたつて千布さんと安孫子さんが幹事になり猶理事數名を選び毎月第 1 と第 3 木曜日を例會とし其夜は全部エス語のみを用ひるといふ事を決議したことが出てゐる。これは黒板博士洋行中の變態から博士の歸朝を機として常態に復せしめ相當の變革を行ふことになつたのである。4 月 7 日の會合の時僕が協會の書記を仰せつかつたと書いてある。

その時分僕は fanatika kristano で救世軍の兵士として銀座小隊に屬し夜毎に銀座街頭の野戰で亡び行く靈魂の漁りに忙しかつた。小隊長にエス語學習をすすめたこともその頃のこと。

6 月 15 日の項に大英博覽會に際し有樂社から安孫子氏が洋行することになつたので同氏の送別會が開かれたことがでてゐる。會頭林伯爵も出席された。

その年 (1910) 暮におしつまつて協會が有樂社を引上げて一本立すべく內幸町に一軒の家を借りることになつた。そして僕も同年末限り有樂社をやめて協會の事務所に移つた。僕は二階に入り階下は日比谷圖書館員の篠田君が老母と入られて留守居をしてもらふことになつた。しかし僕は協會の財政の貧弱なことはしつてゐるから翌 44 年 1 月から築地活版に入ることになつた。

これらのことは右の日記帳の年末の部分に出てゐる。多少の參考資料となると思ふから之に關係のある部分を次に拔萃してをく。

〔12 月 6 日〕 千布さんが，函根へ黒板さん等と雲助會の駕旅行に行つた歸りだと言つて立寄られた。來年から協會は有樂社から獨立して此の邊で 10 圓位の家を借りたい由。僕は來年から築地活版の歐文部へ入るつもりを話すと丁度 Japana Esperantisto も其所で刷る事になる筈だから好都合だと喜ばれた。

〔12 月 16 日〕 黒板さんから電話。昨日僕が見付けて知らせた內幸町の 12 圓の 2 階家を借りる事にした由。2, 3 日內に入る樣にしてくれとの事。

〔12 月 25 日〕 すぐ來いとの黒板さんの電話で行くと千布さんも來て協會の財產を車で持つ

て來たところだ。簿記机一つ。書棚及外國雜誌皆で二階の六疊と三疊へ運ぶ。下は玄關二疊次の間四疊と臺所あり。火鉢は向ひの有樂社の中村さん所から借りて來た。看板を入口に打ち付けて終り。

〔12 月 28 日〕 黑板さんの賴んだ日比谷圖書館員の篠田君と老母とが下に住む事になつた。僕は二階に居候。

〔12 月 31 日〕 有樂社の新年號の各雜誌の荷造り發送。新橋迄三回重い荷車で運んで最後の事務を濟せてから有樂社は今日限りとして內幸町の協會へ僕の財產一と包を背負つて勇んで去る。

明治 44 年の夏に家事の都合で京都へ歸つた。そして京都でも一つエス運動に活を入れたらと思つて協會の會員名簿から調べた 100 人あまりの京都及近郊在住の人々にハガキを出したがキレイに 1 通の返事も來なかつたのにはあきれてしまつた。それでこちらから出かけてゆくに限ると木島嘉一郎氏（木島櫻谷畫伯の兄）を訪問した所「エスペラントは變な思想の持主がやるのでいや氣がさしたのでやめてしまつた」といふ返事でとりあつてくれないのでとうとうものにならなかつた。

明治 45 年頃から僕は滿洲の方から支那の方へいつてしまつたので日本のエス運動とは遠ざかつてしまつた。

大正 3 年頃上海から上京して東京に居た。

ザメンホフ博士の訃報をきいた大正 6 年には鄉里京都に居た。それで同地の新聞にザメンホフの事を話したのが新聞に出た。竹內藤吉君が尋ねて來たのもこの新聞記事が役だつたらしい。

翌大正 7 年（1918）には日本語書きのエスペラントの鍵の樣な小册子を印刷發行した。

同年の暮かに東京の小坂氏から紹介のあつた京都帝大醫學部へ來た內野仙治君や竹內君等と相談の上京都のエスペラント運動の再興を計畫し京大敎授島文次郎博士を會長に依囑し大體の手筈がととのつたが 8 年 2 月自分の身邊におこつた突發事件のため計畫は一時頓挫してしまつた。（併し 8 年暮頃から三高生や內野氏等によつて京都エス運動の再興が間もなくなしとげられたことは後で知つたことであるが愉快である。）

その後 3年間は日本政府の食客となつて暇が出來たので始めてフンダメンタ・クレストマティーオを數回通讀してやつと文章に少し馴れた。

そこで 1927 年（昭和 2 年）秋，上海より飛電あり。國立勞働大學世界語敎師とし聘す，と言つて來たのでジャパン・アドヴァタイザーの歐文工の實入りのよい職場をすてて之に赴いた。先般「皇軍」のためみごとにブチ毀されたあの上海郊外の江灣驛前の大きな校舍がそれだ，易培基が校長で沈仲九が副校長，全支から集つた男女青年 500 人の學生。世界語は必習課目で農工每天三少時といふ規則だつた。月謝は勿論一文もとらず，廣い膳堂で和氣靄々として革命指導者の卵達が滿喫する光景。熱心な聽講ぶりには寧ろ自分の資格足らざるを愧ぢた。何しろ南は雲南北は滿洲の奧からはせ集つた人々の群で丸で發音が違ふので其の矯正に骨が折れた，L と N とが無差別な人や K と C とあべこべなのやがあつて，日本人が L と R と混同する位のなまやさしいものではない。追々文法の說明に入ると盛んに黑板に漢文で早く書く必要が起り悲鳴を上げた。レクタ・メトードも試みたがその方が效果があつた。彼等が最も要求するのは譯よりも耳に聽く正しい發音であつた。

翌年，以前日本に來てゐた同志祝振綱が同大學の校醫になつたので彼に依囑して日本の運動に復歸した。

此の前 1914 年（大正3年）には支那の先鋒たる師復が廣東を追はれてマカオへ更に上海へ機械と活字を携へて逃れ，男女十數名で「ラ・ヴォーチョ・デ・ポポーロ」を出してゐた時，僕は大連發電所で働いてゐたが，東京からの通知でこれに馳せ加はり，エス欄の組版を加勢した事があつた。その次，1922 年（大正 11 年）には O 君のために旅券を獲得すべく北京へ潜行して暫く北京大學第二院の學生に混つて島から逐はれたエロセンコのロシア文學講義を聴いた。光彩陸離たる演壇にメクラがコール天服を着て每週2回エス語で 2 時間もブツ通しに講演をやる。それを巧みに通譯するのが有名な周作人だ。あの光景は又と見られない印象的な圖であつた。

もう僕も流浪の生活に終をつげて何か白鳥の歌を貽したいと思つて柄でもないが「マルユーナ・マイストロ」と題して老子に手をつけてゐる。

〔編者附記〕 山鹿氏の上記日記中エス語に關係ある部分の抜萃と之に對する多少の説明が「エスペラント」誌 1935 年 8, 9 月號に發表されてゐる。

僕の思出

何が僕をエスペランチストにしたか

磯崎巖

僕にエスペラントに關する思出を書けと要求して下さつた編輯者に感謝する。自分の辿つた道を振り返えり考える事は自分自身にとつて一番必要な事だつた。僕は今の與えられた機會を最も有意義にする爲に，單に過去の偶然の日附の羅列でなく，何が僕を必然にエスペランチストにしたのか，その抜き差しならぬ因縁の必然性を突き止めて見たいのだ。僕は深く穿鑿して見たいのだ。しかし今どこまで之れに成功するか覺束ない。却つて讀む人をうんざりさせるに終るかも知れない。しかし，この方向えの努力の意義を諒として，不完全な試みを豫め宥るして貰いたい。

(1)

「自分は大きくなつたら何になるんだらう？」之は自分乍ら解らない眞劍な大きな問題であつた。

「坊やは大きくなつたら何になるの？」問には「陸軍大將だい！」と答えれば大人は皆んな滿足して喜ぶのが定跡だつた。其の當時の日露戰爭のほとぼりが未ださめきつていなかつた。「ニツポン　カツタ，ニツポンカツタ」とか「黑いシヤツポに金筋入れて」とか戰爭臭い歌ばかり歌はされていた。だが其際「僕も大きくなつたら兵隊さんになる」等と定跡通りを繰返えす事は子供乍ら最早や面はゆい感じがするようになつた。自分の頭で考え，自分の力で主張しなければならぬ氣がして來た。僕は幼少の頃から幸福な環境で，父母は慈愛深く僕達の自由を尊重した。僕は色々と頭を働せて見た。結局「百姓にならう」と答えるのだつた。大人達はあてが外れて「なあんだい，肥取さんになるのかい，臭いな」などと嫌がらせを言つた。こうして次第に何だか世間の大人達の希望する所と僕自身の成りたいものとの間には喰違ひがある事が解つて來た。やがて大人達は「お前は理窟が達者だから辯護士になるといい」と言う。「なあに，僕は乞食の大將になるんだ。」とか「僕は仙人になつてやらう。」等と主張する。「仙人？　それじや，あの瀬崎のおつつあんの様になるのかい？」「ちがうよ！」「だつて，あの瀬崎のおつつあ

んはあれで仲々學問があつて偉いんだよ」と人々は言うのであつた。

その瀬崎のおつつあんとは其頃よく僕の家え書畫骨董などを持つて來ては愉快に談論していた瀬崎達太郎と言う變り者の事だ。襤褸の被布に汚れ切つた鳥打で飄然と來 飄然と去つた。彼は獨身者で町外れの陋屋に住み，風呂に入らずに川で垢を落すのだそうだ。其の彼が或日，僕の父や叔父達とストーブを圍んでしきりに氣焔を上げていた。懷から小さな本を大袈裟に取り出して,「えへん，世界語じや！エスペラント語じや，わしは必ずこいつを物にする。」等と言ひ乍ら，此の語の功德を一席辯じ立ててゐた。叔父は「英語ではポストが世界語ではポシュトなんだな」と言ひ乍ら傍の事務用黑板に横文字を書いて見たりしてゐた。これが僕の小學4年生頃の事，大正2年前後だつたかと思ふ。

（2）

「世界語」とゆう言葉が僕には不思議な魅力を持つて響いた。元來，僕は「世界」なる物が好きだつた。何故好きなのか知らなかつたが，最近家財を片附けた郷里の老父が「これは大切にしておけ」とガラクタの中から拾い上げて呉れたのは古い小さい地球儀だつた。「これはお前が小さい時から持つて遊んだおもちやだ」と。成程，言はれて見ると，僕は幼時からこんな物を愛するように敎育されて來たのだつた。家業が輸出商品の製造だつた關係もあろう。外國の書類等で見る自由の女神や，科學や技藝の神々を幼心にも大いに愛した。小さい時から世界地圖を擴げて見入つたり，靑空に浮ぶ白雲を世界の地圖だと言つて眺め暮らした。それに僕の子供の頃から世界の地圖の上に注目すべき變化が續々と起つた。韓國が無くなり，淸國が中華民國に變り，伊土戰爭やバルカン戰爭が續き，やがて歐洲大戰が起こつた。支那の大革命の際，僕等の都市からも續々と留學生達が歸國して行つた。祖國の革命に馳せ加わつたのだろうと，勇ましく頼もしく思つた。伊土戰爭やバルカン戰爭では旗色の惡い方の國民の肩を持ち，力瘤を入れ乍ら新聞の海外電報を讀み耽るようになつた。圖書館え行つて「世界列國の大勢」とゆう本を借覽しようとして館員に怒鳴られた，「これは子供の讀む本じやない！」と。こうして何か彼か讀んでいる内に「どうも其の内に世界戰爭が始まりそうだな」とゆう氣配が感ぜられて來た。そんな話を學校の友達と話していたら，その翌年歐洲戰爭が本當に勃發した。僕は豫感の適中にいささか得意だつた。

血の氣の多い少年の心に歐洲戰亂が與えた衝撃は非常に大きかつた。それはどうせ言葉に盡せないから，ここに述べる事を控える。要するに國際問題えの關心が高まつた。而もありのままの現象を只管詳しくとゆう方向ではなく，世間の通り相場を一應吟味して一皮めくつて見なければ承知がならなかつた。そして戰爭の慘虐を越えて理想的な世界を追及するようになつた。

僕がエスペラントを學び始めたのは中學2年生の時，即 1916 年頃だつたと思うが始めて實際に使用して見たのは丁度ヴェルサイユの平和會議の直前であつた。エスペラントを噛じつた計りの生兵法に，少年の茶氣も手傳つて，平和會議の各國全權えエスペラント繪葉書を出した。文面は「平和を祝す。世界の民衆の幸福の爲奮勵されむことを希望す」位の內容だつたと記憶する。その時ザメンホフえも葉書を出した。彼はもう死んでいた事を僕は知らなかつたのだ。之等僕が始めて出したエスペラントの葉書に，たつた一通ではあつたが確實に返事が來た。それは當時のイタリー全權オルランド首相からであつた。彼自身の寫眞入の質素な繪葉書に自署して，なほ數行何か書いてあつた。そいつが僕には實は讀めなかつた。一體エスペラント文なのかイタリー文字なのか。ともかく解らないまま，僕にとつては大いにエスペラントをやる激勵になつた。

(3)

「人工」とゆう事も亦たまらない程魅惑的である。物を作るとゆう事が少年の心にとつて如何に歡喜であり，又感激であることか。僕も亦少年時代を通じて終始この「物を作りたい」衝動の沸騰にほとほと惱まされ乍らも喜び樂しんだのであつた。飛彈の工の樣な家を自分で建てたいと思つたり，本式の石垣を築き城を作りたいと思つて，手に餘る木材や石材を轉がし廻つたことがある。讀本に蚕蠶のことがあれば蠶を飼つて絹を織つて見たくなる。刀鍛冶のことがあれば刀が作つて見たくなる。どうも少年の心理とゆうものは始末のわるいものである。次から次えと何物かを作りたくつてむずむずするのであつた。その內にふと生きた人間を作りたくなつた。而も美しい賢い優しい女の人を作りたくなつた。讀本にある淸少納言や紫式部のような女を作りたくなつた。つまり初戀だつたかも知れない。左甚五郎の小車太夫が笑ひ出した位なら，僕だつて物を言う美人を作れないことはない筈だと大いに工夫した。小學生相應に智惠を絞つて，骨骼は膠質と石灰分から成つていると聞いて，膠と石灰とをこねて見たりした。無論こんな事では生きた本當の美人は出來なかつた。しかしこの情熱は決して消えなかつた。せめて物を言つて吳れるお人形なりと作り上げたいと思つて聲音の研究などした。鏡を見乍ら自分の聲音の分類表を作つたり，圖書館でアイウエオの出る笛の圖を捜し出したりした。そこで聲音の研究の興味から鑵詰の空鑵と油煙紙とて錄音器を試作して見たりした。

初め何だか錬金術師のような隨分浪漫的な熱情で踏み出した事が結局は現實に存在し生活している我々人間の聲音及び言語を科學的に研究し意識的に彫琢し驅使しなければならぬとゆう課題に辿り着いたようであつた。

この心理的過程の經過中エスペラントを學び始めた。そしてかの始末の悪い奔放な少年の熱情を次第にそれに注ぎ込んで行くようになつた。

中學校え入つて（1915 年）英語を習い始めたことは僕の思考に大きな影響を與えた。外國語の學習とゆうことは頭腦の中え或る自然語を人工的に再製產することである。だから僕は教室での英語の時間に，英語其物の習得よりも，習得過程其物，即ち頭腦の中での言語の人工的再製活動なるものに興味を感じたのであつた。そして英語の助動詞と日本語の用言の活用例とに暗示を得て，一種の人工語を工夫するようになつた。それは主として日本語を材料として動詞の語根部分と語尾活用部分とを分割整理して，活用部分をすつかり規則的な助動詞にしてしまおうと企てたのであつた。

これは中學一年生の頃であつた。其頃やはり同じクラスに似たようなことを考えている男がいた。彼の名は森田可好と言い，體格は小さいが頭の良いので聞こえていた。當年の受驗地獄を首席で突破した男だが，一面仲々飄輕者だつた。他人が附けた綽名のチョリをそのままに樗狸の字を當てて號とし，得々としていた。彼は學業には餘裕綽々で餘技にも凝つていた。この男が又人工語のようなものを自分で勝手に考えかけていたようだ。嚴密には人工語とは言えないかも知れぬが，とにかくアラビア數字と數學記號とを使つて暗號文字のようなものを組立てていた。彼と僕と時々こんな問題で話していた間に，或時彼は「エスペラントを研究し始めた」と言つて，僕にアルファベート 28 文字や文法の少々を敎えて吳れた。それから每日少しづつ圖書館で見て來て敎えると約束した。これが中學2年生の初め頃だつたと記憶する。1916 年（大正5年）頃だろう。

(4)

僕が何故に言語に對して興味を特別に持つようになつたかについて又色々深く考えて見なけ

ればならぬ。言語に對する特殊な關心が育まれて行つたのも決して一朝一夕の事でもなく又單に偶然の出來事ではなかつた筈だ。

僕等の小學校は岡山の場末にあつたので，其頃の小學生達の言葉遣いには粗野な方言が少くなかつた。先生達はそれを標準語に直おす爲に特別に努力を拂つていた。例えば1年生に入つたばかりの者は「ハイ」と應えないで「ヘイ」と返事をした。又自分の事を「僕」とゆう者は殆どなく「ウチ」「ワシ」「ワツチ」「ワツキ」等と言つていた。先生達は標準語を浸透させる爲言葉遣いのことをよく話題にしたが，仲々徹底するものではなかつた。こんな環境にあり乍ら僕は前から自分を「僕」と呼ぶように習慣附けられていた。これは父の工場の若い者等が面白がつて僕に教えたものらしい。しかしこの事は日常の談話に際し意識的努力を拂つて一般の習慣を克服するという事業の端緒である。1人稱の稱呼につき一般の習慣を克服しようとする努力は取りも直おさず自我の覺醒と緊密に關聯していると見る可きではあるまいか。國語の標準語の意識的教育の重要なる使命は實にこうした點，即ち文明人としての自覺，或は國民としての人格的覺醒等の道徳的意義が大切なのであるまいか。從つてエスペラントの修得は，國際的，全人類的自我の自覺及訓練とゆう偉大な道徳的意義を持つていると言うことが理解されなければならないのだが，この重大な意義を理解し體現し得る能力たる人格的覺醒の端緒は實に幼少の頃受けた教育，即ち正しい言葉遣いえの自覺的努力によつて獲られたのではあるまいか。

他と區別して自我を喚び覺まされた僕は，淋しい思いをしたり，苦しい思いをし乍ら次第に成長して來た。實はこの事についてこそ詳細に色々書かなければならないのだが餘りに大きい問題であるから今は略す。

外國語に對する關心は如何にして發達したか。僕が11，2歳の或る日の事であつた。父は飴を賣りに來た朝鮮の人を呼び入れて，「朝鮮の文字を子供に教えてやつて吳れ」と言つて半紙に諺文を書かせて僕に吳れた。この小さい出來事は僕の頭に何とはなしに，日本語以外の言語の存在に對する敬意と親愛の情を育くんだ。中學に入つた年，英語なる一外國語を習い始め乍ら考えた。「朝鮮の人達は自國語の外に日本語とゆう外國語を學ばされているのだ。若し日韓併合が眞に言葉通り併合であつて併呑でないのなら日本人には必ず朝鮮語を學ばせなければならぬではないか。僕はともかく朝鮮の言語及び朝鮮の文化を學び，朝鮮の人々の爲役立ちたい」と。そして獨習書によつてこの語を勉强し始めた。しかし孤立した僕の能力では獨習の困難を突破する事が出來ず休止しなければならなかつた。言語に對する關心は諸民族，特に少數民族に對する親愛の情と共に次第に成長した。圖書館に通い，世界地理や人類學や言語學の書物を讀み漁るようになつた。中學校の教科目中に人類學が無いことは甚だ手落ちではないかと感ずるようになつた。民族間の正義の觀念は段々成長して來た。諸民族に對する敬愛の情は，夫々の文化を知り度い心となり，朝鮮語や蒙古語の本を繙いて眺め入つたのであるが，とても之等の諸國語を平等に習得し切れない矛盾に責め苛まれた。そして兼々聞き及ぶ平易な世界語エスペラントを必ず物にしたいと思うようになつて行つた。誓文拂と呼ばれる商店街の棚ざらえの大賣出の日，一書店の店頭でよりどり10錢の見切り本の中に1册エスペラントの獨案內を見出した。しかしその金が無くて買えなかつた。森田の樗理が圖書館で讀んで來ては教えて吳れるようになつた。その種本は大正4年の「中學世界」の黑板博士の書いたエスペラント講義だつた。僕も直接圖書館えそれを寫しに行つた。それから叔父が持つて居た東京外國語學校內の語學協會の「語學」(明治39年刊)誌上のエスペラント講義を借りて寫しかけた。なんのわけはあるま

いと高を括つていたがさて「再歸代名詞」だとか「汎稱代名詞」だとか文法上の術語が當時の僕の頭では仲々呑み込めなかつた。この講義の筆者は大杉榮だつた。しかし大杉が何者であるかは其の頃僕は知らなかつた。それから岡山の縣立と市立の兩圖書館で色々エスペラントの本を有りつたけ借りて見た。ガントレット・丸山順太郎共著「世界語」や村本達三氏著編の英文の A Short Vocabulary, オーコンノールの英文エスペラント敎科書，其他黑板，淺田，安孫子氏共著のエス和字典等があつた。この中には自殺した變り者の岡山醫專敎授高橋氏の寄贈したものなどあつた。圖書館え一々見に見くのも大變だし，どうしても自分でも1冊手元に持ちたいと思つて，「世界語」の印刷發行所村本研精堂を捜がして訪ねて行つた。しかし店の人が出て來て，「そんなものはありませんね」とすげなく追い拂われた。それから岡山中の古本屋新本屋を片つ端から漁つて步いた。何處にもエスペラントの本は無かつた。只1ヶ所，お城下の或る古本屋で，おやじが「要るのは難かしい讀物ですか入門書ですか」ときき乍ら，棚から1册厚い青い表紙の本を取り出してペラペラと讀んだ。「僕は入門書が欲しんだ」「それは有りません」で仕方なく僕は出て歸えつた。後で聞いたのだがこの古本屋のおやじは當年の社會主義者で，親讓りの田地を賣り拂つて岡山え出て古本屋を始め，社會運動に關與し，後姬路で露店商人の元締となり，東京に出て堺枯川等とも親しくし，露店商人の國體神皇會を組織した男だとか。名前は石原伊之助とかいつた。

結局エスペラントの本を町で手に入れる事は出來なかつた。圖書館で讀んだり寫したりする外はなかつた。そして臺灣で出版された赤い表紙の堂々たる「組織研究エスペラント講習書」によつてこつこつと勉强し始めた。この本は解りよくて愉快だつた。それに僕自身も文法を讀みこなす力が出來て來たのだろう。非常に樂しく氣持よく讀み續けた。後年エスペラント界の名物男となつた須々木要君の如きも圖書館で僕が之を讀んでいるのをのぞき込み乍ら「エスペラントとは何處にある國ですか」と眞面目に訊いたものだ。一般に中學生共が皆上級學校えの受驗勉强に沒頭しているのが僕には癪の種だつた。又學校當局が受驗準備を授業の中心課題にしていることが憤慨にたえなかつた。僕はそこで色々と敎育學の本や哲學や心理學の本などを讀んでは現實に自分達が受けている敎育をこつぴどく批判しようと努力した。そして敎室で敎師と屢々論爭するようになつた。外から自己え注ぎ込まれる敎育とは全然別に，自分が自分の意志で擇んだ科目を研究し進むことは如何に爽快なものであつたか。この感激をエスペラントを獨習する中に滿喫した。その頃讀んだ敎育關係の書物の中に「早敎育と天才」と言うのがある。この中に幼い少女エスペランチストたるキニブレッド・ストーナーさんがエスペラントで「鵞鳥の母さん」とゆう長い詩を作るところや，白髮の老エスペランチストと流調に會話して並居る人々を感心させるところなどがあつた。これは大いに僕の意を强くした。

その內に例の「エスペラント講習書」の卷末の紹介を見て，横須賀エスペラント會え入會を申込んだ。僕は餘つぽど頓馬なけちん坊だつたと見える。澤山のエスペラント會の名の中で横須賀のが一番會費が安く雜誌も吳れ親切に指導して吳れるように思われたからだ。返事は仲々來なかつた。戀文を初めて出した時の樣に心配で郵便屋さんの來る時間を每日待ち佗びた。戀文の返事はやつと屆いた。それは小林茂吉氏からだつた。横須賀エスペラント會の舊事務所小坂狷二氏の住所宛の僕の葉書は澤山の附箋がついて，やつと小林茂吉氏の許に屆いたのだそうだ。小林氏は親切に自分の「日本エスペラント」(Japana Esperantisto) 誌を讓つて吳れ，東京の日本エスペラント協會え入會することを勸めて吳れた。この返事は大いに僕を力附けた。そろそろ僅かな金の工面をして協會え入ることにした。世界語書院え出した問合せには遂に返

事が來なかつた。それから山鹿泰治氏の作つた「エスペラントの鍵」や「エクゼルツァーロ」等を幾册か纏めて取寄せ同級生の山田貞元君其他數人に頒つて，互に研究する事を始めた。「大成エスペラント和譯辭典」や千布利雄氏の「エスペラント全程」などを取寄せた。之等が着いた時は非常に嬉しかつた。辭書の紙面の一字一字が生き生きと光り輝いているように見えた。この辭書を買う爲の金を蓄める事は其頃の僕には一苦勞だつた。親父は僕がエスペラントを勉强する事など贊成でなかつた。學校で必要な物以外を買うには却々金が貰らえなかつた。僕は修學旅行の小遣錢を斷然一文も使はないことにして溜めた。そしてやつとエスペラントの本を少し許り買つたのだ。僕は最初は內證で學習した。其後，商工省關係で出ている「商工時報」に國際商業語協會の記事が出たのを見て父はやつと「お前がとうとう勝つたね」と言つた。

（5）

「鍵」や「エクゼルツアーロ」を少し纏めて取寄ぜて同級の二三名と相互に研究を始めたのはもう大正8年頃だつたろうか。「日本エスペラント」誌の第6回日本エスペラント大會の記事は僕を鼓舞した。僕達も何だか小さい乍らも祝祭を持つて見たい氣がした。そこで，コツプに綠色の塗料で小さな綠星を描いたものを作り，友人とサイダーを飲み乾した。

其の翌年岡山エスペラント會が創立された。當時岡山にいた千布氏を中心とした集りを持つた。僕は千布氏に「エスペラントはどうも英語のようになだらかに發音出來ないのではありませんか」と聞いた。氏は「熟練すればなだらかに發音されます」と答えた。實際に始めて流麗明快なエスペラントの談話を直接耳にすることが出來たのはそれから間もなく岡山エスペラント會を訪れた高橋邦太郎氏によつてである。高橋氏は其頃岡山縣の勝山の水電工事に來て居た。高橋氏の歡迎のささやかな會合で氏の美くしい發音のエスペラントに感心して，僕も立ち上つてエスペラントで喋ろうとした。然しまごついて碌に話せなかつた。だが人の話はよく解つた。これが僕の初めてのエスペラントの演說及び會話の經驗だ。

其れより前僕の叔父も亦エスペラントの學習を始めた。彼はブリティシユ・エスペランチストを購讀し，英國から色々のエスペラント書籍を取寄せた。文典や，辭典や，商用文例集や，學習書等だつた。その中僕はマーガレツトとかの著「エスペラント・マニユエル」を讀んだ。その內に大阪の僕の從兄達もエスペラントをやり始め高尾亮雄氏等と交渉を持つようになつた。

其頃僕はエスペラントの事を色々知りたくつて，叔父のネルソン百科辭典で捜がした所，ユニヴァーサル・ランゲーチの項にだつたかに何だか得體の知れない人工語の文法が比較的詳しく出ていた。僕の覺束ない英語で讀みながら「ハテ，變だな，エスペラントの文法とはだいぶ違うようだ」と當惑した。それヴォラピュツクの文法であつた。

（6）

幾年か遭わなかつた瀨崎老がひよつこりと僕を訪ねて來た。僕がエスペラントをやつていることを傳え聞いたのだ。彼は不器用な調子で「ホー・ミーア・カーラ」と呼び掛けた。之は恐らく多年エスペラントを勉强した彼が始めて口に出したエスペラント語であらう。彼は自分がエスペラントをやり始めた當時の狀態について語つた。「わしがエスペラントを始めようと思ひ立つた日，實は岡山の利巧な偉い人達に相談して見た。有名な山陽女學校長神代女史にも相談したら『おやめなさい，おやめなさい。私も以前やつて見ましたが今はやる人もありません』と言つた。其他わしが相談した三人が三人，『やめとけ，やめとけ，あれはもう流行つて濟んだのだ』と言つて反對した。そこでわしは斷乎としてエスペラントの勉强をやり始めることに決

心した」と語つて大いに笑つた。

さて，振返えつて見るのに，僕のエスペラントの學習の最初の記憶に上る人物は何と一風變つた連中が多い事か。瀬崎老も數奇な運命を辿つた。森田槵狸は高等學校の中途から新聞記者になり，その後行方が解らない。或は自殺したのではあるまいかと友人達は心配している。圖書館にあつたエスペラント書の寄贈者高橋醫專教授は當年或る美人に熱烈に惚れて巷に感動を捲き起こした男だつた。風變りな勉強家でラテン語の文法の遺著などもあるが，何故だか自殺して終つた。石原伊之助氏の經歴も仲々波瀾少しとは言えない。村本研精堂主人も事業の事等で餘程心身を勞されたらしい。無論順調な人も無いではないが概して何だか畸人傳でも繙く思いがする。エスペラント界では日本の ニュルンベルヒと言われる岡山に於けるエスペラントの事業も，日本全體の運動の退潮期には僅かに變人畸人によつて法燈が繼がれていたのであろうか。或はロムブローゾの言うように，これら常人と異る連中が何か特に鋭い精神をもつていて文化の爲に一役果たしたのであろうか。大正9年には岡山エスペラント會が出來，大正 12 年には岡山に日本エスペラント大會が開かれた程運動は其後急速に進出した。僕は敢えて變人畸人を禮讃するものではない。寧ろ其の反對に，エスペラントの事業は，健全な玲瓏たる完全な人格の創造の事業でなければならぬと信じている。それにも拘らず，自然の計らいは，變人畸人にさえも意義ある文化的役割を果たさせて吳れたと言う點に泌々と喜こびを感じ，僕自身持て餘ましている自分の心身の弱點や變質に對し煩惱卽菩提と達觀し大いに大勇猛心を振起するのである。

(7)

大切なことを猶お附け加えなければならぬ。それは經濟及産業の問題と關聯してエスペラントを考えた事だ。僕の家は實業家だつた。幼少の頃から住んでいた所は工場の一隅だつた。産業的な環境で僕は成長した。中學校え入つてからも僕はよく經濟問題を扱つて作文など書いた。それだのに轉任して來た校長は士族の出だつたのかも知れない。「この地方の青年は勘定高くていけない」等と言つて經濟問題を輕侮した。僕は非常に不服だつた。それで生れて始めて演說をやつた際「金錢問題を論ず」と題を掲げて此の問題の重要さを强調しようと試みた。その後，歐洲戰亂中の經濟界の大變動で，父の工場内部も騷然として來た。僕は勞働問題や工場管理法等につき勉强し出した。理想社會の問題も考えるようになつた。能率增進の本も讀んだ。これ等の智識や論法によつて，エスペラントの勉强に合理的意義を發見するようになつた。僕にとつてはエスペラントは決して平易な便利な交通手段としての便宜上のものでなく，合理的な必然性をもつたものとなつた。

要するに，僕は少年時代，自分の現實の生活に關聯して敎育及產業の問題の批判を行はなければならなかつた。そしてこの批判の序曲として思考及び言語批判の問題に逢着した。僕のエスペラントの勉强はかかる意義を持つものであつたと思はれる。これが僕の思考の體制及發展史に於けるエスペラントの地位である。

〔編者附記〕 磯崎巖氏は花莚の發明家として有名な磯崎眠龜翁の孫に當る人。上述の如く叔父磯崎融氏や大阪在住の從兄弟清海，捨男，眞澄氏等の人々（この人々は高尾亮雄氏主宰の少國民新聞社の隣に住つてをつた）も熱心にエス語を學ばれたといふことで一族がエス語をやつたことになる。

しかも磯崎氏と岡山縣岡山中學（現岡山一中）の同期（大正4年入學）には同氏の導きで手ほどきをうけた上述の山田貞元氏（後に富山藥專にエス會をつくり又北陸エス聯盟等に活躍さ

れ又現在東京薬學エス界の元老株）や森田氏の外に後年我國エス語界に於て活躍し名聲をはせた吉永義光,尾坂政男,柴田潤一,須々木要氏等が輩出したといふことは興味ふかいものがある。これらの人々は大體大正9年頃から學習された人々であるが吉永氏は岡山エス會のため働き尾坂氏と柴田氏は後年岡山醫大エス會の創立につくされ，又須々木氏は六高をへて東大在學中東京にて活躍され現在米國テキサス州に居る。尾坂氏は軍醫になり現在滿洲に居られ柴田氏は學校卒業後東京その他の地にあつて カプリーツァ・カプリード，神經學，プシコ，レヴオ・クルトゥーラ等々のエス雜誌を出されたこともあり目下今治の腦病院長をやつてをられる由。

とにかく活氣横溢した大正後期のエス運動界にあつて嶄然頭角をぬくエス界の巨星が同一中學同期生の中からかくも多數に輩出したことは珍しいことであるが之は中學時代に磯崎氏が種を蒔かれたことに原因するといつても過言でないと思ふ。磯崎氏は伊東三郎，伊井迂等の雅號によつてあまりにも有名である。

名古屋とエスペラント

山田　弘

最初のエス語研究者とその動靜　明治 39 年日本エスペラント協會が出來た時分，協會々員の中には名古屋市在住者で赤鹽，梅澤氏等數名の名前がでてゐる。之等先輩の現在の住所を探査して會談しそのエス語研究の動機，研究期間，用書等につき聞くことをえたならば貴重なる記錄となると考へその調査に着手したが，何分 30 年前の事であり豫想以上の困難に遭遇し探査して得た結果は僅少なる收穫に過ぎなかつた事を遺憾に思ふ。

赤鹽精氏（催眠術治療を職とす。和泉町。20 年前約 50 歳の時，關東方面に轉居。）

梅澤岩吉氏（東京外語出身，富澤町。有名な階樂亭料亭の主人にして現洋酒食料品大卸問屋梅澤合名會社の創立者。20 年前 45 歳にて逝去）。

長谷川氏（市立名古屋商業在學中エス語研究。17, 8 年前 32 歳で逝去。）

吉田しな氏（協會誌には女學生とあり，下長者町には吉田姓は舊家吉田醫院一軒のみあり，されど同家では同女存在を否定。）

加藤氏（當時學生。10 年前逝去せられし質屋を業とせし人？）

飛鳥井孝太郎氏（加賀生れ藏前高工卒。森村組〔後に日本陶器株式會社と改稱し世界陶業界に君臨〕の技師長として數回洋行。多額の退職金を後輩部下に分配せし痛快兒。名古屋陶器株式會社の創立者。硬質燒の元祖。7, 8 年前に約 60 歳にて逝去。遺族東京へ移住。）

大久保友三氏（現在白川町に在住しラヂオ商店主。49 歳。讀賣新聞にてエス語を知り東京より研究書〔不明〕取寄せ獨習。研究困難にて刺戟なく暫時にして中止。）

杉本四郎氏（現在黑門町に生存し 61 歳。士官學校より初期の近衞電信隊に入り公務中負傷し陸軍大尉で退職歸名〔29 歳の時〕後，雜誌太陽或ひは科學世界〔又は大朝紙〕でエス語の存在を知り，電信隊勤務中に英佛獨語の研究で苦しめられた經驗から國際語の必要を痛感し東京より長谷川二葉亭著「世界語」次いで同「世界語讀本」等を取寄せ約 2 ヶ年研究外國人よりエス文手紙を受取り返信された事もある由。辭書なく研究困難，又，刺戟なく同氏の研究は中絕。最近，同氏を訪問した後，2 回迄も拙宅を訪問昔を語り今日のエス語につき聞かれた。）

其他の協會員は全く手がかりなし。

協會々員ではなかつたが,

金子白夢氏（牧師にして有名な社會教育家又，哲學者として名あり，後に 1922 年頃我々が本格的にエス語運動の準備中當時，我々に味方し反對論を壓える事に進んで助力されし同氏も同時代に二葉亭の「世界語讀本」にてエス語を一寸覗いた事があると述べられた事がある。）

以上私が最近あふ事のできた三氏の言を綜合考察するに當時の名古屋にエス運動の起りし事なく單に izolitaj membroj として存在してゐたに過ぎないと思はれる。

黒板博士と世界語講演　その後數年にして黒板博士等が名古屋の市會議事堂で世界語エスペラントの講演會を開かれたとこふことで，その時，私の伯父が世界語に關し始めて聞いたが，聽衆は 300 名内外であつたと最近私に話してくれた。學會で Japana Esperantisto を調べてもらつたが，それに關する記事は何もなく，明治 44 年 4 月に出た第 6 巻第 1 號に

「黒板博士は昨年 8 月夏休に岡山，廣島，長府，熊本，鹿兒島等を宣傳して廻つたが本年は東海道より滋賀，京都地方へ遊說にでられる」（大要）といつた風な豫告が出でゐるとの事であるから，これは明治 44 年の夏のことではないかと思ふ。その時分の新聞でも調べてみたいと思つてゐる。

名古屋に於ける最初のエス語運動　その後名古屋にエスペラントの會や運動が起つたかを調査したいと希望してゐたのであるが希望せる史料調査の緒も見出し得ず歳月は去つたが本年 4 月學會所藏の協會機關誌 Japana Esperantisto 誌全部（明治 39 年から大正 8 年迄——途中大正 1-2 年は休刊）を調べてもらつた所，次の記事が見つかつた。卽ち同誌第 10 年第 4 號（大正 4 年 4 月 25 日發行）には「名古屋エスペラント會の設立」と題して

「名古屋市に於ける同志は本月 4 日標題の會を設立し，一方エスペラントの無料教授を開始し既に研究會員 12 名ありと，同地の横井憲太郎氏より通信あり。」と書かれてゐるが次號（5 月 25日發行）には,「名古屋エス語會」と題し「前號所報名古屋エスペラント會設立無料通信教授開始云々の件は恐らく僞報ならんとの說あり，眞僞調査の上追て確報すべし。」と訂正され，その後の誌上に確報なるものが見當らず，横井氏の住所も出てゐないとの返事で，これ以上の調査は不可能とあきらめてゐた所，5 月 10 日に學會の岡本氏の努力により學會書庫より幹事横井憲太郎と記入された名古屋エス協會機關誌の創刊號を見つけたといふ意味の書信と，同誌所載の横井氏の住所を通報せられたので意を強くして調査に乘り出した。

横井憲太郎氏は，現在南大津町2丁目松坂屋前にて主としてクリスト教關係の書類を取扱ひ別に出版印刷工場を持つ一粒社書店々主で本年 39 歳，多忙なる時間を割き快よく小生の質問に答へられた所を綜合すれば，

同氏は 17 歳の中學生時代（大正 3 年，1914 年）に英國の或る文通倶樂部（會名不詳）の會員であつたが，その文通の友なる英國人から英文書きのパンフレツトを送られエス語の存在を知り British Esperanto Association からエス文書籍を種々取寄せ一人で熱心に研究された。大正 4 年，大正天皇御大典を祝して名古屋エスペラント協會（エス名 Nagoja Esperantista Societo）創立の宣言ビラ約 2000 枚を印刷し名古屋市立商業その他主として學生方面に働きかけ，高柳氏（今は故人）その他で同商業に約 10 人他に 2 名計 12 名程の學生同志を獲得し毎月 1 回例會（3 回繼續）又，毎週約 1 回横井氏宅で，同氏指導の下に謄寫刷テキストで Ĉambro（チヤン〔支那〕風呂）等と記憶に便なる樣苦心して教授をなし毎回 6, 7 名の出席者があつたとの事で，同會機關誌 “La Mondo de Esperanto”『（和名，エス語セカイ）』も 5, 6, 7 月合併號として，7 月に謄寫版刷で第 1 號（半紙四ツ切判）を發行し第 2 號，第 3 號

(共に菊版エス文 4 頁，當時伊倉町にあつた一誠社で活版印刷。現在同氏宅に一部もなし）迄出し黒板博士來名の折に同博士の希望にて名古屋ホテルで面會，勇氣づけられ高橋，小坂，淺井の我國の諸先輩とも文通したと話さる。その後，大正 4 年 9 月，よき共働の友であり出資後援を引受けてをられた岡崎久太郎氏（當時縣立一中學生，現在は映畫興業岡崎商會主にして金輝館及び中央館主）が慶應の理濟科入學のため上京されたためと，一方宣傳に訪問せし新聞社或ひは學校敎師等の無理解と一般人の嘲笑に氣をくさらし，又キリスト敎信仰に熱を昂めて自身遊學上京したためエス語の研究及び運動から遠ざかつてしまつたと述懐された。現在は宗敎研究に便ならしむべくギリシア語の獨習書などの出版に力を入れて居られるが，エス語聖書も賣つて居られ國際語に對し多大の關心を持つて居られる。横井氏によつて芽生え初めし當市エス語運動が斯くして中斷の運命に落ちた事を名古屋エスペラント史の上に惜しく思ふ。

ついで同誌第 13 卷第 10 號（大正 7 年 10 月號）にはエス文で「第八高等學校學生三戸章方氏が同校生の間にエス語の宣傳を初めエス會の設立を企ててゐる。我運動は輝かしい將來を約してゐる。」といつた意味の記事が出てゐると。併しその後これについての續報のない所を見ると，どの程度の宣傳だつたが全く不明である。

その後の名古屋エス語運動は　當市最初のエス語運動が，横井氏によつて旗上げせられ，その後暫く中絶の運命に落ち入つた事は前項記載の如くであるが，その後の協會末期時代から學會初期時代に亘つて名古屋にもエス語を學習してゐた人は皆無でなかつた事は云ふ迄もない。

唯，團體的に宣傳したりお互ひに學習を援け合ふといふ事がなかつたから本格的の研究が出來ず，その研究も永續きしなかつたと見るべきであらう。

大正10年の秋頃，則ち協會が學會に變つてから第 3 年目に石黑修氏によつて，とても energia なエス運動が起されたのである。今日迄，どうにか永續きを保つて來た名古屋の本格的運動の準備期とも云ふべき時代に，勿論エス語のため苦鬪を捧げた先輩鬪士横井氏については何も知らなかつた自分が何うしてエス語を知り，これを學ばうとしたか，又，當市エス語運動再興の直前に雄々しくも活動を續けられし石黑氏に關し自分の記憶せる範圍で以下に少し述べる事を許して戴きたい。

石黑氏と山田とエス語　私は，大正 6 年（1917 年）中學の 3 年生の時，當時金澤市にあつた HCE 倶樂部と呼ぶ內外人通信交換の倶樂部に入會した。同會の幹部はエスペランチストだつたので，その當時旣に機關誌も Bulteno de H. C. E. とエス語で呼び，時折り顧問高橋邦太郎氏（當時在廣島）のエス語宣傳記事や幹事淺井惠倫氏（當時東京に在學中）のエス文の手紙の文例などが掲載されてゐたので，私も初めてエス語の存在を知り又，その誌上廣告に依つて日本エス協會や UEA の存在を氣づいてゐた。然し英語こそ國際的役割を持つものだと學校で敎育され英文小說の原書などを字引と首ッ引きで嚙つてゐた當時の私にはエス語は物好きな連中が英語とローマ字の中間的なものを作り暗號代りに使用してゐる位にしか見えなかつたので HCE 倶樂部が會員名簿錄や同會々規や會報の短文にエス文を入れてゐるのを見て憤慨し長文の抗議文を同會の主宰者阿閉温三氏宛に送つたことがある。

しかしその後國際語の重要性をおぼろげに感知して自分の非を悟り，前記抗議の取消文を送り同年末同會の代理部から英語で書いたエス語の鍵を買ひ，次いで Traveller's Esperanto Manual of Conversation と横須賀エスペラント會創立者加藤節著「エスペラント獨修」とを入手の上，エス語の獨習を開始し短文を綴つてみたりしてゐた。そして當時殆んど英文許りであつた HCE 會誌の文通欄にエス語で廣告を 3 回ばかり續けて出した。その結果大正 7 年 11月

5 日にシベリアのトムスクの青年雑誌の編輯長である Ĥoves といふ人からエス文で通信を書いた繪葉書を受取つた。これは記念として今でも保存してゐる。

Bulteno de H. C. E. の大正 7 年 12 月を見ると第 1 頁に私の書いた繪葉書見聞錄といふ記事と私の寫眞が出てゐて，その第 2 頁には石黒修治（現石黒修）氏の寫眞と，その「入會後 1年を送らんとするに際して」といふ文が出てゐるのも不思議な因緣だと思ふ。

後に述べる如く私はエス語を石黒氏に本格的に敎えてもらひ，又同氏は大正 3 年（1914)夏中學2年の時，既にやはりトムスクではあるが Labunski 氏からエス語といふもののある事を聞かされたといふ事でこの點でも既に私の先輩であるが HCE 入會は同會々誌に依れば私の方が少し先で大正 6 年の春，石黒氏は翌 7 年の始め頃のやうである。

當市エス語運動の第一線に起ちし者の中，横井，石黒，山田の名が言ひ合はした如く外人からエス語の存在を敎へられ又は强き刺戟を與へられた事はエス語の國際的使命と思ひ合し偶然として一笑に捨て去れぬ因緣を感ずるものである。

石黒氏は，前述 HCE 機關誌上「入會後 1 年……」の文中で

「……私の入會の目的は英語研究でした。……私はここに感謝しなくてはならない事があります。それはエス語の研究でした。直に實際應用の機會を與へられた爲めに不滿足ながら差支へのないだけに進みつつあります。……」と書いて居られ，又同氏が「新愛知」紙上で述べられた所によると同氏自身も大正 7 年 3 月頃から本格的にエス語の研究を始められたやうである。

私はその後大正 8 年（1919 年）海外との文通交換を主とする會を名古屋に創立するため專ら心を用ひエス語の研究からは自然に遠ざかつて行つた。そして翌大正 9 年 PCE 倶樂部といふのを設立して自宅に本部を置き同年 10 月から機關誌を發行した。PCE は石黒氏も幹に部になつてもらつてゐた關係から同氏に依賴しエス語講座欄を執筆して戴いた。大正 10 年 PCE の經營を鵜飼鈴直氏（同氏とは 2, 3 年後にはエス語普及のため運動の第一線で共に働いた）に移管し實業實地研究のため横濱に出たが，その際多數の外人客に接し英語の萬能ならざる事と一等國日本國人として內地に於て外語使用の快からざるを痛切に感じだものだつた。同年末脚氣を患ひ名古屋に歸つた。

名古屋に本格的エス語運動確立 石黒氏は大正 10 年（1921 年)輕井澤の夏期大學に出て科外としてあつた松崎克已氏のエス語講習を受けられ，次いで開かれた早稻田大學の講習にも出席せられ，その時知り合となられた八高學生伊藤隆吉氏と同年9月名古屋の學生間にエス語運動を起す事を約されその後八高，高工，醫大等に猛烈なエス語普及運動を起された。後に北海道苫小牧工業學校で敎職につき同地に初めてエス語の種を蒔いた森卯之助氏及び學會の「エスペラント」誌で，おなじみの倉地治夫氏も當時の熱心な學生同志であつた。

而して大正 11 年（1922 年）8 月，私は石黒氏が市民に對してなした公開講習に參加して大正 6, 7 年に一寸嚙つたエス語の知識を新にし，その後開かれた石黒氏指導の講習には庶務會計事務一切を引受け，又，石黒氏を中心として佐藤一英氏や熱心な學生同志 3, 4 と相談し學會の愛知縣全會員及び當時名古屋で講習を受けた全同志に檄を飛ばし市民エスペラントの本格的糾合の目的が達成せられ名古屋エスペラント社交倶樂部（後に名古屋エスペラント協會と改稱）が生れた。時に大正 12 年（1923 年）5 月 12 日。石黒氏は同月學會主催の東北北海道の普及講演に參加のため上京せられたのを最後として名古屋を去られたので，同氏の種を蒔き續けし後を守り內藤氏等と協力しその芽生えと成育と刈入れと時機に應じた種蒔きに努力し

た。R. O. 誌發表の統計に依れば，大正 10 年の愛知縣會員 5 名が大正 12 年には 150 名に激增を示してゐる。その後熱心な同志も現れたので淺才無力をも省みず今日迄當地エス語運動に力添えさせて戴いて來た。我が名古屋市のエス運動がその時分から大都市として辱かしからぬだけの位置を保ち得たのは，その後現れた幾多の熱心な市內同志（旣にその中 6, 7は永眠）及各地の同志や先輩の刺戟の賜物とこの一隅を借りて感謝の意を表したい。大正 8 年以後の當地のエス語運動及び健鬪を捧げられし諸氏に關しては，いづれ他日機會を得て筆を新に詳述したいと考へてゐる。(Majo 15, 1936)

Fundamento de Esperanto に三度邂逅

山田武一

大正 5 年（1916）の末或恩人を久々で訪問して學校卒業以來藥劑師としての日常生活の模樣を得意然と報告してゐた時のことであつた。そこへ來合せたのが前田といふ佛蘭西から歸朝したばかりの紳士。談偶々我國藥劑師に必要な語學について花がさき理化學の原書やさては處方箋の歐文の話が出た。その時前田氏が「自分が巴里にゐた時珍らしい事に出遭つた」といつて語られた話は「ある日 magazeno を出て車をとばさんとする刹那，故意か間違つてか今以て不明であるがともかくも自分の車目がけて投込まれた小冊子。何が何だかよくは調べてもみないが。何箇國語かを對照した辭書の樣なものであつた。歸朝に際して巴里から持歸つた。若しも君が何等かの參考にしてくだされるならば，荷物の中にそのままある筈だから君に差上げようとのことであつた。

數日ならずして同氏からその小册子が手許へとどいた。それは Fundamento de Esperanto であつた。

當時私はエスペラントの何物たることもしらず唯佛英獨露の外にわからぬ言葉が二語並べてあるものだと思ひさし當り參考にしようにも一寸參考になりそうにもなかつた。從つてそのまま本箱の隅にほりこんで仕舞つた。

翌年の夏頃かと思ふが東京日々新聞か報知新聞かそれとも他の新聞だつたかの記事でエスペラントがごく簡單で平易なもので世界中旅行するのに何等不自由がないといふ意味の記事をチラと見たことがあつた。

そこで私の頭に來たのが前田氏の贈り物の書物のことであつた。不幸にしてその時は前田氏も旣に故人となつて居たがその冥福を祈りながらその形見の小册子を本箱から探しながらもあの小冊子の表紙にかいてあつた Esperanto といふのがこのエスペラントだろうと考へてとり出してみた。

漸く探し出したがなるほどエスペラントであるらしいがこの本だけではとても物になりそうでないので悲觀した。

當時私は東京の王子の町はづれの工場で色素を製造して居たので或時はニグロシンで眞黑に或時はローダミンで紅に，或はクリソイヂンで黃色に或は赤色レーキで眞赤に足の爪先から頭の頂邊まで，まるで七面鳥の樣に，お化の樣になつてゐたので東京の眞中へ出る事は愚か工場の宿舍から一歩も外出できない。まるで大都會の片隅に仙人の樣な生活をしてゐたので，エスペラント界の先輩諸氏の邦譯書物その他親切な指導や普及運動といつた樣なものは目にもふれ

ず耳にもきかず唯この一小册子の各頁に色とりどりの指紋や斑點を印してゆくのみであつた。もし東京の町の眞中へ時々でることのできる境遇におかれてゐたらあんな苦勞はなかつたことと思ふ。

その後大正 10 年の夏頃とおぼえるが文部省史料編纂官平泉澄氏から偶々中學時代の級友だつた淺井惠倫君がエスペラントの大家で目下靜岡方面へ講義に行つてゐるといふ話を聞いて始めてエス語運動が盛に行はれてゐるといふ事を知つたが淺井君が旅行中では急におあひすることも出來ず，いづれその中に充分指導を仰がうと決心したが遂に其機を見出し得なかつた。

幸に知人高木猛亘といふ人の息子が警視廳防疫官吏でエスペラントを知つて居るといふことをききこんで同氏に依賴して始めて邦文で講義した村田正太氏の「エスペラント講話」と「大成エス和辭典」とを買つてもらふことができた。

ところが不思議な因緣といふか，村田氏の「エスペラント講話」の後篇は實は Fundamento de Esperanto の講義であつた。

次いで大正 13 年の秋日本エスペラント社でエス語の講習のあることを聞いたので之に參加したがこの時の講義の敎材も Ekzercaro (Fundamento de Esp. の主要部分) であつた。そしてこの後大いに各方面の同志と交はる機會をもつことになつて自分もエス運動の一人前の鬪士仲間に入れてもらふことになつたのである。

こんなわけで私のエスペラント學習はそんなに古くもないが唯三度まで Fundamento de Fsp. の御厄介になつたといふのが面白いのと，その始めて入手した Fundamento が巴里で前田氏が偶然の事から入手した不思議の因緣のあるものであることが珍らしいと思ひここに請はるるままに思出をつづつた次第である。

今猶手許にある前田氏の形見なる Fundamento de Esperanto が，どういふ理由，どういふ徑路で，前田氏の車へ投げこまれたかをしらべ，その前の持主——それはキツト巴里の同志にちがひなかろうが之と名乘りあふことが出來たらどんなに愉快であろうかと夢みてゐる。

エス語を眞に東洋民族に通用せしむるには

坂　本　清　馬

日本エスペラント學會が，我邦エス運動 30 周年になるので，今度の號を記念號として御發行せられるさうですね，誠に何よりもお喜ばしい事と存じます，小生は肉眼に於ては未知なる諸君子，靈眼に於ては正に 100 年の相識たる諸君同志が，我が皇國の爲，語學報國之御奉公に孜々徹底精進せられんことを，遙に千祈萬禱してやみません。

扨本日，藤田穰三詞兄が態々御來訪下されて，斯々であるから，何か思ひ出のやうなものを書いてくれとの事でありましたので，誠におこがましい至りでありますが，極めて簡單に，小生の感想を書き送ることに致します。

小生がエスペラントを知つたのは，明治 41 年の夏であつたやうに記憶致して居ます，當時社會革命運動の畏友にして心友であつた故大杉榮君が，東京市麴町區飯田町なる支那無政府主義革命家劉光漢兄の寓居で，同君夫婦及其他十數人の東京留學支那靑年の爲に，毎日エスペラントを敎授して居たのですから，小生は其傍で之を立聽きして覺えたのでした。其故，小生には特に敎師といふものはなかつたのですが，强ゐて言へば大杉君が敎師であつたのでせう，當

時は安孫子先生や黒板博士や長谷川二葉亭氏などが，日本に於けるエスペラントの大家でした，是は諸君子の百も承知の様でありますが，小生等の同志の中には，大杉君の外に，九州宮崎に福田國太郎といふ青年エスペランティストがありました，福田君は遠く露佛の男女の同志と文通もして居たので，なかなか錚々たるものでした，小生等同志のエスペラント研究及普及の目的は，勿論エス語の妙用に依りて，世界の平和實現に貢献せんとするにあつたのです，其後小生は宮崎へ落ちて行つたので，十分に研究する機會がなかつたのですが，それでも福田君と日夕交遊してボツボツ獨學して居ました，處が御承知の通り，明治 43 年の不祥事件に連座して下獄しましたので，書籍が缺乏を來たし，爲に廣く深く研究學習することが出來なくなり，獄中常に髀肉の歎を懷きながら，以て今日に及んだのであります。

然し小生は大正 5-6 年頃，ザメンホフ先生のエスペラントは，東洋民族に通用せしめんとするには，どうしても東洋語の文法，殊に日本語及日本文法の要素を取り入れて，之をもつと簡單，明瞭，平易にする必要があると思ひました。而して之が改造は，六合一都，八紘一宇之日本主義即ち眞個世界主義てふ絕對道を以て千古の理想とせる我等大日本皇國民族の先天的使命であり，神援的聖業であると確信して疑ひません。

終に小生は，貴會の同志諸君子が，常に日本國體てふ指導原理を須臾も放たずして，エスペラントによりて日本國體を宣揚恢弘し，進んで我が大日本皇國　天皇陛下の御仁德を全世界に光被するの聖なる手段として，之を研鑽し，之を習學し，之を普及し，以て大に皇國の隆昌發展，及東洋民族の親善修好，並に世界平和の永遠なる確保の爲に，鞠躬奉仕，至誠貢献せられんことを，切に希望悃願して息まず，之を以て 30 周年奉祝之辭に代へ，茲に謹んで擱筆致します，皇紀 2596 年，昭和 11 年 5 月 10 日，坂本清馬，合掌再拜。

私の生活に勇氣を與へたエスペラント

秋　田　雨　雀

私はエスペラントによつて多くの利益を得てゐながら，この言語の運動のために何等の貢獻をなし得ないでゐることを恥ぢてゐます。

私のエスペラントについて知つたのは明治 37-8 年の日露戰役の直後だつたと思ひます。その頃私の同鄉（青森縣南津輕郡黑石町）で，小學時代からの同窓生であつた鳴海要吉（うらはる）がエスペラントを學び初め外國の同志達と通信をしてゐました。これが官憲の誤解を受けて，職（この當時鳴海は北海道で小學敎師をしてゐた。）を失はなければならなかつたのです。滑稽なことは，この通信は植物やその栽培法に關するものだつたのです。鳴海のエスペラントをやつたのは多分これも同鄉の高橋邦太郎さんの刺戟によるものかと思ひます。私はその頃鳴海からエスペラントの葉書を受取つてゐます。私は後で「綠の野」といふ戲曲を書いたことがありますがそれは鳴海の受けたエスペラント受難にヒントを得たものです。

私が正式にエスペラントを學んだのは大正 3 年，エロシエンコに逢つてからですが，その以前からこの言語についての關心は持つてゐたわけです。そしてそれは要するに同鄉の先覺者高橋邦太郎さんの影響によるものだと思ひます。大正 4 年に私は演劇の仕事で北海道から歸京してから‘エロシエンコとの交遊が繁くなりエスペラントは私の生活にとつて缺くべからざるものとなつたのです。私はエスペラントを文法的に學んだのではなく，エロシエンコとの交際や

エロシエンコの飜譯などを手傳つてゐる內に，自然にエスペラントの持つ「有用性」の中にひき入れられてゐたのです。私にとつてはエスペラントは最初から單に言語の問題でなく，生活の問題だつたのです。私にとつてはその頃，如何にして生きて行くべきかといふことは非常に切實な問題だつたのです。私は色々な困難に遭遇する每にエスペラント及びエスペラント運動によつて勇氣づけられて來ました。下に私の小さな生活年譜「五十年生活年譜」の中からエスペラントに關した（但大正 8 年迄）數節をここに拜借して置きます。

大正 4 年（1915） 33 歲

私はこの年の日記の中に，ペルシヤの豫言者の言葉を引照してゐる。この時代に私は色々な內的外的の苦難に遭遇した。そして，その苦難に處する道を科學の力によらずに觀念的思索の上に求めようとした。私はトルストイ，スウエデンボルグ，ストリンドベルヒ，老子，ウパニシヤド，バツハ・ウーラ等の後を追ふて步いてゐた。私はこの時代を觀念主義時代と呼んでゐる。

ワシリー・エロシエンコの私の前に現はれたのはこの時であつた。エロシエンコは，小ロシヤ，クールクス生れの盲目の青年であつたが，熱心なエスペランチストであつた。私は全く人生に絕望して極端にニヒリステツクになつてゐた時，エロシエンコは盲人でありながら，世界のエスペラント運動のために熱心に働いてゐるのを知つた。私はすぐにエスペラントの勉强を初めた。私は 3 月ほどでほぼこの言葉を會得した。私はこの言葉を知つたお蔭で，人生を別な眼で見るることが出來た。そして澤山の仕事が私の前に現はれて來た。

私はここで，日本に於けるエスペラント運動について一つの事實を記錄して置く必要を感ずる。日本のエスペラント運動は黑板勝美，中村精男，小坂狷二，千布，大杉（榮）等の諸君によつて創められ進展させられたものであつたが，この運動の進展に對して長谷川二葉亭の功績は忘れてはならないものであつた。二葉亭は最も早く「世界語」といふパンフレツト形の敎科書を出版してゐた。この運動は，日露戰爭後ロシヤのトルストイヤンによつて日本に呼びかけられたものであつた。然しその呼びかけを日本に傳へた長谷川二葉亭自身は，その當時，旣に國權主義者であり，征服主義的アジア主義者であつたことは色々な文獻で私達は知ることが出來た。然し，この矛盾した過程を經てゐながら日本に傳へられたエスペラント運動は，後では完全に日本の進步的階級の手に渡されてゐることも興味あることである。

私はこの頃エロシエンコの關係で，バハイのアグネス・アレキサンダー女史に逢つてゐる。この女は有名なアメリカのの歷史家アレクサンダー敎授の孫にあたる人であつたが，純白な着物に紫の帶をしめた印象的な容姿をした 40 歲に近い婦人であつた。バハイ敎徒は「人種平等」「消費經濟の均等」「言語の統一」を主張してゐたので，アレクサンダーのところへはエスペランチストが多く集つてゐた。また望月百合子や神近市子なども時々彼女を訪ふた。女史は12-3歲の女の子のやうに房々した毛を前額に垂れて，口を大きく開いてバツハ・ウーラの豫言書の「隱語錄」を讀んでゐたのを思ひ出す。

“Pola Esperantisto” にポーランドの一青年士官が，旅順で日本の一將軍と戰爭に關する會話をしたことが書いてあつた。

士官——人間は何故戰爭をしなければなりませんか？

將軍——大きな平和のために。

士官——人間は兵備を全廢して，人間の勢力を他の有益な仕事に費すやうに努力しなければならないと考へますが，將軍は兵備全廢の時代を想像することが出來ますか？

將軍——その時の確かに來ることを信ずる——然し今其時ではない。

といつて將軍は神經質に室の中を歩き廻つた……。

ヨオロツパは今戰爭の渦中に捲きこまれてゐる。多くのエスペランチストが戰死してゐるといふ報告かあつた……。

大正 5 年 (1916) 34 歲

私はこの年の 4 月にはワシリー・エロシエンコと水戸の講演旅行に行つてゐる。この旅行は私には實に愉快な記憶を殘してゐる。一行には畫家の竹久夢二も加つてゐたが，エロシエンコはエスペラントで女性問題を取扱つたロシヤの民謠についての講演をして，私はそれを通譯した。講演は公會堂，高等女學校，女子師範で行はれた。エロシエンコは「水戸は長い長い夢のやうな町だ」とロシヤに通信した。エロシエンコは羊羹が甘いといつてむしやんこに食べたので，宿屋の拂ひが嵩んで困つた。

エロシエンコは，この年 7 月 3 日にシヤム及び印度に向つて出發してゐる。なぜシヤムに行くかと彼に質ねると，「私は東洋諸國，殊に弱小民族の生活を知りたいのだ」と答えてゐた。私達は中央ステーシヨン（東京驛）で待つてゐると，エロシエンコは赤いトルコ帽をかぶつて，伊達といふ青年に手をひかれながらやつて來た。赤い帽子といへば，この頃私達は「赤い帽子の會」といふ會を組織して每月 1 回何處かで會合してゐた。なぜ赤い帽子を選んだのかその理由もはつきりしてゐない。またこの會には一貫した思想があるわけでもない，中には可なり進步的な青年もる たが，フアツシヨ的青年も 2-3 人はゐた。二三十人の人がエロシエンコを送つたが，その中にはアレクサンダー女史，竹久夢二，エスペラントの福田國太郎なぞがゐた。「永久に死なないやうに!」と私はエスペラントであいさつをすると，エロシエンコは鼻頭に皺をよせて笑つてゐた。

大正 6 年 (1917) 35 歲

今「十月の嵐」は，全ヨオロツパの民衆に强い刺戟を與へてゐることが色々な地點からエスペラントの通信によつて報導されて來てゐる。然し，日本のエスペラント運動は，依然として中立エスペランテストの手にあつたので，ヨオロツパ民衆のこの時期の激動を反映することは出來なかつた。中央ヨオロツパに於ける「勞働者エスペラント協會」の運動を正しく報導し得たのは餘程後のことであつた。然し私はこの時代に自由主義的な立場から，多くのエスペラントの會合に列席して，エスペランテストの使命について語つた。Interna idco (內部精神) といふことが，多くのエスペランテストによつて主張されてゐたが，この內部精神といふ言葉を正しく說明するものはなかつた。またこの「內部精神主義」に反對してエスペラントを實用化しなければならないと主張してゐる一派もあつた。更らに，言語を進步的階級の鬪爭の武器たらしめなければならないといふのは，第三の解釋であつた。ザメンホフ博士の「內部精神」といつた，その主張の社會的ミリユーを科學的に硏究し初めたのはこの第三に屬する人々であつた。この事は一般社會には大した交涉を持つてゐないやうに思はれたが，その實，長く世界を通じて國際通信活動の二つの流れをなして行つた。

大正 7 年 (1918) 36 歲

アンドレイフの「ベルジユームの悲哀」は人道主義的立場から世界大戰の犧牲者であるベルジユームを語つたものであつたがその考へ方は運命主義的で，少しも積極性を持つてゐなかつた。アンドレイフは間もなく，新興ロシヤから亡命して，最初のイミグラントとなつてゐる。アンドレイフの逃亡は，西方科學主義に對する東方神秘主義の現實的敗北であつた。この頃，私はスウキスノエスペランテスト，デツクといふ青年に東京で逢つてゐる。彼はセルビア生れ

の男で，同國人で，全ヨオロツパ的に聲名を持つてゐる戯曲家ヨゼフ・コーソルの戯曲を私に示した。私はこの作物によつて，ヨオロツパの民衆が何によつて惱んでゐるか，殊に弱少民族の青年達が何を苦しみ，何を望んでゐるかを明瞭に知ることが出來た。然し，ヨゼフ・コーソルは結局，アンドレイフと等しく懷疑的，絶望的であるのには物足りなさを感じた。私はヨオロツパ民衆の強く起き上つた部分から，きつと，今に立派な文學が生れるであらうと思つた。

古くよりエスペラントをやられた方々よりの御返事（抜萃）

★　小原清吉

……老生のエス語研究は明治 39 年頃に始め候ものにて其後 2-3 年は興味を以て修習いたし候へどもそれ以來殆ど廢止いたし候故今では全く記憶に存せず唯往時好奇的に之を學び候事が念頭に殘り候故現今英語教授の際折にふれてエス語の興味を生徒に語り研究を勸める事有之候位に過ぎず候當時の習學書類等は數年前金澤エスペラント會員の請により悉く同會に寄贈し研究會員に配布されたる世界各國の會員名簿により交換したる繪葉書も皆子供の慰として與へ候故散佚して一枚も之なく唯明治 39 年講習の際受け候證書の寫（本文は會へ寄付）と往時使用せし教科書 O'Connor 氏の Esperanto が殘存する丈に候右の情態故貴誌に御掲載の價値ある事項は無之遺憾に存じ候只別記一二項だけ御參考までに書添へ置き候

1. 明治 39 年 7 月 30 日より 8 月 18 日迄東京國民英學會主催のエスペラント講習會にて修習，その後エドワード・ガントレツト教授の通信教授により研究し，世界エスペラント會員に列せられ名簿に發載せられたり。

2. 同名簿により英米佛獨墺諸國の會員と繪葉書の交換を數回行へり。

★　田川大吉郎

思出話の御依頼には閉口です，御容赦下さい。ガントレツト先生の第1回講習會の弟子です。外務省のブラジル邊へ勸められた書記生に野田良治といはれた（?）方が神田の青年會館で講演して下されたのが知識の得初めでした。

★　山羽儀兵

御書面拜見，原稿として御解答申上げる暇無之候間左に a—g の御質問に對しお答申上候

a. これは不明ですが小生第一高等學校入學（大正元年）の當時に學友伊藤徳之助君（目下九大工學部教授）がよくエス語をやつて居て種々お話を聞きました。

b. 牛込の物理學校で講習會があつた時初めて學びました。ただ一寸やつて見るといふだけの理由でこの時の講師は千布利雄氏と杉山隆治といふ方，この年代は一寸不明ですが一高時代（大正元年から三年迄の間）だと思ます。

c., d. その後殆んど利用せず，またその機會も無之會話は全然致さず在外（獨，佛）中も全然エス語を耳にする機會も無之候

.e 日本エスペラント協會へ入會（?）しましたが，その後何時とはなしに御無沙汰してしまひました。

f. 小生は當時から英佛獨及びラテン語を致して居りエス語の學習には大した苦心を經驗致さず候。

g. 全然經驗無之

右簡單に御返事申上候何かお役に立ち候はば幸と存候　草々

★　小平房吉

a. 明治 42 年頃新聞記事にてエス語を知りたる事。

b. 同年頃京都智恩院境内の一寺院に於てエスペラント協會支部發會式有之同時に約一週間程の講習會ありてそれに出場したる事。

c. 露國エス協會員某より日エス辭書を貰ひ度旨文通を受け當時各方面を探がして漸く一册を求め送りたる事。

位の事を記憶致候のみにて爾來全く中止致居候様の次第從て何等御參考として御返事申上ぐる資格無之御恥かしく存居候

〔編者附記〕 上記明治 42 年は 40 年の誤と考へられます。

★　佐々木秀一

拜啓エス語に關しては何も申上げることが御座いません，不惡御了承を願ひます。

1. 明治 38 年長野縣師範學校に奉職し，ラテン語の講習を受ける爲上京中，エス語の話を友人より聽き，歸縣してから，同校奉職の野原休一敎諭につき手ほどきをしてもらひました。

2. その後忙しくて，殊に 41 年東京奉職後は，研究と仕事の多忙の爲に，語學の研究は續けることが出來ませんでした。今日では，エス語ラテン語ともに全く忘れてしまひました。

3. この語についての感想もありますが，目下もやはり多忙の延長で，何も書けません。不悪。

編輯後記

ヤツト特輯號ができました。豫定を超過して三倍大のものとなりました。卷頭記載の如くまだ澤山の資料の整理が出來ぬためここへのせられなかつたものもあります。それらはいづれまとめて近い中に單行本として發表致すこととなりました。

本號所載の資料についても誤つてゐる樣なところがあれば御知らせ願ひたく存じます。

金澤エス會の松田氏にもいろいろおしらべ願ひましたが金澤を中心としたエス運動史は調査不十分の點があるので今度は入れられませんでした。今後つづけて調べていただくつもりです。高知藤田穐三氏にはいろいろお骨折願ひました。

其他澤山の人々に御世話になりました。ここに厚く御禮申上けます。(岡本)

今後の日エス運動史資料蒐集のため次の様な材料をお借りしたいと思つてをります。どなたかおかし下さいませんでせうか。

The British Esperantist　1905, 1906 年 (その中から日本に關する報道を書きぬいてしらせていただいても結構です。)

Adresaro de la Esperautistoj　XX, XXI, XXII, XXV

Tutmonda Jarlibro　1904, 1905, 1906, 1908, 1909, 1910

日本エス學會 R.O. 編輯部
岡本好次

感謝

東京の古い同志藤林房藏氏が今回當會編輯部の乞を入れ御所持の次に掲載の如き古い貴重な資料を當會文庫へ寄稿下さいました。ここに厚く御禮申上げます。

Japana Esperantisto 誌 (第 1 卷第 2 號より第 10 卷第 12 號迄)　57 册

Tutmonda Espero 誌(1908年のもの) 6 册
La Suno Hispana 誌 1 册
*Anton Waltisbühl: Kompleta Lernolibro por Esperantistoj 1 册
Cent dek tri Humoraĵoj 1 册
Tri Ĉapitroj el Don Kiĥoto de Manĉujo 1 册
Naivulo, Karabandolo la plugisto, Fiŝkaptisto k rigardanto 1 册
La Grafo erarinta 1 册
*Un dekcentimo 1 册
*Weltsprache (1卷—3卷) 3 册
*Ido 目錄 1 册
*Angla Guidlibreto 1 册
Barcelono 1 册
第五回萬國大會記念 sigelmarkoj 數十枚
(* 印は Ido 關係の書籍)

神戸月木喜多治氏より下記の雜誌御寄贈いただきました。厚く御禮申上げます。

Japana Esperantisto (第5卷第1號, 第4-5號, 第6卷第5號第6-7號) 4 册

金澤エスペラント會から同會所持の(小原氏より寄贈のもの)下記のもの當會文庫へ御寄贈下さいました。厚く御禮申上げます。

Adresaro de la Esperantistoj, Serio XXVI
Adresaro de la Esperantistoj, Serio XXIII
ガントレツト氏通信講義錄

以上の方々に對しここに厚く感謝の意を表明致します。

財團法人 日本エスペラント學會
理事長 大石利三郎

日本エス運動30周年 祝賀雄辯會

6月13日(土)午後正2時より5時半迄

★會場——日本橋區本町1丁目2番地 東京實業組合聯合會ビルヂング(五階)講堂にて。(市電室町一丁目三越前下車日本橋に向つて日本橋を渡らず川端にそひ左折半丁江戸橋際の建物です)。

★會費——無 料 聽講歡迎

辯士十數名。

主催 東京・エス・クルーボ / 東京鐵道エス會

日本エス運動30周年 祝賀晩餐會

6月13日(土)午後正6時より

★會場——同上 東京實業組合聯合會ビル地下室の「江戸橋亭」にて

★會費——1圓(但夕食費)

30年前の古い同志の方々にも出ていただく筈につきふるつて御參加を乞ふ。永田拓相祝辭も交渉中。

晩餐會出席の方はなるべく12日迄に學會宛その旨御一報を乞ふ。

主催 日本エスペラント學會 / 東京エス・クルーボ / 東京鐵道エス會

萬國オリンピック大會及び日蝕觀測に際して エスペラント採用方に就き陳情せる報告

第二十三回日本エスペラント大會委員會
山田弘，矢崎富美人

【I】 萬國オリムピック大會に對して

大會協議會議題第三の決議に則り，その精神を達成せしむべく微力乍ら盡力し此處に一段落を見たので自分等 採つた處置に就き概略を報告いたします。

"萬國オリンピツク大會に於てエスペラントを公用語（競技用語）として御採用あらんことを陳情す"

"Esperanto en la Olimpiaj Ludoj" (esperante)

なる二種の陳情書を二月初旬印刷し下記の關係運動諸團體，諸委員，新聞社等へ送附して輿論の喚起に力めた。

1) 國內：大日本體育協會（我が國に於けるオリンピツク代表委員會），日本陸上競技聯盟（會長，副會長，顧問，理事，評議員，在外情報委員），日本陸上競技聯盟，日本庭球協會，全日本學生庭球聯盟，日本ラグビー蹴球協會，大日本蹴球協會，大日本排球協會，大日本ホッケー協會，大日本バスケットボール協會，全日本スキー聯盟，大日本スケート競技聯盟，全國水上競技聯盟，全日本學生水上競技聯盟。

著名新聞社（東朝，大朝，東日，大每，讀賣，報知，名古屋，新愛知等）——この事に就き東朝讀賣等の紙上に報道せられた。——文部省體育課，縣體育課等。

2) 國外：各國オリンピック委員會（或は陸上競技聯盟），日本陸上競技聯盟の在外情報委員，Ĉiuj Landaj Asocioj., UEA, Heroldo de Esperanto.

以上のものは關係團體幹部に對する atako であるが，我が名古屋に於けるオリンピツク候補選手個々に對しても學習方を勸誘した。即ち佐々木吉三氏（陸上短距離——愛知縣體育課）山本定子（槍），前畑秀子（水泳），小島一枝（水泳）の諸孃に久保氏著エスペラント會話及び學會編エスペラント短期講習書を贈呈した（その費用の一部は名古屋醫大エスペラント會から支辨された。上島武君の好意を謝す）。

又名古屋市八事療養所々長，醫博，靑井節郎氏は日本陸上競技聯盟の理事であつて今回役員としてベルリンへ赴くこととなつた。氏は既に愛知醫專在學の時西敎授から講習を受けたことがあるが，目下前二書に就いて矢崎が說明をしてゐる。氏を初め陸上競技選手は 6 月 7 日東京出發，京城，新京，ハルビンにて各々一泊し 15 日滿洲里を經て，23 日 Finlando の Helsinki に到著し，彼の地に約一ケ月滯在，練習して 7 月の 22 日か 23 日頃 Berlin に乘込む豫定である。尙大會終了後，Leipzig に於て日獨對抗競技を，Parizo に於て日佛對抗競技をなす計畫である。

この事に就いては各々關係 Landoj Asocioj 及び Delegitoj de UEA へは豫め連絡し然るべき aranĝoj を依賴した。

【II】 日食觀測に對して

大會協議會議題第四の決議に從ひ，作成せられた下記陳情書を三月初旬金澤エス會の由比忠之進氏より送附せられたので下記の諸團體新聞社等へ發送した。

"日食觀測の如き國際共働の事業に國際語エスペラントを御採用あらんことを陳情す"

"Esperanto en Internacia Kooperado"

發送先：

1) 國內：日本天文學會（東京天文臺內），東亞天文協會（花山天文臺內），著名新聞社（東朝，讀賣，名古屋，新愛知）——名古屋新聞紙上には記事として掲載せられた。

2) 國外：ケンブリツヂ大學內天文學敎室 Brita Landa Asocio に依賴） Heroldo de Esp. UEA.

——最後に本問題に關して協力援助された全國の皆隊に感謝の意を表します——

内外エス運動展望

國際教育會議での成功

既報 Utrecht における去る 4 月 14—30 日の Internacia Konferenco Pedagogia de New Education Fellowship は各國代表 700 名以上の參加の下に盛大にひらかれた。ゼネバ大學敎授ルーソー學院長 Piere Bovet 氏は敎育家及學校におけるエス語の必要性を力說した。16日の午後は殆んどエスペラント問題に終始した。Glueck 氏はエス語の歷史現狀敎育上の効果等々について報告を發表した。聽衆は喝采した。討論になつて Isbrücker 夫人及 Cseh 氏が Glueck 氏の報告に補足した。

大會々頭なる Kees Boeke は大會委員會はいろいろ設備に努力し通譯の點も大いに骨を折つた。しかしそれでも參會者は不滿であつた。それは會議用語が幾種類もあつて通譯のわづらはしさがあるからだ，もしすべてエス語唯一であつたらどんなによかつたらう。だから私はエス語をおすすめしたい」といつた意味をのべた。その上「自分も大會の直前私の學校へエス語を必習課目として入れることにした。生徒のみならず私も他の先生達も聽講するのだ」。とのべた。同氏の學校は世界に有名な學校で Utrecht の近くの Bilthoven の Werkplaat といふ學校である。

かくて大會におけるエス語の manifestacio は大成功に終つた。

ベルギーにエスペラント街

ベルギーの Bruselo-Gent-Lichtervelde-De Parne の自動車道路が出來た。そして Lichtervelde では新しい strato を Esperantolaan とよぶことになつた。全世界の同志が之が決定に努力した市長に感謝狀をおくられたい。宛名は Den heer burgemeester, Lichtervelde. West Vlaanderen, Belgujo としておくられたい。

ウエルズ協會へ働きかけよ

一二年前 H. G. Wells-Societo が英國に創立された。而して英國內及び海外の進步的思想家を集めてゐる。この會では國際語問題についても考へてゐる。エス語に favora なものもゐてエス語の勉强を始めてゐるものもあるがまだ會としては態度がきまつてをらぬらしい。同志の働きかけをのぞむ會名は最近 Cosmopolis となつた。その adreso は Kosmopoliso, 2, Hanway Place, London, W. C. 1., Anglujo. である。

ハンガリーの銀行エス語採用

ハンガリーの大銀行の一なる Hungara-Itala Banko (S. A., Budapest) はエス語を通信用語として公式に決定し各國の取引先へ通知した。それで今後もエス語で通信することができるわけになつた。

ベルリンの科學學士院とエス論文

ベルリンのプロシヤ科學學士院では 3月18日 Reichenbach の pensiita fervojisto Klemenz Wieczorek 氏のエス語書き論文を承認した。この論文は "Sklavo" といふもので Wien の 28 回の萬國大會の機會に發行される。

天野電話局長エス語に熱中

名古屋中央電話局長天野榮十郎氏は名古屋無線電信局長時代からエス語に好意をもたれ機會ある每に各方面へエス語の必要を力說されたが特に一昨年國際無線電話が初めて開設せられた時事務員の用語をエス語たらしむべく運動を起すため長崎での大會によびかけ又關係各方面に趣意書を送附して注意を喚起された。

昨年の名古屋大會に出席され自分もエス語を自由に話したいとの念願をたてられ本年 2 月から每週 1 回乃至 2 回矢崎富美人氏の指導の下に學習をつづけられてゐると。


大會々場グランド・ホテル

集へ綠星旗の下に

第廿四回日本エスペラント大會

第五回北海道エスペラント大會

北海の天地に第24回日本エスペラント大會の聖旗は建てられたり，今夏涼風に飜へる綠星旗の下に集へ。日本エスペラント運動を語る大會準備は全道エスペランチストの熱と努力に依り今や完了せんとす。そもそも日本エスペラント大會の意義は喋々するまでもなく過去一年間に於ける運動の批判と現情勢に對する正しい理解，然して向後一年間の方針樹立にあり。次に全日本の同志一堂に會して共に將來を誓ふ全國同志の固き握手はエスペラント運動の强化に一層の力あるものにして且，親しき語らひの中に交される刺戟は擴大に役立つ最良の基礎なり。エスペラント運動の疲れを醫す一服の淸凉劑が大會であるならば牽引力を增すも亦大會なり，この意味に於て本大會に參加せられ競つてエスペラント運動に對する誠意と努力を明示せられよ。敢て諸氏の熱意に訴へ參加を希望して已まず，集へ北海の天地に飜へる聖旗の下へ，而して高らかに轟かせ希望の歌を。

★Ekskurso 支笏湖（海拔248米水深383米）

湖の周圍に淸淨純潔な姿を誇る北方の惠庭嶽（1319米）あれば南方に男性的山容の偉觀風不死嶽(1102•5米)の秀麗名山森林の美と相俟つて多く人をして吸收せずに措かず，其の水透明にしてフオレル氏液第2號に相當し，深さに於て我が國第2位の湖瓢形を呈し，ヒメ鱒，ニジ鱒の產地として亦，名高し，地質火山等の學徒の硏究的資料として讃仰措く能はざらしむるものなり。

★日　程

第1日　8月8日（土）

10.00	受付開始
12.30—14.00	大會發會式
14.00—14.30	記念撮影
14.30—16.00	日本エス學會總會
16.00—18.30	大會協議會
19.00	懇親晩餐會

第2日　8月9日（日）

9.00—10.30	第5回北海道エス大會
10.30—12.30	分科會
12.30—13.30	晝食
13.30—14.30	分科會報告
14.30—16.30	大會大學
19.00	普及講演會

第3日　8月10日（月）

支笏湖へ　　午前7時より午後4時まで

★參　加　申　込

本號添附の端書に各條項記入の上，7月末までにお送り下さい。會費送金は振替を御利用下さい。

★參加費槪算

1.	參加費	0.50
2.	晩餐會費	1.50
3.	Ekskurso	2.00
4.	記念寫眞代	0.30
5.	宿泊一泊朝食付	1.00

（旅費は東京より札幌まで片道 10.85 圓であります。尙今回は汽車の割引は致しません）

★合　宿

札幌市北三條西三丁目北向中村屋旅館

大會に關する御照會，御送金等は下記宛に願ひます。

札幌市南四條西十四丁目
第24回日本エスペラント大會準備委員會
（振替小樽 18763 番）



第十三回九州エスペラント大會

4 月 26 日福岡市にて

第 13 回九州エスペラント大會は學會福岡支部主催の下に去る 4 月 26 日福岡市に於て開催された。此の日數日來の春雨からりと晴れて絶好の大會日和。午前 9 時半受付開始と同時に九州山口各地よりの參加者 60 名續々として來場大會場九州帝大醫學部惠愛團講堂は早くも歡喜と昂奮にみちた。

開會式

かくて 10 時 20 分西崎準備委員により開會が宣せられ一同起立・ラエスペーロの合唱により大會の幕は開かれた。續いて今次大會々長大島廣博士は壇上に歩を運ばれ主催地を代表して開會の挨拶をされる。次いで會長司會の下に地方會代表の挨拶並に祝電祝辭の披露にうつる。

〔地方會代表挨拶〕

大牟田エス會田中忠義氏，久留米エス會上田九十九氏，宮崎エス會渡部毅氏，行橋エス會鮎川常基氏，熊本エス會坂崎延喜氏，小倉エス會三浦勤氏，八幡エス會岩崎剛氏，飯塚エス會野見山丹次氏，宇土エス會市原耿路氏，日本國民速記協會片山政子孃。

〔有志挨拶〕

長府野原休一氏，長崎江口廉氏，大分小野田幸雄氏。學會福岡支部川關巖氏。

〔祝電祝辭〕

日本エス學會，別府エス會，戸畑エス會，日本國民速記協會，大阪城戸崎益敏氏，熊本山本齊氏，福岡秋武六一郎氏，小倉赤松定雄氏，大牟田白濱益夫氏，神戸大屋エス文庫。

尙公務のため當地御出張中の學會理事川原次吉郎氏は新聞記事により協議會開會中會場に馳せ參ぜられたので，議長は一時議事を中斷して同氏を歡迎，川原理事は丁重なる御挨拶を述べられ，尙エス運動後援會に對する理解ある支持を希望せられた。

協議會

大島會長は一同の希望により議長に久留米醫專エス會磯部礒一氏を推薦，又書記として堀内，西崎兩氏を指名。議長着席挨拶の後下記各議案につき審議した。

(1) 第 14 回大會を熊本市へ招待するの件——熊本エス會提案。

熊本加藤孝一氏より說明。滿場一致可決す。

(2) 聯盟加入會々員名簿作成の件——行橋エス會提案

3) 聯盟機關誌發行の件——同上

(4) 地方會員及び在九州エスペランチストより聯盟會員を募集し加入者より一定の會費を徵收し以て聯盟費とするの件——飯塚エス會提案

以上三問議長提案により同時上提，各提案者より夫々說明ありたる後本部堀内幹事より上記三問は何れも重要問題なるも昨年度大會の協議に基き本部より照會中の 1) 機關誌の定期發行。 2) 聯盟經費の各會分擔方法の二案件が未解決であるから本問は一先づ幹事附託とし，先づ各會に於て上記二懸案につき速かに處置され度き旨希望あり，種々意見ありたるも結局幹事附託とす。

次で聯盟役員の選擧にうつる。評議員13名は全部重任推薦とし，幹事は異動無き旨議長より報告あり。(以上詳細は大會報告書參照)

以上を以て協議會を閉ぢラ・タギーヂヨの合唱により午前中の行事を終了す。續いて會場前に於て記念撮影をなし晝食の後，折から開催中の博多築港記念博見學に向ふ。

懇親晩餐會

午後 6 時より天神町昭和會館にて開催。晩餐の後座長江崎悌三博士の挨拶あり，續いて三月中旬歐洲御出張から歸朝せられた大島廣博士の興味ある旅行談（エス語）を聽き後有志の parolado 懇談にうつる。

かくて午後 7 時半江崎座長の閉會の辭あり野原休一氏の發聲により KEL の萬歲を三唱し盛會裡に散會意義深き大會を終了した。

(K. E. L. 報)

〔尙大會プログラーモ並に大會報告書御入用の方は下記宛郵券2 錢同封お申越し下さい
福岡市十軒屋三九一　堀內恭二〕

全國各地報道

投稿注意：
1. 日本文にて・なるべくハガキで・迅速に・簡單に。
2. 締切大體前月18日（18 以後到着のものものせること あり）。
3. 地方會誌を以て報道に代ふるをえず。
4. 寫眞は裏に必ず何の寫眞かといふ說明記入の事。寫眞は返送せず資料として保存す。

東京 ★**學會例會**——5 月 20 日大分縣の城内忠一郎氏名古屋の竹中治助氏出席。城内氏は京城のエス運動九州の運動等につき話し竹中氏も大會後の名古屋につき語らる。

★**淺草クンシード**——5 月 22 日城内氏，竹中氏の來會あり。城内氏は東京のクンシードの所感をのべらる。出席 18 名。

同日交遊本位の淺草クンシードの外に運動本位の淺草エス會（Asakusa Esperanto-Societo）創立と決定。6 月 5 日發會式擧行。



五十嵐正巳氏を迎へて淺草クンシード
右より〔前列〕笠松，新津，五十嵐，中村〔後列〕石黑（喜），渡邊，石黑，多羅尾，大橋，塚田。

橫濱 ★**橫濱エス協會**——Verda Jupitero——木曜例會。4 月 16 日水谷氏 Originala Verkaro をよんで Z をしのぶ。新川氏東京第六高女のエスクラス見學談。出席 13 名。4 月 23 日エス語と國語國字問題を中心に語る。13 名。4 月 30 日委員會。6 名。5 月 7 日由會話。11 名。5 月 14 日自由會話。9 名。

◇YMCA Esp.-Grupo——週例會每火曜19-21時。前半は中等研究會。用書エゾーポ。佐久間氏指導。後半は和文エス譯研究。尙中等研究會は毎金曜日も 19-20 時迄行ふ。出席兩方とも 5-6 名。月半より橫濱英語學校で初講を開講の豫定。

◇Rondo Amikino——每木曜 19 時メツセンジャーボーイ事務所階上で。用書 Historio de la Lingvo Esp. 出席 4-5 名。

仙臺 ★**仙臺エス會**——仙鐵エス會の應援をえて 5 月 8 日（金）より 6 月 8 日（月）まで毎月，金 19 時より 2 時間。YMCA 階上にて初等講習。費 1 圓。參加者 33 名。（內 s-ino 1 名。f-ino 2 名）。今回は立看板 1 枚，ビラ16 枚チラシ 2,000 枚を用意し宣傳の主力を書店圖書館等においた關係上講習生は粒揃ひ。

盛岡 ★**盛岡エス會**——◇例會 3 月 25日 5 名。珍客山形から矢部氏丸龜から松本日宗氏。◇ 4 月 1 日 2 名。◇4月 8日初等講習に就て具體的協議。費 80 錢。會期 4 月 24 日—6 月 30 日迄毎火金曜後 7時用書短期講習書。井川醫院にて。講師松木氏。◇4 月 15 日 5 名。講習會の準備ビラ書きに大童• ◇4 月 22 日 7 名。仙臺の菅原氏を迎へたが講習の準備に多忙にて充分話合ふことできず遺憾。講習會に主力をそそぐため會期中水曜例會を中止。◇ 24 日よりの講習は申込者 19 名（內婦人 3 名）。高農と醫專の學生が斷然多く自然教授法にも影響。會の働手をつくりたいと全會員協力中。

札幌 ★**札幌エス會**——4 月 22 日聯盟會報編輯協議。◇ 23 日相澤泯越兩氏旭川エス會副會長武田威勢氏と大會につき協議。◇24 日相澤，氏，花田，藤本，田上，東，櫻井，前田の諸氏訪問。◇ 5 月 5 日木村氏宅で相談會。◇ 13 日相澤氏宅に集合。エハガキスタンプ封緘紙等につき相談。◇ 20 日相澤氏宅に集合。初等講習會を兼ぬ。

苫小牧 ★**苫小牧工業學校同窓生エス會**——は苫小牧町本町 43 對馬方村山自助氣付に變更。

帶廣 ★**學會帶廣支部**——4 月 7 日開講以來大成功を收めてゐる初等講習會終了。引續いて中等講習に移る筈。受講者16名は謝恩會を兼ねて講師佐藤松男氏のため千秋庵で 5 月 26 日「エス」誌購讀者 10 名に及び新進同志の躍進は目醒ましい。會長宅の例會は順調にすすみ輪讀を中止し長谷川守氏を講師として大會準備のため猛烈な會話の練習を行つてゐる。出席者毎回 7-8 名。

名古屋 ★**名古屋エス會**——4 月 19 日7時54分名古屋驛著來訪の學會監事淸水勝雄氏を山田竹中兩氏で出迎へた。◇4 月 21日淸水勝雄氏歡迎會(聯盟主催)につき輪讀會中止。◇ 4 月 27 日大阪川崎直一氏來訪。

◇5月3日北勢エス聯盟訪問と四日市博覧會見學の日歸り旅行を催す。古い四日市エス會と新しい桑名エス會共に vigla な三重縣の會である。この兩會の熱心な會員達の歡迎をうけ快晴の春の一日を愉快に過すことが出來た。◇5月4日大阪の里吉重時氏來訪。◇毎週火曜日の夜白木方で輪讀會を續けてゐる。用書イヴンの馬鹿。出席者は3名乃至6名。◇毎月8日の夜一宮市の初講指導のため竹中氏派遣。

★名古屋ルーマ・エス・クンシード——4月26日春季 ekskurso を多度山近郊へもつ。10名



參加桑名驛にて出迎へ四日市桑名エス會員6名の參加を得て最も有意義な催となつた。◇5月開催に決定の初等講習會は都合により秋迄延期と決定。◇新に顧問として名販社水野淳二氏を迎へ，愈々本格的な運動方針を樹てる事に準備中。◇毎週火，金例會とし火曜日は東新町サンパウロに於て會話會，マヨール氏の出席を得て平均7名出席。金曜日は用書 Heroeca Junulo 輪讀並に初等講習續講毎時平均14-4名の好成績がある。

桑名 **★桑名エス會**——◇初等講習を4月1日より29日迄毎月水金19時より21時半迄。四日市福田正男氏指導の上に五井氏宅にてもつ。12名參加。毎回出席平均14-5名。1名の落伍者なく終了。5月2日茶話會をひらく。◇初等講習を5月9日より毎土曜 Privat の Kursa Lernolibro をテキストとして加藤氏を中心に第2回をもつ。◇例會4月5日，6名。19日，3名。5月3日，7名。◇回覧雜誌第1卷第4號發行。◇4月26日及び5月3日名古屋よりの來訪あり。（名古屋の報導參照されたし）。

京都 **★京都エス聯盟**——◇4月17日阪神津の同志によびかけて嵐山御室へピクニーコを行ふ。神戸より宮本氏外1名參加。大津より中野氏。一同20名新綠の嵐山御室を見て愉快にすごす。夜神戸の同志を中心に有志の晩餐會をもつ。◇5月15日夜7時より四條大宮新京阪食堂別室で例會をもつ。特に古い同志櫻田博士の厚意で同氏の經驗談をきく。赤田氏司會18名出席。歸鄉中の田代氏が自慢の寫眞機をもつて出席。流麗なエス語で數々のニュースをきく。◇5月8日聯盟員西村氏木下氏の korespondanto がたまたまケンプ氏（京都滯在中）の友人だつたので日獨文化會館にて演奏中の同氏訪問エス語の宣傳をなす。

大阪 **★新星會**——毎土曜19時より "Al Torento" 鑑賞研究。5月中に終る豫定。6月より "Homoj sur la Tero" 月例會毎20日夕櫻橋農園フルーツ•パーラー2階にて。5月17日遠足9.30時天六新京阪前に集合 OES と合流參加者14名躑躅滿開の千里山花壇にて遊びそれより山路を BK 千里放送所に向ひ同所の同志數人の歡迎を受け美しい庭園の芝生に坐して晝食記念撮影，所内同志佐藤橋田兩氏の好意により見學4.30時下山。

神戸 **★永文堂ロンド**——第1日曜茶話會第2日曜講讀作文。第3日曜會話。講演。第4日曜講讀文法。第5日曜會話作文。敎材 Z 讀本。Kompleta Gramatiko. R. O. 等。出席者6-7名。◇第2回初等講習——5月6日より早朝5時半より7時。1名。◇5月19日（火）俳句會。當ロンドは最近近くへ移轉された國際文通協會の岡部須美雄氏の熱心な助力によつて漸次隆盛に赴かんとして居る。又4月28日（火）には來神中の別府の同志武田信義氏が出席され愉快な會だつた。

吳 **★吳エス會移轉**——新住所吳市北迫町57の3矢野泰方

福岡 **★學會福岡支部例會**——◇2月14日第13回九州大會を招待する事を決議6名。◇3月13日大會開催決定に付。諸準備打合。7名。◇4月15日。大會の最後的打合8名。◇5月9日舊會員城内忠一郎氏來福を機に歡迎會を催し，朝鮮に於ける運動の現狀の話，其他懇談を交へた。◇5月15日19時，新會員を迎へたので一通り自己紹介の後堀內幹事より九州大會の會計報告書並に餘剩金處分案を提出說明あり原案通り可決，後今後の運動方針その他につき懇談を交へ21時半散會。8名。以上何れも會場は橋口町風洲屋。）

★福高エス會——一時中斷の形であつた福高エス會は今次九州大會を機に先輩同志の努力

により再び活動を開始，4 月より毎週月水二回先輩九大學生川闘，福高大島兩君指導の下に講習を續けてゐる。會員 15 名。

久留米 ★久留米エス會移轉――上田九十九氏上京の爲當分の間西町1474山市眞慧方へ移轉。

飯塚 ★飯塚エス會――長崎より福岡訪問中の佐藤靜子姉より入電あり 10 日 17 時姉を迎へ片山姉宅にて小茶話會をもつ。翌 11 日高尾山公園炭坑測候所等見學。17時歸崎さる。◇同志田中老は去る 4 月 2 日 4 時奇禍にて負傷入院さる。◇高取姉は飯塚高女を辭されて御結婚準備中。

鐵道とエス

聯盟本部 機關誌 La Fervojisto は新年號以來新味を加へ發行されて居る。術語集（先づ車輛術語）エス文鐵道 Novaĵo を連載してゐる。

東京 初等講習會 4 月 27 日より月水金の午後 5 時より 1 時間宛丸の内鐵道俱樂部で開いてゐる。講師は高橋菊藏氏，23 名の申込の中毎回 17, 8 名出席。**研究會** 毎木曜。用書はザメンホフ演說集。出席8名。Stela K. 4 月は 18 日午後 1 時より開く。出席は FER の幹部で高橋，矢島，林，鶴田，安藤，小松萬澤の諸君武藏氏は不參にて原稿のみ出された。題は La plej terura sperto en mia vivo. 興味百%の話が相次ぐ。Nova. K. 毎週木曜午後 7 時より 9 時迄，新宿白十字堂 1 階。

中央委員會 4 月 21 日 5 時より開催。11 名出席。協議決定事項，1）札幌の日本大會出席者に補助費を出すこと，2）國際通信部を擴充し各國と鐵道に關するニュースを相互交換すること。

大阪 會話會復活――毎週火曜午後 4 時半より 8 時迄鐵道クラブで開催，司會者田中覺太郎氏。參考書久保氏エスペラント會話。

札幌 初等講習會――4 月 17 日より每火金 10 回終了。講師は後藤喜六氏他有志。用書短期講習書。申込 15 名の盛況。**ザ博士追悼會** 4 月 14 日集會を開く。17 名出席，有意義な夕であつた。

仙臺 SES に協力して 5 月 8 日より開催の初等講習會に鐵道よりも多數受講者募集の見込。

郡山 每週金曜鐵道クラブに例會を開く。日本お伽噺の輪講をなす。

吹田 4 月 15 日より每週火木曜 5 時より 9 時まで講習會を開く。用書はエスペラント童話讀本。6 時から 6 時半迄は會話練習。受講者 8 名。

新聞雜誌とエス語

★臺灣新聞（5 月 2 日）――女子親米使節の花形孃と題して磯部幸子孃の渡米紹介記事。
★臺灣新民報（5 月 3 日夕刊）同上記事。
★東京朝日新聞（5 月 24 日）米國へ女性使節として磯部孃の全米エスペラベト大會（デトロイト市―7 月 1, 2, 3 日）出席を紹介。
★大阪朝日新聞（5 月 24 日）――“國際親善は私らで”若い女性二人がアメリカ行き――の見出しで磯部孃を紹介。
★大阪朝日新聞（5 月 25 日三重版）――いとものんびりマニラへの旅として林好美氏の南洋方面へのエス語旅行を紹介。
★東京朝日新聞（5 月 24 日）――全世界に涯しない行脚を續けてゐるベルギーの奇人マラン氏の記事。
★中外商業新報（5 月 8 日）――磯部幸子さんのお父さん愉一郎氏の健脚振りを寫眞入りで紹介，エスにふれてゐる。
★富山タイムス（5 月 27 日）――エス語に關する名士の回答 8 を掲載。
★新聞之新聞（5 月 14 日）――「ラ・レヴオ・オリエンタ」記念特輯號發行を紹介。
★東京日日新聞（5 月 16 日ニュース籠）――日食觀測とエスペラントの見出で大會のエス語を公用話たらしむる努力を紹介。
★名古屋新聞（4 月 21 日）――名古屋・ルーマ・クンシードの講習會の計畫を發表。
★名古屋新聞（5 月22日）――同上講習例會。
★岐阜新聞（5 月 22 日）――來岐した國際人マラン氏を紹介。
★鐵道青年（5 月號）――「車中で永田拓相と語る」――矢島英男氏。
★大牟田每日新聞（5 月 27 日）――大牟田，熊本エス會ピクニツクの豫告記事。
★福岡日日新聞（5 月 27 日）――同上
★九州日報（5 月 27 日）――同上
★大牟田時事新聞（5 月 27 日）――同上
★九州日日新聞（5 月 27 日）――同上
★熊本筑後新聞（5 月 27 日）――同上
★西海每日新聞（5 月 27 日）――同上
★肥筑每日新聞（5 月 27 日）――同上
★新教育研究（新教育協會機關誌）5月號。人工語の敎育的意義とその實績――新川正一氏。國語淨化試驗――飯田龜代司氏。

エスペラント運動後援會報告

第2回幹事會は5月16日午後2時からJEI事務室に於て開かれた。出席者は小坂狷二，三石五六，久保貞次郎，伊藤巳酉三，大木克巳，原田三馬，酒井鼎，高橋肇及び學會事務部から岡本好次及び三宅史平の諸氏。外に會員松本健一氏傍聽。

小坂氏を議長として議事に入つた。先づ會員から提出された意見が報告された。會員提出の意見を要約すると次の通りである。

◎進藤靜太郎氏(大阪)――會則第四條を「後援會事業報告の刷物を貰ひたいものは寄附金以外に八圓を拂ふことができる」意に改めること。

◎白木欽松氏(名古屋)――大學や專門學校の入學者發表に際して洋服屋のやうに働きかけよ。

◎田口龍雄氏(神戸)――(1) 東京に大講演會を開いて氣勢をあげよ。(2) 各地方へ特使を派遣せよ。

◎安田勇吉氏(臺北)――學校方面に於ける運動に重點をおけ。

◎野知里慶助氏(三重)――「十日間獨習」といふやうな簡易な學習書を發行して無料配付せよ。

◎川上虎男氏(大連)――(1) エスペラント飜譯に對して補助金を出せ。(2)展覽會を催せ。(3) 興味をひくやうなパンフレットを出せ。(4) 全國の書店に圖書を委托せよ。

以上諸氏の提案は本日の豫算編成について參考に供し，尙今後具體的事業計畫に際して審議，實現をはかることに決定。但し進藤氏の會則變更に關する提議は否決となつた。

本日の幹事會で本年度の豫算を次のやうにこしらへた。但し本年は本會成立初年度のことでもあり，また豫算編成について參考となるべき種々の資料の調査も不十分であるためこの豫算は大體の目安として編まれたもので嚴密にこの豫算通りに實行するとは限らない。今後事業の具體的遂行にしたがつて多少の變更を見ることあるべきを御承知おき願ひます。この豫算振當てについても御意見のある方は幹事會に御進言下さい。

1936 年度概略豫算（單位：圓）

(1)	新聞雜誌へのニュース提供費	100
(2)	新聞雜誌への廣告費	150
(3)	展覽會材料整備費	100
(4)	ビラ，パンフレット作成費	300
(5)	普及講演會補助金	50
(6)	特使派遣費	70
(7)	講師派遣費	50
(8)	座談會等特別會合費	60
(9)	名士訪問費	100
(10)	その他の普及運動費	60
(11)	事務費	160
(12)	通信費その他の雜費	100
	計	1,300

以上の豫算による事業の實行については，(1) JEI 事務部に委任。(2) 三石，原田，高橋の三幹事が特に研究する。(3) 矢島幹事が主として任ずる。(4) 久保幹事主任。(5) 三石幹事主任。普及講演會補助金は一口五圓とし，地方會からなるべく一ケ月前に，開く日時，場所，講演者名を書いて申込むこと，申込みにより幹事會の査定によつて補助金を交付する。講演會を開く際には地方新聞に記事を書かせるように努力し，開催後，來聽者數及び景況，新聞記事切拔を送つてもらひたい。其他の項は今後協議。次の幹事會は6月20日。

會則第四條について

本會々則第四條について誤解されてゐられる方もあるやうですから一言御注意までに申しあげます。――

元來本後援會は，最近轉機を劃して頓にもり上つてきたエスペラント運動が資金不足のために思ふやうな活動ができない憾みのあるのに對して，それの運動資金を調達する趣旨の下に生れたものであつて，卽ちエスペラント普及運動の財的方面を受持つものであります。運動の實踐にあたる人的方面は勿論一般にエスペランチストに俟たねばならぬわけであつて，普及運動の機關たる JEI ならびにエスペランチストたる後援會員一同は，後援會の成立によつて運動の義務から解放されたと考へるのは大きな誤りであります。否むしろこの際一層活潑に我等の戰ひをすすめていただかなければなりません。從つて後援會の事業計畫作成に對しては計畫委員ばかりでなく，一般會員も各自の運動經驗から得られた適切な案を進言せられて，幹事會に協力を吝まれないやうお願ひする次第であります。

北歐篇

高木 弘編

最新刊

エスペラント文藝讀本・5

定價三十錢 送料二錢

アンデルセン： 童話二篇

アアルグレン： 短篇小說

ストリンドベリ： 良心の苛責

イプセン： 幽 靈

附： アンデルセンとザメンホフ

スカンヂナビア半島とデンマルクの大作家四人の傑作をあつめ，エスペラントを通じての北歐文學鑑賞の入門たらしめた。

アンデルセンの童話は子供のための物語たるにとどまらず大人にも亦考へるものを與へてゐる。

アアルグレンは近代スウエデンの女流作家，女性のために闘つたこの作家のここに收められたものは，貧しいものに與へる溫い微笑。

ストリンドベリは近代スカンヂナ文學の最巨峰，リアリズムの驍將として輝く人。

イプセンは近代劇の父であり，トルストイと並んで，十九世紀に君臨した文豪。「幽靈」は「人形の家」とともにその代表作

さらに附錄「アンデルセンとザメンホフ」はザメンホフ研究に一新面を拓く論文（和文）堂々二十ペイヂ。エスペランチスト必讀の文字。

既刊文藝讀本

小坂狷二： **スラヴ篇** 價 25 錢・送料 2 錢

川崎直一： **フランス篇** 價 25 錢・送料 2 錢

三宅史平： **沙翁悲劇篇** 價 30 錢・送料 2 錢

昭和十一年五月十五日印刷納本
昭和十一年六月一日發行（每月一回一日發行）
ラ・レヴオ・オリエンタ（エスペラント研究）第十七年第六號

本號に限り特價六十錢（送料四錢）

編輯印刷兼發行人 東京市本鄉區元町一ノ一三 財團法人 日本エスペラント學會 右代表 大井 學